
recall

神?由宇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

recall

【Nコード】

N3748J

【作者名】

神？由宇

【あらすじ】

「自由」を取り戻すために立ち上がれ！

トリップ先の国は、国民に裏から規制の手が伸びつつあって……
女子大生が知恵とペンを武器に戦う「政治」×「ファンタジー」。

登場人物（ネタバレなし・随時更新）

四条亜希 主人公。黒い髪、焦げ茶の目。

アーク・ウォレス 剣士。赤銅色の髪、碧眼。

アマンダ ポンデグッタ亭の女主人。

グランツ アルツアード教会の初老の神父。銀髪、灰青眼。

エリオット 教会で学ぶ青年。秀才君。茶髪緑眼。一人称は僕。相手は君。（目上の相手には、別）

ルード 教会で学ぶ青年。青髪碧眼。

エリック 教会で学ぶ青年。緑髪茶眼。

ゼノ・メルキス 謎の男。黒髪緑眼。

ガラム・ローウェル 近衛騎士団長兼、特殊部隊隊員。

ローザ・グローウィル 宮廷魔導師。金髪碧眼。

アベル・シュタイナー 宰相。薄紫の髪、緑眼。

カイ 謎の政治通。茶髪碧眼。

エディ・クレイトン インディアス新聞社の社員。

アルフ・ゲルナー 総司令。黒髪碧眼。

ラズ 薄い水色の龍。

エルアノーラ 女神。白髪碧眼。一人称は妾。相手はそなた。（目上の相手には、別）

<イルダーブ党>

ラスター・マツシュモール 幹事長。黒髪、琥珀色の瞳。

フォード・イルダーブ 首相。金髪碧眼。

<王室>

ユリアス・オズウェルド 国王陛下。

アルノス・オズウェルド 前国王陛下。

<地方>

トール・ブリジアン 改革派の若手地方領主。茶髪碧眼。

フィルス・マダレイト 首都エグザリオンの領主。銀髪緑眼。

1 「夢か現か」

大学二年、四条亜希は最近、妙な夢を見るのが悩みである。

そこは、西洋の中世のようだが、東洋や中東的な色彩もある不思議な世界で、今までドキュメンタリー番組で見たどの国とも、似て非なるものであった。

亜希はファンタジー小説を好んで読む人間なので、自分の妄想が夢になったのかと考えたが、それにしてもロマンの欠片もなく、見ていてあまり気分の良いものではない。

妄想なら、美形の王子様と知り合いになったり、ドラゴンの背に乗ったり等出来ても良さそうなもののだが、決まって見るのは同じ国で、城下街の人々が今の政府に対する不平不満を述べている場面や、城勤めの役人のやりとりばかりなのだ。

どちらかと言うと、妄想ではなく、実際に宇宙のどこかに存在している異世界を、神の視点から眺めているような、そんな感じなのである。

今もちょうど、その夢の真っ只中に彼女はいた。

「ねえ、聞いた？ オベルル川の治水工事、中止が決まったのよ」

「五年も前から決まっていたのにねえ。周辺住民でわざわざ引っ越しした人もいるらしいわよ」

「引っ越し損じゃない。お気の毒にねえ……」

「地元住民が集団で嘆願書を出したんだけど、お役人様は聞き入れなかったんだってさ」

「何か街道の整備事業も中止になったらしいわよ」

「不景気で、国が赤字だから仕方がないんだろうけど、その地域の人は納得しにくいでしょうね」

井戸端のおばちゃん達の会話である。

公共事業削減が流行っており、不景気で国が赤字だなんて、二十世紀初頭の日本そのものだ。

彼女達の手には、幕末の瓦版のようなものが握られていた。

活版印刷技術に近いものは、普及しており、マスコミも存在しているらしい。

その、瓦版らしきものの文字を読もうとした所で、視界が真っ暗になった。

(ん？ 何か、頭がちよつと痛いような……)

気が付くと、亜希は壁にもたれかかった状態であった。

ベリーシヨートの毛先が、扉に押しつけられていたせいか、ぺちやんこになっていた。

正面には横に長い、大きな窓。

天井からは吊革がぶら下げられていて

(そうだ。私、電車に乗ってたんだっけ)

そこまで思い出した直後、あつ、と亜希は思わず声を上げた。

(今、何処！？ やばい、乗り過ごしてないかな……？)

慌てて窓の向こう側に流れる景色に目を向けると、ちょうど地元
の中学が見えて、亜希は胸を撫で下ろした。

いつも降りるのは、次の駅。

あと少し、起きるのが遅ければ、乗り過ごしていたに違いない。

ふう、と息を吐き出すと、亜希はカバンから定期券を取り出した。

駅のホームから、向かう先は自宅からは逆方向の、南東に伸びる
道路。

古き良き時代の香りを残す、閑静な住宅街を通り抜け、なだらかな
坂を登り、歩き続けること十分。

山の麓、林に隠れるように立っている、古い洋館が姿を現した。

地元の子供達が肝試しとして、しばしば使っているこの建物は、
実は地域の図書館である。

もともと、明治時代にさる華族が、自らの蔵書を屋敷ごと、村に
寄贈したものであり、現在は文化財に登録されている。

亜希がやって来たのは、大学のレポートを書くためである。

大学の図書館でやっても良いのだが、亜希はこの洋館の雰囲気
気に入っており、こちらの方が集中出来るのだ。

教授が出したレポートのテーマは、「江戸時代と現代の比較」。

何を取り上げるかは生徒の自由だったので、亜希は今の政府と幕
府を比べることにした。

享保の改革の頃と幕末の、どちらを現代と比較するか考えている

最中である。

亜希は政治に少なからず、関心があった。

少し前に、米国の名門投資銀行であるリーマン・ブラザーズが破綻し、これが世界的な金融危機の引き金となり、経済が悪化した、いわゆる「リーマン・ショック」が発生した。

亜希の就職活動が始まるのは来年だが、十二月現在、四年生は例年なら、とつくに内定をもらっている時期だが、そうではない学生がかなりの数、存在している。

三年生の状況もかなり厳しく、今年から氷河期に突入かとの声もあり、政治に注目せざるを得ないのだ。

誰しも、自分の将来は気になるものだろう。

今の政権は財政再建、要は無駄のカットに躍起になっているが、実は享保の改革の頃、同じことをやって失敗していることを、史学科在籍中の亜希は学んでいた。

近年では橋本政権もこの轍を踏んでいる　はっきり言って、不安で堪らない。

そう言えば、夢の中の世界でも、公共投資等、無駄削減が行われていた　普段見聞きしたことが、夢に現れているのかもしれない。

何か良い参考になる本はないかと、亜希は辺りを見て回った。

(ここは、概説の類ばかりだな……向ここの部屋を見てみよう)

この図書館は、結構広い。

屋敷を転用しているため、大きさがまちまちな部屋に、分野別に本が置かれている。

歴史のコーナーだけでも、蔵書が複数の部屋に分けて保管されている。

パソコンで検索出来れば早いのだが、この田舎の図書館に、そん

なシステムを導入する余裕はない。

この前に、家のポストに入っていた市政だよりに、「我が市も財政ピンチ」との見出しがあった位である。

まあ、目的の本を探す途中、無関係の本に目が行き、運良く良書に巡り会ったことも少なくないのだが。

隣の部屋に続く扉を開けて、中に入り　　亜希は固まった。

視線の先には何故か　ベッドがあった。

本棚等どこにも見当たらない、いかにも寝室と言っ感じのインテリアである。

(ええつと……ここって書庫の一つだったよね?)

亜希が今日初めてここに来たのなら、今の状態は「部屋を間違っただけ」だと考えるが、よく利用している身なので、勘違いはあり得ない。

そもそも、本を少しでもたくさん置けるように、家具の大半は売り払ってしまい、寝室自体存在しない筈なのだが……

気味が悪くなり、亜希は踵を返したが、その直後、顔を引き攣らせた。

(扉の形が、さっき見たのと……違っ)

この図書館の扉はすべて、同じデザインである。

木製で、金色の取っ手がついており、美しい紋様が彫られた重厚なもの。

しかし、目の前の扉は木製という所は同じにしても、取っ手は銀色で装飾等は一切なく、薄っぺらい　　実にちゃっちい造りであった。

呆然としていると、がちやりと鍵穴が動いた。

誰か来たらしい。

ぶつからないように慌てて一歩下がると、間もなく、扉が開かれた。

2 「最悪の出会い」

扉から顔を覗かせた人物は、ガタイが良い男だった。

亜希は日本女性ではかなり長身な方で、一七二センチあるが、その彼女が見上げる程に、男は背が高い。

少なくとも、一八五センチはありそうだ。

彫りの深い顔は完全に外人のそれで、赤銅色の髪と青い瞳が何とも派手だが、造作は整っている。

亜希の地元には工業団地があり、南米から来た出稼ぎ労働者が周辺に数多く住んでいるので、外人に対する物珍しさはなかったが、体格差から来るものだろうか。圧倒されていた。

ぼかんとしていた亜希であったが、しばらくして、自分が扉の正面で男の通行を阻んでいることに気が付き、慌てて横に移動すると、突然、男は亜希の腕を捻り上げた。

(!?)

いきなり何なのだろうか。

初対面で、突然喧嘩を売られてしまった。

ぼんやりしている間にも、男の握力がどんどん強まってゆく。

「っっ……!!」

「お前、何処から入って来た？」

耳元で囁かれた。

どうやら、男は日本語が話せるらしい。

訛りもなく、堪能のようだ。

バリトンの美声だったが、甘さなんて欠片もなく、敵意がひしひしと感じられる。

気が付くと、亜希は両手首を一つにして捻り上げられ、そのまま壁へと押し付けられていた。

「……った！」

あまりの痛みに、苦悶の声が無意識に口から漏れた。

「何者だ。俺の首でも取りに来たか？」

「……？」

この男は何を言っているのだろうか。

質問の意図がわからずに黙っていると、締め付ける力がますます強まった。

「……っっっっ」

「答えろ」

「……私は……しがない大学生です。入って来たのは、図書館の入り口から……」

「はあ？ ここは宿屋だぜ。訳がわかんねえな」

「わかんないのは私の方ですよ！」

もう、堪えられない。

強まる一方の握力に我慢出来なくなり、亜希は膝で男の鳩尾を、ありったけの力を込めて蹴った。

「ぐっ……！」

不意打ちが上手く行ったのか、一瞬力が緩んだので、その隙に亜希は男から距離を取った。

「とにかく、私は貴方みたいな人は知りません！ 刺客か何かと錯覚してるみたいですけど、よく見て下さい。こんな華奢な身体つきの人間なんて、どう見たって一般人でしょう？」

「魔術師でないとは言えない」

今、この男は魔術と言ったか。
頭がおかしいのではないか。

「そんなけつたいなもの、使える訳がないでしょう。一体、何なんですか！ ただ、本を借りに来ただけなのに、初対面のいかつい男に暴行されて……毎日真面目に生きてるのに、何でこんな理不尽な目に……！」

話している内に、知らず知らず、涙で視界が揺らぎ始めた。

昔から感情が爆発すると、すぐに涙ぐんでしまう。

「おい……！」

「……人の泣き顔、ジロジロ見ないで下さい」

「す、すまん」

男の声が揺れていた。

何やら、狼狽している。

女の涙が武器と言うのは、本当のようだ。

取り乱している男を余所に、亜希は部屋を出た。

今が逃げ出すチャンスだろう。

しかし、一步踏み出し、扉の向こう側を覗いて、亜希は愕然とした。

人二人が通るのがやっとの、狭い板張りの廊下が真っ直ぐ伸び、突き当たりに下へと続く階段があった。

その片側に四つ、この部屋にあるものと同じ形をした扉が並んでいる。

先程男が、ここは宿屋だと言っていたが、確かにそんな雰囲気だった。

「何これ……どう言うこと!？」

目の前の風景が、信じられない。

ここは一体、何処なのか。

自分は頭がおかしくなったのか、さもなければ夢を見ているのか
もしれない。

そう言い聞かせないと、気が狂ってしまいそうだった。

もう一つ、扉を潜った瞬間に違う場所にワープしてしまったと言
うケースが考えられたが、その仮説はとてまずくには、亜希には受
け入れられそうになかった。

唯物論者ではないので、亜希は超常現象の類もいくつかは信じて
いたが、自分が体験するとなると話は別である。

不意に、亜希の身体が傾いた。

「あ……」

糸が切れた人形のように、崩れ落ちていく。

ああ、ぶつかるなど、まるで他人事のように思っていると、床に上半身が当たる直前に、ぐんつと逆向きに力がかかった。

「おい！……くそ、何で部屋に不法侵入した奴に、手エ差し伸ばしてんだか……」

見ると、先程襲われた男に、支えられていた。

「まだ、話は終わってねえぞ。勝手に俺の泊まってる部屋で倒れられちゃ、困るんだよ」

「あの……」

「何だ」

「ここは、何処なんですか？」

「だから、宿屋だって言っただろうが」

「……そうじゃなくて、何て言う国の、何処の地域かを聞きたいんですが……」

「はあ？ お前、頭大丈夫か？　ここは、オズウェルドって国の首都、エグザリオンの城下街にある、ポンデグッタ亭って宿だ」

「えっと……それじゃあ、オズウェルドは知名度の高い国ですか？」

「おま……知らねえのかよ。経済力では世界で二番目の大国だぞ」

オズウェルドなんて名前は聞いたことがなかった。

そもそも、経済大国で二位なら、日本ではないのか。

今にも中国に抜かされそう、いや、もう抜かされているのか……
まあ、それはどうでも良い。

しかし、この様子では、もう、現実を受け入れざるを得ない。

ここはどつやら 異世界、らしい。

亜希は思わず、頭を抱えた。

神の悪戯と言っ言葉があるが、こんなに酷い悪戯はないだろうと
思いながら……

3 「教会と初めての魔法」

「しっかし、扉を潜ったら、一瞬で宿屋に移動したなんて……
俄には信じ難い話だな」

「無理もないですよ。私自身、まだ、信じられないでいますから
で、貴方は鍵を閉めた筈の部屋に私がいて、ビックリしたと言っ
ことですよね？」

「ああ、そつだ」

「だからと言って、いきなり人を襲うのもどうかと思いますが……
何か狙われるような心当たりでも、あるんですか？」

「俺、剣の腕じゃ、結構有名でな……あんたにや、悪かったと思っ
てるよ」

「もしかして……私、厄介な相手と知り合ってしまったんでしょう
か？」

「はは……言ってくれなげ。そつかもなあ」

男は、決まりが悪そうな声で言った。

見ている感じでは、根は良さそうな人物だ。

いきなり、暴行に及んだ相手と気安く喋っているのが、亜希自身も不思議に感じているのだが、違う形で出逢っていれば、最初からこんな雰囲気になっていたような気がした。

あの険悪なムードから、今に至るきつかけとなったのは、亜希が自分の持ち物を男に見せたことであつた。

鞆を提げたまま本を探していたので、荷物丸々、こちらの世界に持ってこられたのである。

男は鞆と財布のチャック、シャーペンやボールペン、腕時計等の造りに感心し、特に携帯電話と電子辞書を熱心に眺めていた。

そうして、気が済むまで見た後、

「俺、お前が異世界から来たってこと、信じるわ」と述べたのである。

「……それにしても、これからどうしたら良いものか……私って今、天涯孤独の身の上状態ですよ。しかも、一文なしだし」

「ああ、なら俺がこの女主人に掛け合つてやるよ。この宿屋は鼻屑にしているからな　住み込みで働かせてもらえば良いんじゃないかねえか？」

「それは助かります……ありがとうございます」

「礼は要らねえよ。手首、酷い痣作っちゃったから……その詫びだ」

男が目線を逸らしながら言った言葉に、亜希ははっとして自分の両手首を見た。見事に、青紫色になっている。

痛みがないので、今まで気が付かなかったが、確かに見た目は少々、グロテスクだ。

「……後で、教会に連れて行って治してやるから、それで勘弁してくれ」

「良いですよ。まあ、かなり怖い思いをしましたけど、あの状況だったら誰でも不審に思うでしょうから」

「……あんだ、あっさりしすぎてないか？」

「はい？」

「普通、襲われた相手なら、もっと警戒するだろう。罵倒されても仕方がないかと思っていたんだが……」

「うーん……そもそもは誤解から始まった訳じゃないですか。貴方と話していて、根は良い人だと感じましたし、ちゃんと反省している人を、それ以上非難したって、意味がないでしょう」

「大した奴だな、お前……いきなり異世界に飛ばされた直後、暴行されるなんて目に遭ったのに、もう立ち直ってる。俺があんたの立場なら、とてもそんな風には振る舞えねえよ」

「まあ……前向きで、気持ちの切り換えが早いことだけが、私の長

所ですから」

「 本当にすまなかった」

男は重ねて謝った。

余程バツが悪かったのだろう。

「 もう、良いですってば　そう言えば、貴方の名前をお聞きしても？　私は、四条亜希。亜希が名前で、四条が姓です」

「俺はアーク・ウォレス。この世界じゃ、名前を前、姓は後ろにして名乗るのが普通だな」

「そうですか。じゃあ、亜希・四条になりますね」

「そつだ。よろしくな、アキ」

「よろしくお願ひします、ウォレスさん」

「そつちで呼ばれると、ムズムズするな……アークで良い。さん付けも要らん」

「えつと、アーク　みたいな感じで良いですか」

「ああ　それじゃあ、まずは教会行って、お前の痣を消すぞ」

アークに続いて階段を降りる。

ゆらゆらと、彼の赤い髪が目の前で揺れていた。

腰まである長い毛が、手櫛で適当に整えたのだろうか、雑に三つ編みにされている。

しかし、それが不思議と似合っていた。

ぼんやりそんなことを思いながら歩いていると、いつの間にか出入り口の扉の前まで来ていた。

アークが扉のドアノブを持ったまま、訝しげな顔でこちらを見ていたので、慌てて外に出る。

その瞬間　亜希は身震いした。

赤みがかった石畳。

煙突のついた、オレンジ色の屋根。

地球ではあり得ないような、バリエーション溢れる髪色の通行人。

見覚えがあるのだ……この風景には。

(……夢で見たのと同じだ……)

あの夢は、自分が近いうちに異世界にトリップすることを、示唆していたのだろうか。

そう思わずにはいらなかった。

「おい、どうしたんだ」

「あ………すみません。ちょっとぼうつとしてただけです」

「物珍しいのはわかるが、あんまりキョロキョロしていると、田舎者だと思われて、スリに狙われるぞ　まあ、今は俺が見張ってるが」

「以後、気をつけます……そうだ、一つ聞きたいんですけど、私の服装や容姿って、こちらでは変じゃないですか？」

「いや。黒髪黒目で黄色い肌の人間なんて、腐る程いるし、その服装も、世界に国家は無数にあるから、遠い国から来たとでもいやあ、誰も疑わないだろう」

それは有り難い話である。

夢でも、ちらちら自分と同じような容姿の人間を見かけたものの、彼等がマイノリティーだったらどうしようかと思っていたのだ。

しかし、それは杞憂であつたらしい。

そうして、歩くこと十分位だろうか。

アークの話していた教会に到着した。

見た目は地球にあるそれと、よく似ていた。

強いて違いを述べるとするならば、中に十字架にかかったイエスの姿がないことだろう。

地球以外の惑星でも、人類が考え出すものは同じような形になるのだろうか。

中に入って、アークが連れである亜希の治療を頼むと、暫しの後、白い僧衣を纏った初老の男性が現れた。

「痔ですか。これは……酷いですね。どう言った経緯で？」

「ええっと……」

まさか、前に座っている男性は、怪我人の連れがその原因だとは思わないだろう。

言い淀んでいると、「何やら、複雑な事情がおりのようなですね」と、訳知り顔で男はその話題を横に置いた。

斜め後ろに控えているアークを一瞥すると、どこかほっとしたような顔をしていた。

「 それでは、治療を執り行います 」

その言葉に、亜希は果たして、どのような方法で直してくれるのだろうと、目を皿にして、男の一挙一動に注視した。

何と言っても、ここは異世界である。

もしかしたら、今まで空想の世界の話であった、魔法がこの目で見られるかもしれないのだ。

こんなにわくわくするのは何年ぶりだろう。

亜希が見つめる中、男は何度か深呼吸すると、手を組み、目を閉じた。

「 主よ その御光を与え給え。 」

主よ 我らの罪を許し給え。

我は主を信ずるなり…… 」

並べられた単語は、ファンタジーの呪文と言うよりも、祈りの言葉と言う方がぴったり来るだろう。

朗々と述べられた言葉は、石造りの壁やステンドグラスに反響し、辺りの空気を凜としたものに変えていく。

「 彼の者の痣を癒し給え 」

長く続いた言葉の締め括りで、そう述べられた直後 亜希の身体に変化が訪れた。

(何だろ……手首が温かくて、気持ち良い)

これは、お風呂に浸かっている時の感覚に似ているだろうか。しばらくすると、温かみがすつと退いていき、それを名残惜しく思いながら手首に目をやると 綺麗さっぱり、痣が消えていた。

(はっ、しまった！……あんまり心地良いもんだから、ぼうつとして、決定的瞬間を見逃しちゃった。しかし、すごい……)

「これにて、治療は終了です。お加減はいかがですか？」

治療済みの手首に見入っている亜希を、男の声が現実を引き戻した。

「あ……ばつちりです。触ったり、動かしても痛みはありません
ありがとうございます」

感謝の言葉を述べて頭を下げると、男は一瞬目を大きく見開いた後、にっこりと笑い、「貴方に主のご加護があらんことを」と呟いた。

4 「新生活」

宿屋ポンドゲッタ亭への帰り道。

女主人　名前はアマンドと言っらしい　に、どう経緯を説明して、住み込みで働かせてもらうのか、アークと話し合った。

異世界から来たなんて言ったら、まず変人だと思われないので、今に至った不自然じゃない理由を考えなければならぬのだ。

その結果、亜希は極東にある小国の出身であり、西方の国に憧れてオズウエルドまでやって来たものの、運悪くスリに遭って一文なしになり、行き倒れていた所をアークに拾われた……と言う設定になった。

「極東にある小国の出身」のくだりは、日本から連想したものであり、この設定には一部真実も含まれているので、違和感なく話しやすい。

そうして、到着後すぐ、アークに女主人のアマンドに話を通してもらい、彼女の部屋で事情説明を始めたのだが

「極東の国から出て来たんですけど、運悪くスリに遭って、一文なしで行き倒れてた所をアークに拾ってもらいました……ひゃっ！」

最後まで話し終える前に、いきなりアマンドは亜希を抱き締めた。自分よりは背が低いとは言え、恰幅の良い身体に押さえ込まれて少し苦しい。

「今まで大変だったねえ。苦労したからこんな細いんだろう、坊や」

今、何と言った？

「坊や」と聞こえたような……男だと思われたのだろうか。

「あの……」

亜希が誤解を解こうと口火を切る前に、アマンダが口を開いた。

「そう言う事情なら、ウチで面倒を見るよ。良く食べて、精をつけるんだよ」

「あ、ありがとうございます……あの、一つお話ししておきたいんですが」

「何だい？ 何でも言ってみな」

「先程、坊やおつしゃいしましたが、私は女なのですが……それでも住み込みで雇って下さるので……」

「ええ!？」

「……マジかよ」

女だと切り出したら、アマンダのみならず、アークまでもが瞠目した。

その事実には、亜希は少しばかりショックを受けたが、一方では、彼は男だと思っていたから、初対面では手加減なしに暴行に及んだのか、と納得もしていた。

「……ああ、悪かったね。髪が短かったからてつきり……アキの故郷では、女性でも短い髪型だったり、ズボンを履くのが普通なのかい？」

「ええ。特に珍しくはないですね。もちろん、長い髪やスカートの人もいますよ。まあ、私は女性にしては背が高めで、中性的な顔立ちだし、胸は小さめで、それに文化的なギャップが合わされば、誤解されるのも仕方ないでしょう」

「本当にごめんなさいね」

「……気付かなくて、悪かった」

アークとアマンダに揃って頭を下げられたので、亜希は困惑した。

「えっと……頭を上げてもらえませんか。単なる誤解じゃないですか」

「そうかい？ さっぱりしていて良い子だねえ。しかし、女の子なら、こちらでそのままの格好じゃあ、妙だから、私が昔着ていた服を、何着か貸してあげるよ」

「ありがとうございます」

異世界に飛ばされて、一週間。

亜希は面倒見の良い住民達のお陰で、何とか生活出来ている。

午前中は、住まわせてもらっているポンデグッタ亭で、食事の注文を取ったり、皿洗いや部屋の掃除をする。

亜希は「ポンデグッタ亭の短髪娘」として、巷では少々話題になっているらしい。

ベリーショートのが、この辺りでは余程、珍しかったようだ。

午後からはアマンダと共に、食材の買い付けに商店街へ行く。

亜希にとっては仕事でありながら、買い物をしつつ、この世界のお金に関する知識と、商品の相場、文字を学ぶ時間になっている。

何故なのかわからないが、こちらに来た当初から人々の声は日本語に聞こえ、文字は英語の筆記体に似て非なるもののだが、これも見た瞬間、意味が頭に浮かぶため、亜希はあまり不便はしていない。

とは言え、文字は読めても書けないので、買い物がてら、アマンダから看板を題材にして、文字を習っているのだ。

自分でも意味はわかるので、一人でも学習は進むものの、やはりきちっとした文法は、現地人から学ぶのが確実であろう　と言うのが、亜希の考えである。

「アマンダさん。日増しに物価が全体的に下がってませんか？」

「確かにそうだね　ここいらも、店の数がこの一月でちょっと減ったし」

「……値下げ競争で潰れたんですね」

毎日見ていれば、市場の空気の変化にも、敏感になる。
バブル崩壊後の日本と同様、このオズウェルドもデフレスパイラルに陥っていた。

需要よりも供給が多いため、人々の購買欲を刺激するために、お店は値下げをする。

当然、儲けは少なくなる。

この供給過多が、一部の商品に限らず、広い市場で発生しており、人々の所得は全体的に減っている。

そのため、さらに値下げが続き、その輪から抜け出せない状態
いわゆる、デフレスパイラルになっている。

「いつから、物価が下がり始めたんですか？」

「王様が代替わりしてからだね。前の王様は戦好きで物騒な人だったけど、今の王様は表に全然顔を出さないから、やる気がなさそう
で……まったく、この国はどうなっちまうんだろうっねえ」

アマンドは嘆息を漏らし、表情を曇らせた。

閉塞感。

政府に対する、やり場のない思い。

(……やっぱり、日本に似てるなあ……)

彼女の抱えている思いとそっくり同じものを、日本にいた頃の亜希も持っていた。

口先では「国民生活を大切に」等と言いながら、選挙に勝つこと

しか頭のない政治家の多いこと。
そんな調子なので、実行する政策にも効果は期待出来ず、未来に
希望が持てない毎日。

まだ、こちらに来て一週間だが、亜希はこの国に愛着を持ち始め
ていた。

苦しい経済状況の中でも、逞しく生きているアマンダやアーク等
馴染みの宿の客、商店街の人々。

彼等の姿がそのまま、亜希の家族や友人、バイト先の同僚の姿に
重なるのだ。

（ そう言えば、みんなどうしてるかな ）

ふと、そう思った。

今の今まで、とにかく毎日生きるのに一生懸命だったため、すつ
かり忘れていたが、少し余裕が出てきたので、思い出したのかもし
れない。

手元に大切に保管している携帯電話は、当たり前だが、地球の電
波はキャッチ出来ない。

センターに、メールや着信履歴が溜まっているに違いない。

もしかすると、行方不明者として捜索願が出ている可能性もある。
大学は……もう少しで冬休みなので、まだ単位は大丈夫だ。

思い出しても、望郷の念に駆られて悲しくなったりせず、前向き
な自分に、亜希は内心、驚いていた。

意外と、不測の事態に強いタイプの人間なのかもしれない。

ぼんやりとそんなことを考えていると、アマンダが亜希の額を小
突いて来た。

「こら。道歩くときはしっかり気を持つとくんだって言っただろう。」

アキは何かぼつっとしてるトコがあるから、まだまだ心配だねえ」

「ああ………すみません。ちょっと考え事を　そう言えば、アマンドさん。この辺りに、調べ物が出来る所ってありませんか？」

5 「異世界の心得」

元の世界に戻る方法を調べられないかと思い、アマンダに聞いてみた所、この街に図書館のようなものはないが、以前お世話になった、あの教会の蔵書は相当なもので、一般に公開されているので利用してはどうかとのこと。

その勧めに従い、休みをもらっている日に行くと告げると、アマンダが亜希一人で行くことを不安がった。

「でも、その日は配達の人があるから、私は宿を離れられないしねえ……そうだ、アークに送ってもらってはどうか？」

「えっ、良いんですか？」

「あの男は気楽な旅人だから、大丈夫だよ。私から言うておくよ」

結局、アークは快く了承してくれて 現在に至る。

「 すいません。私の我が儘でご迷惑をかけてしまって……」

「 気にすんな。送り迎えするだけだし、負担にやらねえよ 向
こつの世界に戻る方法、ぼちぼち探してエんだろ？」

「はい」

頷くと、頭をわしわしと撫でられた。

少し前　日本にいた頃に、誰かにこんなことをされていたら、「髪型が乱れる」と不愉快に思っていただろうが、今は不思議と嫌ではない。

こちらの世界で唯一、自分の素性を知り、気心の知れた相手だからなのか　落ち着くのだ。

「お前、偉いよ。すげえ頑張ってる。泣き叫んで、絶望して部屋に引き込もってもおかしくない身の上なのに、ここの生活を学んで、前向きに生きて行こうとしてるっただけでも、称賛に値するぜ　俺もまだしばらくはここにいなからな。その間は送り迎えはやってやるよ」

「そんな！……申し訳ないですよ」

「余裕なんてねえ状況なんだから、人の好意は素直に受け取っておけ。それに、アマンダも言ってたが、お前はまだ一人で出かけさせるには、不安で堪らねえんだ」

「……まだ、頼りないですかね？」

「はつきり言えば、ここの子供にも、まだ劣るな　今、アキが一人になりや、スリに財布抜かれたり、柄の悪い傭兵の剣に身体をぶつけて、因縁つけられるだろうよ。そのフワフワした歩き方を見た所……お前の国は随分、治安が良かったんじゃないか？」

「最近が悪化してるって言われてたんですけど……まあ、ここ半世紀以上、戦争とは無縁でしたね」

「そいつは十分平和だよ。まあ、早えトコ、隙のない身のこなしが

出来るようにならねエとな」

「……………頑張ります」

どうやら、自分はかなり平和ボケしているらしい。

地球でも、しばしば日本人はそう言われていたが、こつやつて面と向かって言われると、結構ショックだ。

近年は日本でも猟奇的な殺人事件等が増え、物騒な世の中になったものだ、それなりに周辺には気を付ける生活をあちら側では送っていたつもりであったのだが、こちらの人達に言わせれば手緩いのだろう。

軽くへこんでいると、突然アークが亜希の腕を掴んで、自分の方へと引き寄せた。

「わっ……………何なんですか!?!」

今の状況が、理解出来ない。

訊ねると、顎でしゃくつて「あっちを見る」と言われたので、亜希はそちらに視線を移した。

半歩前に、長剣を提げた男。

鞘の延長線上は、先程亜希の歩いていた場所である。

つまり、アークが咄嗟に引つ張ってくれていなければ、亜希は鞘にぶつかっていたのだ。

よくよく見ると……………ぶつかった男の人相も宜しくない。

もし、ぶつかっていれば、アークの予言通り、ガンをつけられていたかもしれない。

「……………言ってる傍からこの調子だしな」

「すみません」

「アキには、間合いの感覚がないんだろうな　お前の故郷じゃ、武器を提げて歩いたりしないのか？」

「昔はそうでしたが、今は銃刀法って言うものがあって、私の国では帯剣等は許可されていないんですね」

「成程……お前の国は、よっぽど平和だったらしいな。じゃあ、まずは俺の剣を見てみる　長さは、長くも短くもない、一番一般的なモンだ。で、大抵の奴はこうやって提げてる」

「はあ」

見た所、日本で言う所の「落とし差し」と言う奴で、帯　こちらではベルトだが　に対して、垂直に近い形でさす差し方である。日本では、浪人やヤクザの差し方とも言われていたのだが……ここでそれを口にする必要はないだろう。

こちらの剣は、東洋の刀と西洋の剣をミックスさせたようなものであり、この差し方が普及したのにも、何か理由があるに違いない。

「素手の人間を避ける時と違って、帯剣してる奴とは少なくとも、これ位は距離を取らなきゃなんねえってことだ。しばらくはそれを意識しながら歩くようにしろ。慣れれば、人混みもするする抜けられるようになる」

「はい」

「まあ、後はぼつっとしないってことだな。歩く時は、常に周囲に目を配るようにする。こうやって話している時も、意識は周りに向

けるんだ　こいつも、慣れれば無意識に出来るようになる」

「……この辺りでは子供でも、ちゃんとそれが出来てるんですね」

「ある程度はな。小さい時からそれが当たり前になってるんだから、何ら不思議じゃないさ　まあ、アキは違うだろうが」

「早く慣れるよう、頑張ります」

「その意気だ」

アークはくすりと笑うと、ぼん、と亜希の頭に手を乗せた。

(左手……あ、これって……！)

亜希ははっとした。

アークが剣を差しているのは、腰の左側。

抜刀する利き手は右手だろう。

確か先程、彼が腕を掴んだり、頭を撫でた手はどちらも　左手
だった。

と言うことは、いつでも不測の事態にすばやく剣が抜けるよう、
右手を空けているのではないだろうか。

(さすが武人だなあ。剣の腕じゃ、結構有名って言うのも、あながち嘘じゃないのかも……って、感心してる場合じゃないや。周りに目を配らないと)

「　おい、今また意識がどっかに飛んでなかったか？」

「い、いえいえそんなことは――」

「なら良いが」

にやりと笑って返された　　どうやら、嘘だとばれているらしい

……鋭い。

良い歳なのに、いつまでも、外出の度に誰かに付き添ってもらって
いては格好がつかない。

とりあえず、今から教会に着くまでの間は、アークに注意されな
いようにしよう、と亜希は意気込んだ。

6 「教会と蔵書」

「やあ、アーク。いらっしやい　　おや、お嬢さんは先日の……」

「こんにちは。その節はお世話になりました」

教会を訪ねると、庭にこの前、治療してくれた男がいた。手には箒を握っている所を見ると、掃除中のようだ。

「お元気そうで何よりです」

そう言つて、男は微笑んだ。
聖職者らしい、柔和な笑い方だ。

「それにしても、先日は、アークがたまたま見つけた怪我人を連れて来ただけのもと思っていたのですが……お嬢さんはアークのご友人かな？」

「えっと……」

「何でも良いだろ。俺の保護者気取りか？　グランツ」

返答に窮していると、アークが割って入ってくれたので、亜希はほっとした。

彼との関係が何なのか、適切な言葉が思いつかないのだ。
単なる知り合いと言う言葉で片付けるには、仲が良い方だが、友人と言える程の親密さはない。

「いえ。貴方が女性を連れて歩くのは、珍しいので」

「ほっとけ」

それにしても、二人のやり取りを見ている感じでは、随分親しげだ。

くすくす笑っている男　グランツの前で、アークは決まりが悪そうにしている。

「俺のことはどうでも良い　こいつがここの本を見たいって言うから、連れて来たんだ。まだ、この国に来て日が浅いから、一人で行かせるには不安だな」

「成程。ではせっかくなので、中をご案内しましょう」

「頼む。俺はこの後用事があるから、ちょっとくら出掛けて来る。夕方頃には迎えに来るからな　アキ、その状態で一人で帰ろうとか、考えるんじゃないぞ？」

アークが急に声のトーンを下げて凄んだので、亜希はごくごくと頷いた。

その様子を満足げに眺めると、アークはその場を去って行った。

「お嬢さん」

「あ、はい。行きましようか」

声をかけられ、亜希は慌ててグラントの後を追った。

以前にお邪魔した礼拝堂の前を通り抜け、ちょうど隣接する形で建っている建物へと案内された。

見た所、一階建てで大きさは 日本の中流階級の二戸建て、二軒分位だろうか。

中に窓はないものの、天井からぶら下げられた、いくつかの明かりのお陰で、室内は煌々と照らされている。

埃っぽい空気に亜希は一瞬、咳き込みそうになったが、何とか堪えた。

あまり広さはないものの、天井は高く、中には所狭しと本棚が並んでおり、かろうじて人一人が通れそうな通路が間に延びている。

本棚の隙間の所々に、人の姿が見えた。

「さて この教会の蔵書は、大きく二つに分かれます。右側が魔術関係、左側がその他です。さらに魔術関係の本のうち、半分が白魔術関係になっております。蔵書に偏りがあるのは、教会故致し方ないので、ご容赦を……お探しの情報が見つければ良いのですが」

続けて、「良ければお手伝いしましょうか」と親切な言葉をかけられたものの、亜希は丁重にグラントの申し出を断った。

まさか、「異世界に帰るための方法が書かれた本を探しています」等とは言えない。

気違いだと思われかねない。

手伝いを頼めるとすれば、唯一、亜希の素性を承知しているアー

クだけなのだが、生憎彼は今ここにいないので、一人で頑張らざるを得ないだろう。

グランツは少し残念そうな顔をした後、その場を去った。

あの時と同じように、携帯電話や電子辞書等を見せれば、理解してくれるかもしれないが、亜希は何となくそうする気にはなれなかった。

あまり、自分の素性を言いふらさないほうが良いのでは、と直感が訴えているのだ。

異世界の知識や不思議な道具を知って、亜希を利用しようとする輩が出ないとは限らない。

亜希がこの国に来た経緯について、アークが嘘の設定を一緒に考えてくれたのは、それを心配してのものだろう。

(そう言えば、いつの間にか……アークをすっかり信用しちゃってるなあ、私)

初対面では、その場の成り行きで事情を説明したが、誤解とは言え、いきなり暴行に及んだ相手とこつも打ち解けている自分は、人が良すぎるだろうか。

(でも、悪い人には見えないんだよね)

いわゆる 女の直感と言う奴だ。

まだ二十年しか生きていないが……今までを振り返ると、大抵、腹に一物抱えている人間と言うのは、どこか軽薄な空気を漂わせていた。

そして、わざとらしくおべっかを言ったりする。

しかし アークには一切、そう言ったものがない。

気取らない話し方は素のものに見えるし、何より　その目が澄んでいた。

（人を見る時は、まずその目を見る……って、昔おじいちゃんに言われたっけ）

実際、この教えは正しいと思う。

嘘をつく時、多くの人は目が泳ぐし、後ろめたいことがある人間は、あまり相手の目を見て話そうとしないものだ。

アークと言えば、道を歩く際は、亜希を半ば護衛している状態であり、周囲に目を配っているため、前述した例はあてはまらないものの、それ以外の時はちゃんと、亜希の目を見て話をする。

（ここまで信じ切ってて、もし裏切られたら……痛いなあ）

亜希は割と楽観的な人間で、性善説派である。

人の本性は良い物だと信じたい。

（ああつと……こんなこと考え込んでたら、時間がどんどんなくなっちゃう。何回もアークに連れて来てもらうのは申し訳ないし、早くここでの調べ物を終えないと）

狭さの割に、蔵書の数はすごいので、すべてを見て回るのは骨が折れそうだ。

亜希は意識して気持ちを切り替えると、手近にある棚から目を通し始めた。

7 「調べ物と魔術」

(魔術があるって言うなら、RPGやファンタジー小説見たいに、人を召還するものはないのかな)

初めてアークにあった際、自分が異世界人だと知った彼がひどく驚いていたのを見ると、別の世界と行き来することは一般的ではないようなので、存在しない可能性の方が高い。

それでも、今ここに自分がいると言うのは厳然たる事実であり、何らかの現象によって異世界に飛ばされたのは間違いない。

知られていないだけで、禁呪のようなものがあつたとしても、おかしくはないだろう。

(まあ、仮に、そう言う魔術の書かれた本が存在していたとしても、異世界人の私がすんなり読めるような代物ではないだろうけど)

しかし、魔術に焦点を絞っても、蔵書の半分もある　とても多すぎて探せない。

先程、グランツが「魔術関係の本のうち、半分が白魔術関係」と言っていたので、魔術はいくつかに分類されていることはわかって
いる。

何とかもう少し、範囲を狭められないものか。

(とりあえずは、この世界の魔術が一体どう言うものなのか、先にそれを理解した方が良さそう。魔術の入門書みたいなものはないかな……っと)

ぶらぶら見て回っていると、需要が多いのだろうか、『はじめて

の魔術』、『魔術の基礎理論』等と書かれた、それらしき本がゴロゴロ見つかった。

亜希はその中から、一番薄いハンディサイズの、『一から学ぶ魔術』と言う本を手を取った。

目次を開くと、著者の前書きの後に、「魔術の基礎知識」と書かれた章があったので、その一番最初のページを開く。

(ええっと、何々……)

魔術は、白魔術・黒魔術・精霊魔術・その他の魔術の四つに、大別される。

<白魔術>

女神エルアノーラ、それに連なる神々の持つ光の力が源になる。

神々への祈りを通じて、行使されるが、心清らかな者にしか使えない。

祈りの方法は、個人や宗派によって様々。

まれに純粋な者の中には、訓練なく使えるケースもあるが、大抵はある程度、修行を積まなければ使えない。

主に、白魔術師や聖職者が使う。

<黒魔術>

深い嫉妬や憎悪など、自身の負の感情を元にして行使される。

呪文は、個人や宗派によって様々。

現在はこの国でも、使用が固く禁止されている。

使用する者は、黒魔術師と呼ばれる。

<精霊魔術>

地・水・火・風、それぞれの要素を司る、八百万の精霊の力を借りて行使される。

発動方法には二つある。

？精霊たちが支配する空気中の元素に、人が想いの力で働きかけて、望む形に練り上げる。この際、体力を消耗する。

？精霊に直接頼んで、力を貸してもらおう。純粹無垢な者ほど精霊に好かれやすく、強い力を行使出来るといわれている。

使用する者は、精霊魔術師と呼ばれる。

<その他の魔術>

今は使用法が不明になった、古代の魔術。

召喚・転移などがある。

(今は使用法が不明……やっぱりそんなことだろうと思ったよ。でも、存在しているのは間違いない訳だ)

元の世界に帰れる可能性は、少ないが……確実に、ある。

その事実は亜希を、手探りで歩いている闇の中で、一本の明かりが灯った蠟燭を手に入れたような気分させた。

(まあ、これで大分、調べる範囲が絞り込めた。その他の魔術関係の本を集めた棚の中から、召喚・転移について書かれた本を探せば良いってことだね。『古代魔法の研究』なんて題名の、学術論文みたいなのが中心かな？ だったら読みにくそう……」

亜希は、大学の講義で使っていた論文のテキストを連想して、渋い顔をした。

向こうの世界では総じて、研究書の類は読みにくかったと言う記憶しかないのだ。

わがままを言っても、仕方がないのだが。

（何だかんだ言っても、地道に一冊一冊、見ていく他ないんだ
頑張ろう。私は絶対に元の世界に帰るんだ）

ぱん、と両手で頬を叩いて気合いを入れる。

思いの外、大きな音がして、周囲にいた何人かがこちらを見たが、
無視した。

（あ、さっき読んだ本、一応借りておこうかな。ページのデザイン
がすつきりしてて読みやすいし、何となくこれからも役立ちそうな
気がする）

『一から学ぶ魔術』を片手に、亜希はその他の魔術関係の本を集
めた棚を探して、再び歩き始めた。

「……………はあ、つつかれたあ……………」

あれから、体内時計の感覚を信じるなら、二時間は経っただろう
か。

無事、その他の魔術関係の棚を見つけることが出来たものの、古
代魔術に関する書籍は　オカルトの人氣がこちらでもあるのだろ
うか　冊数が多く、ずっと細かい字を見ているうちに頭が痛くな
って来た。

窓がない、汚れた空気の建物に、長時間立ちっぱなしであったこ
とも、疲労の原因だろう。

今の所、何の進展もない。

能率が落ちてきているのは自覚していたので、亜希は一旦、休憩のため外へ出た。

ちなみに、『一から学ぶ魔術』は、本の難しい部分にぶち当たる度に辞書代わりとして、なかなか頼りになつたため、先に借りる手続きを済ませておいた。

期間は二週間。

今は、亜希の提げている鞆の中だ。

ぶらぶらと、教会の敷地を歩く。

新鮮な空気がおいしい。

思わず何度か深呼吸していると、礼拝堂の方から声が聞こえて来た。

朗々とした声音は、外までよく聞こえて来る。

(この声は……グランツさん?)

何となく興味を引かれて、亜希はこっそり扉の隙間から、中を覗き込んだ。

8 「神父と学舎」

(うわあ……人が一杯)

壇上には、本を片手に持ったグラントツが見える。

礼拝堂にある席はすべて、人で埋まっていた。

通路や壁際で立ち見している者までいる。

それぞれの手には、紙と羽ペン。

懐に入れたインクに時々ペン先を付けながら、真剣な面持ちでメモを取っている。

よくよく見れば、全員男性で、年齢は自分とさほど変わらないよ
うな 若者ばかりだ。

熱気が、すごい。

(礼拝中って雰囲気じゃないな。むしろ……江戸時代の私塾に近い
ような)

教会にしては異様な空気に驚いていると、グラントツが若者達に向
き直った。

「皆さん、今最も憂うべきことは、国難が迫っているにも関わらず、
そのことに気が付いていない人々が多いことです。また、気付いて
いても、危機に陥っている理由がわからない エリオット、貴方
はその理由が何だと思えますか？」

指名され、前の方の列に座っている茶髪の青年の頭が揺れた。

「それは……陛下が即位された際、政権の中枢が奸臣に握られ

たためです」

「そうですね　では、そこにいらっしゃる貴方はどう思いますか？」

亜希は思わず、背筋を伸ばした。

視線が　合ったような気がしたのだ。

(いやまさか、こんなに距離が開いてるんだし。自意識過剰だって……)

「扉の後ろにおられるのでしょうか？」

お嬢さん」

(えええ!?)

何故、覗いているのがバレたのだろうか。

音を立てないように、そっと窺っていたのに。

混乱している亜希に、次々と視線が向けられる。

針のむしる状態だ。

(何でこんな目に……勝手に覗いてたこっちが悪いんだろっけども!)

出来れば逃げてしまいたいが、どうもこの雰囲気では、一言発しない限り、解放してもらえそうにない。

渋々、亜希は扉から中に入った。

今までしんとしていた礼拝堂に、ざわめきが広がる。

おい、あれって「ポンデグッタ亭の短髪娘」じゃねえ？

へえ。噂で聞いてたけど、女なのにほんつと髪が短いんだな。背も高いし。

遠い外国から来たらしいぜ。

(思いつ切り、珍獣扱いだねえ……まあ、こつ言つ目を向けられるのは宿で慣れたけど、お前等、不躰だとは思わないのか?)

何だか、腹が立って来た。

聞こえよがしに喋っていた数人を、キツと睨み付けると、慌てて口を噤んだ。

こちらら、生憎、人前で緊張して硬くなるような可愛らしい女性ではない。

大学に入学して以降、何故か研究会の広報に任命されて、一年生全員に向かつて喋らされたり、講義で発表する役に指名されてしまったりする機会が多かったので、心臓に毛が生えつつあった位なのだ。

「こつそり覗いていたことに、お気付きだとは思いませんでした。ところで……何故、私にお聞きになられるのですか?」

言葉を切りながらゆっくりと話す。

グラんツが一番奥にいるため、自然と声を張り上げなければならなくなつたが、致し方ない。

堂々と話しているからだろうか 次第に礼拝堂内は落ち着きを取り戻していった。

「私はまだこの国に来て、日が浅いので、適切な答えは返せないかと存じますが」

「だからこそ、お聞きしたいのです。中にいる我々では見えないも

のが、貴方には見えるかもしれない」

（そんな風に聞かれたら、答えない訳にはいかないなあ……気が進まないんだけど、仕方ないか）

自分から積極的に意見を言いたがらないのは、日本育ち故だろうかと思いつながら、亜希は口を開いた。

「では、僭越ながら申し上げます。グランツさんは、気が付いていない人々が多いとおっしゃいました。それは、国民が真実の情報に触れる機会が少ないと言つことですよ？ 私が見た所、皆さんの情報源は新聞のみなのですが」

「ええ、そうです」

「と言うことは、発行機関の人間がもし、偏向報道を行ったり、政府に媚びを売るようなことになれば、国民が洗脳されてしまう危険性がありますね。いや、むしろそれが現実になっていて、奸臣がその奸臣たる所以を一切、報道しないため、人々が気付いていない。そのことこそが、危機に陥っている理由ではないでしょうか」

ざわめきが、消えた。

怖い位の静けさに、どうリアクションを取ったものかと悩んでいると、グランツが突然、拍手をした。

「素晴らしい！ アークが連れて来たお嬢さんなので、どんな方かと思つていたのですが、お見逸れいたしました。私がこの後話そうと思つていたことを、先に言われてしまいましたね」

ふふふ、と愉快そうにグランツは笑つていた。

「その着想はどこから得たのですか？」

「いえ、考えたと言うのではなくて……私の祖国もこの国と、似た状況に置かれていたので」

「成程　　このような貴人と、どこでお知り合いになられたのですか、アーク」

「ポンデグツタ亭で、偶然出逢ったんだよ」

背後で聞き慣れた声があったので、振り向くと、「迎えに来たぞ。思ったより早く用事が済んだ」と頭上から声をかけられた。

「わわ……アーク！　気配消したまま現れないで下さいよ。心臓止まるかと思ったじゃないですか」

「大袈裟だな。こいつは職業病って奴だ」

笑いながら、アークは視線をグランツへと移した。

「ったく……こいつを試すような真似しやがって」

「純粋な好奇心から訊ねてみただけですよ」

「……腹黒神父」

アークはぼそりと、物騒な二つ名でグランツを呼ぶと、奥の方に歩いて行き、グランツとしばらく何か話し合った後、こちらに戻って来た。

「で、調べ物の方はどうだ？」

「今の所、古代魔術関係の本から、召喚・転移に関する手がかりを探しているんですけど、さっぱりです」

アークが声を潜めたのに続けて、ぼそぼそと小声で答える。

「そう簡単に見付かる訳ねえよな。まあ、あんまり根詰め過ぎんなよ。今からまだ調べてエなら付き合っが」

「いえ、お待たせするのも悪いですし……」

「お二方、お帰りになる前にお茶はいかがですか？」

話している途中、背後からにゅっとグランツさんの首が伸びたので、驚いた。

（アークと言い、グランツさんと言い、何か……心臓に悪い人達だなあ）

「断つても、無理矢理にでも引き留める気満々だろうが」

うんざりしたような顔で呟いたアークに、グランツは穏やかに微笑みかけた。

「おわかり頂いているなら話は早い　こちらへどうぞ」

閑話「剣士と神父」

一仕事を終えて、アキを迎えに行くと　何やら、礼拝堂の様子が妙だった。

ざわめきと共に広がっている、ぴりぴりした空気は何なのか。開いている扉の向こう側にいるのは

(アキ……！)

教会の講義に通う、野郎共が遠巻きに彼女へ不躰な視線を送っている。

奥では、グランツが事態を静観していた。

(あんにやろう……俺が連れて来たっただけで、やたら関心持ってたやがったから、大方アキを試したな)

そんなつもりで、彼女をここに連れて来た訳ではなかったのに。

自分とアマンダ位しか、気を許せる相手がないアキの状態は、精神衛生上、好ましいものではないだろう　そう考えて、旧知のグランツと引き合わせ、彼の仲介で歳の近い野郎共と親しくなれたら良い、とアークは少し前からアマンダと話し合っていたのだ。

実はここは首都だけあって、蔵書の多い教会はたくさんある。

わざわざ、アルツァード教会を選んだのには、そう言う理由があったのだ。

グランツが指摘していたように、アークは日頃、女性を連れて歩く趣味はない人間だった。

仕事柄、やむを得ない場合はそうすることもあったが、自分の容姿等、上っ面だけ見て近付いてくる女が絶えないので、若い異性に対して嫌悪感を持つていた位だ。

しかし、アキに対しては不思議と、親しみを覚えた。宿の食堂で度々顔を合わせた際は、よく話をするが、彼女との会話は気疲れしない。

気取らずに話が出来た異性は、アキが初めてだった。

アキと自分が一緒にいた際の、寛いだ空気をグランツは敏感に察して、興味を持ったに違いない。

それにしても、こんなやり方は公開処刑ではないのか。大抵の女性なら、この空気に晒されるだけで、怯えてしまっただろう。

割って入ろうとした瞬間、アキが顔を上げて一歩足を前に踏み出した。

「こっそり覗いていたことに、お気付きだとは思いませんでした。ところで……何故、私にお聞きになられるのですか？」

落ち着いていて、実に堂々とした口上に、周囲の音が波のように退いていった。

「私はまだこの国に来て、日が浅いので、適切な答えは返せないかと存じますが」

声に震えがない所を見ると、虚勢を張っているのではなく、本当に肝が据わっていることがわかる。

それに、グランツも気が付いたのだろう。

少し前に乗り出すようにして、口を開いた。

「だからこそ、お聞きしたいのです。中にいる我々では見えないものが、貴方には見えるかもしれない」

一体、どう言う質問をアキに投げかけたのか。

途中から来た自分は、会話から推測するしか術がない。

「中にいる我々では見えないもの」とは、国内の情勢についてなのか。

思索していると、アキが口を開いた。

「では、僭越ながら申し上げます。グランツさんは、気が付いていない人々が多いとおっしゃいました。それは、国民が真実の情報に触れる機会が少ないと言うことですよ。私が見た所、皆さんの情報源は新聞のみのようですが」

「ええ、そうです」

「と言うことは、発行機関の人間がもし、偏向報道を行ったり、政府に媚びを売るようなことになれば、国民が洗脳されてしまう危険性がありますね。いや、むしろそれが現実になっていて、奸臣がその奸臣たる所以を一切、報道しないため、人々が気付いていない。そのことこそが、危機に陥っている理由ではないでしょうか」

ざわめきが、消えた。

(この十日間の間に、そこまで見抜いていたか)

予感があった。

三日前、アマンダにアキから物価について訊ねられた、と聞いた。

日増しに物価が全体的に下がっているのではないか。

いつから、物価が下がり始めたのか。

異世界に飛ばされて僅か数日、まだこちらの文化を吸収するのに必死だったであろうに、経済に関心を持つ余裕があったことへの驚き。

さすがに、こちらに来た直後は錯乱状態に陥っていたものの、すぐに冷静さを取り戻していたのを見ていたので、芯の強い奴だとは思っていたが、これには予想外だった。

それから注意深く、彼女の様子を見ていた所、これまでは宿で取っている新聞を、語学の勉強に使っているものと思っていたが、隅から隅まで熱心に読んでいた。

言葉が書けないが、何故か読めることは以前に聞いていたので、すらすら読んでいる光景にさほど驚きはしなかったが、別の意味で衝撃を受けた。

民衆で、政治に興味を持っている者はそう、多くはない。

皆、自分の生活に直結した問題だけを、気にしている。

しかも、アキは女である。

女性でありながら、生活とは無関係の政治の動きにまで関心を持っている人間は、非常に珍しい。

また、彼女は疑問点があれば、宿の者に度々質問していたらしい。アキの国では、女性にも男性と同様の事柄を、学舎で教えていたのだろうか。

思い返せば、アキの話し方は理知的で、どちらかと言えば思考は男性に近い所があった。

パチパチパチ……

思索に耽っていたアークを、拍手の音が現実に呼び戻した。

「素晴らしい！ アークが連れて来たお嬢さんなので、どんな方かと思っていたのですが、お見逸れいたしました。私がこの後話そうと思っていたことを、先に言われてしまいましたね」

ふふふ、と愉快そうに笑うグランツと、視線がかち合った。

その一瞬、微笑みがにやりとしたものへと変わる。どうやら、気付かれていたらしい。

(相つ変わらず、気配には敏感らしいな)

一応、向こうから姿は隠していたのだが、歳を食ってはいても油断ならない男である。

目を細めるアークを余所に、グランツはアキへと視線を戻し、興奮覚めやらぬ様子で、「その着想はどこから得たのですか？」等と話しかけていた。

それに対して、アキは「私の祖国もこの国と、似た状況に置かれていたので」と返している。

「成程　　このような貴人と、どこでお知り合いになられたのですか、アーク」

そこで、いきなり話を振るのはいかななものか。

こちらの気配には、さっぱり気付いていなかったのであろう、アキはびくりと肩を震わせた。

怖がらせてしまったではないか。

「ポンデグツタ亭で、偶然出逢ったんだよ」

「わわ……アーク！ 気配消したまま現れないで下さいよ。心臓止まるかと思っただじゃないですか」

「大袈裟だな。こいつは職業病って奴だ」

あまりにも予想通りの反応に、思わず失笑してしまった。

笑いながら、視線をグランツへと移す。

何とか、無事にこの場が収まったから良かったものの、そうならなければ、どうするつもりだったのか。

アークが陰から見守っていたのを知っていたので、事態が不味くなれば、割って入ることを計算されていたのなら、癪だ。

アキが怯えないように、口元は笑みを浮かべながら、目でグランツに気を飛ばす。

少し言っておかねば、腹の虫が治まらない。

「ったく……こいつを試すような真似しやがって」

「純粋な好奇心から訊ねてみただけですよ」

「……腹黒神父」

そこらにいる男に、軽く視線に殺気を込めれば、それだけで尻尾を巻いて逃げる者がほとんどなのだが、肝っ玉がでかいこの男には、さほど利かないのが悔しい。

(二)の野郎)

すつきりしないままにいるのは嫌だったので、グランツの下へと足を進める。

周りにいる野郎共が、自分から道を譲ってくれた。

どうやら、殺気が少々外に漏れているらしい。

グランツの肩に腕をかけ、声を低めて話しかけた。

「何でこんなことをした。俺が信用出来ねえか」

「まさか。物騒な講義をしている教会ですから、私の許可なしにはこの時間、魔術で中には入れませんからね。貴方の紹介なので、信用してお招きしたんです。直感で、この方はもしかしたら……」と思っただけです。ついで質問を「

「あなたが優れた若者に目がねえのは知ってるが、やり方ってモンがあるだろうが」

「すみません。衝動を抑え切れませんでした」

ははは……と、邪気なく笑う顔を見て、何だか毒気が抜かれてしまった。

(はあ……困ったおっさんだな)

溜め息をつきながらも、言うべきことは言っておかねばなるまい、とアークは頭を上げた。

「気に入ったのなら、それは結構。可愛がってやってくれ。だが、

あいつにはあいつの祖国がある

あつちには巻き込むなよ」

「おや……宜しいのですか？」

「二度言わせんな」

睨むと、グランツは首を竦めて見せた。

一々、素振りが癪に障る。

付き合いが長い分、こちらの本心を見透かしている所があるので、余計気に食わない。

(アキは人物だが 俺の勝手に元の世界に帰ろうとしてるのを、引き留められる訳ねえだろうが)

アークは胸の内ですう吐き捨てた後、グランツに背を向けた。

1 「茶話会の紅一点」

亜希とアークは礼拝堂の奥へと案内され、ほどなく二人には紅茶のよつなものが用意された。

グランツから「ごゆるりとお過ごし下さい」と言われたものの

(……これで寛げって言うのは、無理な話では)

周囲には血気盛んな青年達があり、自分に視線を送っている。

入って来てすぐの頃と比べると、少しだけ空気が和らいではいたが、針のむしる状態であることに変わりはない。

「てめえ等、ジロジロこいつを見過ぎだ。ちったあ、自重しやがれ」

ふと、アークがこちらの気持ちを代弁するような台詞を述べてくれた。

「だって……さっきの言葉を聞いたら、ますます、どんな人が気になるじゃないですか」

「兄貴が、女性を連れて来たってだけでも、驚きだし」

「しかもその女性が、噂の『ポンデグッタ亭の短髪娘』とあっちゃ、なあ……?」

数人が、ぼそぼそと呟いた。

兄貴、と言っていたが、アークは彼等と先輩後輩の関係なのだろうか。

黙っていても気まずいだけなので、アークに訊ねてみると、「そうだ」と返された。

昔、彼もここに通っていたことがあったとのことだった。

(さて、どうしたもんか……)

何を話して良いかわからず、亜希は湯気が立ちのぼる目の前のお茶に口を付けた。

味は、ダーズリンに少し似ている。

純粋な味と香りを充分堪能した後、正面に置かれていた角砂糖とミルクを入れて、スプーンでかき混ぜた。

こちらの世界の食文化は、地球とあまり差がないのでありがたい。カップから口を離れた所で グランツと目が合った。

「先程のお話について、少し質問させて頂いても宜しいでしょうか？」

「どござ」

「偏向報道に気が付かれた、きっかけは何ですか？」

「そうですねえ……記事に用いられているグラフでしょうか」

グラフは、見る者に誤解を与えやすい代物である。

統計学の講義でそう教わって以来、亜希は新聞やテレビの報道で用いられたグラフを安易に信用しなくなった。

わかりやすい例に、棒グラフと折れ線グラフがある。

縦軸と横軸の比率を変えれば、ゆるやかな変化を急激な変化に見せることが可能であり、その逆もわかりだ。

「役人の給与が最近、国から発表されましたが、ランディオン新聞は”給与下がる!”、インディアス新聞は”給与安定”と報じました」

それぞれ、記事と共に折れ線グラフを載せていた。

数値は政府発表による、同じもの。

横軸が月、縦軸が給与 違うのは、縦の目盛りの幅である。

給与の額に着目すれば、変化は二パーセントと微々たるものである。

しかし、縦の目盛りの幅を広くしたランディオン新聞のグラフを見ると、その変化が何十倍にも見えてしまう。

「このことに気が付いてから、二つの新聞の思想性の違いを注意して見てみたんですが、ランディオンは現政権支持、戦争で戦った前政権をこっぴどく非難している所から、反戦平和支持。インディアスは現政権とは距離を取り、前政権に対しては中立……と言った感じを受けましたね」

「その指摘は我々も同感です。ランディオンは左寄り、インディアスは右寄りと言う風に認識しています」

複数の情報に触れなければ、真実がわからないと言うのは、こちらでも日本と変わらないらしい。

亜希も向こうの世界で、ネットで記事を読み始めた頃には、各社の報道の違いに随分驚いたものだった。

「現在、国難が迫っているにも関わらず、気付いていない人々が多いとグランツさんはおっしゃいました。この国の大手新聞社はランディオンとインディアスの二つと聞きましたが、つまり ランディオンの読者が過半数を占めている状態……と言うことですよね」

「ええ。先の戦で我が国が負けた後、一時駐留していた敵国の軍部に、ランディオンがすり寄りましてね。それ以後、あそこの新聞社は偏った報道をするようになりました。まあ、元から長い物には巻かれると言った体質だったのかもしれないが。インディアスは戦後、部数が伸び悩んでいる状態ですね」

話を聞けば聞く程、このオズウエルドと言う国は日本と重なる部分が多い。

日本でこの前の夏に行われた選挙では、マスコミの偏向報道がかなりの票に影響を及ぼし、政権交代に至った。

亜希は選挙速報を見ていた時、日本の将来を本気で危ぶんだ。

民主主義と言うものは、国民一人一人が正しい情報に触れられなければ、そもそも機能しないのではないだろうか。

情報の提供者であるマスコミが、偏った情報を流す罪は重い。

(それにしても、まさか異世界に来て、左とか右だとか、偏向報道の話をするなんて、思いもしなかった)

異世界の中でも、日本と類似点が多いこの世界に飛ばされたのは、偶然とは思えなかった。

「ふふ……貴方は実に興味深い女性ですね。話が示唆に富んでいる」

「いえ、そんな!……偏向報道に気付いたのも、オズウエルドと我が国の置かれた状況が、たまたま、よく似ていたからです」

「似た現状にある国の方と、こうして巡り会えたのも、主のお導き

でしょう 貴国についても、是非色々とお聞きしたいものです」

きらり、とグランツの瞳の奥が瞬いた。

一瞬向けられた鋭い視線に、じわりと手に汗が滲んだ。

（この人は、私が異世界人だつてことに、気付いてる……？ いや、まさかね……）

緊張が表に出ないように注意しつつ、にこりとグランツに微笑み返す。

話していて、グランツは、確固たる信念を持っている人だと感じた。

そして、話し方は穏やかだが 胸には情熱を滾らせている。

（グランツさんは良い人だ。けど、心の距離の取り方は慎重にした方が良いかな）

亜希は身寄りがなく、この世界の経験も少ない、頼りない存在である。

こちらの誰かと深い付き合いを結ぶのは、もう少し自分がしっかりするまで、考えた方が良さだろう。

「そろそろ日が傾いて来たし、今日はお開きだ……帰るぞ、アキ。あんまり遅くなったら、アマンダが心配する」

一瞬、流れた重い空気を断ち切るように、アークが割って入った。彼の意見に異論は出ず、一同は解散となり、亜希はアークと帰途についた。

夕暮れの城下街。

買い物を終えた主婦、仕事を終えた労働者が一斉に帰宅するこの時間帯は、実に歩みにくい。

特に、今歩いているのは街のメインストリートなので、人混みを縫うようにして進まなければならない状況である。

「わわっ！」

「……っと。大丈夫か？」

肩を押されて、つんのめった所をアークに支えられる。

「すみません……さっきから何度も助けてもらってますね」

「いや こいつは、出るタイミングを間違えたみてえだな……悪い。どうせなら、もう少し後にするべきだった」

「いえ、あそこで言うて下さって助かりました」

あのままであれば、自分の身元について話さなければならなくなっていただろう。

この世界に国家が無数にあるとは言え、経済大国とされるオズウエルドと比べてもまだ、科学技術等は日本の方が優れている。

あまり日本のことについて詳しく語れば、「何故発展している国なのに、名前が知られていないのか」と聞かれかねない。

「……そうか」

「はい」

淡々とした受け答えだが、温かみを感じるのは何故だろう。アークと話していて、ほっとしている自分に亜希は気が付いた。

「ちんたら歩いてんのも、疲れるな 飛ばすぞ」

不意にぐいっと肩を掴まれた。

そのまま押されるようにして、前へと進む。

途端に、するすると面白い位、歩くのが楽になった。

見上げてみると、アークが亜希をかばいながら、その肩で人混みをかき分けながら進んでいるのがわかった。

どろり歩きやすい筈である。

ぶっきらぼうな中に垣間見られる優しさに、自然と頬が緩んだ。

もう少し、自分がしっかりするまで、この世界の誰かと深い付き合いを結ぶのは、避けた方が良いとは思うが しかし。

(……この人は、信じたいな)

そう、ぼそりと心中で亜希は呟いた。

2 「怜悯な人」

あれから、ポンデグッタ亭が休みの度に、亜希は教会へと足を運んでいた。

今日は三回目。

自分の読む速さから考えるに、後一回来れば、ここの教会の蔵書は調べ終わりそうだ。

残念ながら、未だにこれと言った収穫はない。

「ふう……」

亜希は一つ、長い息を吐くと、持っていた本を勢い良くパタン、と閉じた。

(駄目だ。全然集中出来ない)

能率が下がったままの状態が続いている原因は、ただ一つ。

ちらりと壁を背にした本棚の方に視線をやると 人影が三つ。

一人の茶髪頭の青年は、こちらに背を向けるようにして本を読んでいるが、傍らの青頭と緑頭の青年はこちらを見ながら、こそこそ何か話し合っている。

自分の体内時計の感覚からすると、視線を感じ始めて十五分は経っている。

(ああ、もう！ 鬱陶しいなあ…… 言いたいことがあるなら、ここに来てはつきり言えば良いのに)

我慢も限界に達し、亜希はずかずかと彼等に向かって歩いて行った。

気付かれるとは思わなかったのか　青頭と緑頭がおどおどし始めた。

逃げようと踵を返したので、「そこのお二人さん」と声を低めて呼びかけると、二人はぎくりとしたように、足を止めた。

「さつきから、ずつとこっちを見て、何か言っていましたよね？
気のせいだとは言わせませんよ　何かご用ですか？」

わざと笑顔でそう言ってやると、緑頭がびくびくしながら、背後に回っていた腕を前へと出した。

その手には　新聞。

「あの……一つ、あなたの意見を、聞かせちゃもらえないだろうか
？」

「　はい？」

「……えっと、要するに、私にこの記事について、思う所を述べると？」

「そつだ」

亜希の問いに、青頭が神妙な顔で頷いた。

彼の指し示した先には、「国の借金、過去最高九百兆ガロンに！
国民一人当たり七百万ガロン」と言う見出しが躍っている。

実際には筆記体に似た文字で書かれているのだが、見た瞬間、頭に浮かんだ訳をそのまま言つと、こうなる。

日本円に換算された訳になるのではなく、オズウエルドの通貨、ガロンで訳されているが、兆や万と言つた部分は日本の表記方法なのが面白い。

おそらく、自分から話す時もこの見出しのような言い方をすれば、相手に上手く訳されて聞こえるのだろう。

(参つたなあ……私の専門は歴史なんだけど)

亜希は自分の就職の問題をきっかけに、政治について調べるようになってから、ネット上で経済のブログの記事も若干読んでいたが、それ程知識がある訳ではない。

耳学問で、どこまで話せるのかは未知数だ。

「私は、経済の専門家でも何でもないんですけど、素人の意見でも？」

「構わない」

と、青頭。

それに

「俺達は、外国から来たあんたがどう思うのか、ただそれを聞いてみたいんだ」

と、緑頭が続ける。

「はあ」

要するに、彼等は自分達にない、異質な視点からの意見を求めてやって来たらしい。

二人の視線には、何かを期待するようなものをひしひしと感じるので、断つても、しつこく聞いてきそうな気がする。

(仕方ない……頑張つて、少ない知識を掘り起こすしかないか。救いは、この国の経済状況が日本そっくりってことだね)

深く溜め息をつくくと、亜希は調べ物で疲れていた頭に再び、スイツチを入れた。

「そうですねえ……この”一人当たりの借金”って言う表現は、おかしいと思います」

「何故だ？」

青頭が首を傾げる。

「そもそも、政府がここまでお金を借りることが出来たのは、貸してくれる人がいたからですよね。前に新聞で読んだんですけど、オズウエルドの政府は足りないお金の大部分を、国内から借りていきます。国民が銀行に預金をして、銀行がその預金を国債という形で運用している訳です」

こちらの世界でも、銀行が存在してくれていたお陰で、耳学問で得た知識をそのまま話すだけで済むのが、ラッキーだ。

「つまり……」

「国民は借金をしている側ではなく、貸している側、と言つてとですね？」

突如、青頭でも、緑頭とも違う声が亜希の言葉を遮った。

聞こえた方を向くと、先程までこちらには目もくれずに、傍で本を読んでいた茶髪頭が、亜希にまっすぐその視線を向けていた。

（あつ！ この人、確か礼拝堂で、グランツさんの質問に答えてた人だ）

名前はエリオットと言ったか。

翡翠の瞳はすっと切れ長で、どこか、ぎらぎらしたものを纏っているように感じる。

「そうです」

「しかし、政府が家計の貯蓄に頼って借金を重ねるのには、いくら我が国の家計が世界的に見て高貯蓄だと言っても、限界があるので？ 政府がさらに借金を重ね、少子高齢化を背景に家計の貯蓄が減っていけば、後十年で政府の負債が家計資産を逆転する可能性もあります」

エリオットの意見に、亜希は眉を顰めた。

彼の言っていることは一見、正しいことのように聞こえるが変だ。

「高貯蓄だと言われるオズウェルドの家計が、お金を取り崩したのなら、この国はすごい好景気になるんじゃないですか。そうになると国債を発行する必要もなくなるかと思いますが……」

家計が使ったお金はそこで消える筈はなく、民間企業の利益になるのである。

「金は天下の回り物」と言う言葉があるが、お金はぐるぐる回っ

ているのであって、使ったらなくなるものではないのだ。

指摘されて、そのことに気付いたのか、エリオットの色白な顔がみるみる赤くなった。

「失礼！」

エリオットはいきなり叫ぶや、早足でこの場を立ち去ってしまった。

「ええっと……私、もしかして……彼のプライドに傷をつけてしまったんでしょうか？」

「だろうな」

「エリオットは、グランツ先生の教え子でも、特に勉強が出来る奴なんだ。この前、あんたが来てから妙にピリピリしてたから、敵対心でも持つてるんじゃないかな」

青頭と緑頭が揃って頷いた。

「勝手にライバル視されても、困るんですが……」

「いや、でもお前、素人の意見とか言っときながら、充分すげえよ。俺、この記事見ても変だとか思わなかったし　なあ、ルード」

「ああ。兄貴とグランツ先生の目に、狂いはないな」

「いや、あの……私の祖国とこの国の経済状況が偶然似ていて、最近聞いた話を、記憶を頼りに言っただけなんで！」

ネットで学んだだけの知識で、そこまで感心されると恐縮してしまふ。

「それでも、だ。この国じゃ、一般人で経済に興味を持つてる奴は珍しい　ましてや、女子なら尚更だ」

青頭は、真面目な顔をして言った。

「……そうなんですか？」

「不思議そうに言う辺り、あんたの国には、そう言った知識を持つてる人間は珍しくないみたいだな。すごい国もあったもんだ

なあ、俺達と友達になっちゃくれないか？」

「えっ」

緑頭の突然の申し出に、亜希は目を丸くした。

呆然としていると、「嫌か？」と泣きそうな顔で聞かれて、思わず首を振ると、緑頭はガッツポーズを作った。

否定を了承の意と判断したらしい。

まあ、断る理由もないので、別に良いと言えば良いのだが。

「じゃあ、これからよろしくな！　俺はエリック。こいつは親友のルードだ」

二人から手を差し出され、おずおずと握手した。

緑頭で、軽い喋り方の方がエリック、青頭で、落ち着きのある物言いをする方を、ルードと言っらしい。

(何だか訳がわからないうちに、友達が出来ちゃった)

考えてみれば、アーク以外の年の近い知り合いが出来たのは、これが初めてである。

「えっと、『ポンデグッタ亭の短髪娘』の噂で、名前はもう知っているかと思いますが、亜希・四条です……よろしく」

自己紹介なんてするのは、大学入学以来だなと思いながら、亜希はエリックとルードの笑顔を眺めていた。

3 「怪しい男」

その後、亜希は二人に引きずられるようにして、礼拝堂の窓際へと連れて来られた。

(まだ、調べ物を続けるつもりだったんだけどなあ……)

エリックにすっかり腕を掴まれているので、女の亜希には容易に振り解けない。

先程から、エリックはルードとぼそぼそ、何かを話し合っている様子なのだが、わざわざ場所を変えてまで、自分に何か言いたいことでもあるのだろうか。

礼拝堂内は、今の時間にはグランツの講義がないらしく、一般の礼拝者が数人見える程度である。

「なあ、あの左の隅っこにいる奴、見えるか」

エリックがルードとの話が終わったのか、アキの方を向いた。

「あの人はですか？ 腰に巻いている帯に、鳥の羽みたいなのがついてる……」

「そう、あの男。昨日もうちに来たんだ。『ポンデグッタ亭の短髪娘』はいないか……」って。知り合いか？」

訊ねられて、亜希は改めて、男をまじまじと見た。

黒髪、肌の色は白色系。

黒のシャツの上に薄茶のベスト、腰には水色の帯を巻き、その上に羽がついた紐のベルトが締められ、そこに大振りのサーベルがぶら下げられていた。

ベルトとお揃いなのか、首からも羽がついたペンダントを提げている　伊達男だ。

（長身で、顔も悪くない　こんな人目を引く人が宿に来ていたら、記憶に残ってそうなるもんだけど……）

「うーん……会ったことはない、と思います」

「となると、怪しいな。一体、何が目的であんたに会いたいのか……俺達も、妙な奴だからと、知らぬ振りをしていたんだが、気になつてあんたに確かめてもらったんだ　どうする？」

ルードが眉間に皺を寄せながら、言った。

「……進んで会う理由はありませんね」

自分の噂が広まっているのは知っていたが、こうしてわざわざ会いに来た人物は初めてである。

一体、自分の何を知って興味を持ったのか。
何のために近付こうとするのか。

非常に気になるが　こちらから接触を図るのは、本能が危険を訴えている。

「まあ、知り合いだったら、こうこう、こう言う事情があつて会いたいんだ……って言い方になるのが自然だもんな。そう言うのを一切なしに、ただ『会わせる』ってのは、不自然極まりねえから、怪

しんで当然だ」

「確かに、エリックの言う通りだ　アキ、あんたはしばらく、ここには来ない方が良くかもしれない。とりあえず、兄貴が迎えに来るまでは、グランツ先生の所に隠れさせてもらったら良いだろう　こっちだ」

ルードの案内に従って、礼拝堂の裏手に回る。
木々が数本ある他、辺りには何も無い。
足下には、芝生が広がっているだけである。

「あの、グランツ先生の所って……？」

「ちょっと待つてな。呪文を唱えれば……」

「唱えれば、何だって？」

エリックの言葉に、突然、見知らぬ声が口を挟んだ。
はっと三人が振り向くと、いつの間にか背後には
礼拝堂で見た謎の男。

先程、

(気配をまったく感じなかった……！)

じとり、と背中に汗が流れ落ちるのを感じた。
酷く、動悸がする。

アークやグランツも、気配を断つのに長けている人達だが、背後

に立たれて恐怖を感じたのは、これが初めてだ。

さっと、エリックとルードが亜希を庇うように前へ出ると、「あ、そのお嬢さんに手を出す気はないから、安心しろ」と、男は慌てた様子で言った。

「俺達が教会の人間だからって、言われた言葉をそのまま信じられる程、お人好しじゃねえよ」

エリックの皮肉が入り交じった言葉に、男は首を竦めて見せた。

「……警戒されてるねえ。俺は巷で噂のお嬢さんがどんな子か、直に会って確かめたくなっただけの、ただの一般人なんだが」

「気配を消していきなり現れるのが、一般人だと？」

ルードの意見に、亜希は心の中で強く同意した。

「あー……こいつは職業病って奴だ」

「……どんな職業ですか、それは」

「お、口利いてくれる気になったかい？」

思わず素で突っ込むと、男はうれしそうな顔をこちらに向けた。

「まだ、心を許した訳じゃありませんよ　で、質問の答えはどうなんですか？」

「気の強い女は悪くないな……で、俺の職業だが、アークの同業者

で、あいつとは友人だ」

「！」

さらりと出されたアークの名に、三人は顔色を変えた。

しかし、アークは自分を「剣の腕では、結構有名」だと言っていたので、この男がその名前を知っているのは、不思議でも何でもない。

同業者と言い張るのなら、尚更である。

こちらに油断を誘うために、名前を出してみたのではないか。

「その証拠は？」

「間もなく、お見せ出来るだろうよ　ほら、来た」

そう言うなり、男はひょいっと首を右に曲げた。

間を置かず、最初に首があつた場所に突如、男の背後から鞘に収まったままの剣が突き出された。

その持ち主は　赤銅色の髪。

何故なのかはわからないが、その姿を見て　亜希は自分の心が
凪いでいくのを感じた。

「アーク」

無意識のうちに、その名を呼んでいた。

それに応じてか、アークはこちらを一瞥し、一瞬目元を緩ませた
ように見えたが、すぐに険しい表情に戻った。

4 「風雲」

ここまで、結構な距離を走って来たのだろうか　アークの肩は激しく上下するのを繰り返している。

にも関わらず、構えた剣先が微動だにしないのは、すごいと感じた。

「　思いの外、嗅ぎ付けるのが早かったな」

「何故、お前がここにいる？　ゼノ」

「女嫌いだった筈のお前が、女を送り迎えしてるって聞いたから、見に来ただけだ」

「……仕事はどうした？」

「終わらせてから来たに、決まってるだろう。留守番もちやんと置いてきた　しかし、お前の見る目も悪くないじゃないか　国債に関する新聞記事の間違いを、実にわかりやすく指摘していたぞ」

男、もといゼノの言葉に、前に立っているエリックとルードの表情が強張った。

「どうやら、書庫にいた時から観察されていたらしい。」

「嫌ですね……立ち聞きしてたんですか」

睨みながら、嫌悪感たつぷりに言ってやったが、「いや、何だか面白そうな雰囲気だったから、つい聞いちまったんだ」と悪びれた様子もなく返されて、氣勢をそがれてしまった。

「お前なあ、好い加減にその物騒なのを下ろせつての。このお嬢さんをどうこうしようなんて気は、これっぽっちもねえよ」

ゼノはわざとらしく溜め息をつきながら、指先でアークの持つ剣をピンピン弾いている。

緊張感のまったくない振る舞いに毒気を抜かれたのが、アークは剣を下げたが、その視線をゼノから外そうとはしない。

「お前がそこまでムキになる理由が気になる所だが……この場は一且俺が消えるしか、収めようがねえみてえだな。まあ、一つだけ言っとくぞ」

ゼノは不意に真顔になった。

緑の双眸が、すっと細められる。

「今後はお前も、ずっとお嬢さんに付いてはいられない。でも、彼女を人は放って置かないだろう。お嬢さんの自由を尊重して、あえて置いて行くのか、傍に置いて守るのか……とつと腹を決める」

「……っ！」

アークは苦虫を噛みつぶしたような表情で、ゼノを睨み付けた。

「友人からの忠告だ。じゃ、俺は戻ってるからな」

少し前の、緊迫した空気は何処へやら。

ゼノは軽い口調に戻してそう言うと、さっと踵を返し、アークの横を通り様に、彼の肩を叩いて行ってしまった。

気まずい沈黙が、その場を覆う。

（何か知らない所で、私を取り巻く状況が、どんどん変わっていつてみたいけど……）

訳がわからない。

アークが少しの間だけここにいると言う話は、前から聞いていたが、彼は旅人だとアマンドは言っていなかったか？

先程のゼノとか言う男との会話を聞いていた感じでは、どうもそんな風には思えない。

何となくだが、アークは自分に何か重大な事実を隠しているのではないか、と言う気がする。

彼の素性はほとんど知らないし、今まで知りたいたも思わなかったが、自分に関わることであれば、別だ。

これまでの彼の振る舞いを見ると、何故かはわからないが、本当に親身になって世話を焼いていてくれたので、今も信用はしている。

しかし、最近のアークを見てみると、妙にピリピリしていて、何事からか自分を遠ざけようとしていたように感じた。

それは、一体何なのか。

「アーク」

声をかけると、はっとした顔をして、アークはこちらを向いた。
何か、考え事をしていたようだ。

「さっきの話……説明してもらっても構いませんか？」

「……ああ。当事者のお前には言わなきゃならんだろう」

そこで言葉を切ると、アークは視線をエリックとルードに移した。

「悪い。ちょっと席を外してくれ　アキを守ってくれて、ありがとう
とな」

「いえ」

「紳士として当然の行動ですよ。兄貴」

エリックとルードは笑ってそう告げると、嫌な素振りを少しも見
せずに去って行った。

「ここじゃ、あれだな。中を借りるか　おい、グランツ。一
部始終聞いてたんだろうが」

何も無い空間に向かって、アークがそう告げた途端、ぐにゃりと
景色が歪む。

空中に、突如ドアノブが出現した。

（か、怪奇現象……！）

魔術が存在する世界なので、この程度のことは何でもないのであるが、地球人の亜希は口をあんどりと開けていた。

それを余所に、アークは表情を変えないままドアノブを掴み、開いた手は亜希の肩に回すと、躊躇いもなく押し開けて、中へと入って行った。

5 「隠し部屋」

中には 洋風な内装の部屋が広がっていた。
広さは、日本の中流家庭の応接間と、同じ位だろうか。
亜希の家のそれと、同程度なのである。

年代物と思われる、飴色の丸い机が中央にあり、部屋の入り口とちょうど向かい側にある椅子にグランツが座っている。

亜希とアークのすぐ前に、謀ったように椅子が二つ用意されていた。

「いきなりで悪いが、ちよつとの間、部屋を貸してくれ 今から話すことは、盗み聞きするなよ」

「盗み聞きさせない、と言いたいのでは？」

「……言葉のニュアンスなんざ、どうだって良いだろ」

不機嫌そうに言ったアークに、「失礼しました。では、ごゆっくり」と述べると、グランツは扉から出て行った。

振り返って気付いたが、扉は向こうからみると透明だが、こちらからははっきりと色や形が見える。

薄緑色の、何の変哲もない扉である。

一体、どう言う仕組みになっているのだろうか。

気になったものの、いつの間にかアークが椅子に座っていたため、亜希も慌てて席に着いた。

「今、この部屋は完全な密室になった もともとここは、特定の

呪文と入室者の名前を唱えて、中にいる人物の許可があればやつと入れる空間だ。まあ、俺達は例外的に、さっきグランツが自分の許可だけで入れたが。少なくとも、今は俺達二人が了承しない限り、ここには誰も入れない。盗み聞きしようとするような輩の気配があるうが、俺が『気』で払う」

「『気』？」

「あー説明すると長くなるんだが……アキも魔術関係の本に当たっているから、何となくわかつていると思うが、この世界の魔術つづうのは、要は『思いを具現化する』モンなんだ」

「えっと……それじゃあ、白魔術だと、『人を助けたい』と言う思いが、治癒効果になって現れたりする、と」

「そういうことだ。でも、一口に思いと言っても、いくつか段階があつてな。はっきりとした創造性を持つような思いでなければ、魔術として発動しない。加えて、白魔術なら、使用時に、心が澄み切っている必要がある」

「へえ……」

「……つと、話が逸れたな。まあ、俺は『具体的にものを想像する』つづうのが、どうも苦手だな。それで、剣の方が主体でやってるんだが。でも、俺が唯一得意な魔術に、『相手の魔術を無効化する』つづうのがあるんだ」

「魔術が現れる前の空間を思い浮かべるのは簡単だし、後は、絶対自分には当たらないって思えば良いだけだからな」とアークは続けた。

「それって……実際にやってみるのは、かなり難しいのでは？ 誰しも魔術で攻撃されたら、身を守ることをまず考えて、魔術がどんな風に襲いかかって来るのか、想像してしまうんじゃない……」

「人間の恐怖心程、厄介なものはねえからな。魔術ってのは、こっちが相手を上回る思いをぶつけたら、上書き出来る。『信じる者は救われる』ってこった」

どうやら、アークは相当肝が据わった人物らしい。

彼がぼそりと呟いた言葉が、地球にもあったものなので、異世界でも人類が作る格言は、さほど変わらないものなんだなと、亜希は思った。

「で、ようやく話が元に戻るが、外から魔術を用いたものも、物理的な盗聴であっても、俺が『聞かせたくない』『話している声は、外に漏れない』と強く思う、つまり『気』を発すれば、聞こえなくなるって訳だ。俺は思いの強さに関しては、結構自信がある方だが、信用出来なけりゃ、アキもそう、強く思えば良い」

「信用出来ないってことは……！」

「……でも、信頼してるかと言われれば、別だろ？」

「っ！」

咄嗟に、言葉に詰まってしまった亜希を見て、アークは笑った。

無言でいるのは、肯定の裏返しとなる。

「俺、お前にゃ、ほとんど素性明かしてねえからな。胡散臭がつて

当然だ」

笑いながら、亜希の頭をぐりぐりと撫で回す。

二十歳にもなって、子供みたいにこう言う風にされるのは、内心複雑だが、彼からされるのは、何故か嫌だと感じないので、されるがままになっている。

「さて、どこから話すかな　確か、ここへの送り迎えを始めた時、『しばらくはここにいるから、その間は送り迎えをやってやる』って言ったよな？」

「はい」

「その『しばらく』がもうすぐ終わっちまいそうなんだ」

「ああ、やっぱり」と亜希は思った。

先程のゼノとか言う男が、「今後は、ずっとお嬢さんに付いてはられないぞ」と、それを仄めかすような台詞を言っていた気がする。

「俺は、今からちよいとデカイことをやる。グランツと、さっきのゼノって男は仲間だ」

「グランツさんが問い詰めて来た場面で、割り込んだり、仲間である筈のゼノさんにああも警戒していたのは、私をその件から遠ざけるため……ですか？」

「そうだ」

アークは肘をついた手で、頭を抱えた。

「……ただ、早く自分の国に帰ろうとするお前の、足を引っ張るような真似はしたくなかった。でも、俺がここに連れて来たのが、裏目に出て、注目を浴びる存在になっちまった。今となっては、信じなくてとも言えねえが……きっかけは、お前にも同じ年位の友人が出来たら、と思っただけだったんだ」

一度、そこで言葉を切ると、少し冷静になるためにか、少し時間をとって、アークは再び口を開いた。

「……アマンドからお前が物価に興味を持っていた、と聞いた時点で察するべきだったんだろうな。しかし、まさかグランツの問いにあそこまで鋭い指摘が出来るほど、頭が切れるとは思わなかったんだ」

「頭が切れるなんて……それは……」

お世辞にも、頭が良いと言われるような存在ではないと、亜希は首を振った。

高校に入ってから、数学と化学がわからなくなって落ちこぼれていたし、かと言って文系科目が出来るかと言えば、語学はさっぱりだった。

大学では日本史を専攻しているものの、詳しいのは興味のある幕末の一部のみ。

社会に出てから役に立ちそうなものと言えば、少々昔の難しい漢字が読めることと、古文書から学んだ、手紙の書き方位である。

調べればわかるようなことなので、取り立てて誉めそやすようなものではない。

グランツヤ、エリックとルードの問いに答えられたのは、この国と日本が偶然にも、よく似た状態に置かれていただけのことである。

「祖国とこの国の置かれた状況が、たまたま、よく似ていただけ……ってか？」

「はい」

「と言うことは、だ。アキの国も偏向報道で、国民が洗脳されている状況にあった訳だよな。でも、アキはその呪縛が解けている」

「私の国はまだ多くの人が、新聞の偏向報道を信じていますが、最近若者を中心に、他の媒体から情報を得るようになって、洗脳が解ける人が出て来ているんです。私が特別と言うことはありません！」

「でも、だ。現在、危機的状況にあるんだろ？ つうことは、洗脳が解けている人が増えていると言っても、全体の割合からすれば、わずかつてことだ。その中に入ってるのは、大したモンじゃねえか。グランツ達相手に、あんだだけ堂々とものが言えるってのは、普段から色々考えてなきや、出来ねえことだ」

す、とアークは顔を上げた。

「俺はな、アキ。一日の内、自分以外のことを考えてる時間が多い奴程、立派だと思ってる」

「私は、今でも帰ることはかり考えてますけど……」

「まあ、聞けよ。もちろん、考えてるだけで、何にも行動に移さ

ないままじゃ、凡人と変わらん。でもな、世の中のほとんどの人間は、一日の大半、自分のことばかり考えてる。過去の悩みとか、将来の不安、人間関係……まあ、そう言うので一杯一杯になっちまうのが普通だろう。だから、わずかな時間でも自分以外のことについて考えられるってだけで、すごいと俺は思う」

そこで言葉を切ると、アークは亜希の方に少し身を乗り出した。

「アキ、お前にはこっちに来てまだ間がない頃から、そう言った節があった。考えている大部分が帰る方法だったとしても、それだけで一杯になっていないってだけで、俺はお前に、可能性を感じるんだよ　磨けば、光るな」

「……そこまで、人から評価されたのは………初めてです」

言葉を重ねられても、過分に評価されている気がすることは変わりがなかった。

(何と言うつか………すごい照れる………)

次第に頬が熱を帯びて来ているのを、亜希は感じていた。

「そうなのか？　だったら、アキの周りにいた奴らは目が曇ってたんだろうな　現にこっちじゃ、お前の話を聞いたグランツや、その教え子達、ゼノは目の色を変えてやがる」

「ええつと………ありがとうございます？」

「いや、ちよつと待て！　お前、礼言ってる場合じゃねえだろうが！　話が逸れちまったが、元はと言えば、俺が注目されるきつか

け作っちゃまったせいで、アキの身が危うくなっただから、むしろ怒るべきだろう」

「ああ、そう言えば……その『身が危うい』って話を、聞こうと思っただんですよ。ゼノさんが、私を『人は放って置かないだろう』とか何とか言っただ意味が知りたくて」

「今までの状況を振り返ったら、わかる。『こんな鋭い発言をした女がいる。それはポンデグッタ亭の噂の娘らしい』って話が広まるのは、そう遠くないことは容易に想像がつくからだ。ここの教会の野郎共は口は硬いが、アキは聞いた話じゃ、新聞の疑問点について、宿の客に訊ねてたらしいな。そう言うことをする人間ってのは、この国じゃ普通、記者位しかいないんだよ。その辺からでも、じわじわ名前が広まってくっつてこった。人の口に戸は立てられねえ」

「その結果。この国は政情不安ですが、何らかの政治的な団体に利用される恐れがある、と？」

「そう言うことだ。ほんと、すまん！俺が不注意だったばっかりに……」

「いえ。私も不用意な発言をした所があったでしょうから……ゼノさんは後、『傍に置いて守る』とも言っただかと思うんですけど。要するに私は、身の危険を承知の上で、今まで通り暮らすのか、それとも身の安全と引き替えに、アーク達の仲間になるのか……二つ、選択肢があるってことですよね」

「ああ」

「で、アークがやろうとしていることを、ぼかして話すのは、聞いて

だが最後、仲間にならざるを得ないから……ですか？」

推測を述べると、アークは首を縦に振った。

どうやら かなりヤバイことを計画しているらしい。

選択肢のどちらを選んでも、結局危ないことに違いはないのではと思うが、一応アーク達の傍にいれば、彼等に守ってはもらえる。しかし、そんな大それた計画に加われば、今までのように、自由な時間は取れなくなるだろう。

元の世界に帰る方法を探す活動は、かなりペースダウンするに違いない。

どちらを選ぶのか 簡単に結論を出せる話ではない。
悩んでいるのが、面に表れていたのだろうか。

アークは

「 明日の朝、宿で返事を聞く」

と亜希に告げて、その場はお開きとなった。

6 「招かれざる客」

その後。

亜希はアークにポンデグッタ亭まで送ってもらい、そこで別れた。アークは今から用事があるらしい。

先程、彼が教会にやって来た際、慌てて飛んで来たと言った感じだったので、もしかすると、用事の途中に抜け出てきたのかも知れない。

ゼノが亜希を無理に仲間に取り入れることを、警戒したのか。

(やっぱり……アークに対しては警戒心がわかないや)

主人であるアマンドから頂いた自分の部屋のベッド上で、亜希は膝を抱え、膝頭に顎を乗せていた。

今までの彼の行動を振り返っていたのだが、どう見ても自分に対して、過保護にしか思えないのだ。

初対面で酷いことをしてしまったとは言っても、その後も延々と亜希の面倒を見続ける必要等、彼にはない。

謝罪して、教会で治療を受けさせただけでも、充分の筈である。

では、亜希の知識に興味を持って、仲間に入れたいと言う下心があったから親切だったのか。

(そうだったら、グランツさんやゼノさんから、私を庇う必要はない)

ゼノに剣を向けた時の、あの鬼気迫った表情はとても演技には見えなかった。

もし、そうだとしたら、彼は随分な役者である。
注目を浴びることになったのは、アークに教会に連れて行かれた
のが大きな要因だったとは言え、亜希自身にも不注意な所があつた
のは確かだ。

（そんなに腹黒い人には、見えないんだよね　そう思っちゃう私
って、人を信じやす過ぎるのかなあ……？）

アーク達の仲間になるのか、今の生活を続けるのか。
悶々としていると、「アキ」と階下からアマンダの声が出た。

呼ばれて顔を出すと、

「あなたにお客さんだよ」
と言っ。

「私に……ですか？」

思わず、聞き返してしまった。

今まで、こう言ったことは一度もなかったのだ。

アークが危惧していたように、亜希に興味を持った者が接触を
図って来る、と言うことが、早くも現実になったのだろうか。

手にうっすら、汗が滲んだ。

「間違いなく、他の働いてる子じゃなくて、あなただよ　エリオ
ットって名前の、賢そうな坊ちゃんだけど、知り合いかい？」

少し前に、会ったばかりの人物の名が出て来て、亜希は目を見張
った。

「あ、はい　すぐに降ります」

反射的にそう答え、気が付くと足は階段を駆け下りていた。彼の名を騙った別人かもしれないと、一瞬思ったが、それは勘繰り過ぎではないかとも感じていたからかもしれない。

下に降りて辺りを見回すと いた。

食堂の隅、入り口からは丁度死角になる席に、エリオットの姿が確認出来る。

偽物説は杞憂であったようだ。

頬杖をついており、手の平の上に乗った顔は無表情だが、空いている方の手の指は苛立たしげに、机を叩いている。

(うわ……すごい感じ悪いんですけど)

何となく近付くのを躊躇っていると、急にこちらを向いたエリオットとばっちり目が合ってしまった。

「あ……」

こうなったら、黙っている訳にもいかないだろう。

「えっと……何のご用ですか？」

「僕は負けっ放しは、我慢出来ない質ですね」

「は？」

「君ともう一度、議論しに来ました。この勝負、受けて頂きたい」

「あの……」

「今、この国の経済を立て直すには、どうすべきだと思いますか？」

こちらが許可してもいないのに、勝手に話を進められていく。

拒否権はないらしい。

先程論破されたのが、余程悔しかったのだろうか エリオット
は相当の負けず嫌いのようだ。

（今、自分の問題でそれどころじゃないんだけどな……でも、断つ
たって引き下がるタイプじゃなさそうだし）

現に、亜希からずっと視線を逸らそうとしない。

逃がさないと、その目が言っている。

（耳学問の知識しかないけど、これで何とか乗り切るしかないね）

はあ、と大きく溜め息をつくとき、亜希は渋々口を開いた。

宿の客から注目を浴びないように、声のトーンは抑えめに。

「人々が支出を控えて、市場にお金が出回っていない状態を解決するのが先決でしょう。政府がお金を支出して、市場に流すべきだと思えます」

「財政破綻寸前の我が国は、まず、徹底的に無駄を削減すべきではないでしょうか？ これ以上、赤字を増やす訳には……」

「そんなことをすれば、市場に出回るお金が減って、ますます景気が悪化しますよ。それに、書庫でも言いましたが、オズウエルドの政府は足りないお金の九割を、国内から借りていますし、残りの一割も、この国のお金で外国から借りているので、破綻しようがないと思います。いざとなれば、お金の発行機関に国債を買ってもらえば良いんです」

数字は、新聞を読んでいたから得ていた情報だ。

びっくりする程に、オズウエルドの経済状態が日本そっくりなので、聞きかじった話を思い出しながら喋るだけで済んでいるのが、幸いである。

そうでなければ、専門外の経済の話なんかには、とても答えられない。

「むやみに国債を発行すれば、金利が上がるのでは？」

（えっと……金利が上がるってのは、国債の価値が下がるってことだよ。それで、みんなが投げ売りするんじゃないかって言いたい訳だ）

運の良いことに、同じような話を、日本にいた時にも聞いた覚えがあった。

「国債の買い手がなくなるんじゃないかって、言いたいんですよね？ その心配はないと思いますよ。みんながお金を使いたがらないで、どんどん貯金してる状況なので、その利子を払うために、銀行は資金繰りに困っている筈です。だとすると、国債を発行すれば、銀行は先を争って買い求めると思っています」

「……」

(おっ、黙った)

何とか、この議論を終わらせることが出来そうだと、亜希はほっとした。

小難しい話を、いつまでも続ける趣味はない。

ずっと緊張感を保っているのは、結構疲れるのだ。

エリオットは渋面を作って、こちらを睨み付けている。

どうやら、また彼のプライドをズタズタにしてしまったらしい。

(……いじめっ子になったような気分だけど、仕掛けてきたのは向こうなんだから、罪悪感持つ必要はないよね)

「どうして……」

「へ？」

「……君はどうして、そんな物の考え方が出来るんですか？」

一語一語、実に辛そうな表情でエリオットが話した。

嫌いな相手に聞きたくないと思いつつも、好奇心を抑えられない

……と言った所だろうか。

「ええっと……それは誤解ですよ。今の話は、全部人からの受け売りなんです。書庫で言ってたように、私は経済については素人で、耳学問だけの知識なので、お粗末なものです」

「お粗末！ 今の説明のどこがお粗末なんです？ 耳学問だけなん

て、とても信じられませんか……真面目に勉強していた僕が、馬鹿みたいですよ」

エリオットの声のトーンが、段々下がっていった。どうやら、落ち込んでしまったらしい。

「すみません」と謝ると、「謝られると、ますます僕の立場がなくなるんですが」と返された。

謝罪は、傷口に塩をすり込む行為であったようだ。

「それで、今ので気は済んだんですか？」

「そんな訳ないでしょう……言った筈です。負けたままなのは耐えられない、と」

闘志はまだ残っていたようだ。

(うわあ……面倒臭い人だな)

亜希はあからさまに嫌な顔をして見せたが、エリオットの表情に変化は見られなかった。

この調子だと、エリオットは勝ったと思えるまで、ストーカーのように付きまとうかもしれない。

そう考えて、亜希はぞっとした。

いつまでも相手にするのは疲れるので、どうやって追っ払おうかと頭を捻っていると、俄に窓の外が騒がしくなった。

7 「騒めき」

どうしたのかと外を見れば、前の通りには人、人、人。いつもは人通りが少ない時間帯なのに、妙だ。

今日は、何か行事があるなんて話は、聞いていない。

違和感を感じる点は、他にもあった。

誰もが左に向かって進んでいる。それも、焦った様子で。

彼等は歩いていると言うよりは、「何者からか逃げている」と表現した方がしっくり来た。

(……嫌な感じがする)

いわゆる、虫の知らせと言う奴だ。

昔から、亜希は直感が冴えている方であった。

特に悪い予感。

本能的に立ち上がろうとしかけた瞬間、突如けたたましく宿の扉が開かれた。

「 火事だ！ ここは風下になるから、みんな逃げろ。今日は風が強い」

響き渡った大声に、どよめきが広がった。

扉の前にいるのは……見知った緑頭の青年。

「エリック」

思わず、亜希がその名を呼んだのと、エリックがこちらを見たのは、ほぼ同時だった。

「アキ、エリオット！ お前等一緒だったんだな。早くこっから離れるんだ」

「その前に 出火した場所と、どのくらい燃え広がっているのかを教えてください」

興奮した様子のエリックに対し、エリオットは冷静な声音で問いかけた。

思いの外、彼は肝っ玉の据わった人間のようにだ。

そう、人を分析している余裕がある自分も、神経が図太いかもしれない。

(ただの勉強好きなお坊ちゃん……って訳じゃないんだ)

亜希は少しだけ、傍らにいる男に好感を持った。

「西門近くからだ。さっき俺が見た時点で、周囲が二軒分、風下は五軒まで燃えてたな」

「……近いですね。消化活動の人手はどうですか？」

「それが……騎士団がまだ来てねえんだ。今は魔術が使える連中から有志を募って、消化に当たってる」

「政府は何をやっているんです！ すぐ城下で起こっていると言うのに！」

そう言うつや否や、エリオットは勃然と怒りを発し、手の平で卓上を叩いた。

音の大きさに、亜希は飛び上がる。

「はっ……今の佞臣共には、ほとんど愛想がつかましたね。さて、人手が足りないなら僕も現場に向かいますよ。君は、彼女を安全な場所へ」

「わかった。後で俺も行く」

「ちょっと待って！ 私も、現場に行かせて下さい」

勝手に逃げる方へ、自分が回されたことに不満を感じ、亜希は声を上げた。

何か手伝えることがあるなら、やろうと思う程度には、既に異世界であるこの街には情が移っている。

「君は魔術が使えるんですか？」

「……いえ」

「なら、その申し出は結構です。足手まといになりますから」

「……っ！」

あまりにも辛辣な台詞に、返す言葉を失った。

「おま……そんな言い方はねえだろ！？」

声を荒げるエリックに、エリオットは冷ややかな視線を向けた。

「でも、事実でしょう？ 魔術が使えない上に、華奢な女性。力仕

事にも不向きです

話はここまで。では、また後で」

そう告げるや否や、エリオットはこちらに背を向け、宿を出て行った。

呆然と彼の背中を見送っていた亜希の手を、エリックが掴んだ。

「……俺達も行こう」

「あつ、はい」

先程に比べ、トーンの下がった声と穏やかな眼差しは、どこか気遣わしげだった。

そのまま、エリックに引きずられるようにして、亜希は通りに出た。

「なあ さっきのはあんま気にすんなよ」

「はい？」

歩き始めてから、少し経った頃 人混みから離れた場所まで来た時、エリックが口を開いた。

「宿でエリオットが言ったことだ」

「ああ……」

言われて、少し前に見たエリオットの冷めた表情を思い出す。

「あいつ、口はきつついけど、そう悪い奴でもねえんだよ」

「そうですね」

そう返すと、エリックは驚いた顔をした。

まあ、確かに普通なら、冷たいことを言われた相手について、ここは悪口でも言う所かもしれない。

「彼は私を蔑むような言葉は口にしませし、自分の知識を鼻にかけるような真似もしません 負けず嫌いが過ぎるのが少々、問題ですけど、向学心が旺盛な人はそういうもんですから」

「……お前、年の割に悟り過ぎてんじゃねえか？」

「いやいや、そんなことはないですよ。悪い人じゃないとは思いますが、ぶっちゃけ好きか嫌いかって言われたら、嫌いです」

「アキって……面白いな」

「それはどうも そう言えば、どこに向かっているんですか？」

「南門前の広場だ。街の南の広場は、複数の魔術師がいつでも水の防護膜を張れるように待機していて、臨時の避難場所になってるらしい……それにしても、歩きにくいよな」

時折吹く突風で揺れる前髪を、エリックは鬱陶しそうに掻き上げた。

「うわ、見るよ！ あそこ服が飛んでるぜ。あつ、向こうにも」

「洗濯物ですかね？ 今日は天気良くて、午前中はそんなに風が強く吹いてませんでしたし」

避難中には、随分と穏やかな会話だなと感じて、亜希は口元に笑みを浮かべた。

「あ、あつちからも何か落ちて来ましたよ。オレンジ色の……」

亜希の声は、徐々にトーンが下がっていった。

(あれって、レンガじゃ……)

近づくにつれ、ぼやけていた像がはっきりとしていき、その予想は確信に変わる。

風でどこからか落下したのだろう。

その軌道には エリックの頭。

「っ！」

無意識の内に、手がエリックを突き飛ばしていた。

彼を助けられたことにほっとした直後、頭部に鈍い痛みが走った。

「……！」

どうやら、代わりに自分が当たってしまったらしい 間抜けだ。頭の状態を確かめるために、手を伸ばそうとしたが、力が入らない。

気が付くと、いつの間にか頬が地面に引っ付いていた。

これは、倒れているのだろうか。

(うわあ……これって、かなりヤバイ状態なのかも……)

「アキ、しっかりしろ　アキ！」

目の前で、エリックが必死な顔で名前を呼んでいる。

意識はあることを伝えようと、声を出そうとするのだが、何故かまったく出せない。

(ああ……もしかして、ポンデグッタ亭で感じた嫌な予感は、これだったのかな……?)

そうこうしているうちに、視界がぼやけ始めた。

「アキっ！」

エリックの叫び声を聞いたのを最後に　　亜希の意識は闇に沈んだ。

8 「目覚めの時」

「ん……」

ぼやけた視界のピントが、急速に合わせられていく。橙色に染まった空と、そこに浮かぶ雲、立ち上る煙。

(煙…… そうだ！ 火事が起きてて、それで……)

エリックと逃げる途中、強風に煽られて落ちてきたレンガが頭に当たって、気を失ってしまったのだ。

空の色合いからすると、倒れてからさほど時間は経っていないように思われるが……

起き上がるうとして、亜希はふと、自分の身体が地面とどこにも触れていないことに気が付いた。

そして、下を見て 亜希は顔色を変えた。

身体が…… 浮いている。

念の為に断っておくが、空中浮遊なんて超能力は持っていない。

(！?…… あれは……)

十メートル程下には、自分とまったく同じ姿形をした人物が、横

たわっている。

傍らには、エリックと思しき男性が心配そうに、彼女の顔を覗き込んでいた。

周囲にたくさんの方がいる所を見ると、ここは例の避難場所になっている広場だろう。

（これって……幽体離脱って奴かな？　もしかして……）

そうそう、自分と同じ顔をした人間がいるとは、亜希には思えなかった。

素直に今の状況を判断すれば、このように解釈するのはおかしいことではないだろう。

（まさか、死んだってことはないよね？）

異世界に飛ばされ、不慮の事故であっさり死んでしまうなんて、あまりにも酷い人生ではないか。

しかし、エリックの様子を見る限り、自分の心臓は動いており、呼吸も止まっていないと判断するのが妥当だと思われる。

額からしたたり落ちている血の量が結構多いので、脳に機能の障害が生じていないか、気にかかる所である。

「その心配は無用じゃ」

「！」

突然、背後から鈴を転がしたような、可愛らしい声があった。振り返ると、腰まである白髪の女性が浮いていた。

(わあ……すっごい綺麗な人……！)

姿形は、北欧系の白人に近いだろうか。

透き通るような白い肌は染み一つなく、顔のパーツは一つ一つが絶妙のバランスで配置されている。

絹糸のような白い髪は、よく見ると、表面が真珠のような光沢を帯びていた。

七頭身のモデル体型の上には、ギリシャ神話の女神が着ていたようなデザインの服を纏い、背中の方では、ぷかぷかと天女の羽衣みtainなものが揺れている。

「あまり見るでない……照れるではないか」

目の前で美女がうつすら染まった頬を隠すように、手で覆って見せた。

しかし、そう言う仕草を見せられても、反応に困る。

とりあえず、ここは謝っておくべきかと考え、亜希は口を開いた。

「はあ……それはすいません。で、貴方は誰なんですか？ 見た感じ、生きている人間ではないですよね」

「おや、冷静じゃな？ そなたの祖国は最近、唯物論者が多いと聞いていたから、妾はてつきり『これは幻覚だ！ 夢だ！』と取り乱すかと思っておったんじゃが」

「それは、ご期待に添えずに申し訳ありませんでした。生憎、私は唯物論者じゃないんですよ。まあ、これが気絶中に見ている、やけに生々しい夢だったら夢だったらで、希有なものとしてしっかり記憶に刻ませてもらうつもりです。で、もう一度聞きますけど、貴方は何者なんですか？」

「ふふ……そう早くこともなかるうに。まあ、このような現れ方を
しては、警戒されてもやむを得んか」

くすくす笑うと、美女は青い双眸をひたり、と亜希に定めた。

「妾はこの国で、エルアノーラと呼ばれている者じゃ。恐れ多いが、
オズウエルドの民族神と言う位を、この星の主より賜っておる
これで自己紹介になるか？ 異世界の娘、四条亜希よ」

声の響きは先程と変わらないのに、今の台詞は幾分か威厳が増し
て聞こえる。

また、この世界で出会った誰もがちゃんと発音出来なかった自分
の名前を、目の前の女性 エルアノーラは、姓、名の順であつさ
り呼んで見せた。

「ええ、充分です。ありがとうございます まあ、聞いてもこれ
が現実か夢かは、わからないんですけどね」

「目が覚めれば、嫌でも現実だったとわかる」

にやりと口角を上げてそう言った後、エルアノーラは真顔になっ
た。

「とりあえず、まずはそなたに謝罪せねばならん。そなたとこ
うして接触を持ったために、先の事故は妾が故意に起こしたものだ
じゃ」

「何ですと！？」

何と言う、物騒な神様なのだろうか。
見た目は優しそうだが、随分横暴である。

「責められて当然だと思う。もちろん、そなたが目覚めた時には身体は、ちゃんと健康な状態にしておくかと誓おう。このように乱暴な手段を取ったのは、そなたがそのままでは妾を見ることが出来なかったからなのじゃ」

「……どう言う意味ですか？」

「そなたは唯物論に染まっていないとは言えども、物質的な考え方に慣れ親しんでいたがために、霊人を霊視出来る状態にはなかったと言うことじゃ。そなたの世界でも、日頃から霊が見える者は少なかるう？」

「それは、確かに……」

「先の事故のショックでそなたが幽体離脱しているお陰で、今こうして話せておる。また、脳をそなたの世界の言葉で言う『チューナー』とやらに例えると、今そなたの脳の『チューニング』が以前とは少々、変わったため、今後も連絡が取りやすい状態になったのじゃ」

「はあ」

言葉の意味は理解出来るが、何でそんなに面倒臭いやり方をしなければならなかったのかが、疑問だ。

「神様なら人間の頭の中位、直接弄ってしまえば良いのに」と言うのと、「それは出来んのじゃ」と返された。

あの世にも、色々複雑な決まりがあるらしい。

「あの状況ではああする以外、他になかったのじゃ 申し訳な
かった」と、何度も頭を下げられたので、亜希は釈然としなかつた
ものの、追及を諦めた。

「それで、じゃ。ここからが本題なんじゃが……そなたは生前、あ
の世でこの星に来る、と自ら志願した一人だったのじゃ」

9 「運命」

エルアノーラのぶっ飛んだ台詞に、亜希はしばしの間、固まった。

「……何ですか、そのファンタジーな設定は……？」

「設定ではない。紛れもなく事実じゃ」

真顔で淡々と言われるのを聞いているうちに、怒りがこみ上げて来た。

（ 人のことを馬鹿にしてるのか ）

これがもし夢だったなら、怒るなんて馬鹿馬鹿しいと思うが、それでもこの感情に蓋をすることは出来そうにもない。

今まで、元の世界に帰るために数え切れない程の本を読み漁って来たのだ。

来たいと思つて来て等、いない。

「ふざけるのも大概にして下さい。自ら志願？ 冗談じゃないこちらら、帰りたくて堪りませんよ」

「少し、落ち着け 覚えていなくても、それが普通じゃろう。人は生まれる際、前世までの記憶を封印されることになっておるからの」

「前世……？ 仮に貴方の話が本当であったとして、何故、こんなに重要な話を思い出せなくさせられたんですか？」

「例を挙げて考えてみれば良い 仮に、そなたが前世、本に載るような偉人だったとしよう。そのことを記憶したまま生まれて来て、のびのびと生活出来るのか？ 前世の自分と今の自分を比較しながら、いつも、劣等感に苛まれる可能性がないと言えようか」

「それは……確かにそうですが」

「妾がこうして、そなたの記憶の一部を明かしているのは、例外措置じゃ。本来なら、思い出しても差し支えない境地にまで達するか、死ぬまで記憶は戻らない が、今回そなたは他惑星へ渡ると言う、稀な人生を自ら計画して来たため、記憶がない故に精神に混乱を来すことがないよう、早めにこのことを明かすこととなったのじゃ」

「……私の精神面を気にするのなら、地球にいる時点で教えて下さった方が、シヨックが幾分か少なかったと思います」

「妾や地球の神々も、当初はそうするつもりであったが、そなたの国は近年、人々の心が曇り、随分悪魔が幅を利かせておったのじゃ。まあ、それはこちらと同じじゃが……唯物論に支配されていないだけ、若干こちらの方がマシでな。神の力が振るいやすかったのじゃ」

「訊いておいて何ですけど、もう……話がぶっ飛びすぎてついていきませんね。これが夢だったら、自分の想像力の豊かさにびっくりです」

「夢ではないと言っておるうちに たと思い出せずとも、そなたの魂には、あの世にいた時のことがしっかりと刻まれておる」

そこで言葉を切ると、エルアノーラはすつと宙を滑るように移動し、亜希のすぐ前で止まり、胸にこつんと拳をあてがった。

「どうじゃ。まだこちらに来てわずかなのに、我が国の民に、情が湧いておるのではないか？」

「！……それは……」

「ないと言わせぬぞ、亜希よ。そなたは向こうで、国のために活動しておったことを妾は知っておる。そのそなたが、母国そっくりの我が国を見て、心が揺れぬ筈がなかるう？」

告げられた台詞にどきり、とした。

エルアノーラの指摘は、凶星だったのだ。

昨今の不景気で就職に不安を覚え、情報収集のために新聞記事を読み始めたのがきっかけで、政治に関心を持った。

ネットで色々調べうちに、選挙で勝つために、平気で日本を外国に売ろうとしている政治家が多数いることを知った。

また、マスコミが売国政治家と裏で繋がっており、彼等に都合の悪い報道が流されず、多数の国民が、偏向報道で洗脳されてしまっていることも。

少し前までは、何だかんだ言いつつも、日本は他国に比べれば平和な国だと思っていたのだが、とんでもない。

国民が平和ボケしている裏で、実際は内戦状態にあったのだ。国のために何かしたいと思いつつも、ネットでのささやかな啓発活動しか出来ない自分に、辟易する日々を過ごしていた。

「我が国にそなたが来ると知った時、妾は本当にうれしかった」

「……私は……！」

そんなに立派な人間ではない。
大した特技もなく、一般の人よりは若干、情報を持っているだけのちっぽけな存在なのだ。

「そなたは些か、自己肯定感が低い。良い物を持っているのにな
おっと、そろそろ時間じゃ」

ずっとエルアノーラが視線を下に向けたので、亜希も同じ方向を見ようとした瞬間、目を手で覆われた。

「ちよ……何を！」

「良いか。今はまだ納得出来んじやろうが、そなたがここに来るのは運命であったのじゃ。そして、使命を果たせば元の世界に帰ることが出来る」

「え……？」

「お望みとあれば、元の時間軸に返すことも可能だから、安心するが良い。そなたの使命は『この国を立て直すこと』。それを成し遂げるまでは、自力で足掻いても、帰ることは適わぬ」

何かに急かされるように、早口でエルアノーラは言葉を紡ぐ。

「では、また会おう　　亜希」

声が遠くなった。

これは意識が途切れる、もしくは夢が終わる前兆なのだと、根拠もないのに本能でそう理解していた。

まだ、訊きたいことがあるのに……！

「待つ……！」

待って、と言い終える前に、亜希の意識は途切れた。

閑話「虫の知らせ」

服は煤けて、上下共に悲惨な状態である。

中の肌は汗にまみれて、随分臭くなっているであろうが、自分の鼻はすっかり麻痺してしまっただらしく、その程度がどの位かはわからない。

こんな姿になっているのは、つい先程まで、火事の現場に飛び込むことを繰り返していたためである。

ふう、と大きく息を吐き出し、肩を回していると、「アーク」と声をかけられた。

「酷えナリだが……焦げたり、火傷した跡がねえのは流石だな。無事で安心した」

声の主は、こちらよりも幾分かマシな姿の男　ゼノ。

「当然だ　他の奴に行かせたら、危ねえから俺が行ったんだろ」

そう　この作戦では、それが最善の方法だったのだ。

今回、アークの仕事は二つあった。

火を消すこと。

燃える建物の中から、重要書類が燃え滓になってしまっ前に、持ち出すこと。

他の隊員の場合だと、アークのように『気』で自分の周囲の火と煙を消すような、強い念力は誰も持っていないので、必然的に火事現場に飛び込むとなると、魔術で「自分の周囲に水の防護膜を張る」と言う形になる。

しかし、そのまま書類を触ると濡らしてしまう。

だからと言って、書類を持つ時に防護膜を解除すると、その瞬間、一気に煙を吸って昏倒しかねない。

それ故、書類を持ち出すのは、アークの役割となったのである。

火を消す仕事は、魔術を使える隊員は水を作り出し、使えない隊員はどこかしらから水を汲んできてかける……と言うように、アーク以外の者も取り組んでいたのだが、「完全に消火させる」役割はアークが引き受けることとなった。

「そりゃそうだがよ。毎回、隊長御自ら最前線に出るせいで、みんな胃が痛い思いしてんだ。魔術要員に口覆わせて行かせても良かったんじゃないか？」

「いや、今回は俺が行って正解だった。この火事、魔術で遠隔操作されたモンだったからな。他の奴等に行かせてたら、防護膜解いた瞬間に火達磨になってたかもしれん」

アークの言葉に、ゼノは一瞬ぴくりと眉を跳ね上げた後、にやりと口の片端をつり上げた。

「成程……通りでしこたま水をぶっかけても、なかなか消えなかった訳だ。まあ、狙ったようにあの腹黒爺に縁のある建物ばかり燃えて、他の一般住民の建物に火が広がってなかった時点で妙だとは思ったが。で、その口振りだと火をつけた野郎は？」

「火事現場から出た後に、ちょっと離れた小路で明らかに拳動不審な奴を見つけたから、後ろから殴って気絶させた。隊員に運ばせといたから、後で訊問だな。まあ、十中八九、あの男に違いねえだろう……今、鎮火してんのが良い証拠だ」

「お見事」

「まあ、書類は、今懐に入ってる数枚しか手に入らなかったがで、お前の方は？」

「もう撤収させた。後始末は街の有志の連中だけでも、充分だろう」

「……だな。んじゃ、そろそろ帰るか」

「ん、それはどっちの『家』だ？ 隊長さんよ」

ゼノは、がらりとおどけた口調に変えて、そう告げた。
にやにやした顔が、気味が悪い。

「宿の方だ。まだ期日じゃねえだろ」

「そんなにあの娘が気になるなら、攫つちまえば良いのに。お前、見目は良い癖に、女一人口説き落とせねえのか？」

「五月蠅え！ そんな勝手な真似が出来るか」

気付いたら、思わず声を上げていた。

その様子を見て、ゼノは目を丸くしている。

自分のことを馬鹿にされたことに対してと言うよりも、アキを軽く見ているような節のある言葉に怒りを覚えた。

美形に言い寄られた程度で、陥落するような女性ではない。

そもそも、彼女はこちらの容姿なんて、まるで気にも留めていないだろう。

仕草を見ていれば、異性として意識されているか否かは、何となくわかるものだ。

アキは、あくまで一人の人間として、自分を見ているように感じる。

それに、アキには「元の世界に帰りたい」と言う強い思いがある。帰る手段を探す手を無理矢理止めさせてまで、来てくれとはとても言えない。

「……驚いた。惚れ込んでるんだな、彼女に」

「女嫌いだったのが嘘みてえ」と溢すゼノに、「そんなんじゃないやねえよ」と返した。

これは、恋愛感情ではない。

同志として、彼女の中に通じるものを感じ、それに興味を持っているだけなのだ。

「はは……どうだか。自覚症状がないだけなんじゃねえか？」

「言ってる」

吐き捨てるようにそう告げて、アークはその場を後にした。

アークは最初、真っ直ぐにポンデグッタ亭へ向かうつもりでいたが、途中で気が変わって道を曲がった。

この火事騒ぎに関わる連中が、まだ何人か見付かるかもしれない。

犯人は必ず後になって、現場の確認に戻ると言う話がある。

今回、火を起こした魔術師はあくまで実行犯であり、裏には巨大な悪が控えているのは間違いない。

そう断言出来るのは、今日までずっと、その悪を調べ続けて来たためだ。

消火活動に参加した一般市民と言う顔で、ぶらぶらと通りを歩く。今日は風が強いせいで、時折目にかかる前髪が少々、鬱陶しい。

たまに、洗濯ものらしき服や、屋根瓦等が落ちているのが目に入るので、その強さがわかると言うものだ。

(宿の洗濯物はどうなってるんだろうな……仮に飛んでなくても、風に乗った煤で汚れてる可能性大か)

風向きからすると、あの地域一帯は風下になるので、被害が大きいだろう。

後で洗濯をし直すのに苦労するアキの姿が浮かび、時間があつたら手伝ってやろうか等と考えている途中、アークははっとした。

(そう言や、南門前の広場が避難場所になつてゐるって言つてたな。アキや教会の奴等もまだそっちにいるって可能性もあるか)

火事騒ぎも一段落し、徐々に減つて来た街の人混みをすり抜けて広場まで行くのには、そう時間もかからなかった。

人伝に鎮火した話がここまで伝わったのか、帰り支度をしている人の姿が多く見られる。

そんな中で、ふと噴水の近くにいる人影に目が止まった。

周囲が慌ただしく動いている中で、そこにいる二人だけが、時間を止められたかの如く、そこに留まっていた。

群衆の中の、異質な一点。

そう判断したのは、自分の主観の問題なのかもしれないが、何故かアークは気になり、そちらに足を向けた。

第六感と言う奴だ。

一人は座り込み、もう一人は地面に横になつている。

服装から察するに、横たわっているのは女性で、彼女の方を向いているのは男性。

女性は紺色のワンピース姿で、短髪

(あの長さは……アキ……?)

肩に付かない長さの髪の女性は、彼女の他に、まだお目にかかったことはない。

自然と歩く速さが増していく。

近づくにつれ、顔形がはっきりとして来る。

男性は エリックだ。

表情が暗い。

そのことに、胸がざわめいた。

女性はこちらに背中を向けているので、まだ顔は見えない。

半ば駆け寄るようにして、目と鼻の先まで来て アークは目の

前の光景に、言葉を失った。

女性の額から流れ落ちる血。

青白い肌。

素人目でも、重傷だとわかる女性の容貌は……間違いなく、アキ
の物だった。

閑話「神の悪戯」

「……………何が、あつた……………？」

一気に様々な感情の波が押し寄せ、荒れ狂う心を何とか押さえ込み、出せた声は掠れていた。

いつの間にか、喉がからからになっている。

アークに問われ、エリックは俯いていた顔を静かに上げた。

「風に煽られて……………レンガが落ちて来たんだ。それで……………」

そこで言葉を切り、エリックはアークから視線を逸らした。

ここまでの話で、そのレンガがアキの頭に当たったために、今彼女が重傷を負っているのだとわかったが、まだ何かあるのだろうか？

「それで……………っ！」

エリックは何か、喉元まで迫り上がって来ているのに、それを出すかどうかためらっているような、そんな様子に見えた。

どこか、声に悲痛な響きを感じる。

ふと、膝の上に置かれた手が、強く握り締め過ぎて、プルプル震えているのが目に入った。

「アキが……………俺を庇って、レンガが頭に当たって……………！」

「なっ……………！」

予想外の台詞に、アークは瞠目した。
同時に、エリックが言葉に詰まっていた理由を理解した。
申し訳なさで、胸が一杯になっていたのだろう。

アキはその一瞬、自分の身の危険は感じなかったのだろうか？
元の世界に帰ることを強く願っているために、自身の安全を優先
して、立ち竦んでしまってもおかしくなかったであろうに。

いや、まさか自分が怪我をするとは、思ってもいなかったの
かもしれない。

（自分のことばっか考えてるとか言っときながら、咄嗟に人庇つた
り出来るんだから……やっぱり、他人のこと考えながら生きてんじ
やねえか）

少し前に、グランツの部屋で二人で話していた時のことが、頭に
浮かんだ。

客観的に、アキの置かれている状況を見れば、人を気遣う余裕な
んでなさそうなものなのだが。

「……………ごめんなさい……………」

消え入りそうなエリックの音が、アークを現実へと呼び戻した。
上がっていた彼の顔が、いつの間にか、再び下へと向いている。

「兄貴の大切な人に、怪我させて……………俺がぼんやりしてなかったら
……………くっ……………！」

涙声で語られた言葉に、アークははっとした。

アキの姿を見て動揺する余り、最初に声をかける際、感情の揺れ
がそのまま声に出ていなかったか、と。

それを聞いて、エリックは自分が責められているように感じたのだろう。

(弟子に当たり散らして……最低だな。何やってんだ俺は)

彼には何の非もない。

たまたま、落ちて来たレンガが悪いのだ。

「……謝らなくて良い。これは、事故だ」

「でも！」

「エリック 俺は怒っちゃいない。むしろ、二人揃って怪我してなくて、良かったと思ってる」

「氣イ使ってもらわなくても良いっすよ。いっそのこと、思いっ切り罵っても……」

「馬鹿」

そう言って、頭をわしわし撫でると、エリックは呆気に取られた顔でこちらを見た。

「俺はお前のことも大事に思ってたよ。んなこと言っんじゃねえ」

「……すみません」

「よし。んじゃ、頭切り替えるぞ この様子だと、アキの治療はまだだな？ 白魔術師はいないのか？」

努めて、明るい口調で問いかける。
内心、アキが心配で堪らなかったが、轍を踏みたくなかった。

「はい。白魔術が使える人は、火事現場周辺で怪我人を看てるって話です　まだ、こちらには誰も帰って来てなくて……」

「……不味いな」

予想していた返答であったとは言え、焦りが募る。

呼吸は出来ているものの、流れ落ちている血の量が多いのが気になる。

今、自分にはどうしようもないのが、悔しくて堪らない。

とりあえず、傷口の状態を確かめようと、アークは顔を近づけて

自分の目を疑った。

(……………どう言うことだ……………?)

何度確かめても、見付からない。

傷口が、ない。

流れた血の跡を辿って、傷口が存在するであろう場所の周辺を見るが、ただ血に濡れているだけだ。

少し冷静になった今、ようやく気が付いたが、血は既に止まっている。

自分が見て、取り乱したそれは、少し前に流れ落ちた血の「跡」であり、今現在流れ落ちている訳ではないのである。

(異世界人は傷の治りが早いのか?……いやいや、ちょっと待て。

この前、宿でアキが包丁で指切って怪我した時は、治るまで結構か

かっただじゃねえか　　なら、治療を受けていないのに、何で……)

訳がわからない。

ちらり、と横目でエリックを窺うと、未だ暗い表情をしている。

(気付いてなさそうだな　　まあ、エリックの性格なら、気付いてたら、とっくにこのことを口にしてるか)

この事実は……言うべきではないだろう。

この件が広まれば、「神の奇跡」扱いをされて、アキが変に注目を浴びるような事態にならないとは、言えない。

アークはアキが異世界人だと知っているため、少々妙な現象が起きてても、おかしくはないだろうと考えるが、事情を知らない他人がどう取るかはわからないのだ。

怪我が治っていて、しっかりと呼吸も出来ている状態なので、アークは少しほっとしたが、まだ安心するには早い。

アキが意識を取り戻すまでは、まだ

そこまで考えた時、視界の端でアキの目蓋が震えたのを、アークは捉えた。

10 「怪我人」

(……………う……………何か、目がしばしばする)

そう感じて目蓋を押し上げると、赤みがかつた光が差し込んで来た。

日没間近の日の光は、ちょうどこんな感じだっただろうか。

大抵、寝起きはいつも、亜希はドライアイのような感じになる。

目が明るさに慣れて、視界がはつきりしていくのに従い、すぐ傍で、覗き込むように自分を見ている人物が二人いることに気が付いた。

赤銅色の髪と、緑色の髪。

「……………アークと、エリック……………?」

咄嗟に浮かんだ名前を口にした瞬間、ふわりと、上半身が温かいものに包まれた。

これは

「っ……………アキ!」

これは何だろうと思ったと同時に 耳元で声がした。

(え……………今、声が聞こえたのと同時に、耳に風が吹き付けられたよ
うな、妙な感触が……………)

目の前が何かに塞がれて、よく見えない。
首を持ち上げて……亜希はぎよっとした。

自分の視界を塞いでいたのは　　何と、アークの逞しい胸板
だった。

身体が温かいと感じるのは、抱き締められているためである。
先程、耳に妙な感触が走ったのは、至近距離にいるので、彼が声
を発したと同時に息がかかったからだ。

そこまで理解して、頬が急に熱を帯び始めた。
ハグの文化がない日本人に、寝起き早々、これは少々心臓に悪い。

(なな……何でこんなことに……？　とりあえず落ち着こう……)
まずは今の状況を冷静に分析してみよう、と自分に言い聞かせた。
思考の海に入ること、目の前の現実から逃げているのは重々承
知しているが、それでもしないと、動悸がするのを抑えられそうに
ない。

考えられるのは、怪我をしたことで、周りに心配をかけてし
まっていたと言う説。

そう言えば、意識を失う少し前、地面が赤色に見えていたような
覚えがあるが　　あれは、自分が頭から流した血だったのだろうか。
だとすると、視界に入る範囲一面、赤色だったので、結構勢い良
く出血していたのかもしれない。

(あの記憶が正しかったら……私、よく助かったなあ)

そう言えば、先刻見た夢の中で、エルアノーラと名乗った女神が
「目覚めた時には、健康な状態にしておく」と言っていたような気

がする。

あれが実際にあったことなのか否か、確かめようがないが……

そこまで考えた時、「大丈夫か？」と問う声がして、意識が現実へと引き戻された。

音の遠さと、聞こえて来た方向から考えて、視線を横にずらすと目を赤く腫らしたエリックと目が合った。

「頭は……痛くないか？」

「ああ、はい。大丈夫です　　すみません、何だかものすごく心配をかけてしまったみたいで……」

「ちょ、何でアキが謝るんだよ！？　　すみませんって言うなら俺の方だから！……ぼうつとした俺を庇って、怪我させて……ごめん」

「いえいえ。格好付けた真似して、うつかり怪我した私が鈍臭かったんですよ　　お互い、無事で何よりです」

そう言っただけで、エリックの表情が明るくなった。

自分のせいで、人に暗い顔をさせているのは辛かったので、少しほっとした。

(さて、落ち着いた所で……どうしたもんか)

アークは、エリックとのやりとりを黙って聞きながら、ずっと亜希を抱き締めたままの状態にいる。

怪我人相手だと言うことで、気を遣っているのか、腕の力はそう強くない。

(いつまでもこの体勢でいるのは、ちょっとなあ……)

冷静さを取り戻したことで、周囲を見回す余裕が出て来たのだが
通行人が自分たちの前を通り過ぎる際、みんな微笑ましいもの
を見る目でこちらを見るので、ものすごく気恥ずかしい。

アークの胸をそっと手で押し返すようにしながら、立ち上がるう
とすると その直後に、腰に腕が巻き付き、ぐいっと引っ張り戻
された。

「わぶっ……！」

再び、顔が胸へと押しつけられる形になる。

「今は大人しくしてろ」

「大丈夫です。ちゃんと立って歩けま……」

「血まみれの顔で言われても、説得力がないんだよ」

そう呟いたのが聞こえた直後 突然、視線が……高くなっ
た。

(!?)

突如、全身を包む浮遊感。
両足を抱え、背中に回された太い腕。
見下ろす、アークの視線。

(えっ……ちょ、これって、もしかして……いや、もしかしなくて

も、抱っこされてる?)

それも、自分の目が曇っていないなら、お姫様抱っここの体勢だ。たぶん、今自分のほっぺたは、リンゴみたいに真っ赤だろう。

「お前はどう見たって貧血だ。無理して、また倒れられたら困るから、宿まで運んでやるよ」

「いや、ほんつとに大丈夫ですから！ 私、女の割に馬鹿デカくて重いんで……」

「軽い」

アークの返答に、亜希は「嘘だ！」と心中、突っ込みを入れた。

今と同じ身長になった頃、体育祭で自分を担ぎ上げる役になった男子が、重くて持ち上げられなかったと言う、苦い思い出がある。体型は極端に太くも細くもない方だが、背が一七〇センチ以上と高いのに比例して、体重は結構ある方なのだ。

アークは武人で鍛えているので、抱き上げることが出来るのだろうが、軽いと言うことは、まずない。

気遣って、そう言ってくれただけに違いない。

「あの、そのお気持ちだけ受け取っておきますから……降ろしてもられませんか?」

「あー……俺、さっきまで火事現場回ってたからな。煤だらけだし、汗臭いのが気になるか?」

「いえ、それは別に……って、火事現場!？」

言われて、はっとした。

何となく彼の服は汚れてるなと思っていたが、現場を回っていたとなると、火傷等をしているのではないだろうか？

「アークの方こそ、怪我してないんですか？ 大丈夫なんですか!？」

そう告げると、アークは一瞬、大きく目を見開いたように見えた。

「……人の怪我より、自分の怪我の心配しとけ」

「話を逸らさないで下さい!」

言い返すと、何を思ったか、アークは口元にニヤリとした笑みを浮かべた。

「無傷だから心配すんな 何なら、脱いで見せてやっても良
いが?」

「な……っ!？」

いきなり何てことを言い出すのか。

それも、腰に来るような声で、至近距離で囁くように言われたのだから、その破壊力たるや凄まじい。

絶句している亜希の耳に、アークは口を寄せた。

「お前は傍目にゃ、重傷者そのものなんだよ。なのに、目

が覚めて早々、歩き出したら周りがびっくりするだろうが。俺はさつき、お前の頭見て、『傷口が消えてる』のは知ってるから、そこそこ元気なのはわかってるが……ここは俺に合わせとけ」

小さい声で、早口でそう囁かれた。

この音量だと、自分にしか聞こえていないだろう。

視線を上げると、真顔のアークと目が合った。

その双眸には、先程まであったからかいの色はどこにもなく、本当にこちらを心配しているような感情が滲み出ていた。

何となく、見つめ合ったまま目が逸らせないと、「兄貴」とエリックが声をかけて来た。

「とりあえず、みんな心配してると思うんで……俺、一旦教会の方に戻りますね」

「ああ、わかった」

短いやりとりの後、エリックはその場を後にした。

去り際、頬がうつすら赤く染まって見えたのだが……気のせいだろうか？

エリックの姿が見えなくなるまで見送った後、亜希はアークに抱っこされて、宿に戻った。

11「始まり」

ギシギシと、足下が軋んだ音を立てる。

ポンデグッタ亭の中を、一組の男女が周囲の視線を集めながら、進んでいた。

アークと亜希である。

(見られてる……すごい見られてる)

アークの胸に顔を埋めている状態なので、実際に見て確かめた訳ではないが、そこら中から視線を感じる。

男が血まみれの女を抱き抱えた状態なので、やむを得ないとは思うが、恥ずかしくて顔から火が出そうだった。

街中を運んでもらっている時も、衆目を集めっぱなしだったが、見られたのはほとんどが知らない人だったので、まだ良かった。

今は、周りにいるのが顔馴染みの宿の客ばかりなので、恥ずかしいことこの上ない。

顔を隠したところで、この辺りでは珍しいベリーショート of 髪型から、「ポンデグッタ亭の短髪娘」なのは火を見るよりも明らかだったが、隠さずにはいられなかった。

(……明日から、絶対みんなにからかわれる……！)

「気まずい　　すごく、気まずい。
とにかく、一刻も早く部屋に入りたくて堪らない。」

亜希が動揺しているのを余所に、アークは淡々と階段を登っていた。

「ここまで、かなりの距離を歩いて来たにも関わらず、疲れた様子は見えない。」

階段を一步一步踏み締める足は、歩き始めた当初と変わらず、力強かった。

「アキ　　鍵出して、開けてくれ」

「……あつ、はい」

気が付くと、いつの間にか部屋の前まで来ている。

アークの求めに応じて、アキは慌てて懐から鍵を取り出した。

扉を開けると、アークはさっと中へと滑り込んでベッドまで歩き、亜希の身体を横たえた。

「　　しっかし、意外だったな」

くすりと笑ったアークを、亜希は訝しむ目で見た。

「何がですか？」

「ん……お前って、少々のことには動じない奴だと思ってたんだが、恥ずかしがり屋な所もあるんだな、と」

「こんな風にされたら、恥ずかしがって当然ですよ」

「そうか？」

「そうです で、さっき言った『傷口が消えてる』って言うのは、何なんですか？」

ニコニコしながらこちらを見つめるアークの視点に耐えられず、やや強引に話を逸らした。

「言葉そのまんまの意味だ。そこにある鏡を覗いてみる」

指摘されるまま、ベッド横にある手鏡を取った。

彼が言っていた通り、血まみれの顔がそこにある。

(うわあ……こりゃエリックが泣きそうな顔してたのも、当然だ)

アークがこの顔で普通に歩いていたら変だと言って、半ば無理矢理、亜希を抱き上げたが、そうしなくなったのも、今ならば頷ける。一頻り凄惨な顔を堪能した後、血の筋を辿って、傷口があると思われる場所に視線を移す。

(あれ……ない?)

どれだけ見ても、血に濡れた頭皮が見えるだけで、傷らしきものはどこにも見付けられない。

「ないだろ？」

「ないですね」

信じ難いが、実際に存在しないのだから、仕方がない。

脳裏に、先の女神の姿が過る。

「目が覚めれば、嫌でも現実だったとわかる」とか何とか言っていたが……

「……まさかなあ」

「まさか？」

ぼそつと呟いていたのが、アークに聞こえていたらしい。

今の台詞はどう言う意味だと、その目が言っていたので、掻い摘んで目覚める前に見たことを話した。

女神の名前と容姿、目覚めた時には身体は、ちゃんと健康な状態にしておく約束された部分だけに留めたが。

「……驚いたな。この国で信仰されてるのは、確かにエルアノーラと言う名の神だ」

「マジですか」

「ああ 俺は、今まで神の奇跡とかを信じる口じゃなかったが……話を聞いて、今回に限っては、アキが助かったのは神の加護があったからかもしんねえって思った まあ、とにかく、お前が無事で良かったよ」

そこで言葉を切ると、アークはぼん、と亜希の頭に手を置いた。

女神から、あの事故は自分が故意に起こしたもので、その責任を取って怪我を治したのだと告げられたことは、伏せておいた方が良さだろーと思ひ、亜希は口にしなかった。

「何か、お前が気になって仕方がねえんだよな。ちよつと目を離してる間に怪我してるし……まだ、傍について守ってやれたらと思うんだが」

「でも、これからどうしたいかは、アキが決めることだしなあ」と笑う。

そう言われて、はっとした。

亜希がここで、今まで通りの暮らしを望むのであれば、アークとは別れることになる。

彼の仲間になるか否か、返事の期限は明朝。

短い間に色んなことがありすぎて、すっかりそのことを失念していた。

しかし、この件について考える際、以前悩んでいた時と今では、状況が変わっている。

(あれは夢だったのか、それとも神のお告げだったのか……)

エルアノーラは「この国を立て直すまで、どれだけ足掻いても、帰ることは出来ない」と言っていた。

そもそも、アーク達の仲間になって、彼等の活動に従事した結果、元の世界に帰る術を調べる時間がなくなることや危惧していたのだが、女神の言葉が事実なら、問題定義そのものが変わる。

アーク達のしようとしていることとは、一体何なのか？

その中身こそが、重要になる。

彼の仲間の一人であるグランツや、その教え子である教会の若者たちの様子から見て考えるに、何らかの政治的な行動を起こそうとしているのではないかと亜希は感じていた。

彼等の行動は、エルアノーラの言う「この国を立て直すこと」へと繋がるものなのか？

(……わからない。どうしたら良い？ いや、私がどうしたいのか、か……)

亜希が混乱状態に陥っているのに気付いたのか、アークは「悪い、この話は明日聞くんだったな」と話題を引っ込めた。

「じゃ、俺はこんなナリだしな。ひとつ風呂浴びて来るわ」

「その返事は、明日の朝に食堂で」と告げて、アークは腰を上げた。

ぼんやりとその様子を見ていた亜希だったが、彼が扉に向けて歩き始めた瞬間、口に違和感が広がった。

引き攣るような、妙な感覚。

(え……あつ、ちよつ、勝手に……！)

驚くべき事に、自分の意に反して勝手に口が動き始めた。

気味が悪い現象としか言えないが、嫌な感じがしないのは何故なのか？

「アーク」

自分の口が、はっきりと彼の名を呼んだ。
彼の足が、それに反応して止まる。

「私」

続けて、主語が発せられた後、少しの間が置かれて……

「 貴方の仲間になります」

（ええっ！？）

本人がまだ悩んでいるにも関わらず、亜希の口は勝手に決断の言葉を口にしてしまった。

1 「決心」

「……わかった」

自分の口から出た言葉に、呆然としている亜希にそう告げると、アークはドアノブを引いた。

「ああ、言い忘れてたが、怪我が治ってるのは、俺が宿まで運んで来る途中、白魔術が使える奴に治してもらったから……っでここにしとけ」

「あ……」

「じゃあ、今後についてはまた明日」

口によろやく自由が戻って、声が発せられるようになったと気付いた時には、彼の姿は扉の向こう側へと消えていた。

(うわ、どうしよう……！ 口が勝手に動いて、決めちゃうなんて……何なんだ、今の……？)

こちらの魔術で、人の身体を意のままに操れるものでもあるのだろうか？

しかし、仮に誰かにそうされたのだとしても、今の自分を利用し

て、何のメリットがあるのかさっぱりわからない。

(それよりか……あの人の仕業って考える方が妥当か)

夢か現か……一時会った女神、エルアノーラの顔が浮かぶ。

(……まあ、考えて見た所で、何にもわかんないんだけど)

もやもやした思いを抱えながら、しばらくベッド上でじっとして
いたが、再び口が勝手に動き出す気配はなかった。

一時的なものであったのなら、良いのだが。

心が凪いで来た頃、アマンドが「大丈夫かい!？」と騒々しく扉
を開け放ち、部屋にやって来た。

買い物から帰って来た直後に客から、血まみれの亜希がアークに
抱き抱えられて帰って来た話を聞いたらしい。

まだ、顔を拭っていない状態だったので、アマンドは亜希を見て
蒼白になったが、アークの勧めに従って、宿に帰って来る途中に治
療してもらったことを告げると、彼女は落ち着きを取り戻した。

「すみません。お借りしている服を血で汚してしまっ……」

「構やしないよ! そんなもの。服よりもあんたが無事で、ホント
良かった。とにかく、風呂入って、今日は早く寝ちまいな。明日
は一日、ゆっくりしたら良いよ」

「良いんですか？ 私、もう元気なので、働けますよ？」

「治療されたって言うても、そんだけ血を流してたんじゃ、貧血になってるよ。無理しないで養生おし」

「……ありがとうございます」

口先だけでなく、本当に自分のことを心配してくれていると言うのが、アマンダの口調や仕草から伝わって来て、胸がじんわりと温かくなるのを感じた。

その日の夜。

食事を採り、湯浴みを済ませて床に就いてから、まもなくのことだった。

突如、キーンと耳鳴りがするのを感じた。

飛行機に乗った時の、気圧の変化による症状と似ている。

それが収まるのを待っていると、「夜分に失礼するぞ」と突如、澄んだ女性の声が耳元でした。

「うわっ」

「これこれ、大きな声を出すでない。隣室の者が起きてしまっぞ？」

聞き覚えのある喋り方。

声が聞こえた方を向くと、半透明で女性の人型をしたものが浮かんでいた。

姿が判然としないが、おそらく

「……エルアノーラ、さん？」

「いかにも」

半透明の浮遊体の方から、返事が返って来たので、どうやらそうらしい。

(……て言うか、私、何でこんな怪しげな物体と、普通に会話してあっさりこの状況を受け入れてるんだろ？ 立て続けに色々刺激的な体験をし過ぎて、頭がおかしくなっちゃったのかも……)

「怪しげな物体とは、失敬じゃな」

「ちょ……勝手に人の心の中を読まないで下さいよ！」

「見えてしまうものは、仕方がなかる？ 霊には、心はガラス張りじゃ」

だとすると、この前会話していた時も、筒抜けだったのだろう。

何だか、居心地が悪くなった。

まあ、抵抗しようにも、心を無にするなんて芸当は、自分には出来ないので、開き直るまでだが。

「ふむ。その様子だと、声は届いておるが、妾の姿ははっきり見えではおらんようじゃな これ以上は亜希の意識が上がるのを待つ

他ないか……」

「あの……何か考えておられる所、申し訳ないんですけど、さっきの口が勝手に動く怪奇現象は、貴方の仕業ですか？」

エルアノーラは、ぶつぶつ一人で何か呟いていたが、それを黙って見ていても気まずいので、話しかけてみた。

「ん？ ああ、そうじゃ。そなたが目覚めた後、傷を消したり、さり気なく妾と会ったことが夢でなかったことをアピールしてみたのだが、そなたが一向に、夢だったと言う考えを捨てないから、わかりやすい現象を起こしてみたのじゃ」

「それと併せて、今こうして、そなたがはつきり起きていると言う自覚のある時に、姿を見せているのだから、信じざるを得んだろう」とエルアノーラは付け足した。

確かに、ここまで奇妙な出来事が重なると、エルアノーラと言う存在を認めざるを得ない。

しかし、大怪我をさせたり、いきなり人の身体を動かす他に、もう少しマシなやり方はなかったものかと思う。

「だからと言って、人が重大な決断をしようとしている時に、勝手に進む道を決められるのは、不服です」

「今はそう感じるじやろうが、ここまでの流れは、そなたが生まれる前に自ら計画して来たこと。妾はそれを後押ししたに過ぎぬ」

「……また、前世の話ですか」

そう言われても、記憶がない以上、「はいそうですか」とあっさ

り納得は出来ない。

「まあ、この話は続けても、平行線になるでしょうから、一先ず置いておきましょう。で、もう一つお訊きしますが、あの時『アーケの仲間になる』方を選択したのは、彼等のやるうとしてしていることが、『この国を立て直すこと』に繋がるから……と考えて宜しいのですか？」

「左様」

「確認しますが、それを成し遂げれば、私は日本に帰れるんですね？」

「そうじゃ。それが、そなたが今回の人生で取り組むと決めた課題じゃからのう」

「私は生前、あの世で自分が何を言ったのかなんて、まったく覚えていないので、理不尽な状況に置かれているとしか思えないんですけど……祖国に帰るためにも、精一杯努めましょう」

「宜しく頼む。妾も、他の霊達と共にそなた達をサポートする。これ以上、売国奴がこの国で幅を利かせるのには、我慢ならぬからな」

そう言うと、エルアノーラは深々と頭を下げた。

唐突にそう言う行動に出られて、亜希は呆気に取られ 毒気が抜かれてしまった。

突拍子もない行動をする神様だが、時折、妙に人間臭い一面を見せるので、どうも憎めない。

しかし、疑問に思うのだが、神自身が、この世をどうにか出

来ないのだろうか？

わざわざ、それを人の手に託す理由は何なのだろうか？

「あの世の霊が、この世に干渉するのは最小限度しか認められておらぬ。地上は人間にとっての学びの場。肉体と言つ不自由な衣を纏い、悩み苦しみながら生きて、それぞれが成長することを、この星の主は望んでおられる」

亜希の疑問を読み取って、エルアノーラが答えた。

「まだ、他にも疑問はあります。悪がこの世に存在するのは、何故です？ 神の目から見て、明らかに誤っている者を裁かないのは、どうしてなんですか？」

「人間は自らの意思によって、自分自身を自由に作り替えていくことが出来る存在なのじゃ。主にとって、人間が悪を犯さぬようにすることは簡単じゃったが、規制を加えれば、自由ではなくなってしまう」

「……では、貴方のような存在がいる一方で、悪人もいる理由は？ 至高神は、魂を平等に創造しなかつたのですか？」

「人間は何度も生まれ変わりを繰り返す存在じゃ。その転生の中で、自らを磨き、世のため人のために生き続けた者と、自分勝手に生き続けた者に差が生じるのは、当然のこと。しかし、すべての者を主は慈しんでおられる。妾もかつては地上で、『我が儘王女』と呼ばれていたものじゃ」

「神も元は人間、と 何だか話が少々、抹香臭くなりましたが、今ようやく、貴方が神様だと認めても良いような気になって来まし

た」

すんなり受け入れられる話ではなかったが、一応筋は通っているように感じた。

「そなたも難儀な性分よのう」

「少々理屈っぽい質なのは自覚してますよ」

「妾は責めてはおらぬ　それはそうと、あまり話し込んでそなたが睡眠不足になってはいかんな。そろそろお開きにしよう　ではな、亜希」

エルアノーラはそれだけ言うと、どろんとまるで忍者の如く、一瞬にして消えてしまった。

（何て言うか……突然現れて、突然消える神様だなあ、ホントに）

もし、怪奇現象が今まで起きていなければ、今も夢だったと感じたことだろう。

目の前に、エルアノーラがいた痕跡は、何一つ残っていないのだから。

しかし、抗えない運命の大波に巻き込まれつつあるのをひしひしと感じつつも、至って冷静な自分がおかしい。

（もしかして、私、心のどこかでこれから起こることに対して、ちょっとだけワクワクしてるのかな？　ああ、駄目だ……この状況でそう言う考えを持つ時点で、やっぱり私、頭がおかしくなってるに違いない）

今日一日で色々なことが起こり過ぎた。

「まずはしっかり寝て、頭を冷やそう」と、亜希は勢い良く布団を被って、目を閉じた。

2「ポンドゲッタ亭の朝」

遠くの方から、鳥のさえずりが聞こえて来る。

ポンドゲッタ亭の食堂には、本日の日替わりランチに付く、スープの食欲をそそる香りが広がっていた。

朝である。

さらっとした茶色のスープに、木製のスプーンが沈む。

中に混じっている狐色のオニオンと共に、上に浮かんでいるチーズの乗ったパンをすくい 亜希は口の中に放り込んだ。

（ああ……やっぱりアマンダさんのスープは、すっごくおいしい……！）

特に、このオニオンスープは自分の中で、ベストスリーに入る美味さだ。

こちらで暮らし初めて、もう一月程になるが、ポンドゲッタ亭で働いていて、色々とわかったことがある。

一つは、この世界の食べ物が、地球とほとんど同じだと言うこと。あまりにも同じものが多すぎるので、異世界と言うよりは、パラレルワールドなのではないかと感じている位だ。

また、自動翻訳機能がどう働いているのか、気になる所なのだが、食材や料理の名称も日本で使っていた言葉が、ほぼそのまま使える。

そんな訳で、今日の前にあるのは「オニオンスープ」と言う呼び方で、正しい。

その他、実にありがたい設定だと感じたのは、世界中で同じ話し言葉と文字が使われていると言うこと。

ただし、国や地方によつて、特有の訛りや文法の微妙な齟齬があるらしい。

ちなみに、識字率は国によつてまちまちだと言う。

それ故、亜希が言葉について周りに訊ねても、不審がられることはなかったのである。

スープから湯気と共に立ち上る香りに頬を緩ませながら、隣にあるサラダを口に始めた時、ふっと食卓の上に影が落ちた。

「おはよう、アキ」

見上げると、穏やかな青い瞳が飛び込んで来た。

「おはようございます。アーク」

「相席しても良いか？」

「どうぞ 毎回、律儀に許可取らなくても良いんですよ？」

「何となくだ」

今まで、何度も繰り返して来たやり取りに、くすりと笑う。

それなりに気心の知れた仲だと思うので、許可なしに自分の隣に座ろつが、こちらは全然気にしないのだが。

アークは椅子を引いて、持っていたトレイを置いた。

「あ、アークも日替わりランチにしたんですね」

「ああ。食堂に入った時に、すっげえ幸せそうにそれ食ってるお前の顔が見えたから、つられて、な」

返す言葉が思い浮かばず、亜希はうつすら頬を赤らめた。

アークは時たま、さらっと恥ずかしくなる台詞を言うので、困る。

「それはそうと、体調の方はどうだ？」

「良好ですよ。みんな貧血じゃないかって心配してくれるんですけど、今の所、そう言う症状もないですし」

「そいつは良かった　で、今この時間に飯食ってるってことは、今日は休みなのか？」

「はい。アマンダさんが、『今日は一日ゆっくりしろ』って言うって下さって」

「ゆっくり、ね……じゃあ、俺が『アキを連れ出したい』って言うたら、承知しねえかもしんねえなあ」

平べったい皿に盛られたライスに口をつけながら、アークはぼそりと呟いた。

「この前、俺とお前が話をした部屋で、今後のことについて話し合いたいと思ったんだが」

「私の方から、頼んでみましようか？」

「いや、俺から言う。これ食ったら、厨房に行つて頼んでみる」

そう言うつと、アークは食べる速度を上げた。

掻き込むようにライスとサラダを平らげ、スープは一気飲み。

すべての皿が綺麗に空になったや否や、アークは席を立ち、厨房へと歩いて行つた。

胃を悪くしないか心配な程の勢いだったが、本人の表情に変化が見られなかったので、大丈夫と思つて良いのだろうか？

それから待つこと、暫し。

亜希が食べ終わった頃に、アークは戻つて来た。

どうだったか訊くと、何とか許可をもらえたらしい。

「まあ……条件付きだったかな」

「条件？」

首を傾げると、アークは笑いを噛み殺すような仕草をした。何なのだろうか？

「大したことじゃねえよ　じゃあ、その食器返して、行こうぜ」

笑つてそう言うつと、アークはひょいっと亜希のトレイを取り上げて、返却口へ持つて行つてくれた。

誤魔化されたように感じたのだが、気のせいだろうか？

入り口付近で待っていると、アークが手に紺色のコートを提げて戻って来た。

先程まで着ていたのを、脱いだらしい。

「アキ　とりあえず、これ被ってる」

「はい……？」

何の説明もなく、いきなりコートを渡された。

頭にクエスチヨンマークを浮かべていると、ふわりと身体が浮いた。

「……って、何で私を横抱きにするんですか！？」

「これが条件だったんだよ。『貧血の人間に、外を歩かせる訳にはいかん』と言われてしまったら、こうするしかねえだろうが」

「私は至って健康なのに！」

「周りはそうは思っていないんだよ。まあ、昨日のあの出血量からすりゃ、普通なら今、重度の貧血状態だろうからな」

話わかるが、二日続けてこんな姿を衆目に晒すのは、恥ずかしくて耐えられない。

「そ、それに……アークも二日連続で人抱えて歩いたりして、腰とか大丈夫なんですか……？」

「野郎を肩に担いで運んだ時のことを思えば、女のお前一人、どう
つてこたねえから気にすんな 昨日運んだ時は、俺も配慮が足り
なかったからな。コートはその反省で、だ。それで顔隠しとけ」

「あの、私に拒否権は……」

「ない。仮に約束破って、お前に歩かせてたら、この宿の客が市場
の奴等の、誰かしらに見られて、絶対アマンダにバレるしな じ
ゃ、行くぞ」

有無を言わずに自分を抱えて歩き出されてしまったので、亜希
は仕方なくコートをすっばり被った。

(うつうつ……何か、ニュースで警察に連行される犯人が、服とかで顔
を隠してたのを思い出す……)

先程までランチで昂揚していた筈の亜希の気分は、すっかりブル
ーになっていた。

3 「告白」

歩き始めてしばらく立った時、ふと何か思い出したように「なあ」と、アークが声をかけて来た。

「お前が仲間になってくれるってんで、興奮して勢いのままに連れ出して来ちまったが 本当に良いのか？」

「はい」

「なら良いが……昨日は見ていた感じじゃ、最初は悩んでる風だったのに、何か唐突に決断したように見えたから、気になってたんだよ」

彼は、よく見ている。

あの時は、エルアノーラが勝手に自分の口を動かしたため、何となく違和感を覚えたのだろう。

しかし、昨晚エルアノーラと話したことで、今はこの選択に納得している。

「腹を決めた理由は何なんだ？」

昨夜訊いたことを、彼に告げるべきか否か。

逡巡していると、「……言いたくないなら、別に良い」と言われた。

「あの……突拍子もない話なんですけど……」

「今更だろ。アキには今まで色々、びっくりさせられっぱなしだか

らな　もう、少々のことには驚かん」

明るい調子でそう返されて　何だか心が軽くなったせいか、亜希は自然と口を開いていた。

あれから、もう一度エルアノーラに　今度は夢の中ではなく、現実で　会ったこと。

亜希はこの国を立て直すまで、何をしても元の世界には戻れないと言う事実。

エルアノーラ曰く、アーク達のやろうとしていることが、この国を立て直すことに繋がるので、仲間になると決めたこと。

「……信じて、くれます……？」

「信じるさ　そもそも、俺はお前に何をしようとしてるのか、一言もしゃべってないのに、最終的な目的を言われちゃった時点で、信じざるを得んだろう」

「だが、一つわからないことがある」と、アークは呟いた。

「もう一度会ったって言ったよな？　アキが目覚めてから、俺が宿に運んで、お前の決断を聞くまで、俺はずっと傍にいた筈だ　じやあ、エルアノーラにもう一回会ったのはいつなんだ？」

（あっ、しまった……あの話は出来ればしなくなかったんだけどなあ……）

亜希は頭を抱えた。

最初に会った時に聞いていたことにすべきだったか？

「いや、俺はそれを聞いて正直、ほっとした。前に『母国に帰ろうとするお前の、足を引つ張りたくなかった』って、言っただろ？ その心配がなくなったから、な」

「それにしても」とアークは付け加えた。

「いくら、祀ってる神とは言え、お前にしたことは許し難い。もし、会う機会があったら、この件について問い詰めてやる」

「ちよ、アーク！ それは不味いのでは……」

自分も神相手に、散々礼を欠くような言葉を口にしたが、それは異世界の神だからと言うことであって、エルアノーラが治める国に住む彼がそう言うことをするのはどうかと思う。

「相手が神だとか、そんなことあ関係ねえ。神だからって何でも許される訳じゃねえんだよ」

(うつ……この言葉、本人に聞かせてやりたい……！)

口が勝手に動く怪奇現象の一件でこの調子なので、きっと、亜希が怪我を負ったのもエルアノーラのせいだったことを知れば、アークは烈火の如く怒るに違いない。

この先、彼に天罰が下らないか心配しつつも、亜希は一方で、彼が怒ってくれていることを、うれしく感じた。

時折会話を交わしながら、通い慣れた道を行き、教会の敷地内に入るや、アークは礼拝堂の裏手に向かう。

周囲に人気がないのは、早朝だからだろうか。

(まあ、この姿を見られないで済むに、越したことはないんだけど)敷地に入ったのだから、もう降ろしても良いように思うのだが、どうもアークは例の隠し部屋に着くまで、亜希を放す気はないらしい。

角をぐるりと周り、青い芝生が広がった空間には、人が一人、佇んでいた。

それを見て、アークは露骨に顔を顰める。

「……てめえには予知能力でもあるのか？ グランツ」

「ここにいたのは、たまたまですよ」

グランツは手に持った箒を掲げて見せた。

掃除のためにここにいただけ、と言いたいらしい。

「こちらにいらっしやったのは、ここの部屋を使いたいからですか？」

「そつだ……何度も済まん」

「構いませんよ。まあ、この辺りで私の部屋以上に、密談にぴったりの場所はないですからね」

「今回はお前も同席して欲しい」

「ほづ………?」

グランツは愉快そうに目を細めた。

その視線がちらり、と亜希に向けられる。

頭に被っていたアークのコートの隙間から、目と目があって、少しどきりとした。

「もしや、今日お二人で来たのは、例の件ですか?」

「ああ」

「成程 ではどうぞ、お入り下さい」

グランツはそう言うと、いつの間にか宙に現れていたドアノブを引いて、亜希とアークを部屋に招き入れた。

4 「女と精霊」

室内には前回と同様、中央に丸い机があり、その周囲に椅子が三つ置かれている。

そのうちの一つに、アークは亜希を降ろし、程なく自らも右隣の椅子に腰掛けた。

ここまで運んでもらったことに対するお礼の言葉と共に、コートを返そうと思っていたのだが、タイミングを逸して、亜希は仕方なく、コートを畳んで膝の上に置いた。

二人が座つたのを見届けた後、グランツも座つた。

最初にどんな言葉が投げかけられるのかと、構えていると、グランツから「エリックから昨日、お嬢さんが酷い怪我をしたと聞いたのですが……お加減はいかがですか？」と問われた。

「昨日、宿に戻る途中に運良く、白魔術が使える方に会って、治療してもらったので、もう大丈夫です」

昨晚アークから勧められた言葉を述べると、「とは言え、まだ貧血状態だから、俺が抱えて来た訳だ」とアークが付け加えた。

「そうですね　もし、話している途中で辛くなったら、遠慮せず
に言っして下さいね」

「お気遣いありがとうございます」

ぺこりと頭を下げると、グランツは微笑んだ。

「さて、本題に入る前にお訊きしたいのですが、お嬢さんはこ

「数日で、何か神秘体験のようなものをされましたか？」

グランツの問いに、亜希はたじろいだ。

（て言うか、何でそれがわかるんだ、この人は！ さっきアークが言ってたように、ホントにエスパーだったりして……）

しかし、正直に告白して良いものか、判断に悩んだので、「どうして、そう思われるのですか？」と返した。

質問に質問を返すのは、失礼に当たるかもしれないが、咄嗟に良い切り返しの言葉が浮かばなかったのだ。

「ふふ……いえ、先程から風の精霊が踊っているようですから。この部屋は密室なのに、微かに風を感じませんか？」

「風？ ああ、言われてみれば、確かに……」

五感を研ぎ澄ましてみると、微弱な風を感じた。
心なしか、空気も密室の割に綺麗な気がする。

「管見の及ぶ限り、お嬢さんの周囲には以前に、こうした現象は見られませんでしたが 現在は、精霊に好かれる性質をお持ちのようです。お嬢さんを中心に、清浄な空気が広がっています それで、何かあったのではと思ひましてね」

「はあ」

何と返して良いのかわからず、相槌を打つに留めておく。

「確かに風はあるが……俺は昨日、今日とこいつの傍にいたものの、

別段、精霊の気配みたいなモンは感じなかつたぞ？」

アークが話に容喙した。

「ふむ。それは面白い。今、ここで精霊が急に、自らの存在をアピールし出したのは、私に『彼女を信用しろ』と暗に言いたいからかも知れません」

「えっと……話が見えないんですが」

「これは失礼。精霊と言うのは、暗い心を持った者の傍には、まず近寄ろうとしない存在です。裏を返せば、貴方が胸の内、我々に取り入って良からぬことをしようと企んでいる……等と言うことはありえない、とわかる訳です」

「グランツ……！」

やや毒の含まれた言葉に、アークが声を荒げて立ち上がりかけたが、「まあまあ」とグランツが肩を掴んで座らせる。

「アークの紹介した方なので、私も最初からある程度、彼女を信用していましたよ」

（ある程度……）

すつと、指先が冷えていくのを感じた。

グランツはいつも柔和な表情の裏で、冷徹にこちらを観察していたようだ。

振り返ってみれば、今までに彼がそのような仕草を見せたこともあった気がする。

敏感な者であれば、亜希が国の別と言う枠を超えて、こちらの常識に疎く、かなり変わった物の考え方を持っていることに、微かな違和感を感じることも、あるかもしれない。

事情を知っているアークと違い、彼が容易に亜希を信用出来なかったのは、やむを得ないだろう。

「あまりに聡いお嬢さんなので、万が一の心配はしていましたが……まあ、これでそうした疑念も払拭されました」

そこまで言うと、グランツは一つ咳払いをした。

「さて、貴方は私達の『仲間』になりたい、と言うことで、今日こちらにいらっしゃったんですよね？」

「はい」

いよいよ本題に入ったと、亜希は襟を正した。

「志願されている時点で、訊ねるのは野暮でしょうが……我々が成そうとしていることが、危険を伴うものであることは、承知されていますね？」

「ええ」

一問一答。

まるで、入試や就活の面接のようだと思しながら、亜希は答えていた。

「オズウェルド人ではない貴方が、我が国の揉め事に関わろうとす

る理由はなんですか？」

「簡潔に言えば、この国の揉め事が解決しない限り、私は祖国に帰ることが出来ないからです。また、皆さんとは思想信条に通じ合うものを感じたので、仲間にさせて頂こうと思った次第です」

事実と、咄嗟に浮かんだ言葉を紡ぐ。

教会の人々にシンパシーを感じたのは、嘘ではない。
彼等の姿が、日本で政治に憤っていた自分の姿と、重なった。

「ほう……差し支えなければ、詳しくお訊きしても？」

グランツの目が興味深そうに、細められた。

何となくアークに視線を移すと、彼はこくりと頷いて見せた。

「グランツは信用出来る」と言うように。

（そうだよな。相手に信用してもらいたいなら、自分がまず、相手に対して作っていた壁を壊さなきゃ）

人は、自分の心を映し出す鏡だと、昔何かで読んだ。

今までの人生を振り返って、それは正しいと感じている。

こちらが隠し事をしたままでは、本当の意味でグランツの信用を得ることは出来ないだろう。

よし、と心中で呟いて気合いを入れた後、亜希は意を決して口を開いた。

「話せば長くなりますが」

実は、私は異世界の人間です」

5 「仲間入り」

言葉だけで理解してもらおうのは難しいだろうと、懐に常に隠し持っていた巾着袋を取り出す。

中には 携帯電話と電子辞書。

亜希は向こうから持って来た物のうち、この二つだけは肌身離さず、持ち歩いていた。

科学技術は、こちらよりも地球の方がかなり進んでいる。

魔術と言う、亜希にとってはまだまだ未知の要素があるので、断定は出来ないが、ぱっと見た所、この世界はまだ、産業革命よりも前の科学技術レベルと言えた。

それ故、こちらではオーバーテクノロジーだと思われる電子機器二つを、人の目に触れることのないよう、宿に置きっぱなしにせず、持ち歩いていたのである。

おいそれと人に見せて良いものではないだろうが、グランツは信賴しているアークの仲間だから、と腹を括った。

電子辞書を開けて、明らかにこちらの文字ではないものが並んだ画面や、携帯電話で自分の姿を撮影し、それが写った画面をグランツに見せる。

大事に扱っていたため、まだ電池が残っていたのが幸이었다。

「これは……素晴らしいですね。その場の風景を一瞬で、そのまま写し取れるとは……」

アークに見せた時と同じような反応を、グランツは返した。

彼は特に、携帯電話を興味深げに覗き込んでいる。

アークはと言えば、表情がくるくる変わるグランツを、面白そうに眺めていた。

「このような技術が当たり前の世の中になれば、画家は商売上がりたりでしょうね。ちなみに、この道具はどう言った仕組みで動いているんですか？」

「私もよくわからないまま、向こうでは使っていたんですが……エネルギー源として、『電気』と呼ばれるものを使っています」

「『デンキ』？」

「えっと……雷ってこちらでも、落ちますか？ あれと同種のもんです」

そう説明すると、グランツは「何と……」とつぶやき、感極まった表情を浮かべた。

「……世界広しと言えども、これらの道具は明らかに、どの国の技術でも作り出すことは出来ないでしょう 貴方が異世界の方だと言う話、信じます」

どうやら、納得してもらえたようだ。

「しかし、これは事情を知らない、他の者には見せない方が良いでしょう」

「ええ まあ、こちらではエネルギーを注ぎ込む術がないので、遠からずこれらの道具は使えなくなりますが、私自身、まったくこの道具の仕組みを理解していないので、利用するのは難しいですよ

うが……」

そこで、一旦この話は打ち切り、亜希は話題を変えた。

エルアノーラの件を話さなければ、「この国の揉め事を解決しない限り、元の世界に帰ることが出来ない」理由を説明出来ない。

しかし、アークに打ち明けた時とは違い、亜希は少々緊張していた。

エルアノーラは、この国の民族神である。

下手な言い方をして、教会の神父であるグランツを刺激しないようにしなければと考えると、緊張せざるを得ない。

意識を失った直後と、その日の夜、二回会った時の出来事を、慎重に言葉を選びながら話す。

怪我を負った事故は、エルアノーラが故意に起こしたものだと言う部分だけ、除いておいた。

「……と言う訳で、初めに『怪我は、白魔術師に治してもらった』と言ったことと、『貧血』と言ったのは、不審に思われなかったためについた嘘だったんです。すいません！」

これは、事情を説明すれば、必然的に明らかになる事実だったので、一通り話し終えた後、素直に頭を下げて謝罪した。

その時、ポンと肩に手が置かれたのを感じた。

「こいつは悪くない。俺がそうするように言ったんだ」

「おやおや、二人共、私が責めるとでも？　お嬢さんの事情を知らず、あつという間に怪我が治ってしまった事実だけを周囲の人々が知れば、変に注目を集める結果になっていたのは間違いないでしょうから、私もアークと同じ立場なら、貴方に嘘をつくように勧めていたと思いますよ」

「……信じて、下さるんですか……？」

「はい。お嬢さんの話に出て来た『神がこの世界の問題の解決を、人の手に託す理由』や、『悪がこの世に存在する理由』、『善人と悪人が存在する理由』の部分で、エルアノーラ様が仰った答えを訊いて、この国の神父で納得出来ない者は、教会から去るべきでしょうね」

「と、申しますと……」

「お嬢さんの問いに対するエルアノーラ様のお言葉と同じ内容が、教典に載っているんです。しかも、お嬢さん伝手に訊いたエルアノーラ様のお言葉は、教典の文章よりもはるかに簡潔でわかりやすい正直、感動してしまいました」

「出来ることなら、私もその場に居合わせたかった……」と呟き、グランツはどこか遠くを見るような目で、亜希を見た。

エルアノーラの件は、あり得ないような話なので、信じてもらえるかドキドキしていたが、話をあまり端折らなかつたことや、彼の信仰心の厚さが、亜希に対する理解へと繋がったようである。

グランツの纏う雰囲気少し柔らかくなったのを感じ取り、亜希は胸を撫で下ろした。

「長々と喋らせてしまって、すいませんでした……お疲れなのは？」

そう言って笑うグランツの眼差しは、とても優しい。

「いえ。私も今までの経緯を思い切って話したら、すっきりしました」

笑い返すと、「そうですね」との言葉と共に、グランツが手を差し出した。

「随分回り道をしました……貴方を喜んで歓迎致します。アキさんとお呼びしても？」

「はい！ 改めてよろしくお願いします。グランツさん」

出された手を、がっちり掴んで握手を交わす。

それからしばらくして、「さて」とアークが呟いた。

「……流石にこれ以上待たせたら悪いから、そろそろ声をかけてやらねえか？」

「えっ、外に誰がいるんですか？」

「ええ。もう少しこの余韻に浸っていたかったんですが、仕方ありませんね。では、今から少しだけ中と外の音が通じるようにします」

そう言うと、パチンとグランツは指を弾いた。

6 「始動」

「そちらにいらっしやるのは、どなたですか？」

『ゼノ・メルキスだ 訊かずとも、わかっている癖に この時間に来るって、事前に言ってた筈だよな？ 気配に気付いておきながら、無視してた理由はなんなんだ？』

(あ、あの人だったんだ……)

教会まで、亜希を見るためだけに、わざわざ訪ねて来た人で、アーク曰く、彼とグランツの仲間 ゼノ。

刺々しい返事が、外から返って来た。

これは相当、苛ついている。

「ふふ……急遽、別のお客様がお見えになったものですから。念のために、呪文をお願いします」

『パイアス・エモリア・レバーンズ・ペイトリット』

「結構です。どうぞ」

グランツの許可と共に、扉が押し開けられた。

名乗った通りの人物 ゼノが、するりと部屋に入る。

黒い外套を纏った姿は、前回出会った時よりも地味だった。

「えっと……あん時のお嬢さん？」

「……どうも」

一応、挨拶の言葉をかけると、慌てたように会釈を返された。
第一印象は最悪だったが、根は悪くなさそうな人だ。

出会ってすぐの頃のアークと、どこか印象が被る。

「これは俺の勝手な推測だが 見た所、結局、お嬢さんを仲間に引き入れることにしたのか？」

「違う アキ自身が志願して、だ」

そう答えたアークに、ゼノは「へえ」と呟いて、にやりと笑った。
何処となく、含みのある笑みだ。

彼等の会話を聞きながら、ふと周囲に目を遣って、他に空いている椅子がないことに気が付いた。

自分が長々と話している間、ずっと外で待っていたゼノに対して、知らなかったとは言え、少々申し訳なく感じた亜希は、気が付けば無意識に立ち上がった。

それに、男三人が訝しげな目を向ける。

「あの……ちょうど、私は話が終わった所なので、どうぞ」

空いた椅子を手で指し示しながら、そう告げると、こちらの意図を理解したのか、ゼノの表情が和らいだ。

「気イ使ってくれなくて良いのに！ 良い子だな、お嬢さ……」

「アキさん。貴方とはまだ話したいことがありますから、どうぞ座

「あ、アーク……?」

こちらが驚いているのを余所に、アークは「それがどうした?」
とでも言うような、涼しい顔だ。

当たり前のように、片腕で亜希の腰を支え、自分の身体を背もた
れ代わりにしてくれている。

「……嫌か?」

真顔でそう訊ねる彼に、この姿を友人二人に晒す恥ずかしさは…
…見えない。

「いえ、その、そう言う訳ではないんですけど……」

「お前が嫌なら、ゼノが床に座ることになるだけだがな」

(……今まで散々、自分のせいで待たせた挙げ句、彼を床に座らせ
る……)

亜希は、自分の恥ずかしい姿を晒し続けることと、ゼノが椅子に
座ることを天秤にかけて 悩み抜いた結果、ゼノのために羞
恥心に耐えることを決めた。

それを口にした時のゼノの驚いたような表情と、グラントツの嫌に
綺麗な笑顔が印象に残った。

その後、ゼノがこの二人の仲間であることは、先刻承知の上なの

で、ついでにと彼にも身の上話をする事になった。

今後、彼等との活動を円滑に進めるためにも、ゼノと信頼関係を築いておく必要はあるだろう。

アークが以前、グランツの名前を話に出す際、一緒に彼の名前も取り上げていた所を見ると、彼等三人の結びつきは深そうに思えた。

初対面の印象が悪い相手ではあったが、アークへの信頼感が「彼の仲間だから大丈夫」だと、グランツに打ち明けた時と同様に、亜希を後押しした。

「長く話した後で疲れているだろう」と、グランツとアークが時折、説明に加わってくれたため、思いの外、話は短時間で終わった。

「……信じられねえ話だが、証拠もあるし、信じざるを得ないんだよな……」

亜希が一通り話し終えた後、ゼノはそう、ぼそりと呟いた。

呆然とした表情だが、無理もない。

自分が彼の立場なら、すぐには受け入れられないと思う。

「ああ、でもそうすると、色々納得出来るのは確かだ。お嬢さんが経済に明るいこともそうだし……」

そこで言葉を切ると、ゼノはちらりと視線を亜希の上方へと動かした。

その先は アーク。

「……お前が構いたがる理由もな。まあ、それだけじゃないだろうが」

「何が言いたい？」

アークの眉間に皺が寄る。

「『コレ』で、自覚がないんだぜ？ 始末に負えねえよ、グランツ」

「そうですね」

「……？」

はあと大袈裟に溜め息をついて見せるゼノに、グランツはくすくす笑っている。

（何がおかしいんだろう？）

台詞の重要な部分をあえてボカして、ゼノは話しているように感じるのだが、グランツには伝わっているようだ。

アークはと言うと、先程から難しい表情のままで見ると、亜希同様、言葉の真意がわからないらしい。

「ええつと……話の流れを切って悪いんですが、ゼノさんのお話は良いんですか？ そもそも、グランツさんに何かお話があって、ここに来たんですよね？」

黙っているのも、気まずかったので、別の話題を取り上げてみた。

「ああ。緊急性の問われるモンじゃなかったからな」

そう言った後、ゼノはふっと目を細めた。

「さて、今から突っ込んだ話をするが、お嬢さん、覚悟は良いか？
こっから先は聞いたが最後……後には引けない」

「思い切って、身の上明かしたのに、今更ここで逃げたりなんてし
ませんよ」

散々悩んでから決めたので、腹は据わっている。

「まあ、そりゃそうだな　じゃあみんな、これを見てくれ」

くすりと笑った後、ゼノは懐から数枚の紙を取り出した。

7 「草莽崛起」

「これは……例の不正献金に関する書類ですね」

「不正献金？」

ぼそりと呟いたグランツの言葉を、事情がわからない亜希が無意識にオウム返しをする。

「少し前の新聞で、ウェイブ・オルキードって政治家が要職を解任されたって記事があったの、覚えてるか？ 各紙共、一面で派手に扱ってたと思うんだが」

アークが亜希の顔を覗き込むようにして、言った。
話に入っていけるようにと、気を使ってくれているのが見て取れる。

毎日、新聞には目を通していたので、アークの挙げた名前には心当たりがあった。

「はい。確か、インディアス新聞のインタビューで、政府の要人であるマッシュモール氏を批判したことが問題になって、オルキード氏は解任されたんですね」

「今の政権では、自由な発言が認められないのか」と、どの新聞も批判的な論調だったと、亜希は記憶している。

「そうだ。それを恨んでの行動だろうが……オルキードは自分の解任を決めた連中 マッシュモールの腰巾着が隠していた秘密を暴

露した。その証拠書類がコレなんだよな？ ゼノ」

アークの言葉に、ゼノはこくりと頷いた。

「一枚目はオズウェルドの首都である、ここエグザリオンにある教会の、寄付金の内訳と用途をまとめた表だ。毎年、地域ごとに国への提出が義務づけられているんだが、問題はここだ」

そう言っつてゼノが指差した所には、

贖宥状

育英金

の文字が記されていた。

「『贖宥状』つてのは、買った分だけ罪が許されるつて言う、ありがたい代物だそうさ。一部の教会で発行されていて、評判になっているが、はっきり言っつて体の良い金儲けの手段だな。『育英金』は、教育機関の役割も果たしている教会に対して、教育費支援を目的に集められた寄付金のことだ」

「それが問題と言っつことは……つまり、集められたお金が政府の人間に流れていた、と？」

「その通り」

亜希の指摘に、男三人は首を縦に振った。

二枚目、三枚目は、教会と政府の人間が政治的な取引をした証拠だと言っつ。

(何だか……あの有名な話と、日本の教育問題を彷彿とさせるなあ)

亜希の脳裏に浮かんだのは、二つの出来事である。

「贖宥状」は、世界史で学んだ、ルターと免罪符の話によく似ているし、「育英金」は日教組の組合費が教員の給与から天引きされ、選挙資金に使われていた件を思い出させる。

ちなみに日教組とは、日本教職員組合の略称で、日本の教員と学校職員による労働組合の連合体のことだと、一般的には言われている。

しかし、公立学校の教職員は公務員なので、正式には「職員団体の連合体」であり、「任意団体」となる。

労働組合とは違い、労働基本権が制約されているのだが、この点について、認識の誤解からたびたび騒動が起きていた。

亜希は教職課程を取っており、日教組問題はこちらに来る直前、講義で聞いた話題でもあったため、よく覚えている。

グランツ曰く、「オズウェルドは国教をエルアノーラ教一本に定めていて、神父と巫女の生活費全額と、教会の運営資金の半分を地方政府からの税金、残り半分の運営資金は市民からの寄付で成り立っています。そんな訳で、私を含め、教会の人間は地方官吏扱いになっています」とのこと。

「だとすると、教会の人間が政治活動を行った罪は重いですよね？」
「それが、ですね。地方官吏法では違法な政治活動を禁止しているんですが、罰則規定がありません」

「……実質、野放し状態なんですね？」

「ええ」

グランツが、表情を歪めた。

首都にある教会の一つで神父を務める彼は、アークやゼノよりも重く事態を受け止めているのだろう。

(ホントに……日本とよく似てる)

日本では、地方公務員法で地方公務員の選挙運動が禁止されているが、罰則規定がなく、教員は半ば公然と選挙活動を行っていた。

大学の教職課程の多くが左傾化し、こうした問題を取り上げない中、亜希は運良く保守的な教授に巡り会い、実態を教わっていたのだが、後々、異世界に行くことが運命づけられていたのなら、これも偶然ではなかったのかもしれない。

「今まではこの件について、状況証拠がほとんどで、物的証拠が不足していたが、これは好機だ。俺はこれを機に、マッシュモールに仕掛けようと思う」

グランツと亜希の会話の後、続いていた沈黙を破り、アークが声を低めてそう述べた。

「えっと……確か、マッシュモール氏は今、政府を仕切っているイ

ルダープ党の、幹事長ですよね？」

「ああ。しかし、イルダープの奴は看板だな。実質、我が国の権力者はマツシュモールだ」

ここで、一度整理しておこう。

亜希が新聞等から得た情報によると、オズウェルドは国王を元首として頂く、立憲君主制の国家である。

議院内閣制を採用しており、党名には、党の総裁の姓をつけるのが特徴的である。

フォード・イルダープは、名前から明らかなように、イルダープ党総裁であり、現在、首相を務めている。

ラスター・マツシュモールは、イルダープ党の幹事長である。ウェイブ・オルキードは、先日、同党の副幹事長を解任されている。

「マツシュモールが、この国の諸悪の根源だ。あの腹黒爺をどうにかしない限り、オズウェルドの再建は不可能だろう」

そこで一旦、言葉を切ると、アークは亜希に視線を移した。

「俺達はこう言った不正を追及して、国を立て直そうと活動している訳だが……こんなモンで説明は充分か？」

「ああ、はい。長々とすいません！ まだまだこちらの常識に疎くて、申し訳ないです」

「いや、この国の人間でも、政治に興味持って調べてる奴以外、ほとんども知らないだろうからな」

「あの……そう言えば気になってたんですけど、教会の若者達と、ゼノさんって面識がありませんでしたよね？ ゼノさんと教会はそれぞれ別行動を取っているんですか？」

ふと思いついて、そう訊ねてみた。

ゼノと初めて会った日の、ルードとエリックの反応は、まだ記憶に新しい。

返事を待っていると、ゼノとグランツが一瞬、視線を交わして、にやりと笑ったように見えた。

「流石、お嬢さん。よく見てるぜ。その指摘は正しい。実は俺は普段、城にいる人間で、情報収集を主に担当してる。グランツ率いる、アルツアード教会の連中は、在野での活動部隊。アークは俺と同じ側だが、一時的にこっちでも活動してる状態って感じだな」

「一時的」と言う言葉に、アークのこれまでの言動には、このような背景があったのかと合点がいった。

「しかし、我々の勢力はまだまだ少ない……そこで、私からの提案

なのですが、アキさんには『世論を喚起する』役割を担ってもらっては、いかがでしょうか？」

ぼんやりしていると、グランツが突如、そう口にした。

8 「地上戦」

（世論を喚起、か……）

礼拝堂内には、羽ペンを片手に頭を抱える多くの若者達。
その中の一人に 亜希もいた。

ちなみに、アークとゼノは「情報収集に城の方へ行ってみる」と
言い残し、話が終わると、教会を後にした。

アマンダとの約束があるので、アークが夕方に迎えに来るまで、
亜希は教会に滞在することになっている。

正式にアーク達の仲間になり、在野での活動部隊であるアルツァ
ード教会の一員となった亜希は、目下、グランツや青年達とブレ
ーンストミーニング中である。

彼等はマスコミの偏向報道を正す活動を続ける中、定期的にこう
した話し合いの場を設け、より効果的な活動方法をみんなで考えて
いると言う。

（街宣やビラ撒きは、こっちでも既にやってるんだよね）

インターネットと言う媒体がこちらにはないのが、辛い。

日本にいた時は、自分の無力さを嘆いていたものだが、今になっ
て思えば、情報の発信手段が幾通りもあったのだから、随分恵まれ

ていた。

（でも、幕末の志士達は、直に会って話すか手紙で連絡を取り合っ
て、維新を成し遂げたんだよね。交通手段も基本、徒歩だったし…
…詰まる所、気合いの問題なんだろうけど）

かの吉田松陰は、政治の中心であった江戸や京から遠く離れた、
長州藩、現在の山口県において、高杉晋作や伊藤博文等、多くの志
士を育成した。

彼等と自分達を比べれば、活動拠点が首都の街中にある分、まだ
恵まれている。

そのようなことを考えながら、良い案が浮かばず、暗くなり
そつな心を何とか奮い立たせていると、集団の中から一人が挙手し
た。

「国民の感情に真つ直ぐに訴えると言う方法を、我々は今まで行っ
て来ました。しかし、偏向報道による洗脳が根強いためか、国益を
語れば右翼と捉え、そこで聞くのをやめてしまう人も少なくないの
が、現状です」

声がする方を向けば、茶色の髪に色白の顔 エリオットであっ
た。

硬い話し方だと感じていたが、彼であれば納得だ。

「これまでの活動も当然、継続すべきですが、政治色を前面に出さ
ずに、真実を訴える方法も模索すべきだと、僕は考えます」

ふむ、と亜希は顎に手を添えた。

彼の指摘には、一理ある。

亜希はこれまで、友人と政治の話をした際、少しでもイデオロギ
ー的なものを感じれば、引いてしまう子が少なくなかったのだ。

敗戦後、日本はどこか自虐的になった。

不思議な一致だが、このオズウエルドも敗戦を契機に、国益を語
ることはタブーだと言う空気が広まっていると言う。

(要は、最初に拒否反応を起こさせないような形で、こちらの主張
を人々に訴えられるものを考えろってことだよな)

例えば、娯楽。

こちらでは、舞台のお芝居や、読み物等がそうである。

そこまで考えて、はっとした。

「あ、良い案が浮かんだ…… かもしれせん」

心の声が、無意識にそのまま声に出ていたらしい。

周囲の視線が一斉にこちらに向かい、ドキリとした。

頭の中で言葉がまだ整理出来ていないのだが、黙ってられるよ
うな空気ではないので、亜希は渋々、話し始めた。

「ええっと…… 文章を書くのが好きだっつて方、いませんか？」

呼びかけると、辺りがざわつき始めた。

「小説等、人間ドラマを描いたものの中に、政治的なメッセージを
発信することも可能だと思っんですが、いかがでしょう。もし、劇
団と伝手がある方がいるなら、芝居と言う形で表現する手もありま
す」

話しながら、ふと頭の中に「あるもの」が閃いた。

(そうだと……日本文化の中に、誇るべき表現手段があるじゃないか)
今まで、何故気が付かなかったのか。
慣れ親しみすぎていたからだろうか。

亜希は破顔し、握っていた羽ペンを紙に滑らせた。

「後、私の祖国ではこう言ったモノがあるんですが……」

解散になった後の礼拝堂には、四人の若者が残り、膝を突き合わせていた。

亜希、エリック、ルード、エリオットである。

男三人が目皿のようにして見つめているのは、「亜希の書いたもの」である。

「これが……『マンガ』」

「趣味で書いてたってだけなんで、あんまり上手くないんですけど」
「文字だけの小説等より、視覚的にメッセージを訴えることが出来て、わかりやすいな」

そう、書いたものとは『マンガ』である。

亜希は中学時代、美術部に所属していた。

それ以降も、好きでしばしば書いていたのだが、その趣味がこう言う形で明らかになるとは、予想外であった。

紙面を枠線で区切り、絵に吹き出しや効果音を書き込んで、物語を形にする。

こうした表現方法は、なかなか衝撃的なものであったらしい。

と言っても、興味を示して残ってくれたのは、この三人だけで、他のみんなは街宣とビラ撒きに行ってしまったが……

(何か、意外なメンバーが残ったなあ……)

こうなった経緯はと言うと、「文章を書くのは割と好きだ」とエリオットが名乗り出て、他の若者達が「絵を描くのはこいつが上手い」とルードを推薦し、亜希やルードと友達であるエリックが、付き合いで残ってくれたから……と言う訳である。

「新しい表現方法なので、本と言う形にすれば、それだけで注目を浴びるでしょうね」

そこまで言った後、「とは言え」とエリオットは前置きして、再び口を開いた。

「第一印象が肝心です。最初に出した本が上手く行けば、続刊を続けて出すことも可能になるでしょう。逆に失敗すれば、一時のブームで終わってしまうでしょうが、それではあまりにもったいない。しっかりストーリーを練って、形にしなければ……」

エリオットの呟きを耳にし、亜希は目を丸くした。

マンガを世に出すことを前提に、話しているように聞こえたから

である。

「このアイデアを本気で実行に移すつもりなのか？」と問うと、「当たり前です」と返された。

「こんなに面白そうなものを知ってしまったら、広めずにはられないでしょう?」

エリオットはやりと笑みを浮かべて、「君達もそうではないですか?」と傍らの二人に問いかけた。

「ああ 俺も、絵描きとしての血が騒ぐ」と、ルード。

「俺は何でも、とにかくやってみたら良いって考えかな。今のままじゃ駄目なのはわかってるんだ 考えつく限りのことをやって、そのうち一個でも上手く行きゃ、儲けモンだろう」

エリックはそう言うと、亜希の肩に手を置いた。

「エリオットの言うように、万全を期すよう努力するのは当然だが、あんまり気負うことあねえと思うぞ。色んなことに捕らわれすぎたら、良い案も出なくなっちゃう 気楽に行こうぜ」

「えっと……要するに、皆さん乗り気なんですね?」

訊ねると、男三人は揃って首を縦に振った。

この瞬間、亜希の提案は実現に向けて、動き始めた。

これ以後、四人は二度目のブレイクストーミングを、夕方まで続けることとなった。

閑話「隊長と団長」

盗人宜しく城壁を乗り越え、兵の目を掻い潜り、城の一室の窓辺に立った男　アークの表情は穏やかだ。

事情を知らない連中に見付かったら大変なのは間違いないため、一定の緊張感を保持してはいるが、もう何度も繰り返していることなので、慣れてしまっている。

中を窺い、見知った長い銀髪の男が一人、机に向かっており、彼の他に周囲に気配を感じられないことを確認した上で、アークは音もなく窓を開けると、するりと中に滑り込んだ。

「よう、ガルム。何か動きはあったか？」

「ここを警護する近衛兵の数について、特に指図は受けていないので、アークにはまだ、気付いていないと思われませう。諸々の報告はこちらに」

銀髪の男もとい、ガルムが差し出した書類を受け取り、目を通す。

読み始めてからしばらくして、アークは顔を引き攣らせた。

「……おいおい、まだ会ってんのか……」

報告書によると、イルダーブ首相夫人が昨日、隣国の舞台俳優を屋敷に呼び、手料理を振る舞ったと言う。

ちなみに、夫人はその俳優のファンなのだが、もう何度も逢瀬を

重ねている。

これだけの情報だと、ただの呆れ話だが、それだけで済まないのが問題なのだ。

特殊部隊は、俳優を「スパイ」と認定している。

機密が漏れる恐れがあるとし、夫人を警護する名目で監視を付けているのだが、好い加減、遊ぶのを止めて、そろそろ働いてはどうか。

不景気で国民が苦しんでいるというのに、放蕩三昧とは呆れたものである。

「くそ……ただでさえ人手が足らねえつてのに、まだ、あの女から監視を外せないとは」

「それはそうですが、誰かさんが、期限ぎりぎりまで城と街の二重生活を続けなければ、俺が部隊に戻るんですけどねえ」

ちくりと嫌みを言われて、アークは閉口した。

ガラムは近衛騎士団長であると同時に、特殊部隊の一員である。

近衛騎士団は基本、王族の護衛のみが任務であり、他の騎士団に比べれば仕事は楽なものであった。

団長は平の近衛騎士よりは忙しいとは言え、書類仕事を中心なので、特殊部隊の隊員と兼務も可能であった訳である。

特殊部隊は、公には存在が隠されている、王直属の部隊である。表向きは近衛騎士団が王直属の部隊だが、入隊試験時に実力よりも家柄や品位、容姿等を重視する、悪しき伝統があった。

すべての国民は法の下に平等であり、身分の差がないことを憲法で謳っているが、巷では世襲議員等を指して「貴族」と呼んでいる。そうした「貴族」の子弟や親族が近衛の大半を占めており、王族や有力議員に擦り寄ろうと、各々が内部で醜い権力争いをしているのが現状である。

それ故、王は秘密裏に特殊部隊を結成したのだ。
そして、部隊の隊長が アークである。

「教会との繋ぎ役にはゼノもいるのに、隊長が出張る必要はないのでは？」

「だが、あいつだって、こっちで仕事が……」

「それはそれです。もっと早くに切り上げることだって出来たでしょう？」

確かに、ガルムの指摘は正しい。
アキのことが気掛かりで、城下街からなかなか離れられずにいたのだ。

「ふむ……アークに好きな女子が出来たとの話は、ホントだったようですねえ」

ガルムの台詞に、アークは目の色を変えた。
アキと共にいた自分を見て、勝手に色恋へと話を繋げられるのは
不本意である。

彼女に対しても、失礼ではないか。

「誰だ？ そんなデマをお前に吹き込んだのは」

「ゼノです」

「あんにやろう……」

「ああ、安心して下さい。これはゼノとグランツと俺、三人だけの
秘密にしようって決めましたから、他に漏らしてはいませんよ」

「お前、本人が否定してるのに、認めようとしてないだろ……？」

「自覚症状がないだけだろうって、二人が言っていたので」

自覚症状と言う言葉に、アークは眉間の皺を深くした。

どうして、どいつもこいつも、そう言う目でアキと自分を見るの
か。

彼女は自分にとって、大切な同志なのであり、それ以外の何者で
もない。

「……お前も、俺を弄くって遊んでないで、とっとと持ち場につけ」

かなり強引な話の切り替え方だとはわかっていたが、それと悟ら
れない言い回しが浮かばず、やむを得ず、そう口にした。

先の話題に居た堪れなくなっていた。

「了解」

そう言つて、ガルムはにやりと笑い、腰まである自身の長い銀髪を手で掴んだ。

そのまま、一気にそれを引っ張ると、ずるりと銀糸の間から金糸が顔を覗かせた。

そう、彼はカツラを被っていたのである。

ガルムの地毛は、茶に近い金で短髪だ。

それから、纏っている衣を脱いでカツラと共にクローゼットに仕舞うと、机の下から 隠してあったのだろう 近衛騎士の軍服と剣を取り出して、素早く袖を通し、ボタンを嵌め、最後に腰に剣を差しした。

「では、また後で」

そう口にするや否や、ガルムはアークが入つて来た窓から庭へ下り、あつと言つ間に姿を眩ませた。

それを見送るまでに、アークはクローゼットの服を取り出していた。

手際よく着替えを済ませた後、三つ編みにしていた髪を解き、首を振る。

無駄にコシのある髪は結った跡を残さず、さらりと宙を舞った。

そして 机の前の椅子に腰掛けた、その時。

赤銅色だった毛は、瞬時に銀色へと変わる。

(……さて、溜まつてた書類を片付けるか)

タイムリミットは夕方、役人が仕事を終えるのと同じ時間までである。

アマンダとの約束を守るべく、自分のサインがなければ処理出来なかった書類の山へと、アークは目を通し始めた。

閑話「迎え人」

何処と無く、身体がだるい。

約束の時間までに、出来るだけ多くの書類を片付けようと、少々、根を詰め過ぎたのだろう。

眉間を指で摘みながら、アークは一人、街を歩いていた。

空は赤味の中に、濃い青色が混じり始め、道行く人の顔が少々、判別し辛くなって来た。そんな頃合いである。

(……けど、城と街の二重生活を選んだのは、俺だ)

城下に下りていれば、仕事が溜まるのはわかっていた。

それでも……何故か、アキのことが気になって、気が付けば彼女の下に足が向いている。

出会った当初は、自分意外に、彼女の頼れる人間がいなかったため、心配で傍にいた。

しかし、今はアキの傍に、多くの理解者がいるため、もう、その心配はない。

なら、どうしてぎりぎりまで、彼女の傍にいようとするのか？

不意に先刻、「アークに好きな女子が出来た」と述べたガラムの声が、脳裏を過った。

(くそ……あいつが去り際に余計なことを口にしたせいで、変にアキのことを意識するようになった)

時間を作って城下街に来れるのは 今日までだ。
今のゴタゴタが落ち着くまで、ここには来られない。

それを寂しく思うものの、だからと言って、自分の勝手にアキを城には連れて行けない。

今働いている宿を突然辞める訳にはいかないだろうし、教会の弟子達との繋がりもある。

(それに、城に連れて行くと……アキは二度と市井の人間には戻れなくなっちゃう)

彼女の人生の選択肢を、独断で減らすような真似は出来ない。

城での活動について、アキに全てを話さないのにも、理由があるのだ。

これ以後、彼女は特殊部隊の部下に、陰から守らせるつもりである。

仲間になってくれたからには、彼女を守る責任がある。

(ここで一旦、考え事は止めだ、止め)

教会の前まで来て、アークは一度、大きく頭を左右に振った後、ふとすると出そうになる欠伸を噛み殺しながら、敷地へと足を踏み入れた。

礼拝堂の中を覗くと、窓の陰に人影が四つ見えた。

その内、三つは頭が下がっていたが、恐らく寝ているのだろう。

彼等の前の机には、沢山の絵が記された紙と羽ペンが見える。

その中で一人起きて、黙々と何か作業をしているのは、青い髪の毛の人物 ルードだ。

彼を驚かさないように気配を隠さず、また、周囲の三人を起こさないよう、足音に気をつけながら、中へと入って行った。

彼等との歩幅、三步分程の距離になった時、気配を察して振り返ったルードに、手を挙げて挨拶すると、彼は口元に人差し指を当てた。

「周りの三人は眠っているので、静かに」と言いたいのだろう。

「わかっている」と頷くと、ルードは口に当てていた指を、自分の傍らで寝ている人物の方へと向けた。

それがアキだと、わざわざ教えてくれている 服装を見れば、一目瞭然なのだが。

彼の身振り手振りにアークはくすりと笑い、アキの傍に膝をついた。

彼女の身体をそっと抱き上げようとした時、ルードはさらさらと紙に羽ペンを滑らせ、こちらに掲げて見せた。

「アキは、病み上がりだと聞きましたが、抱えて帰るのはそれです？」

「そつだ」と頷きかけて、「少し筆談して行くか」と思い直したアークは、卓上に転がっていた羽ペンを掴み、手近にあったインク瓶にペン先を浸して、たまたま目の前にあつた、書き損じと思われる紙に文字を書いた。

「ああ。『貧血の人間に、外を歩かせる訳にいかん』って、こいつが働いてる宿の女将さんに言われてな。「抱えてくから良いだろ?」って言つちまつたから、送り迎えて俺がちゃんと抱えてたかどうか、後で街中にいる知り合いに、聞いて回るだろうよ。」

そつ書くと、ルードはぶつと吹き出し、慌てたように自分の口を手で覆った。

どうやら、話がウケたらしい。

何やらツボにはまつたらしく、こみ上げてくる笑いを堪えている様子だったため、アークは続けて文字を書いた。

「それはそつと、お前等四人は何やってたんだ? 絵を描いたものが多いが……。」

「アキから『マンガ』と言う表現方法を教わつたんですけど、それを用いて本を作るうつて話になつたんです。」

ルードはアークの書いた紙の下に、そう記した。

笑いが収まり切つていかなかったのだから、文章の先頭部分の文字が歪んでいる。

そんなに面白い話だったかどうかと首を傾げていると、ルードがこちらに一枚の紙を差し出した。

そこには絵が描かれているが、アークはその配置に目を引かれ

た。

紙面を複数の線で区切り、それぞれに人物が描かれている。

左上から右下に向かって読むものだと言うことは、線の区切り方から直感的に解った。

そして、区切られたスペースの中にいる人物は、左上から右下まで並んだスペースの中で、生き生きと動き回り、話をしている。

まるで、舞台を見ているような気分になった。

「面白いな」

「でしよう？　今、これでどんな話を書くのか、四人で考えてるんです」

「しつつかし、お前とエリックが一緒なのは、友達同士だからわかるとして、エリオットが加わったのはどう言う経緯でなんだ？」

「『文章を書くのは割と好きなんです』って名乗り出たんですよ」

「へえ」とアークは心の中で呟いた。

彼はあまり社交的ではなく、群れるのを嫌っていたように見えていたのだが　何か、心境の変化でもあったのだろうか？

その時、ふと視界に入った窓の向こうは、来た時よりも大分青味が強くなっていたので、アークは慌てて「悪い。そろそろ帰る」と書いて羽ペンを置き、アキを抱き上げた。

あまり遅くなると、アマンダが心配する。

ひらひらと手を振るルードに、「じゃあな」と声を出さずに、口を動かして伝えた後、アークは教会を後にした。

9 「別離」

(何か、足下がふわふわする)

そんな不思議な感覚と共に、亜希は目覚めた。

浮遊感だけではなく、身体の左半身と腰、膝の裏側に温かさを感じる。

実に心地よい だが。

教会にいた筈なのに、今のこの状態は一体何なのだろう？

ふとすると、また眠りに誘われそうになるのを、意思の力で抑えながら、亜希は重たい目蓋を持ち上げた。

すると、正面に……人の顔があった。

それも至近距離で。

赤銅色の髪が、時折吹く風でひらりと舞っている アークだ。

(!?)

はつとして、周囲を見ると、自分の身体の左半身は、彼の身体にもたれかかっている状態であり、腰には太い腕が巻き付き、両足を大きな手で抱えられていた。

(お、お姫様抱っこされてる……!)

それに気付いた瞬間 眠気はどこかへすっ飛んでしまった。

もしや、教会でいつの間にか寝てしまい、迎えに来てくれたアークがそのまま抱えて帰ってくれている途中だったのだろうか？

以前、どこかで聞いたのだが、意識を失っている人を運ぶのは、起きている人を運ぶよりも重いらしい。

(うわ……気付かないですつと寝てたなんて、申し訳なさ過ぎる！
ちゃんと起きて待ってるつもりだったのに、大失態だ……)

謝らないと思ひ、慌てて顔を上げると、ちょうどこちらを向いたアークとばつちり目が合った。

「あ、起きちまったか？ 悪かったな。出来るだけ揺らさないように注意してたんだが……」

「いやいや、謝るなら私の方ですよ！ 運んでもらってることにも気付かないで、呑気に眠っててすみません！」

「気にすんな。もともと、こうやって帰ることになってたしな。それに、なかなか起きられなかったのは、そんだけ疲れてたってことだろ？」

「机の上の奴、見たぞ。何か面白そうなこと、やってんじゃねえか アークの発案なんだって？」とアークは言った。

さり気なく、亜希が気を使わないように話題を変えてくれたのがわかった。

彼は優しい。

その好意に甘えて、気付いていながらも、誘導に乗った。

「はい。私の国では広く読まれている、『マンガ』ってモノなんですけど……実はあそこにあった絵の半分は、私が描いたモノで、後

半分はルードのモノだったんですよ」

「あ、じゃあ俺が見たのはお前の絵だ。ルードのタッチは知ってるからな。線でいくつかに区切られてた方だろ？ 上手いな」

アークの推測は凶星であり、褒められて、亜希はつつすら頬を赤く染めた。

「あ……ありがとうございます」

「おう。亜希にや、芸術の才があるが もしかすると、精霊魔術師に向いてるかもしんねえな」

ぼそりとそう述べたアークに、亜希は首を傾げた。

芸術と魔術に、何の関係があるのだろうか？

そう訊ねると、

「前に、魔術は『思いを具現化する』モンだつて言ったよな？ 具体的なものを想像する力』が魔術になる。想像力豊かな芸術家は、大抵、魔術に秀でていると言われてるんだ」

と返された。

「昨今、この国も物騒だからな。時間に余裕がある時にでも、教会の連中に魔術を習っておいても良いだろう 大卒の説明は、グラントとエリオット、使い方はルード、護身術としての応用方法はエリックに訊くのが妥当だと思う」

「ふむふむ じゃあ、今度彼等に会った時に、早速訊いてみます。もし、使えるようになったら、アークにも見せますね」

「……………ああ」

返事が返って来るまで、少し間があった。どこか歯切れが悪いように感じたのだが、気のせいだろうか？

訝しんでいると、アークは出し抜けに「実は」と切り出した。

「俺は……………明日からしばらく、城に籠もりっ切りになる。今、俺達がか関わってるいざこざが一段落するまで、お前や教会の連中とも会えない」

「前に、『しばらくはここにいる』って聞きましたが……………それがいいよ今日で終わりなんです」

「そつだ」

目線を逸らしながら、アークはそう言った。

「……………何だか寂しいですね。毎朝、当たり前のように食堂で会ったのに、それが明日からなくなっちゃうとは。でも、私は迷惑かけてばかりだったんで、アークは正直ほっとしています？」

「そんなことない！」

おどけて言った言葉に、アークが声を荒げたので、亜希はぎょっとした。

びくりと肩を引き攣らせたのが、身体が触れていることで伝わったのか、「……………そんなことあねえよ」とアークは声のトーンを抑えて言い直した。

怖がらせた、と思ったのかもしれない。

「俺は好きで、お前の世話を焼いてただけなんだから、気にしなくて良い。見返りを求めてやってた訳でもない」

「まあ、アキを仲間には誘って、結局、引き込んでるんだから、求めてただろ」って言われても、否定出来ないんだがな」と呟いて、アークは笑った。

その笑顔には、どこか陰があった。

「そんなこと言いませんよ　アークは最初、自分達の活動から、私を遠ざけようとしてた位なんですから、信じます。それにしても、ずっと不思議だったんですけど……どうして突然、自分の部屋に降って湧いた女に、ここまで親切にして下さるんですか？」

自分に対して彼が過保護だと感じるのは、勘違いではないと思う。

初対面で暴力を振るったとは言っても、すぐに自分の非を認めて謝罪をし、教会で治療を受けさせてくれた。

普通はそれつきりで縁が切れそうなもののだが、アークは実に良い人だった。

その後、天涯孤独の身の上である亜希を案じ、今後の身の振り方を一緒に考えてくれただけでなく、今日まで悩み事を聞いたり、陰に陽に、色々と世話を焼いてくれた。

何故、そこまでしてくれたのか？

アークは徐に口を開いた。

「俺も……自分でもよくわからねえってのが、正直なところだな」

「わからない？」

「ああ」

彼の返答は、意外なものだった。

「価値観が似てる部分が多いから、親しみを感じてるってのはわかってるんだが　世話を焼きたくなっちまう理由はわかんねえ」

「とにかく、気になって仕方がないんだよな」と呟いた後、彼は口を閉ざした。

亜希も、話を続けるための適当な話題が思い付かなかったため、それつきり宿に着くまでの間、アークの腕の中で黙って大人しくしていた。

ポンドゲグッタ亭に到着後。

この前と同様に、アークはわざわざ階段を登って、部屋まで運んでくれた。

怪我人でもないのに、そこまでしてくれなくても良いと言っただが、「ここまで来りゃ、入り口で降ろそうが、部屋まで抱えて行こうが、大した差はねえよ」と押し切られてしまったのだ。

ここまで歩いて来るのも、かなり大変だったのは間違いないだろうし、少しでも負担を減らせたらと思ったのだが、それ以外に、宿の客にこの姿を見られるのが恥ずかしいと言う理由もあった……だが、もうベッドの前まで来た今、過ぎたことを言っても仕方がない

だろう。

「よっ……と」

アークはベッド脇に腰を沈めると、壊れ物でも扱うように、そう
つと亜希を降ろした。

「あの、ありがとうございました！」

言葉と共に、自然と腰が曲がり、深々と頭を下げていた。
心からの感謝を示す際、お辞儀をしてしまうのは、日本人として
の遺伝子だろう。

それに面食らったのか、アークは少し顔を赤くしながら、

「ん……礼は要らねえよ。俺が勝手にアマンダとした約束が元だか
らな」

と述べた。

「それもありますけど、これまでお世話になったことに対する、お
礼の気持ちも込めて、です。今まで、色々ありがとうございます
でした」

「……その言い方じゃあ、まるで、二度と会えなくなっちまうよう
な感じだな」

くすりと笑われ、「そう言う訳では！」と慌てて否定したが、ア
ークはおかしそうに笑ったままでいる。

「わかってる。お互い、それぞれの場所で全力を尽くして、今の
一件で……マッシュモールの爺を権力の座から引きずり下ろしたら、

また会おう」

「はい」

にっこりと微笑んで、亜希とアークはそのまま見つめ合っていた。

その状態から、しばらく経った時。

突然、アークは亜希との距離を詰めた。

息がかかる程の至近距離に、思わず身を反らしかけたが、その瞬間、ぐっと肩を掴んで引き留められた。

「アーク……？」

困惑の色を隠さない亜希にお構いなしに、アークは再びこちらへと近付いた。

(わっ、唇がひつつ……!?)

額に、熱を感じた。

一瞬、何が起きたかわからなかった。

と言うのも、アークはすぐさま身を引いて、素っ気ない声で「じやあな」とだけ述べると、ぱっと部屋を出て行ってしまったからである。

確かに額に口付けられたと感じたのだが……自分の錯覚だったのだろうか？

いや、あの生々しい感触は、勘違いとは思えない。

しかし、あの、照れも何もない彼の様子を見る限り、ああ言った行動はこの国では、挨拶程度のものなのかもしれない。

今まで、一度もされたことがなかったが。

(ふ……深く考える必要はないよね！ た、多分、彼なりの親愛表現を含めた、別れの挨拶だったんだよ。きつと！)

そうに違いないと自分に言い聞かせながら、亜希は暫しの間、火照った自分の頬に手を当てていた。

1 「空の茶話会」

あれから食事を済ませ、風呂に入り、床に就いてしばらくした後
気が付くと、何故か亜希は椅子に座っていた。

目の前には丸テーブル。
その上には湯気が立ち上る、一杯の紅茶。

辺りを見回してみたが、まったく見知らぬ場所だ。
青い絨毯が敷かれ、傍には暖炉、奥にテラスが見える。

(あれ？ 私、寝てた筈だよね……？)

と言うことは　これは夢……なのだろうか？

紅茶は見るからに高そうな、複雑な意匠を凝らしたカップに注が
れており、置かれたソーサーの上にはご丁寧にも、角砂糖が乗った
スプーンまで置かれていた。

手持ち無沙汰で、角砂糖を紅茶に入れて掻き混ぜていると、不意
に近くで「こんばんは」と声がした。

顔を上げると、いつの間に現れたのか　妙齡の白髪女性が向か
いの椅子に腰掛け、ティーカップを持っている。

身体の一つ一つのパーツが美しい比率で並び、どこにも文句の付
けようのない容姿の彼女は、誰なのか間違いようがない。

「エルアノーラさん……毎回、気配なく現れないで下さい」

「ああ、すまぬすまぬ。長く霊体で暮らしておるせいか、人間としての自然な振る舞いが、少々抜けておるのじゃ」

エルアノーラは微笑を浮かべた。

今回は前回とは異なり、姿がはっきりと見える。

と言うことは、やはり、これは夢の中なのだろうか？

「正しくは 初対面の時と同じく、そなたは『幽体離脱中』じゃ」

亜希の思考を読み取って、そう返された。

「一応、お訊きしますけど……私、死んでないですよね？」

「うむ。しかし、どうやらそなたは睡眠と言うものについて、正しい知識がないようじゃな 人は誰しも、睡眠中は幽体離脱してあの世に来ておるのじゃぞ？」

「ええ！？」

衝撃の事実である。

聞けば、夢の一部は、睡眠中にあの世に行って見たものらしい。

それならば、実際に死んでいる人と、睡眠中にこちらに来ている人との区別はどうやってつくのだろうか？

頭にそんな疑問が浮かんだ直後、すぐさまそれを読み取ったエルアノーラが、

「頭の上から、何か糸のようなモノが伸びておるだろうか？」
と言った。

言われて初めて気が付いたが　確かに紅茶の水面には、自分の頭の上から、ふよふよと何かヒモのようなものが伸びている様子が映し出されていた。

ヒモの先を辿ると、床に突き刺さっている。

エルアノーラ曰く、ヒモの先は亜希の肉体に繋がっているのとこのことであった。

それにしても、心の中を覗かれながら話をするのは、何だか妙な気分である。

彼女は、気を利かせているつもりなのかもしれないが。何故か不快さは感じないのが、不思議だ。

「それが繋がっておる限り、その者は生きているのだとわかる訳じや」

「うっかり切れちゃったりしないんですか？」

「それは絶対にならないから、案ずることはない。身体の方が寿命になって、初めて切れるものだからの」

「あ、後、睡眠中にみんなこちらに来るのなら、ヒモとヒモが絡まったりはしないんですか？」

「お互いにすり抜けるから、問題ない」

ふむ、何だか知らないが、上手いこと出来ているんだあとと思った後、亜希は「それはそうと……今日は何のご用です？」と話題を変えた。

あの世の話も面白いものの、いつまでもこの話題を続ける訳にも

いかないだろうと思うからである。

と言うのも エルアノーラが亜希の前に姿を現す時は、いつも何かメッセージを携えているからだ。

用もなく現れる程、神様だって暇ではないだろう。

「うむ 今、我が国では教会の者達が不正を働いておるだろう？ それについて、少し言っておきたいことがあったのだ。

」と言いますと……？」

「今回の件が元で、政教分離の声が上がって来るだろう。それに注意せねばならぬ」

「それって……何か問題がありますか？」

亜希は首を傾げた。

政教分離は当然のことだと考えているし、日本では邪教集団による事件が起こったこともあったため、宗教に対して、あまり良いイメージを持っていないのだ。

「ちと、そなたの頭の中にある知識を借りるぞ」

エルアノーラはそう言うと、出し抜けに亜希の頭に手で触れる。

暫しの後、手を離すと、徐にその口を開いた。

「亜希の星には中国と言う国があるう。彼の国がチベット自治区等に対して何をしてたのか？ そなたは知っている筈じゃ。政教分離を理由に、弾圧が起きる可能性もある。信教の自由は思想良心の自由、表現の自由と、コインの表裏の関係なのじゃ。妾はそれらの自由が侵害されることを防ぎたい」

確かに、中国では宗教に対し、弾圧と厳しい取り締まりが行われており、教会や寺院等の宗教的文化財が破壊されていた。

共産党の一党独裁を維持するのに、最も邪魔なのが宗教だからである。

言われて気が付いたが、亜希の世界で宗教弾圧が行われていたのは、全体主義国家であった。

「しかし……だからと言って、教会の腐敗を許すことは出来ぬ」

エルアノーラは厳しい顔つきになって、そう言った。

「妾が残した教典を読み下せても、中身を理解している者の、何と少ないことか。言葉を曲解して、『あの世等存在せぬ』と公言する者まで、おる有様じゃ。口先の上手さだけで神父を騙り、金を巻き上げて喜ぶ等、聖職者としてあるまじき行為。心の教えを軽んじ、形式論を重んじるようになった頃から、この国の教会はおかしくなった」

「……唯物思想、ですか」

「そうじゃ。今、教会の中でそれが根を伸ばしつつある。こうして妾と会っているそなたには、それが間違った考え方であること等、言うまでもないだろうが……」

エルアノーラは、何やら興奮している様子である。

自分に端を発する組織の腐敗ぶりに、怒りを覚えずにはいられないのだろう。

「すまぬ……少し熱くなつてしまつた。神格を頂く者として、心を乱すのは恥ずかしいことじゃな」

「いえ」

「そなたに伝えたいことが、もう一つある。自分のことを柵に上げて言つのも、心苦しいが　あまり心を乱さぬよう、心がけよ」

「それは、何故です？」

「あまり心が揺れておる状態では、妾はそなたと、連絡が取れなくなつてしまふのじゃ」

「えっ……でも、この前、私が怪我を負つた時、私の頭の『チユーニング』とやらが変わつたから、連絡が取りやすい状態になつたとか、言つてませんでしたっけ？」

「それは、霊全般に言えることなのじゃ。『波長同通の法則』と言うものがある。怒り、嫉妬、名誉心等、負の感情に支配されれば、魔性の者が寄つて来ることになるつ」

「うわあ……」

亜希はコウモリの羽を付けた鬼や、お化けが自分の周りにいる場面を想像し、気分が悪くなった。

今まで一度も見たことがないので、ちょっとだけ見てみたい気がしないでもないが、わざわざ神様が忠告するのだから、危険なのだろう。

身の危険を冒してまで、会いたいとは思わない。

(そう言った危険がないようには、出来なかったのかなあ？ そうしてくれれば、苦勞が減ったんだけど……)

「それは出来ぬ　そなたの感情に規制を加えれば、そなたから自由を奪うことになってしまう」

エルアノーラはこちらの思いを読み取って、そう返した。

「……理屈はわかりますが、こちらの世界の理は厄介ですね。出来る限り、注意はしますが……」

「逆を言えば、そなたが自分を見失わぬ限り、身の安全はある程度、保障されると言うことじゃ」

「ある程度、保障される」と言うことは、「それだけでは安心出来ない」と言う意味を含んでいるように聞こえる。

エルアノーラの言葉に、亜希は一抹の不安を覚えた。

それをすぐさま感じ取ったのか、エルアノーラが再び口を開いた。

「物理的な危険から、霊である妾がそなたを守るのは、非常に難しいのだ。霊が地上に干渉するのは最小限度しか認められておらぬ故、な　なれど、そう案ずることはないだろう」

そう言うと、エルアノーラはニヤリと笑った。

「そなたは良き仲間達に恵まれておるようじゃからの　特に一つ、そなたに向かう強い念を感じるのう」

「？」

「ふふ……こちらの話じゃ。では、あまり話しては、そなたの身体が休まらぬだろうから、この辺りで終いにしよう。では、またな」

「あ……」

返事を返す間もなく、エルアノーラは姿を消した。
毎度毎度、登場と退場がいきなり過ぎる。

突然、ひとりぼっちにされてしまい、所在ないままに紅茶を飲んでしたが、段々と眠くなり。そこで、意識が途切れた。

2「知己」

目が覚めたら、ちょうど起床時刻だった。

昨夜、亜希が「一日休ませてもらったので、明日は働きたい」とアマンダを説得した結果、いつも通り、給仕はさせてもらえなかったが、自分のペースで出来るからと、一日洗濯係を任命された。まだ病み上がりだから、と心配されているらしい。

手早く朝食を済ませて、洗濯物が詰まった籠を手に、宿の裏手にある庭に出た。

ここにある井戸の水を汲んで、傍にある桶で洗い、屋根と塀の間に渡された紐に吊すのだ。

バシャツと汲み上げた水を桶に注ぎ、そこに洗濯物を放り込む。まだ早朝だからなのか、辺りに人気は無く、時折小鳥の鳴き声が聞こえる他は静かである。

手で服を揉み洗いをしながら、亜希は物思いに耽っていた。

(……仕事に集中出来ない)

原因にはおおよそ、見当がついている。

毎朝、必ず顔を合わせていたアークと、今朝は会わなかったのだ。昨日の晩か今日の早朝に、彼は行ってしまったらしい。

いつも当たり前のよう存在していたものが、急になくなると、人は戸惑うものである。

考えてみれば、こちらの世界に来た当初からずっと、彼が傍にいた。

異世界に飛ばされ、天涯孤独の身の上になると言う、とんでもない目に遭ったにも関わらず、比較的早くこちらに馴染み、今日まで前向きに生きて来れたのは、アークの存在が大きい。

大切なものはなくなつた時に、初めて価値に気付くと言うが、彼は亜希にとつて、空気のような存在であつたと言つて良いだろう。教会への送り迎え等で、アークは物理的に亜希を守るだけでなく、精神的にも支えてくれていたのである。

今は、胸にぽっかりと穴が空いてしまつたような気分だ。

この気持ちを端的に言い表すなら「寂しい」。

今まで無意識のうちに、いかにアークに寄りかかつて過ごしていったのかを、実感させられる。

(二十歳の良い大人が、こんな調子じゃダメだ)

これはある意味で、独り立ちするための良い機会かもしれない。

「ポンデグツタ亭住み込み」と言う身分ではあるけれども

(しっかりしないと)

そう自分に言い聞かせていると、ガチャリと背後で扉が開く音がした。

振り返ると狭い戸の隙間から、見知った顔が三つ、飛び出していた。

裏庭の訪問者三人は、エリック、ルード、エリオット　マンガの企画と一緒に練っているメンバーであった。

先日、病み上がりの亜希を外出させることについて、渋っていた宿の主人、アマンダに対し、アークが行き帰り共に抱えて運ぶことを約束した上で、連れ出した話を聞き、しばらくは亜希が今までのように、頻繁には教会に行けないと思っただらしい。

「亜希が自由に歩けるようになるまで、待つてはいられない」と、宿を訪ねて来たと言う。

しかし、彼等三人が現れた時、亜希はタイミングの悪いことに仕事中であった。

日本でバイトをしていた頃から、仕事に対して真面目な亜希は、「洗濯物を途中で放り出して、三人と話す」なんて真似は出来ない。

「急いで終わらせるから、ちょっと待つて欲しい」と告げると、「なら、手伝うよ。そうすりゃ、早く終わるだろ?」と言って、エリックが亜希の隣に腰を下ろした。

こちらが諾否を述べる前に、彼は腕まくりをして、籠から服を取り出すや否や、亜希の桶に手を突っ込んで洗い始めてしまった。

亜希が戸惑っている間に、他の二人も、壁に立て掛けていた桶をこちらに持つて来ている。

「あ、ありがとう……お客さんにこんなことさせちゃって、良いのかなって思うんですけど」

「そんな些細なこと等、どうでも良いんです。今は国がどうなるかと言う大事な時。僕等の計画も、出来るだけ早く実行に移さなければならぬのですから」

亜希の言葉に、エリオットが語気鋭く返す。

「お？ この前は、『じっくり内容を煮詰めないと……』とか、言
ってなかったっけ？」

「エリック、君は僕の言葉尻を捉えるのが趣味なんですか？」

「……いや、別に」

睨むエリオット等、お構いなしに、エリックは鼻歌を歌い始めた。
ルードは二人の横で、くすくす笑っている。

ブレインストーミングを始めた当初、エリックとルードの二人と、
エリオットはあまり仲の良さそうな印象を受けなかったのだが、短
い時間で随分打ち解けたものだ、と亜希は思った。

(……ほっとするなあ……)

少し前まであった心の中のざわめきが、今はすっかり消えている。
もしかすると、彼等はアークがしばらく教会には来なくなることを
聞き、亜希が寂しい思いをしているのではと、心配して来てくれ
たのかもしれない。

(私が、勝手にそう思ってるだけかもしれないけど……)

それでも、あのタイミングで三人が来てくれたことで、亜希は心
が救われたように感じたのは、紛れもない事実である。

三人が来てくれたこと、このタイミングで彼等が来るように仕向

けた、神の悪戯、自分がいなくなった後のことまで考えていたのだ
ろうか　三人に引き合わせてくれたアーク……それ等すべてに、
亜希は感謝した。

3 「宿の一室」

洗濯物が一通り片付いた後、四人は亜希の部屋に集まり、昨日の話し合いの続きをすることとなった。

教会の裏にある隠し部屋とは異なり、声が若干外に漏れる構造なので、不安になった亜希はそのことを告げた所、ルードとエリオットが魔術で『風の防音膜』とやらを張るため、心配は要らないとのことであった。

二人がかりである理由はというと、話をしながら防音膜を維持し続けることは、出来なくはないものの、意識が逸れている間、魔術の効果が薄れてしまつて危険なので、一人が話している間、もう一人が魔術の行使に専念し、安全を期するためと言う。

マンガのストーリーをどのようにするのか、今までに出た意見を集約した所、次の二つとなった。

一つは、仕事をテーマにした作品。
職業人の立場から、現代社会を見つめ、うつすら政治的なメッセージを入れてみると言うもの。

もう一つは大河ドラマ。

政治的なメッセージを込めやすいが、イデオロギー色が現代モノより強めに出やすいので、注意が必要である。

「国内情勢は、風雲急を告げているからな　書き上げるまでの時間を重視するなら、現代モノだろう」

そう、ボソリと漏らしたルードに、亜希は頷いた。

「歴史モノはまず、史料集めから始めないといけませんからね。時代考証も難しいですし……」

今まで見た大河ドラマや歴史小説を振り返ってみても、話の筋はそこそこ面白いのに、時代考証でおざなりな点が目に付き、あまり楽しめなかった作品が少なくなかった。

余計な労力を割かねばならない、と言う点において、歴史モノは好ましい選択とは言えないだろう。

「良い案だと思ったんだけどな」と、エリック。

「期限がないのであれば、僕も断然、歴史モノなんですけど、今回は、教会と政治家の癒着問題が注目されているうちに、何とか出版までこぎ着けて、世論に一石を投じたい所ですからね」

腕を組んで、そう述べたのはエリオットだ。

「じゃあ、今回は現代モノで行きます？」

大体話がまとまったようなので、そう告げると、男三人はそろってこくりと頷いた。

「時代は決まり、と……次は、主人公の職業を何にするかですね。私は外国の人間なんで、こちらの仕事については、よくわかりませんが、大きく職業を分けるなら、民間人が役人の二つでしょうか？」

「だろうな　民間人視点の方が、世間の共感を集めやすいが、役

人視点は、政治的なメッセージを込めやすいと言つメリットがある。書きやすさから言えば、役人視点だが……悩み所だな」

顎に手を添えながら、ルードが思案顔でそう述べた。

「主人公は、つい最近まで民間人だったけど、訳あって役人に轉身したって設定にしてみるの？」

エリックの提案に対し、「成程、そう言つ手もありますね」とエリオットは神妙に頷く。

「とりあえず、いくつかあらすじを書いてみては？　ずっと民間人の主人公、役人の主人公、民間人から役人になった主人公、役人から民間人になった主人公の四パターンで、ひとまず考えてみるのが妥当だと、僕は考えますが……」

さらりとエリックの主張を織り交せて、話すエリオットを見てみると、彼等の距離が狭まったと感じたのは、やはり間違っていないなかつたと、亜希は思った。

しばしば、議論の応酬をしている姿を見るものの、心の底ではお互いを認め合っている。

口を閉じて、三人の顔をただ見ているエリオットの目は「異論はないか？」と言っているように見えた。

「んー……じゃ、私はまだ、ここの役人の世界を知らないから、ずっと民間人の主人公」で！」

何となくそう告げると、「おいおい、早い者勝ちかよ！」とエリックに突っ込まれてしまった。

そう言いつつもりで口にした訳ではないのだが。

「俺は、さっき言った『民間人から役人になった主人公』にする！」

エリックは早口でそう、捲し立てた。

パターンが四つで、ちょうど人数分なので、一人が一個考えるものだと勝手に思い込み、焦っているようだ。

「なら、俺は『役人から民間人になった主人公』で」

さらりと、ルードも自分の希望を述べた。

場の空気から、エリックの思い込みが現実化するだろうと考えて、残り物を押しつけられる前に発言する辺り、なかなか抜け目のない性格をしている。

「……で、僕は余り物と。一人一個ずつ考えろと言ったつもりはないんですが　まあ、どうでも良いと言えば良いですがね」

「えっ、そう言う考えで四つあげたんじゃなかったのか？　でも、エリオットはどことなく『役人』って感じがするから、ぴったりだと思っけど」

「『どことなく役人』とは、どう言う意味です？」

「いや、何か雰囲気とか……」

「雰囲気……」

エリオットは、何やら複雑そうな表情を浮かべている。

「……役人は大きく分けて、軍人と文官がありますね。さらに部署ごとに集まる人間の性質は何種類もあるので、『役人の雰囲気』の定義を決めるのは難しい。おそらくエリオットは文官の方をイメージしたのでしょうが……」

そのうち、一人でぶつぶつと呟き始めてしまった。ぱっと見、ちょっとおかしい人である。

「おい、エリオット。俺が下らねえこと言って悪かった。戻って来い……！」

エリオットの肩を揺さぶるエリックを、ルードと亜希は生暖かい目で見守っている。

コント混じりの会話を交えつつ、四人は話の案を練っていた。

閑話「暗中飛躍」

(ふむ……噂の嬢ちゃん達は、順調そうだな)

心中でそう溢し、首都の一角にある、紫色の屋根の教会を遙か上空から眺めている、その存在は　大きな龍である。

灰青の鱗が、きらきらと日の光を浴びて輝いていた。

(さて、見物はここら辺で良いとして……仕事をするか)

龍は一つ、溜め息をついた。

と言うのも、今回の仕事は正直な所、乗り気ではなかったからである。

そのため、すぐに取りかからず、道草を食っていたのだ。

龍の仕事は、主に神の指示に従い、各自の持ち場で天候を調整することだ。

自分の任されている管轄は、この首都近郊である。

この度、神より下された命は　　暴風雨。

(近頃の人間は昔のように、素直ではないから、天候の乱れを『神の怒り』と感じる者は少ないだろうに……それでも、しなければならぬのか……)

人々が撒き散らす「想念」を見ることが出来る、神や龍の目から見れば、裏金や暗殺が横行しているこの国は、国土全体が真っ黒だ。

黒い煙の隙間から、光が明滅するのを目撃する機会もあるが、それは稀である。

私心がなく、己のことよりも他者のことについて考える時間が多くて、実際に、世のため人のために生きているような人間は、その「器」相応に光を放っているのだが、まあ、そんな人物は百人に一人もいない。

「共業」と言う言葉がある。

過去、滅んだ国にも人物はちらほらいたが、欲にまみれた者の数
が大半を占めている場合、どうしても衰退の道へと国は進んで行っ
てしまうものだ。

天災を起こすように命じられるのは、これで何度目のことだろう
か？

事態は逼迫している。

若人達の活動が希望の一灯とならんことを願いつつ、龍は天高く
駆け上って行った。

一方、城では

「エテルナ・モルグローブ議員は辞職」

一部の界限で、そんな噂が囁かれていた。

エテルナは、イルダーブ党幹事長ラスター・マツシュモールの腰巾着と揶揄されていた者達の一人である。

同党の元副幹事長が解任された腹いせに、エテルナが教会から不正献金を受け取っていた事実を暴露し、先日、事件に関わっていた神父がそれを認めたのだ。

今、馬車の周囲を取り囲んでいる連中は、その件について、何か一言、コメントが欲しいのだろう。

彼等は言うまでもないが、新聞記者である。

予想していたとは言え、鬱陶しいことに違いはない。

秘書の手を借りながら、人を押し退けて馬車に乗り込み　ラスターは一息ついた。

「マツシュモール先生、無視して宜しかったのですか？」

「ああ。私とは何の関係もない話だしね」

関係ないと告げた瞬間、秘書の顔が一瞬曇ったのがわかった。

「エテルナに、先生は随分慕われていたし、先生も可愛がっていたのに……」とでも、言いたいのだろう。

しかし、それには気付かない振りをした。

こんな事件で今、足を引っ張られる訳にはいかないのだ。

エテルナは器量良しで、金を集める才があった女なので、見捨てると決めた時には、少しもつたいない気もしたが、まあ、それだけ

である。

彼女一人いなくなった所で、そう困ると言う程のことでもない。
教会以外にも、資金源は色々あるのだ。

城で張っている新聞記者は若手が多く、正義感に燃える真っ直ぐな者もいる。

社会の木鐸を気取っているのだろうが、彼等は自分の立場と現実をわかっていない。

フリーの記者は別として、組織に属している若手記者達は、上司の意向に逆らう記事を持って行けば、当然、ボツにされてしまう。
それに対して、意見を言うなら首にされる。

自分の首をかけてまで、信念を貫けるような記者はほとんどいない。

(二大紙の内、ランディオンは俺の言いなりだしな)

インディアス新聞はこちらの圧力に対抗しているが、購読者数がさほどでもないため、少々喚いた所で問題ではない。

国益を語るような新聞は、戦後「右寄り」だと考えられ、煙たがられるようになったのだ。

(そして、そう仕向けた一人が……俺)

国会議員でありながら、ラスターはこの国　オズウェルドを嫌悪していた。

元々、かつて戦で残虐な行為をした、罪深い歴史を背負った国だと感じていたが、はつきりと憎しみを覚えるようになったのは、あ
る一人の男に対する恨みが原因だった。

(あの男が築き上げた全てを、この手で壊す)

その人物は、前オズウェルド国王アルノス・オズウェルド。

ラスターから、全てを奪った男。

愛した女性も、権力も……全てを。

ラスターに唆された息子で現国王、ユリアス・オズウェルドにより、既にその命はないが、未だ憎しみは尽きない。

復讐が達成されるまでは、あと一息。

(誰にも、俺の邪魔はさせぬ 右翼連中はエテルナの辞職に浮かれているが、馬鹿なことだ)

その裏で、着々と計画は進められている。

世論が気付いた頃には、もう、にっちもさっちも行かなくなっていることだろう。

雨が降りしきる車窓風景を眺めながら、ラスターは口の端を吊り上げた。

閑話「志操堅固」

時間と共に、窓から軋んだ音が聞こえる頻度が高くなって来た。ちらりと目をやれば、以前見た時よりも空の色は暗く、遠くの風景は幾重も重なる雨の軌跡で、ほとんど見えない。

庭の木は風が強いらしく、枝を大きく揺らしていた。

一言で外の天候を表すなら 暴風雨であろう。

(城は古い割に、造りがしっかりしているから大丈夫だろうが、城下では被害が出ている所も多いだろうな……)

アークは眉間に皺を寄せた。

今の政権は公共事業削減に躍起になっており、治水工事の中止等を早々に決めてしまったが、その付けが回って来ることになりそうだ。

被害が甚大であった場合、イルダーブ党の連中はどうするのだろうか？

次の選挙で当選することにしか関心がない者がほとんどであるため、被害者に義援金と言う名のばら撒きを行い、治水工事を中止したことに對する非難を封じ込め、支持率低下を防ごうとするだろう

と言うのが、アークの読みだ。

公共事業の一律削減には、アークは反対であった。

街道工事費用も既に三十年前の水準にまで削られているのにも関わらず、これ以上減らされては、十分な補修が出来なくなり、通れなくなる道が出て来るのは時間の問題だろう。

数年後には、耐用年数が経過した橋が三万基に達する。

人・モノの移動が制限されれば、その分、経済活動も縮小して行かざるを得ない。

また、この不景気には公共事業は、雇用対策の観点から見ても、徒に削るべきではない。

今回の削減で、いくつもの工事中止が決まった結果、建設業界は大打撃を受けている。

今回の天災が、そうしたことに多くの人々が気付くきっかけとなれば良いのだが、そうなるためには政権与党と新聞社の二つと、情報戦で戦わなければならない。

建設業界が公共事業の受注で、一部の国会議員と癒着していたことが一時期、大きく報道された結果、「公共事業悪玉論」がすっかり広まってしまったが、この件は突き詰めれば、その癒着構造が問題なのであり、公共事業を悪とするのは、論理のすり替えではないだろうか？

いつの間にか、「公共事業悪玉論」が話題の中心になり、それに絡んでいた議員のことは、忘れ去られてしまった。

ここで、巧みな世論誘導が行われていたことに、多くの国民は気

が付いていない。

彼等は今も政界で暗躍している　ラスター・マッシュモールがその筆頭である。

政府が機密費から、一部の記者や評論家に金をばら撒いていることを、アークは知っている。

暗に口封じを迫られている彼等は、与党に批判的な言論を避けようとするだろう。

民主主義国家を標榜しているオズウエルドだが、裏では言論弾圧が行われている。

現政権は、民主主義の仮面を被りながら、全体主義国家への道をひた走っているのだ。

そこまで考えて、溜め息をついた。

教会の癒着問題で、不正献金を受け取っていたエテルナ・モルグローブを追い詰めはしたが、親玉のラスターは悠々と暮らしている。

彼等の繋がりを示す明確な証拠は、見付からなかったのだ。

(……だが、打ち込む矢はまだ何本もある)

ラスターは後ろ暗いことを数多く行い、権力を握った男である。それは裏を返せば、叩けば、いくらでも埃が出ることを意味している。

そんな人物であれば、普通なら新聞の格好の餌食になりそうなも

のだが、金と暴力による脅しを受けて、ほとんどの者が口を閉ざしてしまうのだ。

(俺は、お前の脅しには決して屈しない)

アークは、暗殺者を差し向けられようが、ほとんど討ち取れるだろうと思える程には、自分の腕に自信がある。

そもそも、今の活動を始めた時点で、命など惜しくはなかったが、

ラスターの権力の源は金だ。

私兵を使って、力で人を脅せるのも、結局は金があるからだ。

彼の周囲からじわじわと追い詰めていき、その資金源を断つのが、アークの狙いである。

今の与党は自分達は不正に金を得ておきながら、赤字で財政が苦しいためと言う言い訳を使って、増税をしようとしている。

財政再建の名の下に、無駄な事業の削減を図っていると吹聴するが、自分達に擦り寄る団体の無駄には目を瞑っている有様だ。

一方で、選挙で票を得るために、補助金という名の税金をばら撒いている。

現政権が長く続けば、この国は滅茶苦茶になってしまう。

この国を立て直すためには、実質的な権力者である幹事長のラスターを、引きずり下ろさねばならない。

何が何でも、それを成し遂げなければ、この国に未来はない。

(見てろよ。俺は絶対、あんたを追い詰めてやる)

心中でそう吐き捨てた後、アークは目の前の書類に意識を戻した。

現在は、城のとある一室で計画を練っている最中であつたのだ。書類は、ラスターに体する「第二の矢」に関わるものである。

憂えていても、現状は変わりはない。

とにかく、考え得る限りのことを、一つ一つ実行に移すのみ。

頭を切り換え、思索に耽り始めたアークの耳には、窓の軋む音はもはや遠くなつていた。

4 「宮廷魔導師」

私は城下の小さな薬屋を営んでいた一魔術師に過ぎなかった。

だけど、一ヶ月前、城勤めの近衛騎士が何を思ったか、表通りの大店ではなく、裏路地にひっそり佇む私の店をわざわざ尋ねて来たのが、全ての始まり。

買った薬の効き目が良かったとのことで、騎士が仲間に紹介して回ってくれた結果、口コミで店と私の名前　カミーユ・マトリカリアン　が広まっていった。

売り上げが上がって、最初はニマニマしていたが、それだけで話は終わらなかった。

ある朝、玄関横のポストを覗いたら……オズウェルド宮廷魔術師団の印章が捺された封筒が入ってたの。

国家機関の封筒が、何で一庶民の私にいきなり届く訳!?

震える手で封を開けると、何と　宮廷魔術師団への勧誘の手紙だったものだから、私はしばらく夢を見ているんじゃないかと、目をゴシゴシ擦った。

何かの間違いだろう。手紙には「貴方」としかなかったし、きつと、私のことじゃない……と、見なかったことにして数日。

突然、どう見ても宮廷魔術師団の制服にしか見えない服を着た男の人がやって来て……半ば脅されるような形で、私は魔術師団の一員に加えられてしまったのである。

『魔術師カミーユの日記?』序章　一日目より

「……見切り発車、か」

誰に言うでもなく、ぼそりと白皙の美女がそう漏らした。

左手は本に、片手は豪華な金髪を弄くっている。

彼女の視線の先で、カミューが笑ったり、驚いたり 表情豊かに、紙の上を所狭しと動き回っている。

文字が躍っていると言うのではなく、言葉通り「彼女自身」が、だ。

目の前の本は紙面が複数の線で区切られており、その中に絵と文字でドラマが描かれていると言う、今までにない表現方法を探っていた。

先日取材に訪ねて来た四人曰く、「マンガ」と言う異国の表現方法らしい。

絵本のようだが、絵本よりも躍動感溢れ、感情移入してしまう度合いは小説に近い。

しかし、小説よりも遙かに読みやすい。

実に面白く、魅力的だ。

今頃、魔術師団内では話題になっているに違いない。

（まっさか、私がモデルだなんて、誰も気付かないでしょうけど）

取材を引き受けたきっかけは、頼んで来た相手が懐かしのアルツアード教会の者達だったからである。

幼少時、あの教会にはお世話になった。

しばらく城に身を置いた結果、用心を第一とするようになった筈なのだが、教会の名前を聞いて、警戒心が解けた。

訪ねて来た四人は初対面だったが、話してみた所、すぐに意気投合した。

気さくで、価値観もよく似ており、見た感じ、年齢もほぼ同じ位に思えた。

魔術師団の長、宮廷魔導師に就任して以来、初めて気楽に人と会話が出来た。

そして、休日の今日は、あの時にいた一人の女の子とお茶の約束をしている。

ぼんやりと友達になった子の姿を思い浮かべていると、自室のドアをノックする音が聞こえた。

青い絨毯が敷かれた廊下を、屋敷のメイドと思しき女性に案内されて進むこと、何分か。

見覚えのある 否、先日通された……と思われる部屋の前に辿り着いた。

断定が出来ないのは、この屋敷がとても大きいため、前回訪れた際に間取りをほとんど覚えられなかったことが一つ。

もう一つは、どの扉のデザインも似通っているためである。

亜希は優秀な魔術師を代々、輩出している首都エグザリオンの名家の一つ、グローウィル家にお邪魔している所であった。

メイドに促され、室内にそつと踏み入ると「アキ、久しぶり！」と鈴の鳴るような声が奥から聞こえて来た。

見上げれば、オズウェルドの民族神エルアノーラを想起させる、輝くばかりの笑顔を浮かべた、金髪碧眼の麗人の姿が目に入った。

「お久しぶりです。ローザ」

そう挨拶すると、「敬語は良いつて言ったでしょ！」と彼女

ローザ・グローウィルは頬を膨らませた。

そう言えば、以前帰り際にそう、本人から頼まれていた。

「ごめんなさ……ごめんごめん」

言い直そうとしかけて、それでもまだ気を抜くと敬語になりそうなのは、最初に彼女の役職を聞いてしまったためであろう。

魔術を扱う者を一般に「魔術師」と呼ぶが、ローザは「魔導師」

魔術師を指導する「導師」の位であり、さらに王に召し抱えられているため、「宮廷魔導師」と呼ばれている。

宮廷魔導師とはすなわち、国でもっとも力のある魔導師だと認められた人物を指す。

要するに、すごいエリートなのである。

「私も一応、つい最近まではただの民間人だった訳だし、魔術師団じゃ、私が一番若造だから、媚びへつらう要素なんて、肩書き以外に何にもないのに……」

「あ、そう言えば、ローザっていくつ？」

「二十歳よ」

「近いかなって思ってたんだけど、私と同年なんだ！ それを聞いたら、敬語が自然にやめられる気がして来たよ。私、自分と同じ年かそれより下って特定出来た上で、心が許せる相手じゃないと、自然と敬語を使っちゃう癖があるんだよね」

「親しい相手でも家族を除いて、年上には敬語を使うのが亜希のスタイルだ。」

「タメ口は家族、同い年の親しい友人、親しい後輩のみ。」

「教会の三人 エリオットとルード、エリックは二十二歳と年上なので、敬語で接している。」

「ちなみに、こちらの世界も一年は三六五日、一日二十四時間、一時間は六十分、一分は六十秒。」

「時間の進み方は地球と同じであることを、付記していく。」

「じゃあ、これで心置きなく話せるって訳ね」

「うん」

「にっこりと笑い合い、二人は席に着いた。」

5 「闖入者」

ローザが手ずから淹れてくれた紅茶を頂きながら、たわいもない会話を楽しんでいたが、途中からいつの間にか、話は魔術師団内部についてのものへと移っていた。

現在の互いの関心事が、それだからであろう。

「魔術師団に入った頃は私もまだ純粹だったから、宮廷魔導師に抜擢されたのは、能力を認めてもらえたからだって思ってたの。でも、そうじゃなかった」

そこで一度、言葉を切ると、ローザは表情を険しくした。

「私は愛想良く笑う、マスコット役で呼ばただけで、魔術師団内で何か新しい仕事をする事なんか、全く期待されてなかった訳。いや、むしろ『お前は何もするな。ただ黙って座って、判子を押してる』って空気だね。入って二日目にそれに気付いた時は、しばらく呆然としてたわ」

「うわあ……」

「でも、だからって縮こまってるのは、私の性に合わない。この国のために、自分の力を生かせるならって思って、魔術師団に飛び込んだんだからね。で、今は周りの頭が硬いおじさん連中と戦いながら、改革を推し進めてる途中」

自分の身に今まで起きた事を、何でもないことのようにさらりと話しているローザは、強い人だなと亜希は感じた。

実際はかなり大変な目に遭っている筈である。

そもそも、女性でかつ最年少と、舐められやすい要素を持っているので、指示に従わせるのも一苦労だったのではないだろうか？

そのことを訊ねると、

「魔術でちよつと脅したら、次からは少なくとも、私の言うことに頷くようにはなったわ　ま、実際に私がない場所でも指示通りにやってるかは、わかったモンじゃないけどね」
と、にこやかに返された。

その嫌に綺麗な笑顔は、彼女が今までに潜り抜けてきた修羅場の凄さを感じさせた。

「少し話は変わるけど　確か、宮廷魔導師は防衛大臣と同格だけど、有事の際は防衛大臣の指揮下に入るんだよね？」

今後のプロット執筆参考のためにと、はつきりとわからなかった組織についての疑問をぶつけてみた。

ローザはなかなか休みが取れない立場の人間であるため、聞ける時に聞いておかねばと思ったのだ。

「そうね。騎士団と魔術師団を束ねる防衛省のトップが防衛大臣で、魔術師団の長と言う立場で見ると、実質的には下になるわ。ちなみに、各団の最高指揮権は『文民統制』を我が国では謳っているため、今は内閣総理大臣が有している」

「『今は』？」

「本来は国王陛下が最高指揮官なんだけど、今上陛下は療養中でね。職責を果たせないのと、総理大臣が職務を代行する形になっている」

「ふむふむ」

「それと、注意が一つ。騎士団には陸・海・空の三つの他に、近衛騎士団が存在するんだけど、近衛だけは陛下直属で、防衛省の下には入らないの。騎士団と言っても少人数だし、基本は王族の護衛のみが任務だからね」

「了解」

頷きつつ、頭の中で組織図を組み立てる。

国王陛下（現在は内閣総理大臣が代行）

防衛大臣

防衛省

騎士団の長・ローザ宮廷魔導師

騎士団・魔術師団

宮廷魔導師と防衛大臣の地位は同格。

近衛騎士団は国王陛下直属。

……今話をまとめると、こんな所だろうか。

日本で馴染みのある役職名・組織名が出て来るが、少々異なる部分もある。

「しっかし最悪なことに、今の総理イルダーブの坊っちゃんは左のハト派だね。領海侵犯・領空侵犯されても、動こうとしないから困ったものなのよ。防衛大臣も似たり寄ったりで、国を守る気概がまるでない」

(何か他人事とは思えないような話だなあ……)

亜希がいたころの日本の状況も、こちらと同じようなものであった。

隣国がたびたび領海や領空を侵犯していたのだが、日本は警告しても、無視された際に攻撃するまでの国民的合意が形成されていないため、結局はやられ放題の有様であった。

また、「専守防衛」を謳っているため、仮にミサイル等で狙われた場合、攻撃されるまで反撃出来ないのです、何も出来ないままにやられてしまう可能性があり、亜希はそのことに強い危機意識を抱いていた。

聞けば、こちらでも日本と同様に、警告する他に何も出来ず、「専守防衛」を掲げていると言う。

不思議な一致に驚いていると、不意に部屋の扉をノックする音が聞こえた。

「ご歓談中、失礼致します　宰相閣下がお嬢様にお会いしたいとのことなのですが……」

見ると、先程のメイドの方である。

「……あの男、私の貴重な休みまで潰しに来るとは、喧嘩売ってるのかしら？　お引き取り願えない？」

「『至急』とのことなのですが……」

「わかったわ まったく、何でよりによって、アキと会ってる時にやって来るんだか……嫌がらせにしか思えない、タイミングの悪さね」

ローザは大きく溜め息をつくど、視線をこちらに戻した。

「ゴメン！ せっかく来てもらったのに、急に席を外すことになるなんて……すぐに戻るわ。この埋め合わせは必ずするから！」

両手を合わせて、心底申し訳なさそうな顔で謝られて、亜希は「いやいや」と手を振った。

「全然気にしないから、大丈夫だよ。忙しい立場だつてのはわかってるから」

「本当にゴメン。じゃあ、また後でね」

慌ただしく退出するのを見送った後、残っていた紅茶を頂いた。それからぼんやりとローザの帰りを待っていたのだが カップが冷たくなっても、彼女は戻って来なかった。

6 「今出来ること」

応接室の扉を開くと、こちらに背を向けて窓辺に佇む男性の姿が目に残った。

すらりとした体躯に、藤色の髪は紛れもなく 我が国の宰相、アベル・シュタイナーである。

ローザの手から離れた扉が閉まる際に鳴った音で、こちらの来訪に気付いたのか、振り向いたアベルと目が合った。

「『至急』って、どういうこと?」

「ボルティモアの軍艦と見られる不審船が、オズウエルド領海内に侵入しました」

「!」

アキと国防問題について話した直後に、領海侵犯が起きるとは噂をすれば影が射す、とはこのことだろう。

有事の際に、首相や防衛大臣が動かないため、国王陛下の補佐を務める宰相が出て来ざるを得ない辺り、現在の自国の安全保障体制にローザは非常に危機感を覚えた。

「甲板には十名程の魔術師と見られる者が、陣形を作っているとのことです」

「集団魔術攻撃練習しますって言わんばかりじゃない！ あいつ等、段々やるのがエスカレートして来たわね」

前までは、船でこそ偵察して行くだけだったのだが……この国が舐められていると言う、良い証拠だ。

「海上警備部隊が警告を行っていますが、無視されています」

「でしょうね」

やめろと言って従うなら、警備部隊は要らない。

「……お引き取り願えないのであれば、こちらにも考えがあるわ。現地まで行ってる時間はないから、ここから魔術を行使して、海上警備部隊の援護をする。手を貸して、アベル」

「言わずもがな」

了承の言葉を受け取るや否や、ローザは部屋を飛び出した。

魔術の行使は、規模が大きなもの程、集中力を要する。

応接室のような場所ではなく、リラックス出来る部屋に移動する方が好ましいのだ。

魔術師を代々、輩出しているグローウィル家には、それ専用の部屋が複数ある。

早歩きして着いた部屋は、精神統一に支障のないよう、不法侵入対策が施されたこじんまりとしたものだが、祭壇が設けられており、神聖な気が満ちていた。

アベルの入室を確かめた後、魔術でしっかりと扉の鍵をかける。

椅子に腰掛けた時、「ローザ」と背後から声をかけられた。

「魔術行使時、私が同席することを良しとされていきますが、常々、私のこと嫌いだと公言して憚らないのに、何故……？」

「皮肉屋な性格は嫌いだけど、信用しているから、よ　政治的な価値観は私達、すごく似ているでしょう？」

アベルとローザは、城では数少ない愛国心を持った人間である。政治的信条には一致する部分が多いのだ。

「今から部屋全体に結界を張った後、不審船に対して魔術を展開するわ。直接的な武力攻撃は、法律上不可能だから、幻影だけだね。結界の維持と、私の補助をお願い……頼りにしてるわよ、宰相さん？」

頼りにしてる、と言った際、アベルが一瞬驚いたように目を見開いた後、「……私で良ければ、喜んで」と小さく呟いた。

ちなみに、アベルは魔術師ではないが、魔術を生業としない人間でも、実は魔術師の補助をすることは可能である。

魔術とは詰まる所、「思い」を具現化するものだ。

そうであるならば、誰か魔術を行使している人がいた場合、他の者がその人の魔術に「思い」の力で手を貸したり、逆に足を引っ張ったりすることも可能であると言う訳である。

不審船の甲板で、十名程の魔術師と見られる者が、陣形を作っていたのも、複数の人間で一つの魔術を行使する方が、より強力なものとなるためだ。

二、三度深呼吸した後、ローザは目を閉じて、両の手を祈る

よりに合わせた。

一方、亜希はぶらぶらとポンデグッタ亭までの道を一人、歩いていた。

その後、メイドに何度も頭を下げられながら見送られて、屋敷を出た。

ローザは魔術師の団を率いる長の立場であり、かなり忙しい立場であることは、前々からわかっていたため、亜希が機嫌を損なうことはなかった。

今日の面会も、何とか彼女が時間を捻り出してくれたため、実現したのだ。

少しの間だけでも話せたことで、亜希自身は満足している。

地位に奢った所もなく、気さくな人柄のローザに、亜希は好感を持っていた。

自分と同年でありながら、政治の場でバリバリ働く姿に、少し憧れも感じている。

もし、彼女と同じ能力を持っていたとして、自分が一軍を率いる長の立場に就いた場合、彼女のように明るく振る舞えるだろうか？ やって見ないと実際にはわからないだろうが、嫌がらせや反発に耐え抜くだけの根性があるか、亜希には自信がない。

ローザの肝っ玉のデカさに、尊敬の念も持っている。

(……私も頑張るうっと)

バイタリティー溢れる彼女と会って、亜希は元気を分けてもらったような気がした。

亜希が元の世界に戻るためには、「この国を立て直す」と言う使命を果たさなければならぬ。

使命の大きさに最初、聞いた時は頭がクラクラしたが、同じ目標の実現に向かって日々、活動を共にしている仲間が今はいる。

漫画も『魔術師カミーユの日記』の第一巻を刊行することが出来た。少しづつではあるが、確実に前進している。

動かなければ、何も始まらない。

動けば必ず、何かが変わる。

昔、どこかで読んだ言葉がふと頭に浮かんだ。

そう言えば、エリックも似たような台詞を言っていた。

(『今のままじゃ駄目なのはわかってる。考えつく限りのことをやって、そのうち一個でも上手く行けば、儲けモン』……だったかな?)

今日ローザに聞いた話も織り込みながら、二巻のストーリーを教会のみんなと練ってみようと思いつながら、亜希は弾むような足取りで道に行く。

そんな亜希を、路地裏から見つめる暗い視線が一つ、あった。オズウェルドに伝わるエルアノラの言行録には、こんな一節がある。

陽が昇る時 魔は競い立つ。

光ある所にまた、陰も出来るのだ、と……

7 「脅迫」

大通りを歩き始めてから、五分程経った頃からである。

(何か、視線を感じるような……)

首都ど真ん中の通りで、交通量も多いため、気のせいではないのかとも思っただが、いつまで経っても、その感覚が消えないのだ。

(……気味が悪いなあ)

夜道を一人で歩いている時に、つけられている気配を感じると言うシチュエーションに比べれば、真つ昼間の今は幾分かマシに見えるが、それでも気持ち悪いことに違いはない。

大して麗しい容姿でもない、一庶民の自分をつける必要性が思い浮かばないので、被害妄想に陥っているのだと思いたい。

亜希は嫌な予感程、何故か当たるのだが……今は無視だ。

……そうしようとしていたのだが、時間と共に、ねっとりした視線を濃厚に感じるようになって来た。

動悸がする。

現在、少し雨が降っているのだが、通行人の大半が傘を差してい

るため、気配の出所がわかりにくいことが、より不気味さを増している。

無意識に早足になりそうになるのを、何とか意思の力で押し止めながら、歩く。

仮に、本当に追われている場合、ここでペースを上げるのは、得策ではないように思えるのだ。

下手に向こうを刺激せず、いかにも気付いてないかのように、のんびりした顔で歩きながら、群衆に紛れて撒いてしまおうのが、理想的だ。

人と人の間を右へ左へ蛇行しながら、縫うように歩く。

傘に引っかけたり、ぶつかることなく、するすると抜けられるのは、アークの教えと日々の訓練の賜物であろう。

こちらに来てすぐの頃に比べれば、少しは進歩した所もあるのだ。女性の割に立つ端のある自分の身体が、人混みに溶け込むことを若干難しくしている事実が、今は実に恨めしいが、贅沢は言っていない。

大柄な傭兵数人の後ろを潜った瞬間、亜希は持っている傘で顔を隠しながら、さっと小路に身を隠した。

（しばらくここで息を潜めていよう）

そう決めた直後である。

背後で突如、気配が膨れあがった。

「！」

振り向きながら、本能的に傘を広げたまま、盾代わりに構える。

「追っ手は一人とは限らないんだよ、『ポンデグッタ亭の短髪娘』さん？」

傘越しに、低い男の声がした。

傘を少し下げて見上げてみると、ガタイの良い厳つい顔の男が、口の片端を吊り上げていた。

男の言葉によれば、今まで視線を感じていた方の人物に、自分を追わせ、逃げた所をサンドイッチにして捕まえる作戦だったらしい。

「……私みたいな一庶民に、何かご用ですか？」

出来るだけ、怖い顔をして睨み付けてやった。

声を震わせないようにしたのは、精一杯の虚勢である。

平和な日本社会を生きて来た亜希に、こう言った事態に対する免疫はない。

「一庶民……そりゃあ、まあそうだろうが、嬢ちゃんは一部の界限じゃ、すっかり有名人だぜ？」

「冗談を」

「謙遜しなさんな。嬢ちゃんと教会の人間達で出した本が、巷で話題になってるじゃねえか」

「本の著者名に、私の名前はなかった筈ですが？」

そう、あの本には四人の名前を書かずに、チームで一つのペンネーム「リベルタ」と記している。

保守的な内容を書いたことで、今のように狙われる危険も考えた

上でのことだ。

「少し調べれば、わかることだ。人の口に戸は立てられねえからな」

「……成程。それで、本の内容を問題視した人が、貴方の雇い主ですか？」

「まあ、そんなトコだ」

そう返すと、男はこちらににじり寄って来た。

この距離で逃げる自信はとてもないため、話を引き延ばそうと、亜希は頭をフル回転させる。

「この国の憲法では、『思想・良心の自由』と『表現の自由』を保障していたと記憶しておりますが」

「大人の世界には本音と建前があるのさ。純真なお嬢ちゃん」

「法治国家にあるまじきことですね」

会話を交わしている間も、両者の距離は次第に縮まっていく。

「それだけ口が達者なら、頭もさぞかし切れるだろう？ 俺が何を言いに来たかわかるか？」

「本の内容を訂正しろ。そうしないなら、出版差し止めに追い込む……とか、ですかね？」

「無論、『金は払う』と雇い主は仰せだ」

(うわあ……何か、社会のどす黒い闇を垣間見た気分)

自分の人生で、金を積まれて脅される経験をしようとは、想像もしなかった。

大方、作者四人の内、女の自分が一番、脅しに弱そうだと思われるため、真っ先に狙われたのだろう。

「俺も出来るなら、女に酷エ真似はしたくねえんだよ　幾らなら、承諾する？」

「　　お金に魂は売らない。内容の訂正は拒否。出版差し止めにも抵抗するって言ったら？」

「そうになると……あんたの勤め先の宿に圧力かけるしなくなるな」

「っ……!!」

男の言葉に、亜希は唇を噛んだ。

住み込みで働く身の上で、これ以上アマンダに迷惑はかけられない。

追い詰めたと、確信したのだろう。

にやにやと意地の悪い笑みを浮かべる男を、亜希は恨めしそうに睨み付ける他なかった。

(こんな脅し一つで、屈するなんて……!!)

悔しい。

だが、返す言葉が見付からない。

ぎりぎり歯を噛み締めていると、背後に気配を感じた。
先程まで、自分をつけていた人物だろう。

「お前、遅かった……!？」

正面の男が声をかけたが、その声音は語尾に向かうに従い、小さくなっていった。

目は大きく見開いていて 何やら様子がおかしい。

「騎士団……それも、海軍の人間が何でこんなトコに……？」

「か弱い女性が脅されているのを見かけて、黙って通り過ぎる訳には行かないでしょう？」

甘い口調だが、どこか懐かしさも覚える不思議な声に振り返って
亜希は瞠目した。

白地に青い線が入った軍服の上に、赤いマントを羽織った人物の
顔は、よく知る人とそっくりだったのだ。

(アーク……?)

赤銅色の髪も、青い瞳も同じ。

しかし、身に纏う雰囲気は貴公子然としており、やや粗野な感じの彼とは正反対であった。

8 「邂逅」

「騎士さんよ。あんたも国の人間なら、見なかつた振りをしちゃくれねえかな？」

「……貴方の背後には、政府の人間がついていると言つことですか？」

「あんだだつて、今の地位を棒に振りたかねえだらう？」

騎士の言葉を否定せずに、男はそう返した。
暗にそうだと言わんばかりだ。

「はっ……この国も腐つたものですね。その台詞で今まで何人、口封じされたやら……通りで上まで情報が上がつて来ない訳だ。ああ、そうそう。私は彼女を見捨てるつもりはまったくないので、覚悟して下さい」

地位への圧力も何のその、と言つた様子の騎士に、男は狼狽した。

「おい、本当にどうなつても知らねえぞ？」

「どうにもなりませんよ。マッシュモールのジジイ等、恐れるに足りぬ」

「！ 何故それを……」

「おやおや。自ら口を割るとは。貴方、二流の傭兵ですね。今の、カマかけだつたかもしれませんよ？」

騎士の言葉に、男は顔を真っ赤にした。

この騎士……なかなか良い性格をしているようである。

「まあ、今ので黒幕がはつきりしましたね。しかし、何でみんなあの男を怖がるんでしょうねえ？ 金がなければただのおっさんですよ。貴方もどうせ仕えるなら、もっと人の良い主人を選ぶべきでしたね。あの男、用済みになった人間は、あっさり捨てますよ。邪魔になった人間は消しますしね」

騎士は「貴方も例外じゃない」と、言外に匂わせて言った。

「それは……あなたに言われなくても、薄々わかってた。初めから承知の上で、金目当てで働いてる身だよ」

「ほう」

「それはそれ、これはこれだ。俺一人やった所で、後日他の奴等が宿の方を狙うぞ。あんたが隊のお仲間になら声かけた所で、うちの主人様に逆らえるような骨のある奴なんざ、この国にや、ほとんどいねえんじゃないか？」

「私一人で何が出来る、と言いたい訳ですか。まあ、それなら望む所ですよ。何人来ようが、全部私が叩きのめして差し上げます二度と彼女に手を出そうと思わない位にね」

騎士はにこりと笑って、そう述べた。

余程、自分の腕に自信があると見える。

「その自信……あんた、何者なんだ？ それに、そこまでして守る

価値が、その嬢ちゃんにはあるのか？」

「貴方の知る必要のないことです」

急に、騎士の声のトーンが下がった。

それと同時に、瞳に剣呑な色が混じる。

急に様子の変わった騎士に戸惑っている間に、耳元で「ふっ……！」と力んだような声がした。

気が付くと、背後にいた筈の騎士が自分の隣におり、目の前の男の鳩尾に、拳をねじ込んでいた。

(速い……！)

一体、いつの間に動いたのか。

傍にいながら、動きをまったく捉えられなかった。

「少し眠っていて下さい」

騎士の呟きと共に、男の身体は地面に沈んだ。

そのまま、ぴくりともしない　　気絶したようである。

騎士は、恐ろしく腕の立つ人物らしい。

その後、気まずい沈黙が辺りを覆った。

お礼を述べるべきだとわかってはいるのだが、何と声をかけて良いのかわからない。

そもそも、彼はアークなのだろうか？

それとも、そっくりな別人なのだろうか？

どう話しかけたものかと頭を捻っていると、不意に騎士は亜希に手を伸ばし、腰を掴んで抱き寄せた。

「!……あのっ!」

いきなりの事態に、咄嗟に腕を突っ張って逃れようとしたが、さらにきつく抱き締められ、耳元に口を寄せられた。

「無事で良かった　俺がいない時に限って、何でも危険な目に遭うんだろうな、お前は」

前触れもなく変わった口調　気取らないそれは、記憶にあるものと重なる。

「……アーク……アークなんですか?」

「ああ。久しぶりだな、アキ」

穏やかな声に、胸が詰まって泣きたいような気持ちになった。

文字にしてみれば、何とすることも無い台詞だが、耳にした瞬間、包み込むような優しさを感じたのだ。

「……髪、しばらく見ないうちに伸びたな」

「そうですね?」

「本人は毎日見てるから、わかんねえのかな?　確か、前にあった時は肩についてなかっただろ?」

「……ああ、言われてみれば」

他愛ないやり取りが、何だか懐かしい。

「しかし、不用心なトコは相変わらずだな。本でペンネームを使うのは良かったとしても、狙われる危険があるのをわかっていながら、何で一人で出歩くんのだ？」

「不注意でした……返す言葉もございません」

語尾へと向かうに従い、亜希は声が小さくなった。

「こちらの世界が日本と似た部分が多い故に、日本にいた時と同じような感覚で過ごしていたのではないか？」

治安状態は、オズウェルドの方が日本よりも悪い。

一般人が普通に帯剣していたりする点からも、明らかである。

「アークと出会ってまだ間がない頃、彼から「お前は平和ボケしている」と散々言われていたのに、そのことをすっかり忘れていた。」

「今度からは、必ず誰かを同伴しろ」

「……何だかアーク、先生みたいです……」

「こっちは、心配して言うてんだよ　で、今向かってるのは宿の方か？　送ってく」

「え、良いですよ！　アーク、その格好を見るに、お仕事なんじや……」

「その帰りだ　と言うか、お前な。襲われた直後で、まだ狙ってる奴がいるかもしれないのに、一人で帰らせられる訳ねえだろうが！　それに、ついさっき一人になるなって言った直後に、一人で帰ろうとするバカがあるか！」

「あつ……ゴメンなさい」

「その辺が無防備なんだよ、アキは」

大きく溜め息をついた後、アークは亜希の手から傘をふんだくるようにして取ると、亜希の頭上に差しかけた。

「いつまでもそのままでしたら風邪引くぞ……… つつても、俺もお前ももう、びしょ濡れだけだな。まあ、使わないより使った方が良かったら」

「ありがとうございます。折角なんで、アークも入って下さい」

「俺、無駄に図体デカいから邪魔になるぞ」

「せめて、顔だけでも………」

「じゃあ、お言葉に甘えて」

そう言うと、アークは亜希の肩を抱くようにして、傘の下に頭を入れた。

（あ、そう言えばこのシチュエーションって、相合傘なのでは………）
意識し出すと、何だか照れ臭くなって来た。

同姓の友達とすることはたまにあつたが、異性とした経験はない。

（いやいや、こんなことを気にしてる場合じゃないんだ。まだ私を狙ってる人がいないとも限らない訳だし、気をしっかり持たないと

！
)

そう自分に言い聞かせながら、亜希はポンデグッタ亭へと歩を進めた。

閑話「この手に護るもの」

海上警備部隊に紛れ込み、念力で不審船からの魔術発動を押さえ込んで、追いついた後、アークは一人、街を歩いていた。

事務仕事に専念しようとした途端、特殊部隊の隊長として、出勤することを余儀なくされるのだから、なかなか思うように事が進まない。

海軍の人間に成り済ますために身に付けている軍服は、海上での小競り合いにより浴びた波飛沫と雨で、今やびしょ濡れ状態である。アークの「気」の強さを持ってすれば、服が濡れることを防ぐことは容易かったのだが、無駄に疲れるようなことをしなくても良いだろうと、ほったらかしにした結果、こうなった。

(さて、早エトコ城に戻って、残ってる分を片付けねえとな)

この数日は、気の休まらない日が続いていた。

暴風雨で、首都近郊の住宅地に被害が出ていたが、現政権の動きは非常に遅い。

七日前の夕方に騎士団から、被害の第一報が届いていたと言うのに、動き出したのは六日前の朝。

首相と防衛大臣揃って、翌朝まで呑気に寝ていたという。

平和主義を謳う政権与党は、武力を持った騎士団と言う存在を扱うのが嫌なのか、彼等に救助や炊き出し等の指示が出たのは、何と

五日前の朝だ。

被害が出て、二日後にようやく……である。

その間、何をしていたかと言えば、国会で、被災民へ補助金をいくら払うかの話し合いだ。

物事の順序を取り違えているのではないか？

騎士団が動けなかった間、アーク達特殊部隊が、地元の有志が臨時で組織した自警団と組みながら救助活動を行い、一段落したかと思ったら、今度は不審船の領海侵犯である。

息つく暇もない。

(このタイミングの悪さ、狙ってやって来たとしか思えねえ)

今の与党内部には、周辺諸国に媚びを売り、スパイに成り下がっている議員が大勢いる。

救助活動で騎士団の人手が 特に海軍が割かれていることを、売国議員伝手で知ったボルティモアが、喧嘩を吹っかけて来たと言つのが、今回の真相であろう。

(しかし、今の左翼政権を、我が国にのさばらせることになった責任の一端は、俺にある 俺には何が何でも、この国を守る義務があるんだ)

どれだけ大変な目に遭おうが、愚痴や泣き言を言うてはいられない。

過去に対する贖罪意識と、自らの立場の重みから来る使命感が、アークを突き動かしていた。

足早に城への道を歩いていたが、不意に不穏な空気を感じ、アークは足を止めた。

(……………何だ？ 今の……………)

一瞬、確かに殺気と呼ぶには弱いが、鋭い「気」を感じたのだ。
今、傍を通り過ぎた人物だろうかと振り向き 群衆の中から、
痩身の男がアークの目に留まった。

(あいつだ)

一見、細身で貧弱そうな男に見えるが、腰を沈めて歩く様はどう
見ても、裏の玄人筋だ。
誰かから依頼されて、とある人物を追っている途中……………と言った
所だろうか。

こんな所で油を売っている場合ではない筈なのだが、何となく興
味が引かれて、アークは気配を消して、その男の後をつけた。

自分の直感が、追いかけた方が良いと告げている気がしたの
だ。

後を追いつつ、男の視線の先を探る。

(くそ……………わかりづれえな)

雨が降っている中である。

痩身の男は手ぶらだが、他大勢は傘を差しているのだ。

迷いなく早足で進む男を追いながら歩くこと、暫し。

先に小路が一つ、大通りから右に伸びているのが目に入った所で、
男が足を止めた。

小路に何かあるのかと様子を窺っていると、女性らしき人物が、
辺りをキョロキョロ見回しながら、逃げるように小路へと滑り込ん

だ。

その刹那、傘の隙間から見えた姿に、アークは息を呑んだ。

この国では、ほとんど見られない女性の短髪。すらりとした体躯に、長い手足。

(……アキ……!?)

見間違いかとも思ったが、生憎アークの視力は頗る良い。

この街の女性で、あの身長に黒い短髪、象牙の肌と言えば、該当する人物はそう多くはいない。

前の男を見れば、彼女が飛び込んだ小路の方へと一直線に進んでいく。

(ちっ、させるか)

咄嗟に腰のサーベルに手をかけかけたが、男に踏み込む瞬間、その身体が地へと沈む。

男の背後から現れたのは、アキに護衛としてつけていた特殊部隊の部下の姿だった。

こちらの視線に気付いたのか、大きく目を見開いている。

「隊長!? 何でこちらへ……」

「話は後だ。そいつは頼んだ」

そう返して、小路に駆け寄り、中を覗き込むと、アキが中で敵ついで男に脅されていた。

どうやら、最初からこの辺りに追い込んで、前と後ろからサンドイッチにするつもりだったのだろう。

俺も出来るなら、女に酷工真似はしたくねえんだよ 幾ら
なら、承諾する？

お金に魂は売らない。内容の訂正は拒否。出版差し止めにも
抵抗するって言ったら？

そうになると……あんたの勤め先の宿に圧力かけるしかなくな
るな。

耳を澄ませば、大方、予想していた通りの事態になっていた。

アキ達を書いた本の内容は、例え直接的ではないにしても、現政
権への批判が散りばめられているので、遠からず圧力をかけて来る
だろうとは思っていたのだ。

正直、本を一冊出した段階で、圧力をかけて来る程、向こう側が
ピリピリしているとは予想外だったが。

(しっかし、力尽くだな。革命成就のためには、手段は選ばねえっ
てか)

アークは隙を狙って割って入れるようにと様子を窺っていたが、
男が「宿に圧力をかける」と口にしてから、アキは口を閉ざしてお
り、両者の間に沈黙が続いていた。

流石の彼女も、住み込み先の宿の件を持ち出されては、なかなか
返す言葉が浮かばないのだろう。

今、出るべきか否か、アークは逡巡していたが、アキがキツと相
手を睨み付ける目に、うつすら涙が滲んでいるのを見て取った瞬間、
いても立ってもいられなくなり、飛び出した。

「お前、遅かった……!？」

正面の男が声をかけて来たが、その声音は語尾に向かうに従い、小さくなっていった。

予想していた人物と違い、それがよりによって軍人だったのだから、驚きだろう。

「騎士団……それも、海軍の人間が何でこんなトコに……?」

「か弱い女性が脅されているのを見かけて、黙って通り過ぎる訳には行かないでしょう?」

素の言葉で話しそうになるのを堪えて、「今は育ちの良い軍人の設定だろう」と自身に言い聞かせながら、自分でも歯が浮きそうな台詞を返した。

今、この姿なのが非常に面倒臭いが、致し方ない。

視線に軽く殺気を込めて、アークは男を見据えた。

閑話「恐怖による支配」

「騎士さんよ。あんたも国の人間なら、見なかった振りをしちゃくれねえかな？」

「……貴方の背後には、政府の人間がついていると言つことですか？」

「あんだだつて、今の地位を棒に振りたかねえだらう？」

こちらの言葉を否定せずに、男はそう返した。暗にそうだと言わんばかりだ。

この様子だと、裏についているのは、かなりの権力者と見て間違いないだろう。

それも、「アキ達が出版した本の内容が広まると、非常に困る」連中の親分格だ。

「はっ……この国も腐ったものですね。その台詞で今まで何人、口封じされたやら……通りで上まで情報が上がって来ない訳だ」

「思想・良心の自由」と「表現の自由」が、我が国の憲法では保障されている筈なのだが、いつから一部の者の指示で、それらの自由が制限されるようになったのか？

民主主義国家を標榜するオズウェルドにおいて、力で無理矢理これらの自由を奪う行為は、罪深い。

「ああ、そうそう。私は彼女を見捨てるつもりはまったくないので、覚悟して下さい」

爽やかな笑顔で、自分の意思をはっきりと伝えた。

「俺は、脅しには屈しない」と。

国の人間が皆、腑抜けだと思われるのは、心外だ。

地位への圧力も何のその、と言った台詞が返ってくるとは思っても
しなかったのだろう、男はぎょつとした表情になった。

「おい、本当にどうなっても知らねえぞ？」

「どうにもなりませんよ　マッシュモールのジジイ等、恐れるに
足りぬ」

「！　何故それを……」

もしや、と思った名を挙げてみると、男はあっさり正解だと認め
た。

……恐らくこの男は、マッシュモールの手下の中でも、下っ端の
方だろう。

アキにこのレベルの者を寄越した所を見ると、マッシュモールの
中でアキは「注意人物」程度の評価なのだろう、とアークは受け止
めた。

恐らく使い捨て扱いになるであろう、男の将来を思い、何となく
哀れに感じたので、老婆心から「今のは不注意だったのではないか
？」と指摘すると、男は顔を真っ赤にした。

せっかく親切にも教えてあげたのだが、プライドを傷つけてしま
ったのかもしれない。

「……まあ、今ので黒幕がはっきりしましたね。しかし、何でみん
なあの男を怖がるんでしょうねえ？　金がなければただのおっさん

ですよ。貴方もどうせ仕えるなら、もつと人の良い主人を選ぶべきでしたね。あの男、用済みになった人間は、あっさり捨てますよ。邪魔になった人間は消しますしね」

言外に「お前も例外じゃない」と、匂わせて告げる。

マツシユモールへの忠誠心を試すつもりで、揺さぶりをかけたのだ。

しかし、男は以外にも「初めから承知の上で、金目当てで働いてる身だ」と返して来たので、アークは少し驚いた。

「それはそれ、これはこれだ。俺一人やった所で、後日他の奴等が宿の方を狙うぞ。あんたが隊のお仲間になら声かけた所で、うちの主人様に逆らえるような骨のある奴なんざ、この国にや、ほとんどいねえんじやねえか？」

アークが海軍の知り合いに助力を求めて、アキを助けようとするのではと考えたらしい。

確かに軍の人間であっても、真に気骨のある者はほとんどいないと言って良い。

その数少ない人間の多くが、アーク率いる特殊部隊に所属しているので、実際、声をかければすぐに応じてくれるのだが、それを教える必要もないだろう。

それにしても、男はアーク一人ではアキを守り切れないことを前提に話しているのが、気に食わない。

こちらら、伊達に特殊部隊の隊長は務めていないのだ。

「私一人で何が出来る、と言いたい訳ですか。まあ、それなら望む所ですよ。何人来ようが、全部私が叩きのめして差し上げます二度と彼女に手を出そうと思わない位にね」

「その自信……あんだ、何者なんだ？ それに、そこまでして守る価値が、その嬢ちゃんにはあるのか？」

「貴方の知る必要のないことです」

男が余計なことにまで興味を持ち始めたのを察し、アークは話の幕引きを決めた。

(サーベルを抜くまでもねえな)

雑念を消し、踏み込み様に拳を男の鳩尾へとねじ込む。

「っ!？」

「少し眠っていて下さい」

声にならない叫び声を上げて、男は地に頽れた。

意識を失っているか、しばらく様子を見ていたが、何の動きも見られなかったので、視線を小路の外へと移した。

程なく、アークは人混みに隠れてこちらを窺っている、特殊部隊の部下の姿を見つけた。

先程、瘦身の男を仕留めた、あの人物である。

彼にわかるように、顎で足下の男をしゃくり、「拘束して連行」するよう伝えると、頷きが返って来た。

それを確認して、「一先ず、これでこの場は収まった」と、アークは安堵の溜め息を漏らした後、傍らにいるアキへと視線を合わせた。

強張った表情を見る限り、まだ緊張は解けていないらしい。

彼女にはすぐに正体がバレるだろうと思っていたのだが、確信が持たずに戸惑っているのかもしれない。

危険人物もいなくなったので、正体を告げようとアキに手を伸ばし、腰を掴んで抱き寄せた。

「!.....あのっ!」

声をかけずにいきなりだったので、驚いたのか、アキは腕を突っ張って逃れようとしたが、ぐっと抱き込んで、耳元に口を寄せた。

この姿では、あまり大きな声で素の話し方をすると、少々都合が悪いのだ。

「無事で良かった　俺がいない時に限って、何でも危ない目に遭うんだろうな、お前は」

「.....アーク.....アークなんですか?」

「ああ。久しぶりだな、アキ」

名を呼ぶと、アキはぱつと花が綻んだような笑顔に変わ少し動悸がした。

閑話「それぞれの役割」

一方、グローウィル家では、ローザが合掌した状態で瞑想に入ってから、早二時間が過ぎていた。

（ ああ、疲れた。やっとこっちに帰って来られたわね ）

誰に言うでもなく、ローザは呟いた。

眼下にはやや青白い顔をして、瞑目している自分の姿がある。

もう何度目になるかはわからない位、経験を積んでいるものの、未だ自分と同じ姿の「それ」を、鏡越しではなく、直に見ることは慣れない。

ローザは現在、「幽体離脱」中であつた。

遠隔地に対して魔術を行使する方法の種明かしをすれば、実は、肉体から「霊」として抜けだし、現地に飛んで、そこで魔術を使っている……と言う訳なのだ。

今までこうして幾度も戦場へと飛んだが、現地に渦巻く暗い「想念」には毎度、気分が悪くなる。

軍人同士の間流れる、怒り、憎しみ、恨み等の「負の思い」は、霊体で見ると真っ黒い煙に見えるのだ。

その煙が戦場全体を覆っている中に、わざわざ突っ込んで行き、魔術を使うのは精神的にかなり消耗させられる。

肉体と言う鎧を纏っている時と比べて、ダイレクトに人々の悪意を肌で感じてしまうのである。

お陰様で、普段、多少の陰口や嫌がらせは何とも思わない位に、ローザの心臓には毛が生えている。

(……うーん、ちょっと元気が出て来たかしら?)

いつも、戻って来た時にはほっとする。

無事に任務を遂行し終えたことの他に、部屋の安定した磁場に癒されると言う部分が大きい。

天井を突き抜けて祭壇に降り注いでいる天の光が、アベルを経由し、ローザへと注がれているのが見える。

うつすら額に汗しながら手を合わせいるアベルが、必死にローザの身の安全を祈ってくれているのが、はっきりとわかる。

いつもは皮肉屋のいけ好かない男なのだが、心底心配してくれている様子を見るに、本心からローザを嫌ってはいないらしいことが窺える。

(有事の時のように、普段も優しくければ、良い男なんだけどね)

性格が悪いことを差っ引けば、アベルは実に魅力的な人物だ。

その辺の女性よりも余程顔立ちは整っているし、頭が切れる。

紳士的で正義感も強い。

密かに思いを寄せる女性は多いのだが、その空気を察すると、ことごとく冷たい言葉で切り捨ててしまうために、浮いた話がちっとも出ないのが、実にもったいないとローザは思っている。

くすりと笑った後、ローザは椅子に座る自分の身体に重なるように倒れ込んだ。

しばらくして、眠りから覚める時と同様のものを全身に感じながら、ローザは目を開けた。

背中にのしかかる倦怠感は、いつものことだ。

はあ……と大きく息を吐き、ローザは椅子に手をつけて立ち上がる。

はっとしたようにアベルが手を差し延べたが、大丈夫だと首を振った。

「今回は途中で……誰かはわからないけど、助っ人が入って、向この魔術をことごとく不発にしてくれたから、少し楽だったの。疲れもいつもよりはマシな方よ」

「助っ人……」

そう呟いて、アベルは一瞬、目を細めたように見えた。

「私に張り合う位、念力の強い助っ人さんだったわ。何者なのかわかったら魔術師団に勧誘したいくらいね」

そう　いつもは、真つ暗な戦場の中で、今回はキラキラ光る人物が一人、いた。

兜を深く被っていたために、顔はよくわからなかったが、服装から海軍のものであることはわかった。

その人物は魔術こそ使わなかったものの、凄まじい念力を使い、ポルティモアの魔術をすべて、完成半ばで叩き壊すと言う、離れ業をやったのけた。

周囲にいた海上警備部隊の者は、何が起こったのかよくわかって

いない様子であり、そもそも、そんな人物が途中で割り込んで来たことにすら、気付いていないようであったが、霊体で現地にいたローザには、よく見えていた。

念力が強い者の中には、怒りや憎しみを源に力を振るう輩もいるが、あの人物は、光を纏っていた。

霊視出来れば、わかることなのだが、心根が真っ直ぐで綺麗な者は、総じて周囲を照らして見える。

反対に、恨み等の負の思いばかり抱いている者は、黒い煙に覆われて見えるのだ。

これは、ローザの経験から言えることである。

「また無茶を……」

ぼんやりと現地の出来事を振り返っていると、ぼそりとアベルがそう漏らした。

「?……アベル？」

「無茶」とは、何を指しての言葉なのか？

首を傾げていると、「ただの独り言です」と返された。

暗に「ぼつ」として、余計なことを口走ってしまったので、今のは聞かないで下さい」と言いたいのだろう。

彼がそう言ったミスをするのは珍しいことなので、少し興味が引かれたものの、深く突っ込むのは止めた。

「あ、そう言えばアベル。今って何時位なのかしら？ さっきのやると、どうも時間の感覚が狂っちゃうのよね」

ローザの問いかけに、アベルは徐に懐中時計を取り出した。

「午後五時を少し過ぎた位ですね」

「五時！？ うそっ、二時間以上経ってるじゃないの！」

アキは待ちくたびれて、帰った後だろう。

有事の際に、緊急招集をかけられるのが当然の身の上だとは理解しているが、今回は間が悪かった。

これ位で怒る人物でないとはわかっているが、ローザは申し訳なさで胸が一杯になった。

「ああ……確か、私がこちらに伺った際、他にお客様が来ておられたようですが……」

「そうよ。さっぱりした気性で、すっごい話が合う友達」

「それは……悪いことをしてしまいましたね」

「謝る必要はないわ。あんたが私用で来たなら、蹴っ飛ばしてたけど、有事なら仕方ないでしょ？　悪いのは、ボンクラ首相とバカ大臣よ。あいつらが何されても黙ってるせいで、うちの国が舐められて、私と貴方がしょっちゅう出勤しなけりゃならなくなってるんだから」

「仰る通りで」

「あいつ等、もし今の職から退いたら、タダじゃおかないわ。私の貴重な貴重な休みをことごとく潰してくれたことは、一生忘れないんだから……」

「ローザ。お腹の中が黒くなってますよ。心を綺麗に保たないと、魔術の行使に支障があると貴方から聞きましたが……」

「これは正当な怒りよ。仕事しろって言う義憤」

「……まあ、そう言うことにはしておきましょうか」

アベルはくすつと笑ったかと思うと、いきなり子供をあやすように、よしよしとローザの頭を撫でた。

「ちよつと！ 年頃の女性に向かって何してんのよ」

「機嫌が直るかなと」

「逆効果よ！」

きいきい喚くローザを見て笑いながら、しばらくアベルは頭を撫で続けていた。

閑話「自覚」

ずぶ濡れのまま、城に戻れば不審に思われるのは間違いないので、アークは風呂場から自室に入り、「ひとつ風呂浴びた」ことにした。留守を預かっていたガラムから、「何で『気』を使って、雨を防がなかったのか」と咎められたが、「面倒で疲れるから」と答えると、呆れられた。

「途中でアキさんにお会いしたそうですが、本気で貴方一人で彼女の働く宿の警護をするつもりなんですか？ 正直、城から長く離れている時間の余裕はないでしょうに」

「耳が早いな……まあ、あの時の台詞は勢いで言っちゃった所もあったのは確かだ。けど、マッシュモールからアキが狙われてるのをわかってて、見過ごすことは出来ねえ」

アキが狙われたとわかった瞬間、予想していたことであつたにも関わらず、アークは肝を冷やした。

現に、アキにつけていた護衛の隊員が城に常駐している隊員に、マッシュモールの手下二名を引き渡し、戻って来るまでの間、アークはアキの傍からずっと離れなかった。

今回の事件は言わば、マッシュモールから売られた喧嘩だ。アークは喧嘩を売られれば、買ってやる質である。

先の件の報復で、新たな手下がアキを狙ってやってくる、男が話していたが、何も、向こうが来るのを待つこともない。

「こつちから、マッシュモールの家を警護している奴を二三人、締めに行つて『牽制』したいつてのが、今の正直な気持ちだがそんなことすりゃ、アキがよっぽどの『重要人物』だと判断されてますます狙われるのは目に見えてるからなあ……」

今は事態を静観するのが得策だと、頭ではわかっている。

だが、昂ぶる感情を抑えることが出来ずに、アークは悶々としていた。

自分に出来るのは、これまで通り、特殊部隊の部下一名を彼女の護衛としてつけることしかないのか？

「本音を言えば、アキさんの傍にいたいんですよ？ 部下に任せらんじゃなくて、自分の手で彼女を護りたい　そうでしょう？」

ガルムの言葉に、アークは息を呑んだ。

正鵠を射られた　気がしたからだ。

しかし、心の揺れは一瞬、ぴくりと眉を跳ね上げる程度に、何とか留められた。

「……何だ？　藪から棒に」

「別に　俺はただ、自分の気持ちに素直になつた方が、楽になるんじゃないかって、言いたいですよ」

「素直……」

「本当はとっくに気付いているのでは？　『気になる』だけじゃなくて、『護りたい』と思つていることに気付いた時点で、答えはもう出てるでしょっ？」

ガルムの口調はさらりとしたものだが、その言葉は心にずしりと響いた。

「じゃあ俺、ちょっと外見て来ます」

言いたいだけ言うと、ガルムは部屋を退出した。アークが頭の中を整理する時間を設けるため、だろう。

ガルムは部下だがアークよりも年上で、良き理解者の一人でもあった。

アーク自身が気付いていなかった心の奥底の思いを、ぴたりと言い当ててしまうこともあるのは、付き合いの長さからだろうか？

(……俺もまだまだ、だな)

不意に、脳裏を過ぎった言葉があった。

天下を治めたいと欲するならば、まず己の身を修めることから始め、家庭の調和を図り、国を治めるべし。天下を治めるのはその後である。

詰まる所、「一身より始めよ」と言うことだ。

君子の心得として、世に広く知れ渡っている名言である。

ガルムはこう言いたかったのではないだろうか。

「隊長が自分の心も従えられないようじゃ、国を平らげるなんて、夢のまた夢だ」と。

婉曲に告げたのは、彼の優しさだろう。

（はは…… 自覚したら、不思議と気分が落ち着いて来やがった。ガ
ルムの思いつきボみてえで悔しいが、感謝しねえとな）

アキが大切だと言う、自分の「弱み」に気付いた上で行動を起こ
すのと、無自覚なままに突っ走って行くのでは、先に待つ結果は違
ったものになるだろう。

マッシュモールは、相手の弱点を探り、その部分からじわじわと
真綿で首を締めるように攻めるスタイルを好む。

もし、「弱み」を自覚しないままでしたら、敵にあっさり食われ
ていたかもしれない。

この所、ガルムの他、ゼノやグランツから、からかうような台
詞をしばしば投げかけられていたが、どれもアークに、自分の気持
ちを自覚させるために言ったものだったのかもしれない。

（良い仲間恵まれて、俺は幸せ者だな）

心中、ぼそりとそう呟いた後、アークは机に溜まっていた書類へ
と目を移した。

1 「忍び寄る影」

明くる日の夕方。

給仕を終えて、一息つきながら亜希は頭を抱えていた。

(一人で出歩いたら危ないのは、わかってるんだけど……)

この後、教会でみんなと漫画のプロット作りをする約束をしている。

アークからは、出かける時には宿の誰かと一緒に行くように、口を酸っぱくして言われたのだが、どうも気が進まないのだ。

宿の同僚達が忙しいので頼みにくいと言うこともあるが、外部から圧力を受ける危険性のある作品を書いていることもあり、作業の現場に関係者以外の人を、むやみに近付けないようにしたいと言う理由もある。

(もし、この世界で携帯が使えるなら、それで連絡を取って、エリック、ルード、エリオットの内の誰かに事情を説明して、迎えに来てもらうよう、頼むことが出来るんだけどなあ)

元いた世界では、当たり前前のように使用していた文明の利器が使えないことに、もどかしさを覚えた。

もしかしたら、魔術を使って遠方の人と連絡を取る手段があるのかもしれないが、今それを確かめる術はない。

(やっぱり、宿の誰かにお願いするしかないかな……そうになると、どうやって外出許可をもぎ取るかが、問題だ)

アマンダは情に厚い人物である。

以前、亜希が血塗れになって帰って来た時は、血相を変えていたことを思つと、事情を話した途端、「外出禁止令」が出されるかもしれない。

しかし、仮に今日、昨日の事件のことを話さずに済んだとしても、買い出しの仕事が定期的に回って来るため、遠からず事情を説明しなければならなくなるだろう。

(うつ……困ったなあ。みんなとの約束をすっぱかす訳にはいかな
いし)

テーブルを拭きながら途方に暮れていると、「アキ」と厨房からアマンダが呼ぶ声がした。

「あなたにお客さんだよ」

客、と言つ言葉に反射的に、部屋の入り口へと視線を移すと、見知った顔がそこにあつた。

「 エリック！」

「 よっ」

視線が交わつた瞬間、彼はにかつと笑つて手を上げた。

何でここに来たのかと問うと、エリックは文房具屋で漫画を書く際に用いるインクを買って来たそうなのだが、ポンデグッタ亭が店

から近いので、立ち寄ったとのことだった。

亜希は一通り仕事を終えた後、そのままいつものように教会には向かわず、自室へとエリックを招いた。

昨日の出来事は歩きながら話すよりも、室内で話した方が良いと思ったからである。

「それ……たまたま現場に兄貴が居合わせてたから良かったものの、そうじゃなかったら、ヤバかったんじゃないか？」

「……そうですね」

「しかもその男、『後日他の奴等が宿の方を狙う』って言ってたんだろ？ 兄貴が『叩きのめす』って言ってたんなら、心配はないだろうけど、兄貴、仕事に穴開けても大丈夫なのかな……」

「そう言えば、アークってお城で何のお仕事をされているんですか？」

ふと、そんな疑問が口を突いて出た。

アークはこちらの世界で一番付き合いが長い相手だが、その人柄以外の部分を、亜希はほとんど知らないことに、今更ながら気が付いた。

「ん、俺もよくは知らねえんだけど、今は、城の中でもそこそこ高い役職に就いてるって話だ。何でも、機密事項が多い仕事だから、

詳細は話せないんだってさ。でも、いつも誰かに仕えてる訳でもなくて、ふらりと旅に出ることもあるし、不思議な人だよ。兄貴は「

「ふうん……」

機密事項が多い、と聞いて、亜希は成る程と胸中で呟いた。

言われてみれば、彼はどこことなく、自分の立場や仕事についての話を避けていた所があったように思う。

アークには、話せない事情があったのだ。

「ああ、それと『全部叩きのめす』って言ってましたけど、アークって、そんなに強いんですか？」

「強い。剣の腕は、かの『軍神』に次ぐとまで言われてる。武闘会で優勝して以来、付いた『赤の闘神』の異名は、武人で知らない奴はいねえ位だ。まあ、今は当時と容姿や雰囲気が変わったらしいから、一目見てそうだとわかる奴はあんまりいないだろうけどな」

「軍神」とは、この国の前国王陛下アルノス・オズウエルドのことを指す。

漫画を書くに辺り、亜希はざっとこの国のことについて学んだので、聞き覚えがあった。

どんな武器でも、あつと言う間に使いこなし、どんな武術もすんなりマスターしてしまったと言う、嘘のような実話が残っている人物である。

戦好きの王だったとして、忌み嫌う者も少なくないが、武芸を嗜む人間にとっては憧れの存在らしい。

暗殺者に襲われた皇后陛下を庇い、その時に負った傷が元で亡くなったとされているが、「軍神」とまで称された人物が、そう易々とやられるとは思えないと、生存説も囁かれている。

「アルツアード教会の連中は程度の差こそあれ、みんな『赤の鬪神』の手解きを受けているからな。その凄さを肌で感じてる」

「だから、みんな慕ってるんですか？」

「剣の腕だけで、じゃあないぞ。兄貴は『自分の好きなように生きてるだけだ』って言うてるけど、グランツ先生同様、憂国の士で、いつも国のことを考えてる。もちろん、憂えているだけじゃない。危機を事前に察知して、悪い事態が生じないよう、東奔西走してるんだ」

そこで言葉を切ると、エリックはひたりと亜希を見据えた。

「兄貴は一日のうち、自分のことを考える時間よりも、公を思う時間の方が長い。俺達はそんな所を尊敬してる」

「成る程……」

「そんな兄貴が唯一、大切にしている女性がアキなんだ。兄貴不在の間は、こっちでちゃんと護らねえとな」

「……へ？」

悪戯つぼく笑うエリックに、亜希は間の抜けた声を出した。

「おいおい、自覚がねえのか？……兄貴も報われねえなあ……」

「……？」

首を傾げると、エリックはわざとらしく溜め息をついて見せた。

何なのだろう？

「まあ、雑談はこれまでとして、だ。俺やルードとエリオットも、アキに護身術程度の魔術を教えただけで安心してたのが甘かったな。いくら知識があつたって、場数踏んでなきゃ、咄嗟の時にはなかなか使えるモンじゃねえだろ？」

「ああ……それは確かに。昨日は男と対峙してた時に、自分が魔術を使えるってことを、すっかり忘れちゃってました」

そう。

アークと一つ屋根の下に暮らす生活の最終日、彼から別れ際に「教会の連中に魔術を習っておいても良い」と言われたことを受けて、亜希は簡単な護身用の魔術を教わっていた。

指先に火を点したり、かまいたちのようなものを起こしたり、等である。

昨日も男と対峙している時に、その気になれば魔術で撃退することも出来た筈なのだ。

今振り返れば、あの時はすっかり動転していた。

はつきりと自分が標的にされるなんて体験は、日本でぬくぬくと過ごしていた亜希にとって、初めてだったのだ。

「情けない……私、何のために習ったのかわかりませんね」

「そんな、氣イ落とすなって。狙われるなんて経験はそうそうねえことだから、びびって当然だよ」

「マンガを描き始めた時点で、身の危険は覚悟してました。なのに、この体たらくじゃ……これから先、ずっと守ってもらうなんて申し

訳ないし、もつと強くないと……」

「アキは強いな」

自分の真情を吐露していると、エリックはにこりと笑ってそう述べた。

「強い？ 弱いじゃないですか。狼狽えて魔術も使えなかった臆病者ですよ？」

「いいや、強いさ。現実とちゃんと向き合おうとしてる。怯えて萎縮しちまってもおかしくねえのに、そうはならねえってだけで立派だよ」

「……そうですか？」

「狙った男は、『自分の後ろには、政府の人間がついてる』ことを認めただら？ 政府の要人から狙われてるって聞いたら、大の男でもびびるのが普通だよ。それなのに、脅迫された翌日も、朝から平然と仕事をしてたんだ。大したモンだぜ」

「はあ……ありがとうございます」

褒められて、何だか気恥ずかしかった。

亜希は自分を、決して「強い」人間だとは思っていない。

昨日の出来事は本当に肝を冷やしたのだ。

今日も宿に奇襲をかけられないかと、働きながら常に外を気にしていた位だ。

「しかし、こつも早く『検閲』を始めるたあ、予想外だぜ。ま、裏を返せば俺達の細々とした活動に、意外にあちらさんが堪えてるとも言えるが　さて、どうしたモンかな……」

エリックは顎に手を添えて、思案顔になった。

2「日向へ」

暫しの沈黙を破り、エリックが出した結論は「教会には行かずに、ここで待機」であった。

「宿を狙う」と向こうからはつきりと言われている以上、今ここを離れて、もし、自分達がいらない間に宿の人達が脅されたり、人質にされたりしては、寝覚めが悪すぎる……と言うのが、理由である。

「まあ、ルードとエリオットも俺達がいつまでたっても来ないとなりや、向こうから押しかけて来るだろ」

「ですかね」

「あいつ等なら、そうするさ。仕事がまだ終わってないのかなって、俺とお前がいそうなとこに顔出すに決まってる。マンガの続きを早く書きたくて、うずうずしてるだろうからな」

エリックは笑いながら、そう述べた。

その後、体内時計で三十分と経たない内に、エリックの予想が正しいものであったことが証明された。

「なかなか来ないから、仕事かと思って覗いてみたら……何二人で寛いでるんですか」

不機嫌さがありありと表れた台詞を述べた声の主は、エリオットだ。

扉の前で腕を組み、仁王立ちになっている姿は、妙に迫力があつた。

何の断りもなく、約束を破ったのにその態度か、と怒っているの
だろう。

鋭い眼光が射るようにこちらを睨んでいる　少し、怖い。

「悪い。こつから動けなくなった事情が出来たんだよ」

どう経緯を説明しようかと悩んでいると、エリックが口火を切つてくれた。

エリックのさり気ない優しさに、心の中で謝意を述べる。

「事情？」

「アキが昨日、マッシュモールの傭兵に脅されたんだ。『本の内容を変える。いやなら出版差し止めにする』ってな。で、その傭兵が後日、この宿を狙うって宣戦布告したらしいんだよ」

「脅された！？　怪我はなかったのか？」

それまでエリオットの背後で、一人静かに壁にもたれていたルー
ドが、突如血相を変えて、亜希に詰め寄った。

ぐっと両手で掴まれた肩が少し痛い、本気で心配されているの

がひしひしと伝わって来たので、胸が温かくなった。

「たまたま近くをアークが通りかかって、助けてもらったんで、無事でした」

そう答えると、ルードとエリオットは揃って息をついた。

「しかし、宿の人達が人質に狙われているとなると、しばらくはアキの部屋で作業するべきでしょうね。もし、向こうが襲って来ても、すぐに応戦出来るように……」

エリオットの言に、亜希は頷く。

自分達の活動が、宿の人々を危険に晒すことになったのは、紛れもない事実である。

プロの傭兵からすれば、亜希達は取るに足りない存在かもしれないが、全力で宿の人々を守る責任があるのだ。

「思ったんだけどさ、俺達が執筆活動を続ける限り、嫌がらせはずっと続くよな？ だったら、宿の人に経緯をちゃんと説明して、理解を得るべきだと思うんだ。で、あえて大々的に活動する」

「大々的に？」

思い詰めていた所に、横からエリックが思いもかけない台詞を投げて来た。

宿の人々を危険な状態に置いておきながら、大々的に活動するなんて、何てことを言い出すのか。

「ああ。そうすりゃ、かえって手が出しにくくなるって思うんだ。

コソコソやったって、狙われるてることに違いがねえんだし、どう

せなら派手にやったら良いんじゃないか？」

「確かに、コソコソしようが派手にしようが、狙われていることに違いはないですけど……」

「だろ？ それに、どのみち宿の人達に事情は説明しなきゃいけない 事実、既に狙われているんだからな。もちろん、宿の人達に巻き込んだことについては、みんなで謝る そこから先はもう、逃げも隠れもしないでいようぜって、俺は言いたいんだよ」

「正々堂々、迎え撃つ……と言うことですか？」

エリオットの問いに、エリックは頷き返した。

「ああ」

「言葉で言うのは簡単ですが、実際に応戦するとなると、プロの傭兵相手に素人の私達がどれ位やれるかは、わかりませんね」

「素人……まあ、実戦経験が足りないって意味では、素人だな」

ルードがそう言った後、突然くすりと笑ったので、亜希は首を傾げた。

「そうですね」

「……だな」

続けて、エリオットとエリックの口元にもうっすら笑みが浮かんだ。

何なのだろうか？

「あの……『実戦経験が足りないって意味では、素人』と言うことは、その点を除けば、皆さんの腕っ節の強さは、玄人と言っても遜色ない……と言うことですか？」

聞いた言葉から推測したことを述べると、エリックはにやりと笑って見せた。

「アルツァード教会の連中はみんな、『赤の闘神』の手解きを受けてるって言ったろ？」

3 「理解」

その後。

まずは、宿の女主人であるアマンダに、これまでの経緯を話すことになった。

今は、四人で階段を降りている所である。

亜希はともすると沈みそうになる自分の心を、必死に奮い立たせていた。

脳裏を過ぎるのは、苦い過去。

古くからの友人に、国を守るために活動していることを打ち明けた時の、冷たい視線が目に見えぬ。

政治のことなんか、お役人様達に任せておけば良いじゃん。短い人生なんだから、人のことを考えるより今を精一杯楽しんで、自分のために生きた方が良いんじゃない？

国のためとか、人のためって言うて活動している人達がいるけど、どれも自己満足のためにやってるとしか思えないんだよね。そう言うのって、偽善なんじゃないの？

……自己満足、偽善……

親友だと思っていた相手から、思いも寄らない言葉を投げかけられて、ショックを受けた過去が、亜希の恐怖心を呼び覚ます。

自分の思想信条、国のために行っている活動を、知人に打ち明ける度に、あの時のことを思い出してしまう。

もちろん、自分の心の丈を話して理解を示してくれた人も、これまでに何人もいるのだが、それでも、話す前には、世の大多数の間は、旧友と同じような考えを持っているのではないかと、マイナス思考に駆られるのだ。

(……話す前にブルーになるのは、もうお約束だし)

もう、何度も経験していることだ。

いい加減、慣れなければ。

傷付くことを恐れているのは、何も出来ない。

「アキ？」

声をかけられ、はっとして顔を上げると、エリックが心配そうな表情でこちらを見つめていた。

恐れ、心の迷いが面に表れていたようだ。

「ん、何ですか？ エリック」

努めて明るい声に笑顔でそう返すと、「いや、何でもない」とエリックは呟いた。

亜希が心の奥に踏み込ませまいとしたのを察したのだろう。

心の動揺に気付かない振りをしてくれたエリックに、ほっとした。

彼を含め、エリオット、ルード　ここにいる三人は、人の心の変化に、割合敏感だ。

相手の心の奥底に、土足でずかずかと上がり込むような真似はし

ない。

今日まで大きな問題もなく、彼等との関係が続いているのも、こうした点が心地好く感じるからかもしれない。

(心配してもらってるようじゃダメだ。しっかりしないと)

自分自身にそう活を入れると、亜希は扉越しにアマンダを呼んだ。

「あの話題の本 『カミーユの日記』だっけ？ それを描いてるのが、まさかあんた達だとはねえ……で、その本の内容が元で脅しを受けていて、作者の一人であるアキが働いてるこの宿が狙われている……と？」

「こちらのいざこざに巻き込んでしまい、申し訳ありません。住み込みで働かせて頂きながら、恩を仇で返すような真似を……」

そう言って亜希が頭を下げようとすると、アマンダに肩を掴んで止められた。

「ちょっと待ちな。いきなり本の内容にけちつけられて、内容の改変か出版停止を迫られるなんて、前代未聞な話だよ。誰にも予想出来なかった事態だろうから、仕方ない。そうだろう？ でも、ちよこつと中身を変えるってのは、やっぱり作者として認められないものなのかい？」

「……はい。圧力をかけられた部分こそ、私達が世に訴えたかった

「ことなんです」

「世に、訴える？」

アマンダは驚いたような表情を浮かべた。

「ええ。あの物語自体は僕達の創作ですが、間に挿入されたエピソードの一つ一つは、実話なんです。それが広まっては困る人達一人に、僕達は脅されたと言う訳です」

亜希の後ろに控えていたエリオットが、ずい、と前が出る。

「……例えば、どの部分が実話なんだい？」

「それをお教えするのなら、実際に本を見て頂きながらの方が、わかりやすいでしょう。どうぞ」

エリオットはにこりと微笑むと、懐から『魔術師カミーユの日記？』を取り出して、アマンダに手渡した。

彼は空いている時間に書店への売り込みも行ってきているのだが、そのために常に携帯しているのだとすれば、大した商売魂である。

『魔術師カミーユの日記？』のあらすじを述べてみよう。

城下の小さな薬屋を営んでいたカミーユは、口コミで評判が城まで広がり、オズウェルド宮廷魔術師団の一員に加えられる。

もともと生業にしていた薬作りを、魔術師団でも担当することになり、当初恐れていた国境付近の警備や、諸外国への派遣等もなく、思いの外穏やかな生活をしていたカミーユであったが、ある日、城の渡り廊下で不吉な話を耳にしてしまう。

オズウエルドは消える、と。

馬鹿馬鹿しいと初めは思っていたが、その後、次第にカミーユはそれが現実のものになるのでは、と言う危機感を募らせて行った。

領海と領空を侵犯されても、一向に出されない出撃命令。
報道されない事件の多さ。

反オズウエルド活動を行っていた人物を大臣に登用する、不可解な人事……等々。

国の侵略を防ぐべく、何か出来ることはないかと考えていた時、カミーユは驚くべき現場を目撃する。

カミーユを魔術師団に引き入れた魔術師団長補佐が、隣国の要人と密会している所を……

4 「伝えたい真実」

「……とまあ、一巻の内容はこんな所です。この物語のように、我が国も、隣国ボルティモアに領海領空の侵犯をされるがままで、政府は弱腰。ボルティモアとの経済的な結びつきを維持したいと言う、財界の意見に押されて、事態を静観するように呼びかけるばかりです」

ふう、とエリオットは溜め息をついて見せる。

「近年、ボルティモアに進出するオズウェルドの商売人が多いってのはよく聞くからね。冷静な対応を呼びかける形になっちまうのは、仕方がないんじゃないかい？」

「しかし、そうも言っていられない状況なんですよ。ボルティモアは本気でこの国を狙っているんです」

「心配し過ぎなんじゃないかい？ 隣の国がそんなに物騒なら、議員さんや新聞社さんがもっと騒いでいるだろう」

危機感も露わなエリオットと、そんな彼の姿を不思議そうに眺めるアマンダ。

亜希には二人の姿が、かつての自分と旧友を想起させた。

ボルティモアを中国に、オズウェルドを日本に置き換えれば、話

している内容自体はほとんど変わらないと言っても良い。

(ところがオズウェルドのマスコミは、腐ってるんだよね……日本と同じように)

近隣国と安全保障上、問題を抱えており、経済的に依存し合っていると言う点で、日本とオズウェルドはよく似ている。

日本もオズウェルドもデフレ真っ只中だ。

安く商品を売れなければ、店が潰れてしまう。

人件費の安い中国　オズウェルドにとってはポルティモアで物を作り、それを輸入して安売り合戦で何とか生き残る。

そのために、向こう側を刺激しないよう注意すべきである。

そう言った空気が財界、マスコミには蔓延している。

この論理を掲げると、領海や領空侵犯に対して、毅然と言い返すような政権が出来るか、取引に悪影響を及ぼす恐れがあるので、困ることになってしまう。

極端な所まで行けば、島一つ取られても「大したことはない」で済まされてしまう危険性がある。

今の日本とオズウェルドの政権も、外国に対して強く物を言えない所を見るに、この論理にかなり引き摺られているのだろう。

また、この国の新聞社が、ボルティモアの横暴を控えめにしか報道しない理由は、他にもある。

「アマンダさんの疑問はもっともでしょう。これは一般にまだあまり知られてはいない話なのですが……かつてオズウェルドはボルティモアと、記者交換協定と言うものを結んでいます」

「記者交換協定？」

「そこで、オズウェルドはボルティモアを敵視するような報道をしないことが定められています。これは言い換えれば、ボルティモアにとって、都合の悪い報道はしないと述べているも同じです」

「だから、新聞にボルティモアがこの国を狙っていると言う話が載らない、と？」

「ええ その通りです」

エリオットは厳めしい顔で頷いた。

「相対するアマンダも、話し始めた当初より、真面目な顔付きになった。」

「成る程、あんた達が危機感を持つてる理由が、少しわかったよでも、一つわからないのは、一体どこからそう言う情報を仕入れているのかって所だ」

アマンダが不思議に思うのも当然だろう。

今、エリオットが語った事柄は、一般には政府とマスコミが一緒になって規制しており、出回らない話なのだ。

「一つは僕の家ですね。僕は実はクラウドザー商会の人間でして、政府の情報も少しばかり耳に引つかかるんですよ」

「クラウドザー……って、あのクラウドザーかい？」

「おそらく、そのクラウドザーです」

驚くアマンダを見て、おかしそうにエリオットは笑った。

実はエリオットは、豪商クラウドザー家の一人息子なのだ。

仕事と跡継ぎの勉強の傍ら、アルツァード教会に通っている。

クラウドザーの人間として、表に出ることはあまりないため、一般にその容姿は知られていない。

また、その名字もよくあるものなので、街の人にはほとんど気付かれないと言う。

両親は昨今数少ない、保守的な人物であり、政府の要人とのパイプもいくつか持っている。

この度のマンガ出版も、彼等の援助があつてこそだ。

彼等の他、情報源には宮廷魔導師のローザ、グランツ神父伝手に情報を送ってくれるアークとゼノがいる。

「真実を知ってしまった以上、何もしないではいられませんでした

僕とここにいるアキ、エリック、ルード……アルツァード教会全員がそうです」

「国会議員、新聞社の上層部……至る所にボルティモアのスパイと、

彼等に擦り寄り、私腹を肥やそうとしている輩がいる」

エリオットに続いて、ルードが口を開いた。

「この危機を一人でも多くの人達に知らせるために、俺達は本を出版したんだ。時の政府に直接意見するようなものじゃ、あつと言つ間に潰されるのは目に見えてたから、『娯楽』と言つ婉曲的な形でだけどな」

次に声を上げたのはエリックだ。

その後、三人からちらちらと視線を向けられるのを感じて、「締めが私で良いのかな」と思いながら、亜希は口を開いた。

5 「若人の志」

「この度、ポンデグツタ亭の皆様を巻き込む形となってしまうたのは、一重に、身辺に対する警戒を怠り、隙を見せて向こうの術中に嵌った私に責任があります。今後、相手が危険な手段に訴えて来ないとも限りません」

そこで言葉を切ると、亜希は床に膝をついて、アマンダに頭を垂れた。

周囲がぎょっとしているのが、目に見えずとも空気で伝わって来る。

当然だろう　いきなり土下座をしたのだから。

（あ、そう言えばこちらには土下座の文化はない可能性をすっかり忘れてた。もしなかったら、みんな何やってんだって驚いてるんだらうなあ）

事に及んだ後、ふと、その可能性があることに気付き、自分の間抜けさに心中で苦笑する。

とにかく、きちんと謝罪をしなければと思っていて、亜希は無意識にこの行動を取っていた。

「私は皆さんに罵られて、蹴っ飛ばされても仕方がないでしょうし、宿をお払い箱にされても当然だと思っています」

「アキ……」

戸惑ったようなアマンダの声が、亜希の名を紡ぐ。

「しかし、これだけは信じて欲しいんです　私達はこの国を守りたい一心で、決起したのだと……その思いに偽りはありません」

偽りはない　これは亜希の本心である。

教会の皆と活動を始めた当初は、「自分の世界に帰りたいから、彼等の活動を手伝っている」と言う意識があつたことは否定しない。だが、危険を顧みずに行動する彼等と、日本とそっくりな危機的状況に置かれたオズワールドを見る内、いつしか他人事とは思えなくなり、自分が帰ること等、二の次になっていた。

(私は、この国が好きだ。日本に次いで……いや、同じ位に)

そのことに気付いたのは、先日脅された直後だった。身の危険を感じながらも、向こう側の要求を呑もうとは思わなかったのだ。

最悪、死んでしまつては、元も子もない。

国を立て直すのに、わざわざ目立ったことを続ける理由等なかったにも関わらず、だ。

「逃げる」と言う選択肢が浮かばなかったことに気付いた時、「ああ……私はもう、帰ることなんか、ホントはどうでもよくなってるんだな」と自覚した。

今となつては、以前、教会の書庫で「絶対に元の世界に帰る」と強く願っていたことが、はるか昔のことのように思える。

そんなことを考えていると、「一つ……私にはわからないことがある」とアマンダが呟いた。

「アキはこの国の人間じゃあないだろう？　なのに、何でそこまで一生懸命になれるんだい？」

「皆さんと一緒に過ごす内に、この国が好きになっていったから……
と言う理由だけでは、いけませんか？」

「だからって、狙われてまで、続けるのかい？」

「酔狂と思われるでしょうが、動かすにはいられなかったんです」

「動かすには、いられない？」

「はい。祖国と似た状況に置かれているオズウェルドを見て、
他人事とは思えなかったんです。こちらに来てまだ数ヶ月ですけど、
今では祖国と同じ位、この国が好きになったので……」

正直に、思いの丈をぶちまける。

もし、「祖国とはどこだ」と問われれば、口を嚙まざるを得ない
とわかっていながらも、だ。

ここでそんな小さなことを気にしては、アマンダに自分の
思いが伝わらないと、亜希は直感していた。

その時、ふと、幕末の志士、吉田松陰の言葉が思い浮かぶ。

至誠神を感ず。

真心は神様さえ、感動させるものである、と。

そう、真心。

これをぶつけることが、今唯一、亜希に出来ることだ。

結局の所、どれだけ言葉を重ねても、こちらの気持ちに相手に届
けられなければ、何にもならない。

部屋に沈黙が降りる。

ピンと張り詰めた弓の弦の如く、緊張した空気が広がっている。

未だ、亜希は叩頭した姿勢を崩していないので、アマンダの表情はわからない。

それから暫しの後　ふわりと肩に手を置かれたのが感触でわかった。

「……負けたよ」

「はい？」

ポツリとアマンダが呟いた言葉の意味がわからず、思わず声を上げると、彼女はくすりと笑った。

「あんた達の熱意に負けた。恐れ入ったよ。この宿が狙われてることなんざ、もう、どうでも良いような気になって来ちゃった……これじゃあ、女将失格だねえ」

「アマンダさん……？」

「最初、話を聞いてた時は、半信半疑だったけど、あんた達の真剣な態度を見てたら、嘘とはとても思えなくなった。今はむしろあんた達に手を貸したい気持ちさ。オズウェルド人として、お国のために出来ることがあるなら、何かしてみたいってね　だから、好い加減顔を上げておくれ、アキ」

「……ありがとうございます……!!」

許して、理解してもらえた　　気持ち伝わった。
歡喜に、胸が打ち震える。

促されるまま頭を持ち上げると、穏やかな面持ちのアマンダと視線が交わった。

その刹那、彼女の口角がきゅっと上がった。

「あんた達は、正しいことをやってるんだろう？　だったら、自分達の活動にもっと胸を張りな。大っぴらにした方が、お上も手が出しにくくなるってモンさ」

「しかし、宿にますます危険が……」

「それは気にしないで良い。ここの従業員は血の気が多くて、腕の立つ人間も少なくないからね」

そう言って、にやりとしたアマンダの表情は、亜希の目にひどく魅力的に映った。

閑話「暗雲」

オズウェルドの首都、エグザリオン。

その中心に位置する城の一室に、二人の人物がいる。

アークとゼノである。

「お前が掴んだ情報は？」

「特に変わった物は何も。増税論の再燃位か」

「そいつは知ってるさ……国民の関心が薄い内に、何とか通そうって肚なんだろうが」

そこで言葉を切ると、アークは溜息をついた。

社会福祉の立て直しを図るための増税だと言うが、はたして効果はあるのだろうか？

オズウェルドは消費税を導入しているが、実は当初から、社会福祉の財源を確保することが目的であった。

しかし、導入後に「社会保障が充実した」と言う声は全然聞こえて来ない。

その後、税収自体もほとんど変化がなかったことを思うと、増税の効果には疑問符が付く。

また、増税後にオズウェルドは何と、不況になってしまったのだ。今、国民が苦しんでいるこの時期に、再び増税論を持ち出す与党が理解出来ない。

「ボルティモアの領海侵犯事件後、マッシュモールが目立った動きを見せていないのが気になるな」

心中で現政権に悪態を吐いていると、ぼそりとゼノが呟いた。

「ああ。この前の不正献金事件で今も関与が疑われていて、それがきっかけで支持率がガタ落ちになったにも関わらず、涼しい顔だしな」

与党内でも、幹事長ラスター・マッシュモールに対し、先日的事件について、まだ国民に説明が足りないのではと言う声も出ている位なのだが、本人は他人事と言った様子だ。

「余裕の裏には、順調に進んで行っている計画があるからか……俺はそう思えてならないんだが、その企みが何なのかを読めない」

ゼノは顎に手を添えながら、続けた。

「在オズウェルド・ボルティモア人が増え続ける中での外国人参政権導入や、ボルティモア大使館の地方誘致は、ボルティモアが売国議員を使って侵略の足がかりを作るうって魂胆が見え見えだったから、こつちもすぐに阻止に動けた。これ等が周りの反応を試す物だったとすれば、次にマッシュモールが出て来るのは、わかりにくそうなる形にするだろうな」

「この国を危機に陥れる危険性があるが、まだほとんど誰も気付いていないものは何か……」

中央で目立った動きがないとすると、舞台は地方だろうか。

国会で狙った法案が通らないと見ると、まず、地方議会での成立を画策し、複数の自治体で通した後、再び国会で法案を提出する
と言う例が近年、しばしば見られるのだ。

(いや、危ないかわからないと言うより、良いもののように見えるものとすれば?)

そう思い浮かんだ瞬間、ふと、アークの脳裏に数人の地方領主達の顔が過ぎった。

「……くそ、盲点だったな」

「アーク？」

「ブリジアン領主と至急連絡を取れ」

一人の領主の名を告げると、ゼノの顔色が変わった。
こちらの考えに気付いたのであろう。

「改革派領主の筆頭　マッシュモールが利用しようとしているのはまさか……」

「そのまさか、だ」

そう返したアークは、苦り切った表情を浮かべていた。

地方領主達が民の為を思い、情熱を注いでいる政策が、もし、国を危くするものであったなら……？

彼等を説得するには、かなり骨が折れるだろう。

何故なら皆、信念を持って活動しているからだ。

身の危険を顧みず、名誉心もなく、地位や金にも興味がない人物は、始末に困る。

こうした人間でなければ、大事はなせないものだが、一度意見を違えれば、これ程、説得が難しい相手はいないだろう。

(しかし、何としてでも、改革派筆頭のブリジアンを理解を得なければ、マッシュモールの思うツボだ)

小手先の策が一切通用しない相手であれば、真っ正面から議論する他ない。

一気に視界が暗雲に遮られたような思いだが、頭を抱えていた所で、事態は何も変わらないのだ。

アークは今後の方針について、自分の思う所をゼノに対して話し始めた。

6 「黒い客人」

お昼を少し回り、食事客の数も少し落ち着いた時に、ふらりとその人物は現れた。

注文を取りに席に向かった亜希に、彼は開口一番、こう告げた。

「こんにちは。ここで、『魔術師カミーユの日記』の作者『リベルタ』が働いてるって聞いて来たんだけど、それって君？」と。

「はい。正確には、『その一人』ですが」

「ああ、それは知ってるよ。僕はあの本のファンだからね。しかし、あっさり認めるんだね。最近は僕みたいな手合いが多くて大変じゃない？」

「それは否定しませんが、作者目当てでお客さんが増えて宿が儲かるなら、まあ良いかなと。それに、あえて正体を大っぴらにした方が、お上から狙われにくいかなって計算もありますけどね」

そう。

あれからエリックの言うように、自分達が作者であることを隠さないようにしてから、身の危険を感じることは、ほとんどなくなったのだ。

社会的に広く認知されるようになったことで、容易には手を出せなくなっただけ。

代わりに、鳥の死体を宿の前に置いておいたり、脅すような手紙がポストに入っている等の嫌がらせがしばしばあるが、そんなものは痛くも痒くもない。

「ふふ……噂に聞く通り、肝っ玉のデカイお嬢さんだ　ああ、コ
ーヒーを一杯頂けるかな？」

男は思い出したように、注文を口にした。

サングラス姿で表情は判然としないが、その声からは笑っている
ように感じられた。

飲食は二の次で来たのだなと、よく分かる。

あからさまに作者目当てでやって来て、何も注文せず、宿に泊ま
りもせずに帰るのは気が咎めるので、一応頼んでおくと言った所だ
ろう。

最近是这样言った注文が多く、飲み物がよく売れる。

亜希は「畏まりました」と頭を下げつつ、心中で溜息をついた。

厨房でカップをお湯で温めながら、亜希は棚の隙間から男の様子
を窺っていた。

背が高く、細身でモデルのような体型だが、まくり上げられたシ
ヤツから覗く腕は引き締まっており、ひ弱な感じはしない。

茶の髪は亜希から見て左側を横に流し、右側は後ろに撫で付けら
れている。

一見すると短髪に見えるが、よく見ると、後ろの髪は伸ばしてい
るらしく、うなじの辺りで結ばれている。

そこから細く伸びた毛は、肩から胸元にまで垂れ下がっていた。
なかなか斬新なヘアスタイルである。

黒いシャツに黒い皮のズボン、黒いサングラスと、髪の毛が茶色であることを覗けば、ほぼ黒一色の姿は異質だ。

ちよつと危ない雰囲気か漂っているのだが、話してみると、気さくで穏やかな気性の人物であり、そのギャップからか、「変わった人」と言つ印象を亜希は持った。

(何か、ゼノさんと初対面の時のことを思い出すなあ……人目を引く装いと言ひ、怪しい雰囲気と言ひ……)

彼は本のファンだと語っていたが、果たしてそれは嘘か真か？

これまでファンを自称して訪れた客は、皆、やや興奮した様子だったが、あの男は落ち着き払っている点が気にかかる。

微かに警戒心を抱きつつ、亜希はコーヒーを盆に乗せた。

「『リベルタ』さん。少し、本についてお話を伺つても？」

コーヒーカップが空になって、少ししてから、男は声をかけて来た。

さあ、来たぞと亜希は気を引き締める。

「はい、構いませんよ。そもそも、それが目的でいらつしやっただでしょうか？」

「まあね。じゃあ、遠慮なくお話させてもらおうかな　ああ、ご主人！　しばらく彼女をお借りするよ」

突然、男はぱつと手を挙げ、大きな声で厨房に向かってそう告げた。

彼の視線の先を辿れば、女主人のアマンダがいる。

彼女にわざわざ知らせた所を見ると、心ゆくまで話すつもりなのだろう。

ファンの対応をしている間、亜希は仕事が出来ない状態になってしまうことが心苦しいが、アマンダは「売り上げが増えるんだから、良しさ」と笑って許してくれている。

男の気の使いようを見てみると、客足が減る時間帯に訪れたのも、狙ってのものかもしれない。

「じゃあ早速だけど、今後の展開について……」

「はは……それはバラせませんよ！ ダメ元で訊いてます？」

「ええ。読者として、先が気になって気になって仕方ないので、つい……ね。内容があまりに生々しいんで、実態に基づいて書かれているとか、あの本の内容は未来の出来事を暗示しているんだって、言ってる人もいるけど、その点は？」

「否定しません 昨今は新聞社が『表現の自由』を盾に取り、『偏向報道』を行ったり、『報道しない自由』を行使して、国民に真実が伝わっていないと私達『リベルタ』は判断しました。それが執筆のきっかけですね」

にこりと笑ってそう答える。

何だかインタビューを受けているような、変な気分だ。

「成程。それじゃあある意味、『リベルタ』の皆さんは、『第二の報道機関』として立ち上がった、とも言える訳だ。それを娯楽と言う形。それも、今までにない新しい表現方法で世に出したのは、画期的だね」

「ありがとうございます」

一見すると、彼の問いかけは穏やかだが、言葉の端々に切れ味の良さを感じる。

「最近、関心を持った出来事は？」

その台詞は遠回しに、物語の今後の展開について問うものではないのか、と亜希は内心で突っ込みを入れた。

続きが余程気になるのか？

その手には乗らない、と言うメッセージを言外に込めつつ、

「『リベルタ』としてではなく、私個人が気になったことであれば、お答え出来ませんが……」

と返す。

「聞かせてもらえるかな？」

「そうですねえ……ここしばらく、中央での政治が混乱している中、地方での改革がしばしば、取り上げられてますよね。国内の各領を地方ごとに大きく括り、国から地方に権限を降ろそうとする動きが、今気になるものの一つでしょうか」

そこまで述べた直後、正面にいる男の目がきらりと光ったように、亜希には見えた。

7 「国と地方」

「 いわゆる『地方分権』だ。今の世の中の混乱ぶりを見るにつけ、もはや、中央政府には、この国の各地方領を統治するだけの力がなくなってる。それじゃあ、地方のことは、そこに住んでいる人々が一番よくわかってるんだから、地方に任せる方が良い。だから、権限を地方に移して行くべきだって、そう言う考えだね。」

「はい。『現場に近い所で判断が出来るように、権限を下ろしていく』と言う考えは、私も賛成です」

そう、このオズウエルドでも日本同様、巷では地方分権、地域主権論が盛んだ。

地方領主でも、領民に人気のある人物には、分権論者が少なくない。

「しかし、『地方分権』を理由に、表では中央の役人が減ったように見せながら、裏で地方の役人を増やすような事態が起こらないよう、注視すべきかと思えます」

「それはもつともだね。中央がそうした手段を取らないよう、しっかりと見張っていないといけない。それを踏まえた上で、何でもかんでも、首都エグザリオンに一極集中している今の現状を、いかに打破するか、みんなで考える必要がある」

「とは言え、『地方分権』の結果、首都と地方の差がますます開く可能性もあるんじゃないかって、私は思うんですよね」

「確かに、中にはそう言った地方領も出て来るだろうね。でも、それはそれで良いんじゃないかな。財政破綻する地域が出て来れば、有権者も真剣に投票するようになる」

目の前の人物は、こちらがどんな意見を投げかけても、それを上手く織り込みながら、自分の主張を展開する。

議論慣れしている印象を受けた。

揺らがない言葉の裏には、確固とした自分の意見があるからではないだろうか？

語り口調や仕草を見るに、もしかすると、一般人ではないかもしれないと、亜希は感じ初めていた。

彼が本のファンでなかったなら、何の目的を持って、ここに来たのだろうか？

「政権与党に賛成者が多いのは、地方への補助金をカットする狙いがあるからだと言う噂もありますが……」

「補助金、ね 地方が国からの補助金を当てにするのに、慣れちゃってるのは、僕は問題だと思ってるから、補助金カットも人々の意識を変える『劇薬』としては良いかもしれない。自分で稼ぐ経営的な発想を持った地方領主が増えれば、この国は変わるんじゃないかな？」

やはり、切り返しが早い。

ほとんど淀みない口調は、彼の頭がいかに回転が速いかを感じさせる。

しかし、こちらも言われっ放しで引き下がる程、大人しい人間ではない。

亜希にも、日本にいた頃から築き上げて来た信念がある。

日本とよく似たオズウエルドと言う国を調べ、認識を深めていくにつれ、現状、この国で地方分権を実現することに、亜希は反対であった。

「地方が、国に依存する姿勢の脱却を目指すのは、良いことです。しかし、地方の運営には、会社経営とは異なる部分もあるので、注意が必要だと思っんです。役所の世界には、『決算書』がありません。民間では、決算があるので、放漫経営をすれば、すぐに結果に表れますが、役所の世界では、この辺りがよくわからない」

「続けて。何だか、まだまだ言い足りないって顔してる」

不意に、にこりと男は表情を崩した。

話の主導権をぱつと相手に譲ってしまうのは、余裕の表れか？

内心、少しむっとしたが、顔には出さずに、亜希は促されるまま、話を続けることにした。

「『地方分権』に関して、私は外交・防衛上の懸念も抱いています。つい最近、隣国ボルティモアがこちらの領海に侵入して来ましたが、こうした緊張状態が高まっている中で、『地方分権』を進めた場合
例えば、各地方領が、色々な国と通商協定のようなものを結んだとすると、有事の際に、政府が自由に身動きが取れなくなってしまう危険性があるからです」

「じゃあ、地方と他国が協定等を結ぶ権限を制限したとしたら、君は賛成出来るのかな？」

「いえ。そもそも私は『都市への一極集中』が、この国の未来のためには、プラスになるとさえ思ってるんです」

「へえ。どうして？」

ここに来て初めて、男は興味深そうな表情を見せた。

8 「格差の原因」

「まず、同じ人が地方から都市に出て働くだけでも、生産性が上がって、高い賃金を稼げるようになります」

「確かにかつて、都市への人口集中が生産効率を高め、この国の高度経済成長に寄与したことは事実だ。しかし、それによって所得格差が拡大したことが、現在、問題視されてる」

「ええ、巷では『格差』がよく話題になります。でも、それは事実なのでしょうか？ 都市に移住した人だけではなく、地方に残る人の生産性も、人口が減ることによって上がり、賃金も上昇すると見る向きもあります」

「では、今のこの有様はどう説明するんだい？」

男は両の手の平を、上に向けて見せた。

「都市への人口集中が、現状、地方の人々の多くが、都市に対して『格差』感を抱く原因になったと言うのは、私は違うと思うんです」

『魔術師カミーユの日記』のプロットを皆で執筆するに際して、亜希はこの国の歴史をざっくりとではあるが、学んだ。

「オズウェルドの高度経済成長を止めたものは何か？ 原因は多数あるでしょうが、私はその一つに、かつてこの国の首相が推し進めた『国土均衡発展政策』を取り上げたい」

日本でも、かつて田中角栄氏が、同じような政策を推進した。いわゆる「日本列島改造論」である。

日本列島各地を高速交通網で結び、地方の工業化を促進させ、過疎と過密や、公害等の問題解決を企図したものだ。

「国内の各地に馬車が通れるような、広い街道を整備したことについては、私もやって良かったことだと思います。今まで徒歩で何時間もかかっていた移動が、数十分で済むようになれば、生活は変わります。今まで、分断されていた各都市が大きな経済圏に再編成される。しかし、目指した先が『都市の発展』ではなく、『国土の均衡発展』だった点が頂けなかったというのが、私の考えです」

「具体的には、どう言った部分がまずかったと思うんだい？」

「人・モノ・カネが自由に動けると言う状態で、人口が均等に分散するなんて、考えられないですよ。そう言う意味において、『国土均衡发展政策』は社会主義的な考え方だったと思います。交通網整備と併せて、政府は地方にお金をバラ撒きました。結果として、地方は補助金漬けとなり、生産性はますます下がってしまった。また、公共事業の割り振りで都市を冷遇し、都市部での大規模工場の新設を制限した結果、この国の発展は止まってしまいました」

「……社会主義的、と来たか。成程、そう言った捉え方も出来るね」
ふむ、と顎に手を添えながら、男は言った。

「君の言う社会主義とは、『世の中は、放って置いては上手くいく筈がない。エリートが大衆を適切に指導をしてやる必要がある』と言う考え方のことだね。じゃあ、君は『市場には極力、介入すべきではない』と考えているのかい？」

「都市計画等で変な規制をかけたたりするのは、反対ですね。とは言え。公共投資は重要なものだと考えています」

都市計画が成功したのは、独裁者がいた時である。

史学科の学生であった亜希の脳裏には、少し前にネット上で見つけた、北朝鮮旅行記が浮かんでいた。

そこに掲載されていた平壤の街の写真は、見事なシンメトリーで、美しくはあったが、少し違和感を覚えたことを、亜希は記憶している。

「はは……面白いなあ。公共投資は肯定する、と。それはどうして？」

「今は不況で、誰もお金を使おうとしないですよ。だから、市場に出回っているお金も少ない。こんな時には、政府が公共投資等で積極的にお金を使い、市場にお金を流すべきだと、そう考えるからです」

「いわゆる財政出動だね。これ以上お金を無駄遣いして、赤字が増えたら『この国は破綻する』って意見も多いけど、オズウェルドが借りているお金の九割は、国内からだし、残りの一割も、この国のお金で外国から借りているものだから、短期的にはその心配はない。しかし、長期的に見れば不安はあるね。我が国は高齢化が進んでいるから、段々、働き手が少なくなる。それによって民間の貯蓄が減り、ガロンに代わる代替資産の乏しさ、と言った要素が弱まって来るかもしれない」

「それなら、長期的にも問題じゃないように、オズウェルドを成長

路線に戻せるような、適切な政策を実行すれば良いんです」

「それがわかれば、こんなに苦勞はしてないと思うんだけどねえ……具体的な案はあるのかな？」

痛い所を突かれた　と、一瞬怯んだが、咄嗟に頭を働かせて「私は専門家じゃありませんので」と、何とか切り返しの言葉を捻り出した。

亜希は政治家や経済の専門家でも、何でもない。

日本にいた時、毎日ネットで見ていた記事から得た情報や本から得た知識と、こちらに来てわずか数ヶ月の間に仕入れた情報のみで、今まで話していたに過ぎないのだ。

「動揺したのが顔に出ちゃってないかな？　もし、具体策の点を追及されたら、どう答えよう……？」と、内心、亜希はピリピリしながら男の様子を窺っていたが、「あらら……さらっと躲されちゃった」と彼は述べたのみであった。

精一杯作ったポーカーフフェイスは、何とか剥がれずに維持出来ていたらしい。

「さて、今までの話をまとめると、君は現在議論されている『地方分権』論について、安全保障上の重大な問題が見逃されている点や、かつての『国土均衡発展政策』を引き継いだ、社会主義的発想が含まれていると言う点において、賛成出来ないと、そう言うことで良いかな？」

問われてこくりと頷くと、彼の口角が上がったのが見て取れた。

「いやあ、実に有意義な一時を過ごさせてもらったよ。こんなに政治の話で語ったのは久しぶりだ。しかし、君、ただの本の作者さん

じゃないね。何者だい？」

「その言葉、そっくりそのままお返ししますよ」

亜希は詰まる所、情報通なだけなのだ。

作家兼情報屋と言った所だろうか。

しかし、彼は違う。

亜希に喋らせるだけ喋らせて、自分の考えはほとんど述べていない。

彼がその言葉の中で仄めかしたのは、自らが地方分権賛同者だと言っていること位である。

また、話の切り返し方やいなし方は見事だったし、常に落ち着いていた物腰であった。

過去を振り返るに、政治を俎上に載せれば大抵、感情的なやり取りになっていた。

冷静に政治の話をするのは、実はとても難しい。

親しい間柄であっても、一度意見の食い違いが見付かれば、自分の考えの正当性を相手に認めさせようと、いつの間にか躍起になって、喧嘩に発展してしまうことも少なくない。

男は冷静さを保ち続けたと言う点で、その特異性が浮かび上がって来る。

何者なのかと問いたいのには、こちらの方である。

「買い被らないでくれ。僕も君と似たようなモノだよ。政治ウォッチングが趣味のただの一般人さ」

嘘つけ、と亜希は心の中で突っ込みを入れた。

少なくとも、この男は政治と無関係な立場の人物ではない。
亜希はそう感じていた。

「じゃあ、そろそろお暇させてもらうよ。僕の我が儘で従業員を長時間拘束したら、宿の切り盛りも大変だろうし、申し訳ないからね」

(ええ、是非そうして下さい！)

内心、そう呟きながら、男が席を立つ様子を目で追いつつ、亜希も腰を上げる。

とその時、不意に男がその背を曲げて　こちらに屈み込んだ。

(へ……)

そして、片手で亜希の肩をぎゅっと掴む。

何をするつもりなのか？

不可解な行動に戸惑っている内に、男はその顔をこちらへと近づけて来た。

(く、唇が近い……！　うわ、このままじゃ引っ付いちゃうコース
なのでは！？　ちょ、何！？　いきなり何する気なんだ、この人！
?)

亜希の頭の中は一気に混乱状態となった。

距離を取ろうとするも、肩を掴む握力が思いの外強い。

(……キスされる……！)

逃げられないと、目を閉じた直後、突然男の気配が遠ざかった。

「 てめえ、何こんなトコで油売ってやがる」

突然、耳に届いた第三者の声。

何が起きたのかと目蓋を上げれば、彼の男は肩に腕を回され、何者かに拘束されている。

よく見ようと顔を上げて 亜希は瞠目した。

9 「正義の味方」

赤い髪に、青い双眸。

拘束する男に回された、遅しい腕。

長身の亜希が見上げる程に高い、その背。

その人物は アーク以外の何者でもなかった。

（何でアークがここに……？ しかも、このタイミングで出て来る
とか……）

反則だ、と亜希は心の中で呟いた。

いつも彼は図ったように、自分がピンチの時に現れる。

しばらく会えないと聞いていたのに、何故と言う思いはあるものの、それよりも、助けられたことによる安堵感と、久方ぶりに会えたことに対する嬉しさで胸が一杯になった。

予想外の事態の展開に呆然としていた亜希だったが、不意に「痛い！ 痛いつてば」と言う声で我に返った。

「マジで痛いつて！ アーク、本気で締めにかかってないかい！？」

「悪い。馴染み相手だと、つい加減を忘れちゃう」

「君が力加減忘れたら、洒落になんないって！」

アークが拘束する手を緩めると、男は「死ぬかと思った」と、大袈裟な程に溜め息をついて見せた。

顔色が悪い所を見ると、演技ではないらしいことが窺える。

どうやら、アークは素手でもなかなか腕が立つらしい。

まだ、男に対する警戒心が抜け切らないのか、回した手はそのままである。

「しかし、君がここまで激昂するなんて珍しいねえ。僕としては、彼女とどう言う関係なのか、気になる所だけど……」

「先に質問をしたのは俺だ。その答えをまだ聞いてない　待ち合わせ場所に行かずに、何でお前がここにいたかをな」

そう、きつぱりと話を遮ったアークに、「上手いこと逃げられた」と男は笑った。

「わかった。経緯を話すよ　待ち合わせ場所に向かう道の途中に、話題の本の作者が働いてる宿があるって知って、つい寄り道したくなってね。君との約束に遅れないよう、適当な所で彼女との話を切り上げるつもりでいたんだけど、あんまり話すのが楽しくて、ついオーバーしちゃったんだ。ちょうど今出ようとしてたんだけど……」

「俺には、お前が強引に唇を奪おうとしていたように見えたが？」

アークの口調は刺々しい。

眉間の皺の濃さと言い、機嫌はかなり悪そうだった。

「別れ際に思わず口付けたくなる位、彼女に興味を持っちゃったんだよ。一目惚れって奴かな」

(えっ！？　何急に、自分の思いを暴露してるんですか、この人！)

一目惚れ等と言う単語を、本人がいる前で堂々と言えるのはすごい。

「お前がこいつを好きになるのは勝手だが、自分の気持ちを相手に押しつけるんじゃないか？　　まだ震えてるっ
てのに」

「あ……」

アークの指摘に、視線を自分の手に移すと　　確かに、指先が震えていた。

亜希自身も、今の今まで気付いていなかったのに、アークはよく見ている。

亜希は肚の据わったタイプではあったが、今まで告白してもすべてが玉砕と言う結果だったので、あまり男慣れはしていないのだ。
ましてや今回のように、向こうから迫られては、どうして良いかわからずに混乱してしまう。

それを、アークは見抜いていた。

自分の弱みを他人に知られてしまったのは、痛かったが　　しばらく会わない期間があったものの、以前と変わらず自分を案じてくれるアークに、胸が熱くなった。

視線を前に戻すと、サングラス越しに男と目が合った気がした。
気不味い雰囲気が漂う。

少しして、男は「済まなかった」と頭を下げた。

「言い訳にしか聞こえないと思うけど……軽い、悪戯だったんだ。
怯えさせるつもりはなかった」

謝罪の言葉は、つい先程までの軽い口調とは異なり、誠実さが感じられたので、亜希もこの一件は水に流すことにした。

アークも「馴染み」と言っていたので、何の根拠もないのだが、彼の知人ならそう悪い人でもないだろうと、亜希は感じていた。

「ちゃんと反省したなら、もう良いですよ。私も郷里にああ言った挨拶の習慣がなかったので、少し過剰に反応してしまった所もありますし……頭を上げてもらえませんか？」

「そんなあつさり……良いのかい？」

「いつまでも、申し訳なさそうな目で見られ続けるのも、疲れますから」

これは、亜希の本音だった。

今まで友人と喧嘩した際も、どちらか折れずに消耗戦を続ければ、お互いが疲れ果てるのがわかっていたので、大抵、自分から折れていた。

自らの信念と関わりのないことであれば、最終的には折り合いを付けることが、何とか可能なものだ。

「ありがとう　　僕のことは、嫌わなideいてくれる？」

「……今後も、お話の相手位なら。次に強引に迫られたら、躊躇なく魔術を使いますから」

そう答えると、「充分だよ」と男は苦笑した。

両者の間に漂う緊張が解けたのを確認した上で、アークは男を解放した。

「さて、お前の話を聞いたから、俺も答える」

「……おや、はぐらかされたと思ったんだけど、答えてくれるんだね？」

「茶化すな。立ち直りが早いにも程があるぞ、お前……」

俄に口調が明るくなった男に、アークは呆れ顔を浮かべている。軽口の応酬を見るに、彼等は気心の知れた仲のようだ。

不意に、アークは視線をこちらに向けた。ぱっと、真剣な表情に変わり、どきりとする。

「彼女は仲間だ。俺にとつて、『かけがえのない同志』でもあるたとえお前であろうとも」

そこで言葉を切ると、アークは視線を移し、男を睥睨した。

「……こいつを傷つけたら容赦はしない」

低められ、肚の底にずしりと響くような声に、亜希は気圧された。それを真っ向から受けた男は、さぞやビビったのではないかと思いきや、一瞬、目を眇めたのみで平然としている。

「それって、牽制？」

「さあな」

「はつきりしないなら、僕、諦めないよ？ 彼女を傷つけないって

約束は守るけど、惚れたのは本当だからね。今回の失敗を挽回出来るように頑張るから」

「好きにしる。選ぶのは彼女だ」

ぶつきらばつにそう告げると、アークは前触れもなく、亜希の頭に手を乗せた。

そのまま、くしゃくしゃと撫でられる。

「悪かったな。俺の連れが、仕事中に迷惑かけちゃったみたいで」

その言に、「友人に対して酷い言い草!」と男が声を上げたが、アークは無視した。

「いえ。本の作者目当てでやって来るお客さんも、最近じゃ珍しくないですし」

「こいつの口振りじゃ、結構長い時間、話させられたんだろ? 立派な営業妨害だよな。アマンダにも謝つといてくれ」

そこで撫でる手を止めると、アークは亜希の耳元にすばやく口を寄せた。

「いざこざが一段落するまで会うつつもりはなかったが、やっぱり心配だから、たまに見に来る」

囁かれた台詞に、何故か少し、動悸がした。

隣で「二人だけの世界作っちゃって」と男が呟いたのが耳に入り、はっと我に返る。

「はいはい。離れて離れて！ 君ばかり良い所持つてくのは許さないよ？ で、今の今まで名乗ってなかったから、宿を後にする前に、自己紹介をさせてもらおうかな 僕はカイ。君の本名を伺っても？」

男 改め、カイの問いに、「亜希・四条と申します」と躊躇いなく告げた。

本の作者目当てでやって来る客に対して、もう既に何人かに本名は開示しているので、今更躊躇する理由はない。

「貴方がファーストネームしか告げないのは、やっぱり身分を明かせない方だから、ですか？」

「ふふ、どうでしょう？」

曖昧な返答だが、否定しない所を見ると、暗に肯定しているものと取っても良いのだろうか？

意味ありげなカイの台詞の意味を考えつつ 二人が宿を後にするのを、亜希は見送った。

閑話「愛しい彼女」

待ち合わせの時間から小半時は過ぎたが、相手は一向に姿を現さない。

痺れを切らしたアークは、虱潰しに近くの店を一軒一軒当たっていた。

行き違いになる恐れはないのかと言う心配は無用である。

待ち合わせ場所を提供してくれた主から、自分の元に情報が届くよう、手配は済ませていた。

（つたく、あいつ、厄介事に首突っ込んだりしてんじゃねえだろうな）

待ち合わせ相手であるカイは、決して時間に無頓着なタイプの間ではない。

今までにこう言った例はなかった。

そうになると、何かあったのではと心配してしまうのも、自然な流れだろう。

カイはアークの同志であり、友人でもある人物なのだ。

道を歩きながら、ふとアークは思った。

ポンデグッタ亭も、ここからそう離れていない位置にある。

カイを探しがてら、少し、覗いてみようかと思いついた。

マッシュモールを権力の座から引きずり下ろすまで、アキとは会

わないと一度は決心したのだが、一度好きだと自覚してしまったら、自分の感情に蓋をするのは酷く困難だった。

(様子を窺うだけだ　　会いに行く訳じゃない)

心中、誰かに対してそう言い訳を並べつつ、気が付いたら足は宿へと向いていた。

通い慣れた道を進む。

ポンデグツタ亭は、アークが旅をする際に定宿としているものの一つであり、馴染み深い。

昼下がりと言う時間のため、食事客も退けた後なのか、宿周辺は落ち着いて見えた。

無論、道すがら、アークはカイの搜索と言う当初の目的遂行のため、周囲に対し、充分に目配りしている。

そうして、宿の軒先を潜り抜け、扉を開き、目に飛び込んで来た光景に……アークは一瞬、固まった。

奥の机にいる二人はどちらも間違いなく、知人である。

視力の良さには、アークはそこそこ自信があった。

一人はアキであり、もう一人は驚くべきことに　　待ち合わせ相手のカイである。

そして、自分の友人はアークの愛しい女性の唇を、今、正に奪わんとしている所であった。

そこまで把握出来た瞬間、アークは一気に頭に血が上った。ほとんど怒りの衝動に突き動かされるがまま、一足飛びにカイに駆け寄り、アキから引き剥がして、羽交い締めにする。

「てめえ、何こんなトコで油売ってやがる」

口から出た声は思いの外、ドスが利いていた。

それに反応してか、アキは閉じていた目蓋を開き、アークを見てぎよつとした表情をしたまま、固まっている。

何の前触れもなく、いきなり現れたのが、しばらく会えないと聞いていた筈の相手だから、無理もないだろう。

（俺だつて、本当は顔見せるつもりはなかったが……さつき見たいな場面を見せつけられて、黙って通り過ぎるなんざ、出来るかよ）

それにしても、自分がアキと会う時には、まるで狙い澄ましたかのように、彼女は危ない目に遭っていることが多い。

これが天の計らいなら、神は相当陰険だとアークは胸中、愚痴を吐いた。

その後、不意に「痛い！ 痛いってば」と言う声が出て、アークは我に返った。

視線を移すと、カイが自分の腕の中で、青い顔をしている。

「マジで痛いつて！ アーク、本気で締めにかかってないかい！？」

「悪い。馴染み相手だと、つい加減を忘れちゃう」

そう言って、アークは意地悪い顔で笑った。
よく知っている相手だからこそ、容赦なく締め付けているのだ。

「君が力加減忘れたら、洒落になんないって！」

カイの声には必死さが滲み出ている。

顔色がどんどん悪くなっているのを見て取り、流石にやり過ぎたかと少し腕の力を緩めると、カイは「死ぬかと思った」と大袈裟な程に溜め息をついて見せた。

その様子を見て、少し溜飲が下がったアークはアキに目を移した。先程のあれは合意の上でのことだったのか、彼女の仕草から、その辺りを探れないかと考えたためだった。

自分が知らない所で、二人は実は親しい間柄であった可能性も否定出来ない。

アキは未だ、呆気にとられた表情をしている。

何かしら、読み取れるものはないかと観察していて　アークは眉間に皺を寄せた。

(指先が……震えてる)

ぱつと見では気付かないような、本当に微かなものだったが、確かに彼女の手は震えていた。

アキは、怯えているのではないか？

普段の彼女は、気の強さが際立って見えるが、男性から迫られることには、あまり慣れていないのかもしれない。

振り返ると、抱き上げた時の彼女はいつも恥ずかしそうにしていたし、額に口付けた時は真っ赤になっていた。

(こいつは明らかに、カイが強引に迫ったな)

ならば、まだ放すわけにはいかないなど、アークは回した腕をそのままにした。

今解放して、万が一、アキが再び襲われるのを間近で見ることになれば、自分の理性はその瞬間、吹き飛んでしまっただろう。

そうなれば、例え友人である相手とは言え、腰に提げた剣を抜いてしまいかねない。

「しかし、君がここまで激昂するなんて珍しいねえ。僕としては、彼女とどう言う関係なのか、気になる所だけど……」

思考の海に沈んでいたアークに、カイそう呟いた。

ついさつき、痛い目に遭ったばかりにも関わらず、野次馬根性を出してくる辺り、全然懲りていないらしい。

「先に質問をしたのは俺だ。その答えをまだ聞いてない　待ち合わせ場所に行かずに、何でお前がここにいたかをな」

そう、きつぱりと話を遮ると、「上手いこと逃げられた」とカイは笑った。

「わかった。経緯を話すよ　待ち合わせ場所に向かう道の途中に、話題の本の作者が働いてる宿があるって知って、つい寄り道したくなってね。君との約束に遅れないよう、適当な所で彼女との話を切り上げるつもりでいたんだけど、あんまり話すのが楽しくて、ついオーバーしちゃったんだ。ちょうど今出ようとしてただけど……」

「俺には、お前が強引に唇を奪おうとされていたように見えたが？」

その話から何故、口付ける所まで行ったのだろうか？
アークが聞きたいのは、そこだ。

「別れ際に思わず口付けたくなる位、彼女に興味を持つちゃったんだよ。一目惚れって奴かな」

(こいつ……！)

臆面もなくそう述べたカイに、アークは苛立った。

カイは口を閉じる一瞬、確かにアークを一瞥し、にやりと口の端を吊り上げた。

あれは、明らかに面白がっている表情だ。

自分の言葉に対して、アークがどんな反応を返すのか見ているのだろう。

何せ、アークはつい最近まで女嫌いを揶揄されていた程である。

先の行動が興味深く感じられたのも、無理はない。

しかし、アークとアキの関係を気にしている癖に、「一目惚れ」発言をぶちかます辺り、喧嘩を売っているとしか思えなかった。

一方で、アキは啞然とした表情で、突然、告白に等しい発言をした男を見ている。

その手が未だ震えているのを見て、アークは少し頭が冷えた。

仮にも、好きだと告げた相手が怯えているのにも気付かない男に對して、何をそんなにムキになっているのか、と。

何より、彼女を早く安心させるべきではないか、と自分に言い聞かせて、カイに顔を向けた。

閑話「本音と建前」

「お前がこいつを好きになるのは勝手だが、自分の気持ちを相手に押しつけるんじゃないか？　気付いてないのか？　まだ震えてるつてのに」

「あ……」

カイははっとした顔をした。

アークに指摘されて、ようやくアキが自分に対して怯えていることに気付いたのだろう。

アキも言われるまで、自覚がなかったらしい。

自分の震える手を見て、驚いているようだった。

少しして、アキは両手をぎゅっと握り締めて、胸元に引き寄せ、顔を上げた。

その拍子にカイと目が合ったらしく、両者の間に気味い雰囲気
が漂う。

アークは黙って、事態の推移を見守っていた。

暫しの後。

カイは「済まなかった」と頭を下げた。

「言い訳にしか聞こえないと思うけど……軽い、悪戯だったんだ。怯えさせるつもりはなかった」

頭を下げつつ、ちらちらとカイの視線はアキの顔に向いている。

どのような返事が返って来るか、不安なのだろう。こつこつ言う所を見ると、根は良い人間だと感じる。

罪悪感を持った途端、先程までの勢いはなくなり、別人のように小さくなっている様は、少し滑稽ではあったが。

そして、アキは寛容な態度でカイに応えた。

「ちゃんと反省したなら、もう良いですよ」と。

その台詞に、アークは彼女に初対面で暴行に及んでしまった時のことを思い出した。

あの時も、アキは寛大にも許してくれたのだ。

「反省している人を、それ以上非難したって、意味がないでしょう」と言っていたように、アークは記憶している。

アキのさっぱりした性分に、アークは好意を持っていた。

「私も郷里にああ言った挨拶の習慣がなかったので、少し過剰に反応してしまった所もありますし……頭を上げてもらえませんか？」

「そんなあつさり……良いのかい？」

「いつまでも、申し訳なさそうな目で見られ続けるのも、疲れますから」

ばつさり斬ったな、とアークは笑った。

こつこつ言われてしまったては、謝罪を続けることは不可能だろう。齒に衣着せぬ物言いは、いっそ心地好く耳に響く。

「ありがとうございます　僕のごことは、嫌わないうでいてくれる？」

「……今後も、お話の相手位なら。次に強引に迫られたら、躊躇なく魔術を使いますから」

アキの言葉に「充分だよ」とカイは苦笑した。
両者の間に漂う緊張が解けたのを確認した上で、アークはカイを解放する。

「さて、お前の話を聞いたから、俺も答える」

「……おや、はぐらかされたと思ったんだけど、答えてくれるんだね？」

「茶化すな。立ち直りが早いにも程があるぞ、お前……」

俄に口調が明るくなった男に、アークは呆れた。

お調子者とは、こう言う奴のことを言うのではないだろうかと思う。

アークとアキがどう言う関係なのか、余程気になるらしい。

こちらとしては、カイの期待に添えてと言うより、「釘を刺しておく」と言う意図があって、話すのだが……

「彼女は仲間だ」

「仲間」の部分を強調した。

本心では、カイのように自分の気持ちを正直に打ち明けてしまいたい。

しかしつい先程、カイの「一目惚れ」宣言を受けたばかりのアキは、アークからも告白されれば、恐らく混乱してしまうだろう。

それに、アークの「立場」が容易には思いを告げることが許さない。

自分が下手に動けば、アキの身を危うくしかねないのだ。
それを辛く思いながら、言葉を紡ぐ。

「俺にとって、『かけがえのない同志』でもある　たとえお前であるとしても」

そこで言葉を切ると、アークは視線を移し、カイを睥睨した。視線に軽く殺気を込めて、告げる。

「……こいつを傷つけたら容赦はしない」

本音を出せない分、自分に出来るのは　牽制。
興味本位、遊び半分だけで彼女に近付くつもりなら、痛い目を見てもらうと暗に伝える。

真っ向からアークの殺気を受けたカイは、一瞬、目を眇めたのみで平然としていた。

さほど堪えないであろうことは予想通りだったが、だからと言って、やられっ放しでいられる程、アークは大人しい人間ではなかった。

「それって、牽制？」

向こうもこちらの意図はしっかり把握しているようだったが、「さあな」とアークは嘯いた。

「はつきりしないなら、僕、諦めないよ？　彼女を傷つけないって約束は守るけど、惚れたのは本当だからね。今回の失敗を挽回出来るように頑張るから」

カイが「惚れたのは本当だ」と言う部分を、わざわざ強調して言ったので、アークは瞠目した。

先の「一目惚れ」発言は、あくまで、アークを煽る意図で出され

たものだろうと高を括っていたのだが、読み間違えたか……？
驚きつつも、感情を抑えてアークは返した。

「好きにしる。選ぶのは彼女だ」

言いながら、アキの頭に手を乗せて、くしゃくしゃと撫でた。

彼女は少しびっくりした様子だったが、嫌そうではないことには
つとめる。

これまでの付き合いから、ある程度、信頼されているようだ。

それを利用して、さらにカイを牽制しようとしている自分に、
若干良心の呵責を覚えた。

「悪かったな。俺の連れが、仕事中に迷惑かけちまったみたいで」

隣で「友人に対して酷い言い草！」とカイが声を上げたが、ここ
はあえて無視をする。

「いえ。本の作者目当てでやって来るお客さんも、最近じゃ珍しく
ないですし」

「こいつの口振りじゃ、結構長い時間、話させられたんだろ？ 立
派な営業妨害だよな。アマンダにも謝つといてくれ」

そこで撫でる手を止めると、アークは亜希の耳元にすばやく口を
寄せた。

一瞬、躊躇する気持ちが胸に湧き上がったものの、覚悟を決めて、
口を開く。

「いざこざが一段落するまで会つつもりはなかったが……やっ
ぱ心配だから、たまに見に来る」

(お前に会いたいって言う、自分の気持ちには好い加減、俺も素直になると決めた)

自分の気持ちに嘘をつき続ける毎日は、正直かなりしんどかった。その分、一部だけではあったが、打ち明けた後は随分、気が楽になったように感じていた。

それと同時に　こう言った部分における、自身の「心の治め方」を、早い内に体得しなければ、ともアークは思っていた。

マッシュモール側は相手の心の隙を突くのが、実に巧妙なのだ。相手がアキとの関係を突いてきても、しれっとしていられる位にならなければいけない。

頭の片隅でそんなことを考えつつ、少し赤い顔をしているアキの頭を、カイに見せつけるように再び撫でていると、ぱんぱんと、手を叩く音が辺りに響き渡った。

音の主はカイだ。

「はいはい。離れて離れて！」と言いながら、こちらに割り込んで来た彼は、少し眉間に皺が寄って見えた。

「君ばかり良い所持つてくのは許さないよ？　で、今の今まで名乗ってなかったから、宿を後にする前に、自己紹介をさせてもらおうかな　僕はカイ。君の本名を伺っても？」

カイの問いに、彼女は「アキ・シジヨウと申します」と躊躇いなく告げた。

本の作者目当てでやって来る客に対して、もう既に何人かに本名は開示しているので、今更躊躇する理由はないのだろう。

そのことを、彼女につけている特殊部隊の隊員から、アークは伝

え聞いている。

「貴方がファーストネームしか告げないのは、やっぱり身分を明かせない方だから、ですか？」

「ふふ、どうでしょう?」

曖昧な返答だが、否定しない所から、暗に肯定しているとも受け取れる台詞を、カイは返した。

意味ありげな言葉にアキは訝しげな顔を浮かべながら、宿を出るアークとカイを見送った。

閑話「綺麗な言葉」

宿を出て、アークとカイが向かったのは　アルツアード教会だった。

と言うのも、この近辺で密談に最も適しているのが、教会の隠し部屋だからである。

使用許可はアークが事前に、グランツから得ている。
部屋へ入る際にグランツに声をかけ、以後は二人で貸し切りだ。

今回は非公式な形での、「ブリジアン領主と宰相閣下側近」の会談となる。

そう、カイはツール・ブリジアン領主、その人だったのだ。

アキがそれに気付かなかったのは、決して彼女が鈍かったからではない。

完全に別人にしか見えない、見事な変装だからである。

胸元まで伸びたサラサラの茶の髪を解いて、前髪を下ろし、サングラスを外せば、もはや穏やかな表情の好青年にしか見えない。

変装時のちよつと怪しい、影のある雰囲気は雲散霧消する。

その姿は、しよつちゅう新聞に載る「公」のものなので、アキも一目見ればブリジアン領主だとわかる筈だ。

「それにしても不思議な人だね」

ぼそりと呟かれた言葉の真意がわからず、視線で続きを促すと、「君のことだよ」と笑って告げられた。

ちなみに、今の彼は変装を解かずにサングラス外したのみの姿で、椅子に腰掛けている。

「会う度にコロコロ肩書きが変わる。『近衛騎士』『海軍軍人』『宰相側近』……でも、本当の所は、今上陛下の懐刀みたいなモンなんでしょう？　しばしば旅に出るのも、陛下の目と耳の代わりになって、各地を見て回るためだって僕は思ってるけどね」

「想像力逞しいな」

どうとでも取れるような言葉しか返さないのはいつものことだ。長い付き合いで同志でもある男だが、このことについては一線を引く。

指摘は結構良い線を出していたが、そのことを教える気は、あくにはない。

「やつぱ、『赤の鬪神』の口は堅いか……で、急に呼び出さなきゃなんない位、大事な話とは何かな？」

「単刀直入に言う　今、カイが主導している『地方分権』運動についてだ」

「……おや、まあ……」

ずばり斬り込むと、カイは「すごい偶然の一致」と、心底驚いた顔をした。

「いや、実はついさっき、アキちゃんと話していた話題が、正にそ

れだったんだよ」

「何……？」

彼女は「地方分権」「地域主権」論に潜む危険性について、既に見抜いていたのだろうか？

もし、そのこととラスター・マッシュモールの関係性まで読めていたとすれば、慧眼と言う外ない。

「いやあ、久々に実のある会話が出来たよ。彼女は『地方分権』について、反対の立場のようだったけどね」

「そうか」

内心、彼女がどう言ったことを話していたのか、詳細を知りたい気持ちで一杯だったが、アークはそれをぐっと呑み込んだ。

ここで、この男のペースに呑まれる訳にはいかない。

「その話はまた今度聞く」と述べると、カイは「あつ、そう」と、いかにもつまらないと言いたげな表情を作った。

「話を戻すが　最近、マッシュモール側から接触された筈だ」

「断定口調だね」

「向こうからは、協力する言う話があった」

「……見て来たかのように、すらすら話すねえ……」

相槌を打ちながらも、その台詞に否定の言葉はない。暗に肯定しているかのようだった。

無論、こちらも確証があるから、堂々と話せるのだが。

「マッシュモールの思惑が何か、知りたくないか？」

「まるで、答えを知っているかのような口振りじゃないか？　アーク」

「俺も気が付いたのは、つい最近だ。あいつらが外国の勢力と結託して、自らの権力欲を満たそうとしているのは、早くからわかってた。『地方分権』論が華やかになってから、『地域主権』と言う、一見言葉は似ているが、『国民主権』を否定する危険な思想をあいづらが持ち込んで来たことにも、気付いている。現に、お前もそうだろう？　その点、明確に言葉を使い分けている」

「ああ。主権は国民が持つものだからね。国家の主権を地方に委譲するのが『地方分権』で、これは、地域が新たに主権を持つという意味じゃない」

「主権の最たるモノは何だ？」

「選挙権だね。『国民主権』では、国籍を有する国民が選挙権を持つ。一方『地域主権』は、その地域に住民票があれば、例えば外国人であつても、選挙権が持てるという考え方だ。これが『外国人参政権』とセットになれば、スパイがわんさか押し寄せて、国内に事実上の独立国家が出来ちゃう可能性もある」

カイの指摘は的を射ていた。

役所や新聞社は、「地方分権」という言葉が、これまで国が独占しがちであった権限を地方へ移譲すると言う、「国の側に立った見

方」であるとし、「地域主権」は、一人ひとりの思いを大切にし、新しい社会づくりの主体となる「住民の側に立った見方」だと語っている。

それを理由に、近年は「地方分権」ではなく、「地域主権」という言葉を用いている等と、もつともらしい説明をしているが、裏には一部の勢力の、恐ろしい策略が秘められているのだ。

「そうだ。相手も、それに気付かれているのは承知している。その上で、マッシュモール側はカイに交換条件として、『新しい公共』と言う言葉を地方分権計画書に盛り込むことを挙げた。違うか？」

そう問いかけると、「君の情報網って、一体どうなってるんだい？」とカイは苦笑した。

「アークは同志だし、隠すこともないか。うん、確かにそう言われたよ。でも、胡散臭い感じがプンプンしたから、返事は保留してるけど」

「一見、耳障りが良い言葉程、毒が含まれてたりするからな。こっそり法律等の文言にそう言った言葉を盛り込んで、後で誰も予想しなかったような解釈をして、国を引っ掻き回すのは、あいつ等の常套手段だ」

アークはふと、グラントが教会で語っていた言葉を思い出した。今、国内で暗躍している、売国勢力お得意の方法が四つある、と。

耳障りの良いフレーズ。

レッテル貼り。

抵抗勢力作り。

危機感を煽る。

彼等の説明は単純で、とてもわかりやすい。

そのため、多くの国民がその裏に潜む意味を知る前に、彼等の進める政策に同意してしまうのだ。

政界では綺麗な言葉程、花と同様、トゲが含まれていることが多い。

「……話してるうちにわかってきたよ。今日の主題は『新しい公共』のホントの意味ってトコかい？」

「し」名答「

アークはにやりと笑った。

閑話「重なる瞳」

「結論から言えば、カイの直感は正しい　裏を探ってみれば、前首相が辞める直前、とんでもない宣言を出していたのがわかった」

「その名前が『新しい公共』宣言、だったか？」

カイの言葉に頷くと、彼は「うわあ、嫌な一致」と顔を露骨に顰めて見せた。

「要約すると　今の行政は、役人により成されているが、これは『官』が行政を独占している状態であり、好ましくない。市民やボランティア団体を参加させるべきだって内容だったな」

「一見、良い話に聞こえるけど、僕には『素性が明らかじゃない人間でも、行政に携われるようにする』って言う風にも聞こえたね。ボルティモアのスパイなんて、喜んで利用しそうな話だよ」

アークの懸念も、カイと同じだった。

与党であるイルダーブ党の連中は、外国人参政権が通らないと見て、変化球を投げて来たのだとアークは考えている。

「市民」と「ボランティア団体」について、何の定義も成されていないかったことが、「新しい公共」宣言の重要な点だ。

「市民」には外国人が含まれるかもしれないし、どんな団体でも「ボランティア団体」だと名乗れば、そうなってしまう恐れがあるのだ。

外国人に参政権を与えてしまう程に強烈なものではないにしても、この宣言は、政府が公的に「素性が明らかではない人間も、行政に携われるよう、推進する」と語ったに等しいものなのである。

今、例えば、少し前に制定された「特定ボランティア活動促進法」も、これと関連するものだったのかもしれない。

「ちなみにだが、宣言が出された直後に『新しい公共をつくる会』と言う、ボランティア団体が結成されている。そのリーダーと現首相のイルダーブは、旧知の間柄らしい」

「……状況は限りなく黒に近いグレーだねえ」

カイは額に手を添えつつ、述べる。

「聞いた限りじゃ、『新しい公共』宣言は『地域主権』と狙いは同じだね。中央の支配を退けて、地方に独立国家を作る。要はそう言うことだろう。それにしても驚いたよ。『新しい公共』って言葉は何処と無く怪しいと思ってたけど、まさかそんなトンデモ思想だったなんてね」

「中央政府が売国奴に支配されているなら、何とか地方からでも腐敗した政治を復活させたい。そのために『地方分権』を唱えるお前とは、マッシュモール側は目指す先が真逆だな」

「だから、今回の話には乗るな、と？」

「俺の話が信じられないなら、いくらでも証拠になる書類を見せる」

あらかじめ、口での説得のみでは足りなかった場合に備えて、懐

に仕舞っていた書類の方に手を伸ばすと、「いや、その必要はない」と制された。

「アークの話を信じるよ　でも、今日呼んだ理由はそれだけかい？」

問われて、思わず口の端が上がるのがわかった。

この男はやはり、察しが良い。

恐らく、こちらの肚の内も読んでいるだろう。

それなら、はっきり言ってしまうとアークは口を開いた。

「『地方分権』運動を、凍結させて欲しい」

その一言で、場の空気が張り詰めたのを感じた。

ここからが、本番だ。

「それを、地方分権推進派筆頭の僕に真っ向から言えちゃう、君の真っ直ぐな性格には好感を持つよ」

カイは穏やかな口調こそ変わらなかつたものの、その声に込められた「気」は一変している。

その証拠に、目が鋭さを増していた。

「長い付き合いだから、お前が回りくどい言い回しが嫌いなことはよく知っているからな」

「それで、その理由は？」

「カイもわかっている筈だ。現状、『地方分権』を進めるにはあま

りにもリスクが大きい。売国政治家や近隣国のスパイがその穴を狙おうと、虎視眈々と機会を狙っている」

「じゃあ、何か手はあるのかい？　今まで国民の洗脳を解くために、僕達は手を尽くして来たが、前の選挙だって、惨憺たる有様だった。政界の伏魔殿を解体出来るなら、売国奴だって利用してやるさ」

「目的達成のためなら悪魔とでも手を結ぶと、そう言うことか？　カイ。だから、マツシユモールと会ったのか？」

カイは答えない。

ただ、口元にうつすら笑みを浮かべるのみ。

その態度が、雄弁に物語っていた。

「俺も、マツシユモールと手を結ぶな、なんてこたあ言わねえよ。政治ってのはそう言うモンだからな。でも、あいつ等みたいにとんな手段も躊躇わなくなっちゃったら、俺達も悪魔と変わらない」

「政界入りして、正義を実現しようと思ったら、泥を被る覚悟が必要だってことを僕は知ったんだよ」

「その考えは否定しないが、お前のは行き過ぎだ。もし、あいつ等を上手く騙してこの国を引っ繰り返せたとしても、それまでに彼等の意見の何割かはこちらも吞まされて、悪法がいくつか出来ているだろうな。遺された悪法が、後世、我が国の紛争の火種にならないと、どうして言える？」

カイが、開いていた口を閉じた。

適切な反論が、思い浮かばなかったのかもしれない。

「俺達、中央にいる保守派が、数々の悪法の成立を許し、カイ達を初めとする保守派地方領主や国民の信頼を失っているのは、自覚している。ここまで悪をのさばらせた責任の一端は、この俺にもある。でも、もう一度、信じて欲しい」

もう一度信じる等と、虫が良いお願いだと言うことは、アークもわかっている。

しかし、正直な気持ちを告げる外に、自分には思い付くことがなかった。

取り繕った言葉を持って来た所で、決して目の前にいる男の心には響かない。

「頼む」

頭を下げると、カイが戸惑ったような気配を漂わせた。

「アーク、頭を上げてくれ」

呼びかけには応じなかった。

こちらの提案に対する諾否を、まだ聞いていないからだ。

「参ったなあ……今日会うまで、アークって冷静な奴だと思ってたんだけど、こんなに真っ直ぐで熱い奴だったなんて、驚きだよ」

カイは一つ溜め息をつくと、アークの肩を掴んだ。

「さつきまで、アキちゃんを巡って険悪になってた相手に、こうやって躊躇いなく頭下げられちゃうトコも、君が憎めない部分なんだよね」

「つまらない見栄を張るのと誇りを区別出来る奴って、好きなんだよなあ」と続ける。

「降参するよ。頼むから、好い加減に頭を上げてくれ 『地方分権』運動は凍結する」

一瞬、アークは自分の耳を疑った。

「……本当か？」

思わず、そう聞き返していた。

「本当だ。流石に白紙撤回とはいかないが、事実上『凍結』させるとブリジアン領主として約束する……君の熱意に負けたよ」

顔を上げると、つい少し前までとは別人のように柔和な表情を浮かべたカイと、目が合った。

「その目、だ」

「目……？」

「純粹で、奥に静かな熱意を秘めた、澄んだ目。アークの目を見ていたら、僕も自分の心に嘘がつけなくなった。志のためとは言え、手段を選ばずに突き進んだ結果得たモノが、本当に人々のためになるのか、正直な所、ずっと自信が持てなかったんだ。ああ、それと

「

そこで一度言葉を切ると、カイはくすりと笑った。

「今、何で君がアキちゃんに興味を持ったか、少しわかった気がするよ。その真っ直ぐな目がそっくりなんだ。多分、お互い似ている部分があるから、惹かれ合ったんだろうね」

閑話「決別」

その後。

カイの行動は迅速だった。

各界の主要な「地方分権」推進派を集めて会議の場を設け、今計画を進めるにはリスクが多すぎることを根気強く説き、まずはそれ等の諸問題を解決することを呼びかけた。

推進派筆頭領主による、事実上の「凍結宣言」だった。

今まで、多少の問題点には見て見ないフリで、とにかく分権実現に向けて突っ走って来たカイに対し、当然反発する意見も出たが、それは予想していたよりも随分少なかった。

「そもそもが国を思つての行動から始まった『地方分権』運動であつたにも関わらず、それが国を危うくするのであれば、本末転倒である。国を憂えての活動なら、『地方分権』と言う形以外にも、今、他に出来ることはある筈だ」との意見が大半を占めたのである。

百人以上が集まっている会場の内、カイの提言に反発して席を立った者がわずか十人であつたことに、カイは驚いた。

「自分には存外、人望があつたらしい」と。

ちなみに立ち去つた面々は、政権与党であるイルダーブ党所属議員、及び幹事長マツシユモールと繋がりが深い知識人であつたことを付記しておく。

会議終了から数日後、カイはマツシユモール側と繋ぎを取り、正

式に向こうからの協力話を断った。

事態は順調に進んでいるように、見えた。

かつ、かつと廊下に律動的な足音が響き渡る。

幾分、テンポの早いその音は、歩く人物の今の心中を代弁しているかのようであった。

足音の主は　カイである。

現在の姿は、表向きのブリジアン領主としてのものであったが、恐らく、自分の本性が何割かは外に出てしまっているだろうなとカイは思っていた。

と言うのも、屋内ですれ違った警備員が皆、ぎよっとした顔をしていたからである。

微笑みを絶やさない、穏やかな人物と言われているブリジアン領主が、別人のように怖い顔をしていたためだろう。

カイとしては、これでも少しは抑えているつもりだったが、どうやら、ポーカーフェイスを被りきれない程に、自分の頭は沸騰しているらしい。

何個目かの角を曲がり、目的の人物がいるであろう執務室が目に入る。

カイは歩く速さを緩めずに、そのまま扉を押し開いた。

「どつ言つことなんですか？　マダレイト領主」

開口一番、質問をぶつけると、部屋の奥で机に向かい、淡々と書類に押印していた人物　首都エグザリオンの領主、フィルス・マ

ダレイトが顔を上げた。

ロマンズグレーの、穏やかな顔がそこにはあった。

「ブリジアン領主。君こそ、どうしてそんなにピリピリしている？」

「言わずとも私の怒りの原因、今日こちらに訪問した理由はおわかりの筈でしょう」

「『青少年健全育成条例』か？」

さらり、とフィルスの口から出された名に、カイは不快そうに眉間に皺を寄せた。

「『青少年健全育成条例』とは、先日エグザリオン領議会において改正案が可決、成立した条例であり、追加部分を要約すると「青少年に悪影響を及ぼすと判断した『不健全図書』の販売を規制する」と言つものである。

検閲の基準と権限が曖昧であり、施政者の恣意で拡大解釈が可能、裁量権は執行機関に委託と言う恐ろしい内容だ。

「これは美名で誤魔化した、事実上の『表現の自由』剥奪法です。我が国の憲法にも違反している」

「表現の自由」については、このようにオズウェルドの憲法で規定されている。

一 集会、結社及び言論、出版その他一切の表現の自由は、これを保障する。

二 検閲は、これをしてはならない。通信の秘密は、これを侵してはならない。

素直に条文を読めば、「青少年健全育成条例」は憲法に違反していると思えない。

だが、ファイルスから返って来た答えは「抵触しない」と言うものだった。

「『青少年健全育成条例』は、出版された図書に対する規制であって、作者の出版行為そのものを規制するものではない」

この男の口から、このような役人の答弁の如き台詞を聞くことになろうとは、予想外だった。

カイが政界入りする手助けをしてくれた、恩師から。怒りと同時に胸に広がったのは、落胆だった。

少なくとも、今日ここに来るまでは、カイは恩師が条例改正推進派に加わっていたのではなく、それに反対する立場の人間であり、改正案成立を阻止を出来なかったことについて、弁明を聞けるものだと思っていた。

我が国に数少ない保守派の重鎮であり、尊敬する賢明な恩師であれば、きつと条例の危険性について気付いているだろうと。その希望は無惨にも、打ち砕かれてしまった。

「事後の検閲は検閲に当たらないと？ そんなもの、体の良い言い訳じゃないですか」

「『表現の自由』も他の基本的人権同様、その濫用によって他者の人権を侵害してはならないと私は考えている。領民から『公序良俗を乱し、人権を侵害している』との訴えがあれば、私は領主としてそれを無視する訳にはいかないんだよ」

「今度は『公共の福祉』を持ち出しますか。では、何故規制対象に小説を含まず、絵が入っているモノのみを規制するんです？」

条文を読んで、真つ先に引っかけたのはその点だった。

まるで、昨今首都を中心に話題になっている、「マンガ」と言う新しい表現方法を用いた『魔術師カミーユの日記』を標的にしていると言わんばかりではないか、と。

「小説は『視覚により認識させるものでない』ため、絵があるものと比べて、青少年に対する悪影響は『軽微』だと、議会で判断されたためだ」

（「軽微」だつて？）

カイはちゃんちゃらおかしい理屈だと、笑った。

もう、この男は自分の知る恩師ではない。

もはや、マッシュモールの駒の一つだ。

恐らく、マッシュモール陣営は、「地方分権」計画が頓挫した仕返しに、この条例を持ち出して来たのだろう。

いや、あの狡猾な悪魔のことだ。

最初から「地方分権」計画が失敗した場合のことも予想して、この改正案を周到に用意していたのかもしれない。

そうでなければ、「青少年健全育成条例」改正案がこんなにもあっさりと通ってしまう筈がない。

カイを中心とする保守派地方領主・議員の一部や宰相閣下、アーク、ゼノ達を含む政府内の保守派の一部、グランツ率いる教会の保守派の一部は、改正案が明るみになってすぐから、その危険性を喧伝したが、賛成派の勢いを止めることは出来なかった。

改正案が世に知られた時には既に、領議会議員の過半数が、賛成派になってしまっていたのだ。

「公序良俗を乱す図書を規制し、青少年を保護するため」と言う建前に、すっかり騙されている。

成立間際に改正案の危うさに気付いた議員も数人いたらしいが、改正賛成派から「人権」と言う言葉を持ち出されると、何も言い返せなかったようだ。

アークによると、執行機関は役人の天下り団体とし、審査料を取って儲ける仕組みを作る動きが、現在、裏で進んでいると言う。

大方、図書は執行機関を通らないと首都の本屋では流通出来ないようにし、それに反発して審査を通さなかった人間の図書は、色々と嫌がらせを受けるのだろう。

これは首都だけの規制だからと、甘く見てはいけない。

一地域の条例とは言え、首都だと言う点が重要なのだ、

首都で規制が本格的に実施されれば、それに追随する地方領が出て来る可能性が高い。

また、首都で規制された図書は、その他の地域でも、流通に関わる業界が「自主規制」しかならないのだ。

規制の影響は、全土に及ぶ。

カイは深く溜め息をついた後、閉ざしていた口を開いた。

「……どうやら、いくら話した所で、私と貴方の意見は平行線を辿るようですね」

諦念が胸に広がった後には、いつの間にか怒りは消えていた。心の中を湖に例えるなら、今は鏡面のように静まっている。

「私は貴方を政治家として尊敬していました。貴方の統治手腕は、私の目標であつたと言っても良い」

しかし、とカイは続けた。

「私は貴方に、完全さを求め過ぎていたのかもしれない」

それは、あたかも子が親に対して抱く、理想像のようなものであつた。

カイにとって、フィルスは父親のような存在だつたと言える。しかし、当たり前だが、親も過ちを犯すことがあるのだ。

「それが間違いでした。一方的に期待して、失望したのは私の勝手。それは私の未熟さの表れであつたとも言えるでしょう」

話しながら自然と下がっていた視線を戻し、カイは語気を強めて言った。

「私は今日、正式に貴方から『巢立ち』します」

「縁を切る、と?」

フィルスの指摘は、カイの言いたい所とは少しずれていた。

フィルス・マダレイト領主と言う明確な目標を見据えて、彼の生き筋を参考にしながら生きて行く、これまでのやり方を捨て、今後は自分の頭で判断して生きる、とカイは宣言したのだ。

しかし、それを指摘する気にはならなかった。

「そう取って頂いても結構です　しかし、貴方から受けた恩は生涯忘れません。今まで、大変お世話になりました」

凜とした声でそう告げると、カイはあたかも軍人のようにきびきびと頭を下げ、踵を返して部屋を後にした。

入室時とは真逆に、カイの胸中は晴れやかだった。

1 「噂の人」

傭兵の報告曰く、宿屋ポンデグッタ亭に例の本の作者四人組「リベルタ」が拠点を置くようになってから、周辺住民が徐々に右傾化しているらしい。

「青少年健全育成条例」の制定と併せて、各新聞社に賄賂を渡し、情報統制をかけているにも関わらず、その地域では許可していない情報が出回っていると言う。

情報発信元はその四人に間違いないだろう。

しかし、彼等は一体どこから情報を仕入れているのだろうか？

保守派青年の拠点となっているアルツァード教会、グローウィル宮廷魔導師と繋がりを持っていることや、彼等の内の一人が、豪商クラウザー家の人間であることは把握しているが、それだけが情報源とは思えない。

(……解せぬ)

与党幹事長ラスター・マッシュモールは数枚の報告書に目を通しながら、ポツリと心中、そう溢した。

最近漏れている情報には、ラスターの側近しか知らないものまであるのだ。

(いや……そこにはあいつ等の想像も含まれているかもしれんな)

彼等の出版した本の内容は、今の政治の状況がよく反映されているとは言え、ストーリーそのものはフィクションである。

架空の設定が、実は現実符合していたと言うことも、有り得るのではないか？

(とにかく……このまま放っておく訳にはいかぬ)

本の規制後も、まさかここまで作者の影響が広がるとは思っていなかった。

甘く見ていたと言われれば、否定出来ない。

あらかじめ、用意していたあの「火薬」に点火をするべきか……？

(待てよ。その前に一度、この目で見定めるのも一興か)

雇っている傭兵は腕が良い者を選つてはいるが、残念ながらおつむの弱い輩がほとんどで、上げて来る情報の精度がイマイチなのが問題となっていた。

かと言って、自分の側近達は頭は切れても、書類仕事ばかりですつかり身体が鈍っているので、偵察なんて真似はとても出来ない。

最後に信用出来るのは、己が目と耳のみ。

ラスターはそもそも、最初から誰も信用等してはいない。

自分に人が寄つて来るのは、くつついていれば「何らかのおいしい思い」が出来ると思っているからだ。

その内、「利がない」と思えば、もっと「おいしい思い」が出来る奴を探して、離れていく。

人間なんて所詮はそんなものだ、割り切っていた。

ラスターは徐に立ち上がると、掛けていたコートを手に取り、袖を通した。

一方

ポンデグッタ亭一階にある食堂の一角では、険悪な空気が漂っていた。

中心にいるのは、へらりと笑っているカイと、それを訝しげに眺めるエリオットとエリック、ルード、そして亜希の四人だ。

こうなった経緯はと言うと、カイがいきなりやって来て、プロット作成作業に混ざりたいと言い出したのが、事の発端である。

四人がその発言に当惑していると、カイが亜希に「ネタ提供だけでも」と親しげに話しかけて来た。

知り合いなのかと他三人の視線が、亜希に集中し 今に至る。

「アキ、誰なんですか？ この人」

そう、口火を切ったのはエリオットである。

「だから、僕は君達『リベルタ』のファンで、アークの友人だって言ってるでしょう」

「まあ、『自称』ファンってトコですかね。前に一度、この宿に来られたことがあったんですよ。アークとは友人と言う表現が適切かはわかりませんが、そこそこ気心の知れた仲だと思えます。ちょうどその場に、アークも現れたので、二人の様子を見た限りでは…

…ですけど」

亜希は、カイに対して抱いている印象を率直に語った。

「ああ、お名前はカイさんと仰るそうです。本人曰く、『政治ウオッチングが趣味のただの一般人』らしいですよ」

「何ですか、そのいかにも怪しい自己紹介は」

エリオットが目を細めて、言った。

確かに、亜希も先の台詞を投げかけられた時には、同じような感想を持った。

自分をわざわざ「ただの一般人」だと強調する辺り、特に胡散臭い。

そう言えば、ゼノも初対面では「一般人」を自称していたことを亜希は思い出した。

両者は少し、印象が被る気がしないでもない。

「そこに、アキちゃんの『恋人候補』ってのも、付け加えてくれたらうれしいな」

ぼそりとカイの口から呟かれた言葉に、亜希は目の色を変えた。

「誤解を招く発言はやめて下さい！　って言うか、私、あなたを候補に認めた覚えはないんですけど」

「うん。けど、立候補するのは、個人の自由でしょ？　前に『一目惚れ』したって言ったの、ホントに本気だから」

(出たよ、『一目惚れ』宣言！)

聞くのが二回目なので、前回よりダメージは少なかったが、心臓に悪い言葉であることに違いはない。

意に反して、熱を持ってしまふ頬が恨めしいが、恐らくこれは「彼氏いない歴イコール年齢」と言う、男女経験のなさによるものだろう。

カイは真っ直ぐ、こちらを見つめている。

今回、彼はサングラスをかけていないため、表情がよく見えた。改めて間近で顔を見ると、なかなか造作が整った良い男である。西洋顔のアークとゼノに対し、カイは瞳こそ青いが、顔立ちは東洋系だ。

（それにしても、ここまで落ち着いてられるのって、どうなんだろう……？）

普通、好きな相手を前にすれば、少しは動揺したりするものではないだろうか？

だが、目の前の男は泰然自若としていて 隙と言つものがない。

（だから、本気とか言われても……何となく、信じられないんだよねえ）

その点を訝しく思っていると、隣で「なあ」とエリックが声を上げた。

「兄ちゃん、どうせ勝ち目ないからやめとけて。この辺りじゃ、アークの兄貴とアキはもう『公認カップル』なんだから」

(はあ!?)

聞いていない。

まったくそんな話は、聞いたことがない。

ぎよつとしてエリックを見つめていると、「何を根拠に勝ち目がないと? 彼女も君の発言にビックリしているみたいだけど」とカ
イが言った。

「アキが鈍いのは周知の事実だからおいておくとして 兄貴とア
キが一緒の時って、甘い空気垂れ流しだろ? それに割って入る度
胸がある時点で、あんたの度胸は認めるけど、もしこの兄ちゃんが
『アレ』見てたら……なあ? ルード」

(『アレ』って、何? そして何故そこで、ルードに話を振る?)

亜希が心中、突っ込みを入れるのを余所に、話は進んで行く。

何だか、酷く嫌な予感がするのは何故だろう……?

「ああ、とてもじゃないが告白しようなんて気にはならなかっただ
ろうな」

ルードはくすくす笑いながら、話を続ける。

「前にアキが大怪我して、それからしばらくは貧血で『外出禁止令
が宿の女将さんから出たんだけどな。兄貴が外に連れ出したいっ
て言って、女将さんと交渉の末、『抱えてくから良いだろ』って申
し出て、OKが出たらしい。それから……」

そこで言葉を切ると、ルードはちらりとエリオットを一瞥する。

その視線を受けて、エリオットが口を開いた。

「送り迎えの間、ずっと『お姫様抱っこ』してもらってたんですよ？ アキ」

「キヤ　っ！」

予感が、的中した。

堪らず、叫び声を上げる。

あの時のことは、今思い出しても顔から火が出そうな位、恥ずかしい。

出来れば、そっとしておいて欲しい話題なのだが、悪いことに、この男共はこう言った類の話がお好みの方である。

「途中で一回も降ろさずに、帰りなんてベッドまで連れて行ってもらったそうですけど……」

「聞こえない！ 私は何も覚えてない！」

亜希は耳を塞いで、声を張り上げた。

そうしないと、あの時の情景がありありと目に浮かんで来てしまうのだ。

(エリオットの馬鹿！ 何で『ベッドまで』なんて口にするのよ！)

おかげで　ベッドの上で額にキスされたことまで、思い出してしまっただではないか。

「その後どうなったかまでは知りませんが……まあ、彼女の反応を

見れば、何となく想像がつきそうですけどね。そんな訳で、アキのことは早々に諦めた方が宜しいかと思えますよ」

ちなみにこの件は、この界限じゃ酒の肴に最近よく上がっている話です、と付け加えて、エリオットは話を締め括った。

一方 その傍らで、亜希は撃沈していた。

(酒席にあの時の話が出されてるとか、衝撃的過ぎる事実……今まで私が耳にしなかったのは、宿のみんなが気を使ってくれてたからなのかな)

当時はまだ「リベルタ」として活動する前だったが、「ポンデグツタ亭の短髪娘」としては既に結構知られた存在だったため、亜希の予想を超えて噂が広まってしまったようである。

(ああ……でも、ショック受けてる場合じゃないや。とにかく、ズしてる話題を軌道修正しないと！)

これ以上、こっ恥ずかしい話題を続けられては、自分の心臓が持たない。

自分自身の心の平穏を取り戻すため、亜希はむくりと頭を持ち上げた。

2 「若狸」

パンパンと手を叩きながら、口を開く。

「はい、私の話題はここで終わりっ！ カイさんをプロット作成業に混ぜるかどうかって話に戻しましょう」

最後にぼそりと「後で覚えていて下さいね」と呟き、三人を睨むと、彼等は蛇に睨まれた蛙の如く、一様に青い顔になった。

その様子を見ながら、少し胸がすいたような心地がするなど思っている、「じゃあ、話を変える前に一言だけ」とカイが拳手しつつ、言った。

「どうやら、アキちゃんの周りはアーク派ばかりみたいだけど、僕は諦めないから 逆境の方が燃えるタイプなんだ」

流し目を向けられてドキリとしたものの、何と返せば良いのか思いつかず、「はあ、そうですか」と適当に相槌を打った。

こう言うタイプの人物は、今まで周りにいなかったもので、戸惑うばかりである。

「……では、話を戻しますよ。私の気持ちとしては、素性がはつきりしない人をメンバーに加えるのは、正直賛成出来ません。アークの知人とは言っても、それだけで信用するのは難しいです」

ゼノやグランツの時とは違い、アークからはカイが自分の「仲間」であるとは、一言も聞いていない。

自己紹介は「政治ウォッチングが趣味のただの一般人」。

名前を尋ねれば、返されたのはファーストネームのみ。

どうも、胡散臭い点が目に付くのだ。

「もしかしたら、マツシユモール側のスパイと言う可能性だって、あり得る」

「こりゃ、手厳しい」

カイはアキの言葉に苦笑する。

「私は一度、あちらさんに脅されたことがあるので、身の危険には敏感になってるんですよ。この前、貴方とお話ししてわかったことと言えば、地方分権賛同者と言う位でした。推進派の中には、国を憂えて加わった人もいれば、外国勢力と結託して、地方に独立国家を作ろうと目論む人もいます。カイさんが、そのどちらに属する人なのか、私にはまだ、見極めが付きません」

「ああ、やっぱり流石『リベルタ』の一人だ。話題が変わったら、さつきまで動揺していたのが嘘みたいだに、弁舌爽やかだね。あ、そうそう、話を聞いていて思ったんだけど、君が僕の気持ちを信じてくれないのは、もしかして、僕がボルティモアかどこかのスパイで、自分に『色仕掛け』を使ってる可能性もあるって思ったからかな？」

亜希は指先が冷えるのを感じた。カイの指摘は、凶星だったのだ。

そう言う可能性も、確かに亜希は考えていた。

地方分権賛同者の中には、売国奴だけでなく、スパイそのものも混じっている事実を亜希は知っている。

特に、「ボルティモアのスパイは色仕掛けを好んで使う」と言う話を、以前にエリオットから聞いていたのだ。

豪商クラウザー家の人間であるエリオットは、財界の情報に詳しい。

ボルティモアに進出した商人には、美人や美男子に誑かされて、失敗した者もいるそうだ。

自身の考えを言い当てられたことに、亜希は内心動揺しつつも、面には出さないようにポーカーフェイスを被りつつ、「いえ、そこまでは」と返した。

「それなら良かった。もしそう思われてたなら、結構ショックだったからね」

……被った仮面には気付かれなかったようだ。

そのことにほっとしていると、横からエリックが容喙した。

「じゃあ、この兄ちゃんにはお引き取り願うってことにするか？」

「いえ。プロット作成作業の一員に加えることは出来ませんが、『ネタの提供者』として協力して頂く分には大歓迎です」

亜希の言葉に、他の三人は首を傾げている。

一方でカイは笑顔だ。

「以前、カイさんと『地方分権』について議論したんですけど、彼は恐ろしく頭の回転が速い人でした。管見の及ぶ限り、政界と無関係な人物とは思えません」

「成程。情報は色々握ってそうだから、有り体に言ってしまうば、利用出来る」と

エリックの言に、「君もアキちゃんに負けず劣らず、辛辣だね」とカイは呟いた。

「まあ、今日は最初から『大いに利用してもらうつもり』で、ここに来たから、『ネタ提供』だけでも全然構わないよ」

「その言い方だと、最初からプロット作成に加わるなんて無理だと承知の上で、『ネタ提供』が目的で来たように聞こえるな」

今度は、ルードが口を挟んだ。

「さてはあんた、俺達の本を媒体として、自分に都合の良い情報を広めようって肚だろう」

そのルードの一言で、場の空気が張り詰めた。

しかし、カイはそれには動じず、「ははは」と声を立てて笑う。

「『リベルタ』の皆さんは、四人共なかなかの人物だね。アキちゃんがりーダー格だろうって踏んでただけど、どうやら僕の見当違いだっただけだ」

そこで一度言葉を切ると、ぐるりと一同を見渡し、カイは再び口を開いた。

「えっと……ちよいと『濃い話』がしたいんだけど、ここじゃあれだから、良い場所ないかい？」

3 「情報統制」

カイの提案を四人は受け入れた。

流石に食堂で密談と言うのは、無理な話だろう。

安心して話せる場所ですぐ思い付くのはアルツァード教会の隠し部屋だが、信用出来る相手でなければ、あの場所の存在を明かすことは出来ない。

これは協会関係者の暗黙の了解である。

結局、すぐに移動出来る、話するのに適当な場所と言う条件で決まったのは 亜希の部屋だった。

「あつてまだ間もない女性から、部屋に誘われるとは……ドキドキしちゃうよ」

戯けた口調で言うカイに、亜希は溜め息を漏らした。

「……みんなの話し合いで決まった結果であつて、私が貴方を誘つた訳じゃありません」

「それでも許可してるんだから、同じことさ。好きな子の部屋に行けるなんて、チキンの僕はどうにかなっちゃんいそうだ」

（貴方のどこがチキンなのよ？ むしろ、すっごい図太い神経の持ち主のように見えるんだけど）

初対面で、いきなり亜希にキスしようとした人物である。

大胆な男と言う方が、ぴったり来るだろう。

「ああ それにしても、宿の一室を話の場所に勧める位だから、この宿って実は、防音・防犯構造に優れた造りになっているのかい？」

「いや、別段他の宿と比べて、優れている訳じゃない」

カイの問いに答えたのは、ルードだ。

「だが、心配は無用だ。俺とエリオットの二人がかりで『風の防音膜』を魔術で部屋に張るから、声は外に漏れない。エリックは外からの部外者の警戒に当たってもらおう」

前に亜希の部屋を使って、四人で話し合いをしていた際と同様の方法を、今回も使う。

「成程。二人がかりなら、話している時に意識が逸れて、魔術の効果が薄れてしまう穴を、もう一人が埋められるから安心だ」

ルードの説明に得心がいったらしく、カイは大人しく亜希達と共に部屋を移動した。

「……すごいね」

亜希の部屋に入ったカイの第一声がそれだった。

彼の視線の先はと言えば、本棚と机の上に積み上がっている本の山や、机の下に押し込まれている新聞の束へと向けられている。

カイの反応は亜希には想定内の範囲内だった。彼同様、初めて亜希の部屋を覗いた人のほとんどが、大抵、あまりの本や新聞の多さに圧倒される。

資産家や学者ならいざ知らず、宿屋で住み込みで働く女性の部屋が本と新聞だらけと言うのは、びっくりするらしい。

「散らかってて、窮屈な部屋ですけど……」

年頃の女性の部屋にしては、色気の欠片もない。

この部屋に幻滅して、今後言い寄るのを止めてくれれば、有り難いのだが。

しかし、亜希の望みは叶わなかった。

「でも、埃とかは落ちてないし、掃除が行き届いてる。積まれている本と新聞も、綺麗に並べられているし　女の子の部屋って感じがするよ」

「……そうですか？」

亜希の声には、無意識の内に怪訝さが滲み出していた。

今のはお世辞で言ったのだろう、と。

確かに、掃除はしているが。

「うん。それに確信したよ。『リベルタ』が魅力的な話を書ける秘密は、これだったんだって。一般的に、自身を持って発言出来る人物は、裏で大変な努力をしているものだ。メンバーの一人一人がうまずたゆまず勉強を続けているから、勇気を持って堂々と、伝えたいメッセージを物語に表すことが出来る」

カイの言葉に、亜希は赤くなった。

こんなに直球で褒められると、警戒している相手であっても、照れてしまうのは止むを得ないだろう。

どうして、この男はこっ恥ずかしい台詞を、こつもさらりと口に出来るのだろうか？

「この部屋を見てそんなことを言った人、初めて見ました　煽ても何も出ませんよ？」

評価されたことは嬉しかったが、まだ信頼出来ない相手なので、一線引いた返事をする、「本心で言ってるんだけどなあ」とカイは苦笑した。

その直後、コホンとエリオットがわざとらしく咳を一つした。彼に対して、周りの四人の視線が集まる。

「　で、カイさんの話したい『濃い話』とやらは何ですか？　わざわざ部屋を移動したんですから、結構突っ込んだお話なんですよっ？」

「ああ、ごめんごめん。じゃ、早速本題に入ろうか　僕が持って来たネタは『検閲』だ」

「『検閲』って……もしや、『青少年健全育成条例』がらみのモノですか？」

亜希が問うと、「いいや、それよりもっと質が悪い」と険しい面持ちで返された。

「今度は首都だけじゃなくて、全国規模での情報統制だよ。その対

象も出版物全てに及ぶ」

カイの言葉に、全員が息を呑む。

今の一言で、急激に室内の気温が低下したように感じた。

(その話がホントなら……この人、やっぱり只者じゃない)

手が汗ばむのを感じながら、亜希は心中呟いた。

この男は政界の人間だ、と。

亜希達も、情報収集にはかなり力を入れており、民間人の中ではかなり情報通な方に入ると自負していたのだが、今の話は初耳だったのである。

城に出入りしているアークとゼノ、宮廷魔導師であるローザから定期的に情報を得ている身であるにも関わらず、だ。

「少し前に、ボルティモアの軍艦が、我が国の領海内に侵入して来たよね。あれから、世論の風向きが少しずつ保守に変わりつつあるでしょう？ それとほぼ同時期に君達の本が出版されたことがきっかけで、今まで知られていなかった『真実』が明るみになった。これは僕等にとつては歓迎すべきことだけど、今の左翼内閣の奴等にとつちゃ、不味い事態なの言うまでもない。それで、まずは首都で君達の本を狩るのを主目的に『青少年健全育成条例』を成立させた」

そこで一度言葉を切ると、カイは周りの四人に目を向けた。

「さらにそれと併せて、次々に明らかにされる事実を『デマ』だとして、総務省が各出版社、新聞社に『デマ情報の自主的な削除』要請を出したんだ。今夜行われる会見で明らかになる筈だよ」

4 「仮面」

カイの言に「ばっかじゃねえの」とエリックは毒突した。

「自分達に後ろ暗い所がありますって公言してるようなモンじゃねえか、それ。『自主的な削除を要請』って……命令じゃないにしても、誰だって国に目を付けられるのはゴメンだろうから、みんな萎縮しちゃって、自由にモノが言えなくなる空気が出来るのは目に見える。表現の自由はどこに消えたんだって言いたいよ」

仮に、この要請に反発する人々が内部から声を上げてても、国から睨まれることを恐れるグループが彼等を潰しにかかる。

現政権に対して批判的な言論人の記事も、新聞社・出版社が批判を恐れて掲載を見合わせるようになるだろう。

エリックが指摘したのは、そう言うことだ。

「その話が事実なら 民主主義国家と言うのはもはや、ただの看板になりましたね。この国は」

エリオットが苦々しいと言わんばかりの顔で呟く。

「だが、あんたは何故今夜の会見の情報まで、事前に掴んでいる？

『政治ウオッチングが趣味』だとしても、今の情報が真実なら、俺は到底あんたが『ただの一般人』だとは思えない」

これはルードだ。

「ん……それじゃあ、代わりに『色んな人脈がある男』ってキャッチフレーズにしとこうか」

「人脈？」

「そう、人脈の多様さが僕の情報の源なんだ。さっきアキちゃんが言ってたように、僕は確かに地方分権賛同者の一員だった。地方分権推進者の中には、国を憂えて賛同した人がいる一方で、地方に反オズウェルド国と共に独立国家を築こうとする連中も確かにいる。だから、推進派の中になると、左寄りの連中から現極左政権の企みも多少、漏れ伝わって来るんだ」

敵の考えを知りたいなら、懐に潜り込むのが手っ取り早いからね、と続ける。

「えっ、ちよつと待って下さい！ 今の話だと、貴方は地方分権を進めるリスクを承知の上で、あえて推進派の仲間入りをしたって言う風に聞こえたんですけど……」

「うん、そうだよ。まあ、今は『元』地方分権賛同者で、地方分権推進派とはおさらばしたけど。とはいえ、左の人達の一部とはまだパイプがあるから、今回の特ダネ提供に繋がった訳だけど」

カイの言葉にアキは目を剥いた。

「初対面じゃ、思いつ切り『地方分権賛同者』って顔で私と議論してたのに……！」

「いやあ、ゴメンよ。ムキになって言い返して来るアキちゃんが可愛かったもんだから、つい。それに、アキちゃんの考えも興味深かったから、じっくり聞きたかったんだ」

「……演技しながら反応見て、楽しんでたんですね……」

「あ、やっぱ引いちゃう？ 何となくそんな気がしてたから、あんまり今の話、言いたくなかったんだよねえ……けど、僕も君達とおんなじ愛国者だってこと、信じて欲しかったんだ。アークともホントに友人同士だし。何なら、あいつに直接聞いてみたら良いよ。アキちゃんのことに関しちゃ、ライバルだけど、きつと『カイは俺の同志だ』って言うってくれるから」

同志だつて言うてくれる。

確信を持った口調で語るカイに、亜希は彼のことを信じても良いかと、初めて思った。

アークが自分のことをわざと悪く言ったりするような奴ではないと、カイは信じている。

「それに、僕がもしエセ愛国者で、君達を騙そうとしてるんだったら、情報統制の動きなんて、わざわざ教えたりなんかしないと思わない？ 僕が仮にマツシユモールかボルティモアのスパイなら、こう言った話は絶対に外に漏らさない。国民が気付かないうちにごっそり、出来るだけ速やかに通そうとするね」

実際、思い出してみてもよとカイは続けた。

「これまでも、報道は左寄り 自分で自分の国のことを悪く言う自虐的なムードが蔓延していて、特定の国を持ち上げるスタンスの記者が多かったよね？ 外国人に参政権を与える法案のように重要なものも、一部は全然報道されない。僕が聞いた話じゃ、売国奴共は怪しい法案を通そうと活動しながら、それがバレないように出版社や新聞社に金をバラ撒いたり、脅していたみたいだ。何か事件が起きれば、国民がそれに気を取られている隙に、自分達の意見を通

してしまおうとするのが、あいつ等の典型的な行動パターンさ」

そこで一旦言葉を切ると、カイはぐるりと四人を見回した。

「僕がもし彼等の仲間なら、こんな風にわざわざ自分から敵と面と向かって、堂々とこれからしようとする悪事について語ったりするなんて、はつきり言ってナンセンスだし、考えられないでしょ？」

「それは……確かにそうですね」

「まあ、ほとんどあり得ない話だよな」

亜希とエリックがポツリポツリと呟く隣で、エリオットとルードは渋い表情だ。

カイの話は筋が通っているとは思っているものの、感情的に彼が自分達と同じ側の人物だと認めづらいのだろう。

それも仕方がない話かもしれない。

何だかんだ言いつつも、未だカイは自らの素性について明らかにしていないのだ。

むっつりと黙りこくっている二人にカイは苦笑しながら声をかけた。

「今の話で、僕が『スパイ』だって可能性は否定してくれたかい？」

「もしそうなら、貴方は大した役者ですよ」

「……兄貴に確かめて、事実なら認めても良い」

「うん。その言葉が聞けただけで、充分」とカイは破顔した。

5 「自由と平等」

「いつまでもアークの可愛い弟分達に嫌われてるのは、正直辛かったから、今すぐくほつとしたよ」

「そう思うなら、どうして素性を明らかにしない？」

ルードは訝しげに言った。

「色々事情があるんだよ。ほら、よく言うでしょ？ 嘘には二種類ある。それは、悪意を持ってつく嘘と、相手を傷つけまいとしてつく嘘だつて。それと一緒。アークやゼノだつて、素性がよくわからないのは僕と同じだね。僕等が君達に全てを明らかにしないのは、『重大な秘密を知った人間は、秘密の重さと同じだけの危険が付きまとうようになる』つてことを、よくよく知っているからさ」

「私達はまだ、未熟だと？」

「そうは言つてない。僕等はみんなを守りたいって思ってるだけなんだ。政界に飛び込んで、本気で事を成そうと思うなら、命を捨てる覚悟が必要になる。例え保守の立場でも、最後の最後で保身に走る人間は、敵に利用されるつて実例をいくつも見て来てるからな。けど、僕は安易に『命を捨てる』なんて君達には言えない」

「俺は死ぬことなんて、怖くない」

そう呟いたエリックに「バカ野郎」とカイは拳骨を落とした。

「そつやつてすぐ血気に逸る奴が多いから、言えないんだよ。まずは身を修めるんだ。ちよつと議論を吹っかけられた位でカリカリしているようじゃ、狸爺共とやり合えない」

カイの言に、エリックは顔を紅潮させた。

痛い所を突かれた、と言う顔だった。

「良いかい？ 『死を覚悟する』 ことと 『自分の命を粗末にする』 ことは全然違う。僕やアークだって、普段は命を大切に生きてる。その上で、命以上に大切な尊いものの存在を信じて、それを守るためには一身を擲つことも辞さない。それが本当の意味で 『死を覚悟する』 ってことなんだ」

「結局、俺達のことを未熟な後輩と言っているように聞こえるんだけど……」

エリックの声はいじけているように聞こえた。

子供を諭すような口調で言われたことにプライドが傷付いたものの、中身は反論の余地がない正論であったため、何とか絞り出した言葉は負け惜しみになってしまったようだった。

「人には時機って奴があるんだよ。僕等がどれだけ可愛い弟分達の身を案じていたって、人物となりや、周りが放って置かなくなつて、自然と世に出てしまうモノさ。『時代が人を要請する』 んだ。現に、君達も本の出版を機に、政界に片足突っ込みかけてる状態だから、僕等は心配で仕方ない。せつかく出て来た僅かな希望の芽を、早々に潰させないために、少しでも環境を整えておこつて必死だよ。僕も先陣を切った者としての意地がある。この回天のうねりを確実に次世代に伝えて行くって言うね」

熱の籠もった声に、四人は押し黙った。

皆、カイの『氣』に吞まれている、と言って良い。

「君達に一つ言っておくよ。『革命』とは権力に反抗することじゃない。真の『革命』とは『自由を創る』ことを言うんだ。政治における自由を実現することが、民主主義の理想だと僕は信じてる。真に参政権と政治家になる権利がすべての国民に対して保障され、自分達の政府と法律を作る自由を実現するのが、僕の夢だ」

だけど見て、とカイは言葉を紡ぐ。

「今の政権は国民から次々と自由を奪って行っている。表現の自由が最近の良い例だけど、財産権も侵害しているよね。財政再建の名の下に増税を声高に叫ぶ。私有財産を否定する考えは実に社会主義的だ。福祉国家を標榜して、『大きな政府』による『平等』の実現を目指しているみたいだけど、『大きな政府』になると、国民の自由を制限しにかかるのが歴史の常だからね。僕は今世間に蔓延している『自由』よりも『平等』を優先する空気に危機感を持っている」

きらりとカイの瞳が瞬いた　　ように見えた。

「でもね。『自由』のない『平等』なんて、僕は価値がないと思う。どんな地位や名譽、権力だって、『自由』には敵わないんだから」

そこで、カイは口を閉ざした。

周囲には沈黙が続いている。

誰も言葉を発さない　　否、発することが出来ないのだ。

語り口調こそ穏やかだが、カイの言葉は激しい。

火の如き情熱の籠もった言葉の数々に、各々が圧倒されてしまっ

ている。

(私、この人を見誤ってた……?)

自分の見立てで、唯一正しかったのは、彼が政界関係者であると言っただろう。

カイを軽い男だと思い込んでいた己の不明を、亜希は恥じた。

器が違う。

他の人物が彼と同じ台詞を述べても、彼と同等以上の器を持った者でなければ、心には響かないだろう。

言葉は上っ面だけ、世の不正を嘆いてみせながら、名誉を求める俗人と感じるに違いない。

自身へ向けられる視線に、敬愛の色合いが濃くなって来たのをカイトも感じたのか、しばらくして「こほん」と決まり悪げに咳をした。

「そんなに見られると照れるよ　アキちゃん、僕に惚れた？」

その瞬間、上昇していた部屋の空気は急激にに下降したように感じた。

「……今の台詞で、何か一気に冷めちゃった気がします」

「ええっ、そんなあ」

そう言いながらも、カイはそれ程残念そうでもないように見える。亜希の言葉からトゲがなくなったのを察したようだ。

亜希自身も、彼が最後におちやうけて言った台詞が、場を和ませるためのものだと言っことには気付いていたので、返す言葉に毒が混ざらなかつた。

ああ、この人はこう言う人物なんだなと何か、感覚的なものを今、掴めた気がした。

その後、亜希が吹き出したのをきっかけに笑いが広がり、和やかな空気の中、その場はお開きとなった。

6 「危機と対策」

夕日の眩しさに目を細めつつ、カイは苦笑した。

また少し、長居してしまった。

日の傾き具合から察するに、懐中時計を見るまでもなく、あの宿を訪ねてから後にするまで半時は既に経っていることがわかる。

現在、カイは帰り道を歩きながら、物思いに耽っていた。

(アークが構いたくなるのも、わかるなあ)

少々無鉄砲だが、純粹で真っ直ぐ理想に邁進するリベルタのメンバー達の姿勢は、眩しかった。

彼等に触れる内、志の実現のためにがむしゃらに突き進んでいた頃の自分を思い出した。

経験を重ねると知識は増えるが、その分、失敗を恐れて自由に動けなくなってしまうがちだ。

カイは表では改革派領主として取り上げられているが、一見突拍子もなく見える行動であっても、その行動を起こすまでには色々な計算を終えており、効果的だと認めた上でのものであることがほとんどだ。

例を挙げれば、インタビューでの過激な発言がしばしば槍玉に挙がるが、これも自己アピールの一環として、新聞や雑誌を利用しているが故である。

自分も随分打算的で、嫌な大人になってしまったものとカイは自嘲した。

(いつの間にか、僕って結構、弱虫になってるんじゃない?)

失敗を恐れる者は、若者とは言えない。

脳裏に、いつか耳にしたアルツァード教会の神父、グランツの言葉が浮かび上がった。

感情の高ぶりにまかせて、あれだけ熱っぽく人に語りかけたのは久方振りのことだった。

リベルタの四人の「愚直さ」に感化されたのかもしれない。

彼等に言葉を紡ぐ中で、領主を志すきつかけとなった「政治における自由」を実現したいと言う、自身の原点を再確認出来た。そんな気がしている。

真に人を動かすのは、策略ではなく真心なのだ。

例えば、アークの「地方分権運動の凍結」依頼を承諾し、最終的に地方分権推進派と袂を分けたのも、彼の「愚直さ」に打たれたからだ。

策を弄して動き回ろうとする自分に対して、本音で中央突破を目指すアークの姿が眩しかった。

(こんな調子じゃ、アキちゃんに振り向いてもらえないのも無理ない訳だ)

認めるのは悔しいが、現時点では男としてアークに負けている。

まだまだ、自分は未熟な人間だ。

「このまま負けていられない」とカイが意気込んだ直後だった。

(! 今のは……)

感じた微かな違和感に五感を研ぎ澄ます。

嫌な予感がしたが、進む足は止めない。

しばらく何食わぬ顔で歩き続けたが、この違和感は消えなかった。

(こりやどうも……尾けられてるみたいだねえ)

人数は 恐らく、一人。

見当がつけられる辺り、現役を退いて少し経つとは言え、自分の感覚もまだ鈍ってはいないようだ。

リベルタが現政権の人間に警戒されているのは周知の事実だが、ついには宿に出入りする人間まで監視するようになったか、とカイは心中で内閣の連中を毒突いた。

社会主義国家も同然ではないか。

城まで付いてこられて、「今の自分」とブリジアン領主の接点を疑われるような事態になっては不味い。

取るべき行動は、一つ。

(撒くか)

そう考えたのと、気配が近付いて来るのは同時だった。

一方。

その頃、リベルタの四人は再び亜希の部屋で膝詰めになり、今後どうすべきかを話し合っていた。

カイが持つて来た情報は数時間後に行われる会見で明らかになるものである。

それにも関わらず、「少しでも早く」と彼がわざわざ自分達に教えに来た意図はどこにあるのか？

「今から俺達が何とかするってのは、どうやったって不可能だ。要請自体は既に出されちまってるんだから、会見の妨害を成功させた所で、規制は既に始まっちまってるし……」

頭を抱えるエリックの肩に、ルードが手を乗せる。

「この数時間の内に、対策を練ってそれを実行に移し始めろって言うことじゃないか？ あの人が言いたいのは」

スタートダッシュが僅かでも早いに越したことはない、と言うことか。

「……すごい無茶ぶりですね」

「数時間でそこまで出来るって、期待されてるんですよ。僕等は」

訳知り顔で言うエリオットの言葉が……重い。

しかし、ショックを受けている時間の猶予はない。

(ええい、とにかく頭を回すんだ！ 私っ)

「とりあえず……『青少年健全育成条例』を受けて、その対策として首都で『魔術師カミーユの日記』の小説版を出版する予定を立てていましたが、今回の要請はすべての出版物に及ぶので、これは中止するってことで、異議はないですよね？」

亜希の言に、周りの三人は首を縦に振る。

首都で成立した「青少年健全育成条例」は規制対象に小説を含まず、絵が入っているモノのみを規制するものだった。

しかし、今回の総務省から出される要請は出版物すべてが対象であり、規制は全国で実施される。

こうなつては、小説版を出すメリットがない。

「今後も、規制に刃向かって出版を強行するとすると、エリオットのご家族にはご迷惑をかけることになりますが……」

マンガ出版における資金的な援助を、エリオットの実家であるクラウザー家から受けている。

政府側から嫌がらせを受けて、商売の方に影響が出る可能性は大いにあるだろう。

表情を曇らせる亜希に、「お気遣いは無用です」とエリオットは笑った。

「と言うより、ここで圧力に屈するなんて選択、父が許してくれませんが。『お前はそれでも男か！』って張り倒されるのが目に見えてますから」

「ああ……確かにお前の所の親父さん、そんな感じだよな」

「ええ。なので形は変われど、活動は続けて行きましょう」

そこで、パンとエリオットが手を叩いた。

「さあ、対策を考えますよ！　良い考えは白紙からじゃ生まれて来ません。ならば、まずは向こうがこれから、何を仕掛けてくるかを考えましょう。そうすれば、僕等が取る道も自ずと見えて来る筈です。はい、エリック！」

突然、びしつとエリオットから指を指され、「え？　俺！？」とエリックが仰け反った。

「早く。時間がありません」

「わかった！　言うからその指を下ろせって！！　えーとだな……要請が出された後も、保守的な言論活動をしている所にはまず、圧力がかかるのは間違いない」

「例えば？　具体例は？」

「急かすなつての！　今考えてるトコだから……あー……銀行、銀行の融資を止めに入らって可能性はどうだ？　新聞社と出版社はその嫌がらせが一番キツいだろう。最近はどこも出版業界は厳しいみてえだしな」

「成程。それは確かに起こり得る危険性がありますね　では、次アキ」

今度はこちらに指を向けられた。

早く言えと言わんばかりのギリギリした視線は妙に威圧感があり、しどろもどろになりつつも、亜希は口を開いた。

「ええつと……他に考えられる攻撃は……えーエリックがさっき言っていたみたいに、陰から手を回すってやり方以外に、表からぶつけて来る方法も考えられるかと思えます」

「表とは？」

「ほら、『青少年健全育成条例』の時もあつたじゃないですか！

『児童の健やかな成長を支援する会』とか『未成年の売春阻止の会』の意見が、エグザリオンの民の声として議会で紹介されていたでしょう？ 民間人の設立した団体を装っていましたが、裏を辿れば左派系の教会関係者と与党議員が出て来ましたよね。あれと同じように、今回も何らかの団体を拵えて、そこを経由させながら、倫理的な面からこちらの非を訴えて来る手段に出る可能性はあるんじゃないかと」

「ああ、向こうがやりそうな手ですね。ならばこちらも対抗して、表現の自由を訴える団体の設立を進めるべきですね。よし、これで一つ策が出ました。では次、ルード」

指がするりと遠ざかるのを見届けながら、亜希は溜め息をついた。

ようやく一つ。

あと少しの時間で、どれだけの策を考え出せるのか？

(いや、何が何でも考え出さないと！)

エリオットのやり方はかなり強引だが、無理矢理に喋らせてでも、とにかく各々から少しでも多くの意見を出させて、その中から最も有効だと思われるものを採用しようとするのは、この場合妥当だろう。

口を動かしている内に、頭の中で段々と考えがまとまって来ることもある。

(考える！ とにかく使えるものは何でも使って……！)

使えるもの……？

頭の中でぶつぶつ呟いている時、ふと思いついた言葉である人物の顔が浮かんだ。

「あっ！」

その瞬間、無意識の内に亜希は声を上げていた。周囲の三人の視線がこちらに集中する。

「アキ、どうしました？」

「策……二つ目が浮かんだ、かもしれません」

7 「情報戦」

「考えましたね。著名人との対談を記事にする、なんて。しかもこれ、何回かに渡ってやると?」

「はい。次回以降、ゲストが誰になるかはお楽しみと言うことで……」

「お楽しみ、ね。誰か言えないのは、妨害を危惧してですか?」

「テーマがテーマですから……ねえ?」

室内に、若い女性二人の声が響く。
その傍で、凄い勢いでペンを紙に走らせている年配の男性が、一人。

計三人が首都エグザリオンの名家であり、宮廷魔導師ローザの住むグローウィル家の応接室に詰めていた。

現在、インディアス新聞に連載予定の対談の真っ最中である。
実はこれが 亜希の浮かんだ「二つ目の策」であった。

「そうですね。何せ、先日総務省が出した『デマ情報の自主的な削除』要請の是非を問う……言ってしまうば、『お上』の声に意見するものですから」

にこりと穏やかな笑みを浮かべているのは、屋敷の住人であるローザだ。

天女の如く麗しきかんばせだが、その口から紡がれる言葉は鋭い。ちなみに彼女の発言通り、カイが言っていた『デマ情報の自主的な削除』要請が出ると言う話は現実のものとなっている。

「そう言えば、今まで何度か嫌がらせを受けたんでしょ？」

「ええ。動物の死骸を玄関先に置かれたり、ポストに脅迫の手紙を突っ込まれたこととか、まあ色々ありましたね。ぶっちゃけると、身の危険を感じるような目にも遭いました」

答えたのは、亜希である。

双方共、いつもはタメ口同士の仲にも関わらず、敬語なのは自分達の間を親しい人以外には伏せておきたいと言う考えがあるためだ。

亜希はマンガの情報源の一つがローザだと広く世間に知られて、彼女が嫌がらせを受けるような事態になるのは避けたいと思っている。

しかし、敬語で話すことに亜希は利点も感じていた。

幾分、頭が冷静になれるのだ。

「まあ、怖い！ 『表現の自由』がこの国では保障されていたんじゃないかったかしらね？」

「そうですね。しかも、私達リベルタの書いている本は、実話と通説に基づいているとは言え『フィクション』なのに、どうしてそこまで過剰反応されるのかわかりませんね。騒ぎ立てた分だけ、これは実際に起きたことなんだとみんなが思っちゃっ」

そこまで喋った直後、隣で速記者の男性がプツと吹き出した気配がした。

いつもより亜希とローザは自制した会話を続けていたが、政権与党に対する「嫌み」がたつぷり散りばめられた言葉は、彼の笑いのツボを突いてしまったらしい。

インディアス新聞社の社員である彼 エディ・クレイトン氏とは、亜希は今日が初対面であり、挨拶して以降、ほとんど会話らしい会話がなかった。

と言うのも、大柄で体格も良く、日に焼けた肌に強面で、新聞記者だと知らなければ冒険者か軍人にしか見えない風貌であり、少し近寄り難い雰囲気的人物に見えたのだ。

亜希は初対面で「まるで熊みたいな人だなあ」と言う感想を持った位だ。

本人に言えば怒られるだろうが、ローザと並べば「美女と野獣」そのものである。

だが、今の笑顔は以外にも親しみやすいものであった。

亜希はそれに少し好感を持ち、気紛れに話を振ってみようと言う気になった。

「あの……話は変わりますが、インディアス新聞さんも今回の対談連載の企画がよく通りましたね？ まさか実際にこうした場を設けて頂けるなんて、正直まったく思っていなかったんですよ」

記事を書けると圧力がかかる可能性は大いにありますし、と続けると、エディは笑顔のまま答えた。

「対談企画を持ち込んだのは今話題のリベルタのメンバーで、対談

相手が著名人　しかも初回がまさかの宮廷魔導師閣下と言う点で、上層部を納得させることが出来ましてね。少々の嫌がらせは止むを得ませんが、これだけの大物が出た記事を、『お上』もそう簡単には捻り潰せないだろうとの結論が出た訳です」

エディの言に、亜希とローザは視線を交わしてにやりと笑った。

目論見通りである。

そもそも、今回の企画は亜希の思い付きがきっかけだった。

有り体に言ってしまうえば、「使えるコネは使い倒せ」と言うものである。

普通に意見を発信して握り潰されてしまふのなら、意見に「権威」と言う名の後ろ盾を付けてみてはどうだろうか、と亜希は考えた。

もともと陰ながらリベルタを支援する立場であったローザは、今回の提案を「私の立場を利用するなら、とことん利用しなさいよ！」と快く引き受けてくれた。

二回目以降はエリオットの父であり、財界で知らぬ者はいないクラウザー商会の代表者他、現在順調に調整が進んでいる。

「仮に、圧力をかけられて掲載を止められた場合、掲載スペースをわざと真っ白のまま空けておいて、『大変申し訳ありませんが、から記事の差止め請求を受けたため、本連載は一時休止とさせていただきます』とデカデカと真ん中に書く予定になっています。普通に記事を書けられたにしろ、失敗したにしろ、どっちみち今回の企画は話題を呼ぶ筈ですから、我が社にはプラスになります」

インディアス新聞社は現政権とは距離を取っているとは言え、上層部の面々もなかなか肚が据わっているようだ。

「もし、資金的な面で嫌がらせを受けた場合、どうされるおつもり

でしょう?」

さらっと大胆な質問をローザが投げた。

亜希の立場では聞きにくい点であり、気掛かりでもあったので、ありがたい。

「裁判沙汰にしてやりますよ」

悪戯つぼく笑って口角が上がった表情は、一筋縄ではいかない豪快な気質を感じさせたが、同時に人好きのするものだった。

「随分血の気が多いですね」

「今回の総務省からの要請は、我々は報道に対する弾圧だと受け止めていますので。まず、デマ情報に対する判断の基準が明確に示されていませんよね。これでは、『こちらが把握していない情報なのでデマだ』と言ってしまいます」

「政府が把握していない情報は流せないなんて、まるでどこかの共産主義国か社会主義国みたいですね。出版社と新聞社を監視下に置いて、国民を統制するみたいな感じで」

「ええ。『表現の自由』の危機ですよ。そもそも、基準もなしに、根拠があるかどうかを誰がどうやって決めるのかと問いたいですね」

エディは的確に総務省が出した要請の問題点を指摘している。

要請において「法令及び公序良俗に反すると判断した情報の自主的な削除を含め、表現の自由にも配慮しつつ適切な対応をお取り頂くよう周知頂くと共に、貴団体においても必要な措置を講じ、正確

な情報が顧客に提供されるようお願い申し上げます」と書かれた部分があるが、「公序良俗に反する」ものが何なのか、どこにも判断基準は記されておらず、時の為政者の判断でその気になれば何でも「デマ」に出来かねない危険性がある。

申し訳程度に「表現の自由にも配慮しつつ適切な対応を」等と記しているが、そもそも、基準がわからない要請に対してどのようにして適切な対応を取れと言うのか？

無茶苦茶も良い所である。

「ああ、それに……貴方のような若い作家さん方が頑張っているのに、長い歴史を持つ我が社がこの事態に怯えて小さくなっていては、報道業界人として名折れですから。今回我々は精一杯戦わせて頂く所存です」

最初、連載企画を持ち込まれた時、正直「やられた！」って思っただんですよ。要請に対して一矢報いる企画は私が丁度出そうかと考えていた所だったんでね、とエディは続けると、鋭い一瞥を亜希に送った。

8 「熊と少女」

「今回の要請に対して危機感を抱いている人々から見れば、貴方達リベルタの今回の企画は、言わばヒーローの所業です。同じ書き手として言わせてもらえば、少し嫉妬します」

「ヒーローだなんて、そんな……！」

「謙遜することはありませんよ。『お上』に目を付けられるリスクを承知の上で、あえて行動すると言う『勇氣』を見せたんですから。『お上』に対して不満を持っていても、世間体や社会的身分等に縛られて声を上げられない人々が多いのが現実です。我々も『お上』に対して意見を発信し続けてはいますが、規模の大きい組織であるが故に、内部での意思決定に時間がかかり、行動に移すまでにタイムラグが生じてしまう」

四人組で小回りの利くりベルタの皆さんに『負けた』のは、ある意味当然だったのかもしれませんが、とエディは笑った後、ぎょろりとした瞳がすつと細くなった。

「リベルタは私にとってライバルです」

獐猛さを宿した視線が、真っ直ぐに亜希を射貫く。

圧迫感に一瞬、気圧されたが、亜希はすぐに持ち直して口を開いた。

何となく、今、自分という人物が計られているように感じる。

本当に評判通り、リベルタのメンバーは肚の据わった人物なのか？

全員がそうなのか？ メンバー四人の内、三人は男だが、この女はどうだろうか？
と。

それに対して、逃げたくないと言う気持ちが胸に湧き上がった。

「光荣です」

そう言って、笑顔を返した。

過大に評価されているように感じるが、それに萎縮してしまう自分ではありたくない。

相手の評価は素直に受け止め、前に進んでいこう。

そんな風に思えたことで、プレッシャーは跳ね返せた。
自然に笑えたように、感じている。

暫しの沈黙の後、エディは突如、相好を崩した。

「……男前だなあ、あんた」

「はい？」

いきなり砕けた口調になったエディに、亜希は困惑した。
それを余所に、「なあ、宮廷魔導師閣下様も今、そう思ったろ？」
とローザにも同じ調子で語りかけている。

「ええ、そうですね あんなに殺気混じりでガンを付けられてる

のに、平然と笑って、それも……あれだけ魅力的な笑顔を見せられて、私も思わず見惚れてしまいました」

(殺気!?)

魔術師団を率いるトップの軍人でもあるローザが言うのなら、本当に殺気が混じっていたのだろう。

意図的に殺気を「使える」辺り、過去に武人としての経験も持っているのかもしれない。

冒険者が軍人のように見えると感じた亜希の勘も、あながち間違っ
てはいなかったと言うことが。

どつりで妙に威圧感があった筈である。

やはり、人物を試されていたらしい。

「だろう？ 俺が十歳若かったら、今で惚れてたな。お嬢ちゃん、結構モテてるんじゃないかねえか？」

「え？ いえ、別に……その……」

予想外の方向に話が進み、思いもしなかった問いを投げかけられて、亜希はしどろもどろになった。

その様子をエディは興味深そうに見ている……何やら、居心地が悪
い。

「どうやら、そっち方面には疎いみたいだな。まあ、そのギャップも魅力の一つか？ こりゃ、周囲の男共がやきもきしてそうだ」

「そう思うのは、クレイトンさんの『年の功』ってヤツですか？」

ローザが面白そうに相槌を打つ。
エディに影響されたのか、彼女も言葉が砕けて来ている。

「まあな　それより、そちらも敬語を止めたらどうだ？　ざっくばらんに話した言葉を書き留めた方が良い記事になりそうだし……」

一度言葉を切ると、エディは悪戯っぽく言った。

「お嬢さん方、ホントは結構親しい仲なんだろう？　俺の前だからって、わざわざ固い話し方することはないぞ」

「っ……」

見抜かれていた。

そのことに動揺しつつ、嘘を押し通すか否か逡巡していると、ローザが先に口を開いた。

「……アキ、良いわ。バレちゃったものは仕方ない。私も普段通りに話せるなら、その方が楽だし　あ、エディさん。一応言って置くけど、記事の方は敬語口調にしようよ？」

ローザはあっさり開き直った。

最初からこうなることも覚悟の上だったのだろう。

さり気なく、記事の書き方に釘を刺しておく辺り、余裕の程が窺えた。

「その点はご心配なく」

「なら結構　ああ、アキはどうする？」

今自分が考えていることが、ローザがわかっていることに苦笑しつつ、亜希は言った。

「そうだなあ……ローザとはタメ口として、エディさんとは『ちよつと砕けた敬語』位で勘弁してもらえませんか？ 親以外の年上の方には、親しい相手でも、敬語を使っちゃう癖があるんですよ」

「うーん、それが素ってんなら、しょうがねえなあ」

「ありがとうございます　ローザとの関係については、非公開と言うことをお願いしますね？」

「わかってるよ。取材源のプライベートについてベラベラ喋る程、俺もまだ耄碌しちやいねえぞ」

「それは失礼致しました」

芝居がかった口調でぺこりと頭を下げた亜希に、ローザが可笑しそうに吹き出した。

そうして、幾分か空気が軽くなった室内で、話の進路は当初の目的である亜希とローザの対談へと、戻って行った。

閑話「闘神降臨」

執務室で書類仕事に取り組んでいると、コンコンと、来訪者を告げるノック音が室内に響いた。

少し前から感じていた足音と気配から察するに、知り合いであることを確信していたため、相手の声音を確かめるまでもなく、アークは入室を促した。

「失礼致します　文をお持ちしました」

顔を上げれば予想したとおり　ゼノがしかつめらしい顔で立っている。

掛けた眼鏡がきつい印象をより強めていた。

今は宰相『アベル・シユタイナー』としてやって来たため、素の時とは別人のように堅苦しい空気を纏っているが、自分が現在『銀髪』なのと同様に、目下の状況ではお互い素を出せないため、少々やり辛くとも止むを得ない。

現在、アークが使用している部屋は傍聴面等で不安要素が多く、込み入った話はとても出来ない。

防音魔術を張ることも出来るが、近くでいかにも『コソコソ見張っている』気配が感じられては、そうする気にもなれないのだ。アークが普段、仕事で使用している部屋では対策は万全のだが、そちらに移動するのを待たず、こちらに文を届けに来る等、余程の事態か？

ゼノは懐から書簡を取り出すと、恭しい所作でアークに渡し、あつと言つ間に部屋を後にした。

それを見送る間もなく、アークは文に素早く目を通すと、内容を脳裏で二、三度諳んじた後、即座に卓上の灯りで文を燃やした。

グローウィル家周辺にて不審者あり。本日の対談の情報が漏れていた。

隊員一名負傷。かなりの手練れ。正体は捜査中。
防衛大臣が騎士団情報部隊長と接触。

アークは今日、アキとローザが対談の取材を受けることを、既に情報として掴んでいた。

このことが政府側には漏れないよう、特殊部隊が陰ながら援護をしていたのだが、敵はその監視の目をすり抜けていたようだ。

(かなりの手練れ……か)

報告書を纏めた隊員の心情を思い、アークは表情を険しくした。

特殊部隊は文武両道の精鋭の武人を集めて結成され、それぞれの自尊心も高い。

そんな彼等に「かなりの手練れ」と言わせるだけの人物なのだ相当のものだろう。

そこまで考えた時、ふと先日、カイがポンググッタ亭から帰る際、尾行されたと言っていた話を思い出した。

その際に、現状の警備体制で良しと考えたのが甘かった。

特殊部隊の副隊長であるゼノが自らの出動を主張せず、アークに託したのは、恐らくこちらの心情を汲んでのことだろう。

この情報を耳にすれば、アークは矢も盾も堪らなくなるに違いない、と。

心が読まれていることに苦笑した。

自分はどうかんだと聞いてみたいが、ゼノの「思い人」であるローザは政府の人間であるため、今回、標的にならないと見ているのだろう。

それに関しては、アークも同意見だった。

万が一、ローザも狙われたとしても、仮にもこの国一番の魔導師なので、そう簡単にやられはしない筈だ。

おまけに現場が彼女の実家なので、攻めれば家族総出による魔術攻撃で、敵もタダでは済まない。

そんなリスクを承知の上で、わざわざローザに喧嘩を売りに行く可能性は低い。

(気になるのが、このタイミングで情報部隊に接触したってことだ)

『デマ情報の自主的な削除』要請が出されて以降、情報部隊がデマと見られる情報の収集活動にかり出されていることは知っている。

今、亜希達に嫌がらせや対談の妨害をすることを目的に、情報部隊をどう使ったつもりなのだろうか？

(デマって言やあ、最近じゃ少年犯罪の報道が加熱気味で、嘘も流れてたな。自宅の本棚から勝手に推測した、根拠もない読書傾向と犯罪心理の関係を問題にしてみたり……)

不意に、脈絡のない話を思い出した。

今考えるべきは、そんな過去の事件のことではなくて、現在の事態をどうするかだろうと自分に言い聞かせていた時、脳裏に並んだ単語の組み合わせに、アークははっとした。

マッシュモール、情報部隊、少年犯罪、デマ情報の削除要請、読書傾向……青少年健全育成条例……

(あいつら……もじゃ……！)

単語同士を繋ぐ「糸」が見えた瞬間、一気に嫌な予想が具体的な形で思い浮かび、アークは眉間の皺を深くした。

自分の予想は恐らく、向こうの企みとそう大きく食い違うものではないだろうと、直感する。

現時点では情報がまだ不足しているが、下から次の情報が上がるのを待っているゆとりはない。

こちらの隊員を負傷させ、情報部隊に命令を下しているのを見るに、恐らく対談後、屋敷から出て来た亜希と記者に接触し、何らかの手段で圧力をかけに来るとアークは見ている。

記事が世に出て問題にされる前に、潰しておこうと言う意図も当然あるだろう。

場所は、ローザに気取られぬよう、グローウィルの邸宅から少し離れた人気のない所と言った所か。

負傷した隊員に代わり、亜希の護衛が補充されているだろうが、敵には「かなりの手練れ」がいる。

今回、部下だけでは対処出来ない可能性が高い。

(アキ)

どうか無事でいてくれ、と祈るような思いを抱きながら、アークは席を立った。

残りの目を通すべき書類の山は幸い、どれも急ぎのものではない。

彼女をこの国の政界に引き摺り込んだのは、他ならぬ自分だ。

アキは「この国を立て直すまで、元の世界には戻れない」と言う話を、彼女を引き留めたい自分の都合に利用した。

真に彼女を想うなら、その身を危険に晒させずに、自分達の独力でこの国を立て直し、彼女が元の世界の帰れるよう、取り計らうべきだった筈だ。

表面では彼女を想う素振りを見せながら、本心は自己中心的な醜い想いで一杯なのではないか？

思えば、かなり最初の頃から、アキに惚れていたのかもしれない。

そもそもはアークのせいで、アキは危うい世界に生きる身となったのだ。

自分には彼女を護る義務がある。

逸る気持ちを抑えながら、「表の姿」で演じるべき姿を崩さぬよう、アークは細心の注意を払いながら移動する。

今の自分は護衛の兵や監視役から、「愚鈍」に見えなければならぬのだ。

これも、敵の油断を誘うために、あえてそうして来たためだが、非常時に素早く行動出来ないため、苛立ちが募る。

しかし、城を抜けやすいのも、この「仮面」を長年使っているお

陰であつた。

今となつては部屋を出た後、尾行してまでアークの様子を見ようとする者は皆無である。

監視の目を抜け、目指した部屋に入った直後、アークの瞳には静かな炎が灯つた。

室内で留守を守っていた者達は、上司の久しく見なかつた表情に戦慄する。

「赤の鬨神」が再び、降臨した瞬間だつた。

9 「迂遠なやり口」

同じ頃。

ローザの見送りを受けながら亜希とエディは屋敷を辞し、二人で帰途についていた。

「この後、嬢ちゃんトコの宿で一杯やってこうかな」

「ええ、是非！ 今日を機会にそのままウチの常連さんになって頂ければ、尚、有り難いですね」

「そこまで明け透けに本心吐露されたら、返ってそのキャラに好感持つちまうな」

「それはどうも」

和やかな空気の中での、軽口の応酬。

あつて間がないにも関わらず、今やすっかり友人同士のような雰
囲気だ。

「けど、常連になって欲しいなら、一つ条件がある。嬢ちゃんも一
緒に呑むってことだ」

「おおっと！ それは予想外の注文ですね。私、嗜む程度しか呑め
ませんよ？」

笑いながら言った。

実は、亜希はザルで何倍呑もうが顔色はちっとも変わらず、正気
を失わない人間なのだが、これは秘密にしている。

深い理由はないのだが、「酒に弱い女を演じていた方が得」と言う祖母の言葉に、何となく従って今日まで来ている。

「そいつあ、構いやしねえよ。ま、呑むつつうよりは、話し相手になっってくれってことだな」

「ああ、そう言っことなら喜んで」

エディの話は示唆に富んでいて面白いと感じていたので、亜希は承諾の意を示すように、こくりと頷いて言った。

「ところで嬢ちゃん、話は変わるが喧嘩は好きかい？」

俄に物騒な単語が彼の口から飛び出したので、亜希は首を傾げた。

「藪から棒にどうしたんです、突然。見ての通り、肉弾戦は苦手です。やりたくありませんけど、ペンで戦うのは好きですよ」

「成程　じゃあ、こんな話は知ってるか？　最近、喧嘩の売り方は随分回りくどいのが流行ってるみたいなんだよな。最初は善人ぶって近付いて来るんだとさ」

「例えばどんな感じですか」と問うと、エディは声を潜めて言った。
後ろにいる野郎共みたいな、と。

「っ！」

ぎょっとして、思わず振り向きかけたが「見るな」と小声で制された。

「何も気付いてない振りして歩いてる。どんな奴等かってのは、教えてやるから」

身なりだけなら、騎士さん方だな。

囁くように、エディは告げた。

先程、角を曲がる時に見えたらしい。

彼と出会ってすぐの際、武人の経験がありそうだと思ったが、その線は濃厚そうだと亜希は一人、心中で呟いた。

「……気配に敏感なんですね。私、言われるまで全っ然、気付きませんでした」

「職業柄、危ない橋を何度も渡ってるんでな。嫌でも鋭くなっちまったって訳だ。こりゃ、記事が出る前に潰してやるうって算段だろうなあ」

「誰の差し金かってのは、何となく想像が付きそうですよね」

「違うない」

先程までと同様、笑顔で会話を続けるが、会話の中身は一気に殺伐としたものへと変わった。

「それにしても、まさか自分が騎士に尾行されるような立場になるなんて、思いもせませんでした」

「ここが地球であれば、警察に尾けられるようなものだ。

まるでドラマや映画の中の人物になったような、不思議な気分だった。

そんな風に、今の状況にどこか現実味を感じられないでいるためか、亜希はあまり恐怖感や緊張感に捕らわれずに済んでいた。

「圧力をかけられるにしても、ボランティア団体を通して倫理面から糾弾されるような形で来るかと踏んでいたんですが……」

「俺もそんなトコだろうと高をくくってた　やつこさん方がどんなイチャモン付けて、俺達を縛りに来るか楽しみだな。この状況をしっかり記録して、後で騎士に命令した奴を見つけ出して、絶対記事にしてやる。法律無視なら、人権侵害の特ダネだ」

緊迫した状況下にありながら、エディはまるで少年の如き屈託のない表情で、生き生きと語っている。

やはりこの男、只者ではない。

「この状況で、相手がどう出るか楽しみ、記事にしたいと来ましたか……スリル楽しみ過ぎですよ、エディさん」

「そう言う嬢ちゃんも、すごい落ち着いてるじゃないか」

「自分でも、何で冷静でいられるのか、正直よくわかんないんですよ。まあ言えるのは、こうなった以上、今更ジタバタしたってしょうがないし、正面から受けて立つしかないってことですかね」

「さすがは彼の『リベルタ』のメンバーだ。肝が太い」

「恐れ入ります」

「……最初は俺がおとりになって、嬢ちゃんは逃がしてやるうかと思ってたんだが、その様子じゃ大丈夫そうだな。一緒にあいつ等、

迎え撃つか？」

「えっ、私、最初からそのつもりだったんですけど……！　と言いますか、連れを放って自分だけ逃げるとか、嫌ですよ！　万が一、肉弾戦になったら私は多分足手まといにしかならないんで、それで宜しければ、ですが……」

「ん。じゃ、こっから一蓮托生な」

軽い口調でエディはそう言うと、足を止めた。

10 「正義は奈辺に」

「そこにいらっしやる騎士さん方よう、俺達に用があるんなら、さっさと済ませてくれやしないか？」

突然、張り上げられた大声が辺りに響き渡る。

それと共に、空気がピンと張り詰めるのを亜希は肌で感じた。

エディはどつやら正面から売られた喧嘩を買つことにしたらしい。亜希も度胸はある方だが、エディの肝の据わり方は尋常ではない。

「ずっと尾けられてると、気持ち悪いったらねえんだよ　ほら、とつとと終わらせようや」

からりとした口調で述べると、エディはパンパンと手を叩く。

「そんな、ペットを呼ぶみたいに……」

自尊心の高い騎士の皆さんは返って表に出て来にくくなるのでは、と続けると、エディはぶはつと吹き出した。

「ははっ、嬢ちゃん最高だな！　この空気でそんな面白いコメント付けたら、シリアスなシーンがコメディに変わっちゃったじゃねえか。さっきの台詞、きつと騎士さん方にも聞こえてるだろうよ。こんな任務についてる方々だからな……余計表に出にくくなったんじやねえか？」

「うわ、すみません！　せつかく思い切って挑発して下さいのに！　てか、すごい地獄耳なんですね。さっきの小声が聞き取れるとか」

そう返事すると、エディは腹を抱えて笑い出した。

「あつはつは、今のすっごい皮肉！　それワザと？」

「いえ、そんなつもりじゃあ……」

「無意識だったって所が良い！　天然恐るべしだな」

エディが何度か深呼吸し、笑いを収めて少ししてから、コツコツと背後から足音が聞こえて来た。

ようやく、姿を見せる気になつたらしい。

今まで待っていたのは、笑っている相手に話しかけても雰囲気がぶち壊しになると考えてのことかもしれない。

振り向くと、エディの言っていたように騎士体をした男が三人、立っていた。

三人共、眉間に皺が寄っているのは、先の亜希とエディの会話を聞いていたからか、否か。

彼等の制服は揃って黒、と言う所を見ると、表向きは日本で言う警察に当たる、陸上騎士団傘下の治安維持部隊らしい。

「おいでなすつたな　誰の差し金で来た？」

直球過ぎる問いかけに、騎士三人は面食らった顔をした。

その様子を眺めて、エディはにやにや笑いながら、言葉を続けた。

「口籠もるのは、後ろ暗い所があるからだろう」

「違う！ 我々は事件に関わる捜査を行っていただけだ！」

一人が顔を上気させ、声を荒げて言った。

「上層部は、『リベルタ』の書籍が現在捜査中の少年犯罪を誘因した可能性がある」と判断し、我等に『調査』を命じられたのだ」

「『調査』なんて上手い言い回しですね。『監視』していたって言ったら、仮にも民主主義を掲げる国の騎士として、外聞が悪いですからね」

話題の矛先が自分に向けられたため、亜希は皮肉を返した。今度は意識して。

「監視」と言う言葉は社会主義国や共産主義国を報道する際、よく用いられる表現である。

騎士は後で、亜希達が今のことを何かの機会で話した時に、そう言う事実があったと証言されてはまずいと、言質を取らせないように咄嗟に言い換えたのだろう。

優秀な役人には、言葉の選び方が巧い者が多い。

しかし、平気で「青少年健全育成条例」や「デマ情報の自主的な削除要請」で言葉狩りが進められる現政権下なら、亜希達の証言を改竄したり、捻り潰すこと位、騎士達の背後にいる黒幕は躊躇なくやってのけるだろう。

亜希は、黒幕が政府の人間だと睨んでいる。

権力者が背後にいるのだ、彼等がここで失言しようが、さほど敵方にとっては大きな問題ではない。

「それにしても、私達の書いた本が少年犯罪を促した可能性があるなんて、聞き捨てならない話ですね。どう言う意味ですか？」

「昨今話題になっている、少年犯罪事件の報道は貴方達も耳にしている筈だ。少年宅に立ち入り捜査した際、本棚から『リベルタ』の書籍が発見されたのだ。その後の聞き込み調査の結果、少年は『リベルタ』のファンだったことが判明した」

騎士の説明を聞いて、亜希はげんなりした。

地球にいた頃、「刺激的なテレビゲームが少年の犯罪心理を掻き立てたのでは？」とする意見を聞いたことがあったが、これも同じ類のものようだ。

「『リベルタ』の著書は首都下においては、不健全図書に指定されており、複数の民間団体からも問題視する声が少なくない。貴方達が世論を無視して活動を続けるか、著作を公序良俗に即した表現に改めて行くのか、我々は見守っていたのだ」

「しかし、『リベルタ』が今回、新聞社に『デマ情報の自主的な削除要請』の是非を問う対談企画を持ちかけ、それを実現に移したと言う情報を耳にして、露骨に近くまで迫って尾行を始めた、と？」

「尾行という表現は語弊があるが……」

「ああ、『見守って』でしたっけ？ ごめんなさい」

いちいち、言葉をかたっ苦しく、かつ胡散臭い表現に言い換えようとするので、なかなか鬱陶しい。

しかし、そうするのが彼等の「癖」になってしまっているのかも

しない。

「でも、犯罪を促した可能性があるかもしれないってだけで、ここまでされる謂われはありません。この国の憲法で保障されている『表現の自由』の弾圧行為ではありませんか？」

「しかし、貴方達の著作は世論から問題視されて……」

「ではその分、私達の著作が犯罪を誘発した可能性が高くなったと判断したんですか？ 無茶苦茶な理屈があつたものですね。それに、『世論』と言う言葉を使って、こちらの罪悪感を煽るのって卑怯ですよ。一部だけの意見を聞いて、それが民意だと決めつけるのって、はつきり言つて傲慢です」

相手が突かれて「痛い」だろうと思う所に、矢を打ち込んで行く。それには一切、容赦はしない。

彼等も立場上、止むを得ずこんな役回りをさせられているのだから、亜希はそれに同情しようとは思わなかった。

今、自分が彼等の無茶な論理を認めれば、治安維持の名の下に「表現の自由」が剥奪されることを良しとする、悪しき「前例」をこの国に残してしまうのだ。

「厳しいなあ、嬢ちゃん。俺んトコも世論調査とかしよつちゅうやつてる身だから、今のは耳が痛エヤ」

不意にエディが話しに容喙した。

「ああ、すみません。エディさんを責めた訳じゃありませんよ」

「わかつてるよ」

軽い調子の声を聞いて、少しだけ頭に上っていた血が降りた気がした。

冷静さを失わないよう、フォローしてくれた……のかもしれない。彼に視線を向けると、にやりと笑って返された。

11 「内心の自由」

議論で冷静さを保つことは重要だ。

以前にカイとの会話でも、それを学んだではないか。

感情的になるのは、論理的に話すことだけでは相手を説得出来ないと、内心で認めてしまった場合なのだ。

そう自分に言い聞かせた後、亜希は再び三人に視線を戻した。
穏やかに、淡々と述べることに務めるのだ。

「そもそも、読書の嗜好を犯罪の証拠として扱うこと自体が、問題ではありませんか？」

問いかけると、騎士達は揃って首を傾げた。

自分達の行動の何が問題だと指摘されたのか、わからないらしい。

「憲法では『思想・信条の自由』が定められています。読書はこの『思想』に含まれるものです。どのような『思想』を好み、本を読むかは個人の自由でしょう。人々の内心の自由まで裁こうとするのは憲法違反ではないか、とそう申し上げているのです」

「憲法違反」と言う言葉に騎士達は一瞬怯んだが、その内一人がかつと目を剥いた。

「あつ、貴方は犯罪者を擁護するのか！」

突如、話の論点をまったく別のことにすり替えられた。

その切り口は有効だと感じたのか、残り二人も後に続いた。

「この度の事件で犠牲になった人には、貴方と同年代の女性も多い」
「そのことについて、何も感じないのか！」

三人共、すっかり頭に血が上っているらしい。
論理的な矛盾を突かれ、それを論破するだけの言葉が浮かばずに、感情論に走ってしまったている。

騎士体で強面の男三人に迫られ、威圧感は相当なものだったが、ここで怯んだり、感情に感情でぶつかっては負けだ。

亜希はきつと三人の目を見据えて、言い放った。

「私は、犯罪者を擁護するつもり等、毛頭ございませぬ。それと『思想・信条の自由』の話とは別問題でしょう」

話をすり替えるな、と暗に告げる。

自分達の突っ込まれたくない話題から目を逸らさせようとしていることに、亜希が気付いているとはつきりと悟った三人は、悔しそつに口を噤んだ。

亜希と騎士達のどちらの話が筋が通っているかは、本人達を含め、ここにいる誰の目にも明らかだった。

長い沈黙の後、騎士の一人が大きく肩を上下させて溜め息をついた後、開き直ったように言った。

「……やはり、貴方の意見の方が正論のようだ」

「おまつ、何言って！」

「騎士なら、潔く負けを認める。このお嬢さんを論破することなん

「ざ、最初から無理だったんだ。我々だって、そもそもこの任務に乗り気じゃなかったんだからな」

「おいおい、いきなりそんなにぶっちゃけちゃって、良いのか？」

エディが目を丸くしながらそう問うと、最初に口火を切った騎士は「構わない」と苦笑した。

「酷い将を持った軍人程、惨めなものはないと今日程感じたことはなかった。私も独り身であれば、命令に背くことも出来ただろうが、妻子持ちで経済的に余裕がない男ばかりが三人、集められてな」

「……汚いですね」

「はっ、まあ俺が上官の立場でも、恐らくそうするさ。出来た上官なら自分の首と引き替えに、この作戦を反故にしようと思ってみるかもしれないが、悪いことに直属の上官も『人質』を取られていて、逆らえなかったと謝っていたよ。同情してくれとは言わない。心の隙を突かれて、市民の『自由』を売ろうとした我々に非はある」

「いえ、真に非があるのはそんな無茶苦茶な命令を下した、どこかの『バカ』でしょう」

バカ、と言った瞬間、周りの何人かがぶつと吹き出した音がした。

「バカ……ああ、確かにその通りだ。お嬢さんなら、黒幕もおおよその見当が付いているだろう？ 我々から誰かは言えないが……」

「はい」

それはきつと、彼のラスター・マッシュモールだ。
そう言う確信が、亜希にはあった。

現在、首相を陰から操り、国の中で売国的な政策推進者の中心となっているのが、あの男である。

新聞紙に載った彼の顔を思い浮かべていると、騎士の一人が辛そうな表情で亜希に語りかけた。

「大変……申し訳ないが、我々は貴方を説得出来なかった場合、『捜査協力』を名目に騎士団駐屯地に連行するよう、命じられている」

「うわあ、最後まで嫌な任務を仰せ付かっているんですね」

「……応じて、頂けるか？」

「良いですよ」

即決した亜希に、騎士達とエディは啞然とした表情を浮かべた。

「今逃げたって、後日また同じような目に遭うのがわかりますから。私は『リベルタ』のメンバー唯一の女性でもあるし、多分ずっと狙われ続けるでしょう」

「確かに……そうだが……」

良心の呵責に苦しむ騎士達に、「それなら」と亜希は一つ条件をつけることを宣言した。

「恐らく、この現場に居合わせた人物がいれば、一緒に連行するよ

うに命令が出ていますよね。でも、エディさんは見逃してもらえませんか？」

「なっ！？ 嬢ちゃん一人で駐屯地行くななんて許さんぞ！」

「最後まで言わせて下さい！」

被せるようにして言い、視線を投げるとエディは不服そうながらも、口を閉じた。

「彼は、私とは別々にグロウ威尔家から出ていたことにして欲しいんです。そして、エディさんはたまたま言い争う声を聞いて、この現場を覗いてしまった、と」

「俺にこのことを記事にかかせるつもりか？」

「ええ。対談記事とセットでお願いしますね。私が早く駐屯地から出られるよう、ご支援頼みますよ」

「今日会ったばかりの男をそんな簡単に信用して良いのか？ 俺や会社側が揉め事を恐れて何もしないってことは考えないのか！？」

「話した時間は僅かですが、エディさんはそんな人じゃないってわかってます」

そう返すと、「くそっ」とエディは吐き捨てて、頭を掻き毟った。

「そんな風に言われちゃ、頑張らざるを得んだろっが！」

「あはは、厄介事押しつけちゃってすみません」

「この状況でそうやって笑える嬢ちゃんの肝のデカさにや、感服するよ」

はあ、と大きく息を吐くと、エディはコッソと亜希の額を軽く手の甲で小突いた。

「けど、厄介事とか言うな。言つたる？『一蓮托生』って。それに、こんな特ダネ掴んで逃げるなんて、報道マンの名が泣くだろうが。絶対記事出してやるから、信じて待ってろ」

「お願いします」

亜希が頭を下げた時、「では」と騎士が切り出した。

「エディ殿はあちらの小路から帰ると良い」

「……あの、見逃して頂けるんですか？」

「我々は貴方以外の誰も見ていない　そうだろう？」

騎士の一人が笑って言うと、他の二人も悪戯っぽく笑って見せた。

「何故、その道が良いと？」

「この周囲は現在、治安維持部隊がとある事件の捜査中と言う名目で、一般人が立ち入らないように見張りが置かれている。話題の記者を白昼堂々、連行するなんて悪目立ちし過ぎるだろうからな。一番見張りが少ないのがあちら側なのだ　しかし……」

貴方なら大丈夫だろう、と騎士はエディに言った。

「何でそう言い切れる？」

「貴方もかつて我々のように、武器を持つ人間だっただろう？ 屋敷を出てからすぐに我々の気配に気付いていたではないか」

「……さあてな。俺の過去はご想像にお任せするよ」

エディはそう空嘯くと、亜希達に別れを告げ、小路の陰へと消えて行った。

閑話「黒と赤」

（『信じて待つてる』なんて、大見得切ったものの……こいつあ、ちよいとヤバい感じだな）

アキ達と別れて暫しの後。

またもや妙な気配を感じて立ち止まり、振り返った体勢のまま、時間が過ぎていく。

視線の先には黒い外套に身を包み、腰に下げた剣の柄に手を掛けてこちらを窺う得体の知れない男。

顔はすっぱりとフードに覆われ、判然としない。

これはいわゆる暗殺者とか、そういう類の輩ではないだろうか？

ふと思いついた考えは、恐らく正解だろうとエディは感じた。

近辺にいる騎士達とは別格の「気」のようなものを纏っており、底知れぬ威圧感がある。

エディも元武人の端くれなので、相手の力量についてはおおよそではあれ、見抜く目を持っている。

そんな自分の本能が、今、ピリピリと張り詰めていた。

この男は、危険だと。

今の己の状態は、例えるなら、獰猛な肉食動物に睨まれて動けな

い兔と言った所だろう。

目が合った瞬間、それだけの力量の差を感じた 故に、容易には動き出せないでいる。

エディが現在所持している武器は、護身用の短剣一本のみだ。

これまではそれで事が足りていたのだが、今の状況では圧倒的に不利である。

相手の方が腕が立つ上に、武器のリーチもこちらより長いとなれば、勝てる見込みはほとんどないだろう。

そもそも、アキだけが狙われて自分は無事、なんてことはなかったのだ。

今回の対談記事を潰すのなら、当然エディも狙われて然るべきである。

先程出くわした騎士三人の口振りでは「エディを」捕まえる直接的な命令は出ていなかったようだが、それも、こんな「化け物」が直々に手を下す手筈になっていたためであるなら、納得だ。

記者に金をバラ撒いて買収を謀っている現内閣だが、それに乗っからずに逆らった相手にはこの仕打ちか。

エディは口角が自然と上がるのを感じた。

(はっ、光栄なことじゃねえか)

こんなとんでもない奴に「口封じ」を依頼される位、自分は警戒されているらしいと思うと、何やら愉快だった。

しかし、敵方の念の入れようも、そうやり過ぎではないだろう。

アキを連行して行った騎士達三人位であれば、エディは短剣一本でいなす位の力量は持っているのだ。

現役を離れて長いとは言え、未だエディが「それなり」の強さを持つことを、どこからか聞きつけた結果、この「化け物」をぶつけようと言う算段になったのだろう。

(嬢ちゃんとの約束もある……あっさりやられちゃっては、格好が付かん)

思い切ってこちらから仕掛けるか、と思った時である。

(……っ！)

睨み合いで膠着状態が続いていたこの場に、突如、第三者の気配が現れたのを肌で感じた。

敵の仲間かとも考えたが、見れば、相手もこちらに対する殺気を収めて、「気配」に対して警戒態勢を取っている。

気配の出所は　　上!?

気付いたその直後には、「第三者」は上からエディの正面へと着地していた。

赤銅色の三つ編みが揺れて、視界を赤く染める。

「盛り上がってるトコ悪いが、見過ごせなかったんでな　　邪魔させてもらっ」

闖入者は悠然と腰を上げた後、エディと黒ずくめの男を睥睨した。目が合ったその一瞬　　感じたのは凄まじい圧迫感。

(もう一匹、『化け物』が現れやがった！)

赤銅色の髪を持つ長身の男で、その身から発する尋常でない「気」の重さ。

腰に下げられた剣。

整っているが故に、感情の色が消えれば威圧感を強めるその風貌。

容姿は、しばしばアルツァード教会近辺に現れ、アキと恋仲の噂も立った剣士と一致している。

この人物は

「あなた……まさか、『赤の闘神』か？」

自然にするりと舌から零れた呼び名に、男は頷いた。

「そう呼ばれることもある。むず痒くて堪らんが、この名で一旦、両者が矛を収めてくれるなら楽で良いんだが、その黒ずくめの奴も、俺とこのおっさん二人が相手となりゃあ、少し手に余るだろ？」

自称「赤の闘神」アーク・ウオレスの口調は軽いが、眼光は炯々としている。

「『赤の闘神』さんよ。何で俺を助ける？」

「裏の人間が民間人を襲っていたのを見て、つい、な。弱い者いじめは嫌いなんだよ。まあ、俺の『武』をどう使おうが俺の勝手だ」

そこまで述べるや否やアークは突如抜刀し、黒ずくめの男に突き付けた。

一気に場の空気が張り詰める。

「退け、闇に生きる武人よ。聞けぬと言うなら、このアーク・ウオ

レスが相手になろう 不足はない筈だ」

闇の帝王の如く、凄まじい寒気を覚えるような「気」を発し続ける得体の知れない黒ずくめの男に対して、まったく動揺した様子もなく、堂々とした口上で応じる赤髪の男は、やはり本人が言う通り、本物の「赤の鬪神」と見て間違いなさそうだった。

現に、エディは背後に立っているにも関わらず、アークが黒ずくめの男に対して発している殺気で動けないでいる程である。

暫しの間、睨み合いが続いた。

先に動いたのは 黒ずくめの男。

(っ！)

仕掛けて来るか、と咄嗟に身構えたが、意外にも黒ずくめの男は踵を返して立ち去って行った。

その姿が完全に見えなくなったのを確認した後、アークは剣を収めた。

それと同時に、彼から放たれていた「気」も収まった。

「行ったか……それにしても、あんた、とんでもねえ奴に目エ付けられたな。エディ・クレイトンさんよ」

「!?!? 何故、俺の名を？」

「あー待て待て、警戒しないでくれ。俺はアキの仲間だな。今日あいつがあんたと会ってことは知ってたんだ」

「……そうか」

恋仲、との噂もあながち外れたものではなかったらしい。
実際にそうなのかはわからないが、そこそ親しい仲ではあると
言うことか。

エディは油断なくアークを見遣った。

自分が下手な行動を取れば、アキの身まで危険に晒す恐れがある
のだ。

「いきなり信じろって言われても、難しいか。まあ、是非もない……
ああ、話は変わるが、そう言えば対談が終わって、おっさん一人
で帰る途中だったのか？ さっきのような男が出て来たのを見ちま
ったら、アキが心配になって来ちまった。あいつ、無防備だからな
……」

「アキが心配」と言う言葉が、エディの胸に突き刺さった。

ほんの少し前、駐屯地に連行される彼女を苦い思いで見ただけ
なのだ。

感情の揺れが表情に出ていたらしい。

「何か知っているのか」とアークは顔色を変えた。

(正直に起きたことを話すべきか、否か……)

信用に足るべき人物なのかどうか、会って間もない僅かの間に判
断するのは困難である。

しかし、必死の形相で答えを迫るアークを見ているうちに、気が
付けば口が開いていた。

「……屋敷を出てしばらくは、彼女と一緒にだった。だが、彼女は治

安維持部隊の騎士三人に『捜査協力』が名目で騎士団駐屯地に連行されちまった」

「何だと」

かつとアークは目を見開いた。

抑えられていた「気」が再び周囲に漏れ出し、威圧感を増す。目の奥で怒りの炎がちらついているように見えた。

彼は、真に彼女の仲間のように見えた。

「……済まぬ。止められなかった」

「いや、あんたを責めている訳じゃない。ひとまず、何があったか事情を話してくれ。つつても、ここじゃあれだな。騎士の囲いを抜けるのが先か」

「あちらの方の道は、見張りが少ない。抜けましょう」

そう声をかけると、アークは素直に従った。

1 「回天の兆し」

「……成る程な。自分から進んで連れて行かれる等　その肝の座りっぷりはいかにもアキらしい」

はあ、と大きく溜め息をつくときアークは眉間を指で摘んだ。

あれから後、治安維持部隊の監視を目を潜り抜けた二人は、最寄りの新聞販売店の傍聴環境の整った部屋に入った。

そこでエディはアークに事情の説明を終えた所である。

「旦那……あの嬢ちゃんに色々振り回されているみたいだな」

気付けば旦那、と呼んでいた。

彼の「赤の鬪神」を名前で呼ぶのはどうにも恐れ多く感じていたので、無意識の内にその呼び方を選んでいたのかもしれない。

武人であれば、「赤の鬪神」を知らぬ者等いない。

かつて彼が優勝した武闘会においては、鉄壁の意思の力で魔術をことごとく無効化する武者として名を馳せ、戦場では矢を初めとする飛び道具を素手で捕まえて見せる等、あの「軍神」に勝るとも劣らない逸話を持っているのだ。

それには多少の誇張も混じっているだろうが、アークとこうして

面と向かっていると、時折発せられる「気」には自然と畏怖の念を抱かせるものがあり、話に聞く通り、並々ならぬ人物であることをエディは肌で感じていた。

「わかるか？ 最近じゃ俺が会う時に限って、丁度あいつがヤバい目に遭ってるモンだから、ハラハラさせられ通しなんだよ。無防備な癖に肝が太いから、質が悪い」

とは言え、話してみると、なかなか親しみやすい人柄の持ち主でもある。

アキに振り回されている様を嘆く姿は、まさに恋しい女を想う男の「それ」だった。

「赤の鬪神」も年頃相応な面もあるのか、と感じたことが、エディに親しみを抱かせた。

「……ああ、念の為に聞くが、アキに『連れ』はいなかったんだよな？」

「一人だったな」

「やっぱりそうか まったく、あれ程一人になるなと口を酸っぱくして言っていたのに、あのバカ……」

顔を赤くしたり、青くなったりしている様は実に滑稽である。

「 悪い。見苦しい所を見せた」

「いや。『赤の鬪神』の人間らしい様を見て、かえって好感を持った」

思った所を正直に述べると、「そりゃどうも」とアークは決まりが悪そうに言った。

「ところで、おっさんはこの後どうするつもりだ？ 一人で社に戻るのはおすすすめ出来んぞ。さっきの黒づくめ野郎がまた狙って来ないとも限らんからな。何なら、このまま社まで護衛しても良いが……」

「いや、それには及ばん。旦那はこのまままっすぐ嬢ちゃんを助けに行ってくれ」

「しかし」

「心配無用だ。嬢ちゃんを助けるためにも、対談記事を世に出すまで、俺だってむざむざ敵の手にかかるつもりはない。実は、この販売店は社までの秘密の抜け道がある」

「何と……！」

瞠目するアークに、「このことは他言無用に」と釘を刺しつつ、エディは笑いかけた。

「旦那。内心、嬢ちゃんの下に早く駆けつけたくて堪らないんだろ？ こんなオヤジを相手にしてないで、早く行ってやりな」

「……焦りが傍目にもわかる程、透けて見えているか？ 俺は」

「……案じ召されるな。心は滾っておるようだが、旦那は冷静さを保っている見える。なれば、足を掬われることもあるまいよ」

「その言葉、胸に刻んでおこう　　しからは、これにて」

そう言って会釈すると、アークは部屋を出て行った。
きびきびとした所作は、いかにも武の道を生きる男らしかった。

（久々に好漢に出逢った　　苦しい状況だが、ああした男がこちら側にいると知れば、不思議と何とかかなりそつな気がして来る）

しかし、彼の「赤の鬪神」をあのように必死にさせるアキも、只者ではないだろうとエディは感じていた。

人を惹き付ける「何か」を、彼女は持っているのだろう。

思えば、リベルタの活動拠点の一つであるアルツアード教会が活動を活発化させたのも、アキがこの街に姿を現してからである。

（風が　　吹いているな）

事態は風雲急を告げている。

この風は追い風か、否か。

先はわからないが、確かに回天の兆しは見え始めていた。

部屋に監禁されてから、どれ程の時間が過ぎただろうか？

はあ、と亜希がついた溜め息がまた一つ、空気に溶けて消えた。

あれから後。

騎士団駐屯地内にある、窓一つない事情聴取用の狭い部屋に閉じ込められ、そのまま放置状態であった。

(定時には扉から最低限の食事は提供されて、声をかければ衛兵さんがトイレには行かせてくれるって行つてたけど……)

さて、どうしたものか。

卓上にて頬杖を付きながら、亜希は嘆息した。

誰かしら姿を見せれば、こちらから正論を吹っかけて、ここから出すように交渉も出来ようが、このように放っておかれてどうしようもない。

抜け出そうにも、部屋は三方が壁であり、残り一方は堅固な扉が一つと、その前に衛兵が控えている。

自分には、鍵を開けるような技能もなければ、仮に奇跡的に扉を破ったとて、衛兵をのす程武に長けてもない。

万事休す、か

(いや、何もやってないのに、やる前から諦めちゃダメだ……！)

ふと、脳裏に偉人の逸話が浮かんだ。

幕末の志士、吉田松陰は獄中にて毎月何十冊もの書を読み、他の囚人達と共に何と勉強会を開いていた。

僕はまだ処刑されていない。国も危機に瀕している。それを思えば、のんびりしてられる訳がなく、一日足りとて学問を忘れてはならない。

人は順境にあれば努力を怠りやすい。逆境にあるからこそ、

努力して得るものがある。

囚人の身でありながら、かくも前向きに生きることが出来た人もいるのだ。

そうであるなら、自分も囚われの身であることをただ嘆くより、何か出来ることを探すべきではないか。

本当に、今の自分には何も出来ないのか？

自身にそう問いかけながら、亜希は四方に目を向け 扉の所で視線を定めた。

一人だと思っていたが、「外に」衛兵という交渉相手はいるではないか。

声をかけても初めは無視されるだろうが、構わず話し続ければ良い。

説得出来る可能性はまだゼロとは言えないのだ。

また、トイレに出る際に衛兵をのすことは出来ずとも、道すがら、もし人とすれ違つことがあれば、その者達にも声をかけることは出来る。

もしうるさい等と言われ、口を封じられたら封じられたで、また出方を考えれば良いことだ。

(何弱気になつてたんだろ。探せば出来ることは一杯ある)

それに、いつまでも亜希が戻らないとなれば、教会のみんなが黙ってはいないだろう。

希望がまだ沢山残っている。

ぱん、と景気付けに頬を叩くと、亜希は席を立って扉の前に腰を下ろした。

交渉開始だ。

閑話「奇策」

亜希が監禁されているのと同じ頃、オズウェルド本土の南西に浮かぶピーキング諸島周辺においては、不穏な空気が漂い始めていた。

このピーキング諸島はオズウェルドが古くから領有権を主張している島々なのだが、多くの地下資源が埋蔵されている可能性が明らかになるや否や、隣国のボルティモアが領有権を主張し始め、それ以降は両国の睨み合いが続いている。

ボルティモアが近くに軍艦を派遣して偵察や演習をしたり、軍人が漁師を装って不法操業するのを、オズウェルド海上騎士団傘下の海上警備部隊が追っ払うと言うことが、ここ数年は頻発していた。

と言うのも、オズウェルドに保守的な政権が続いていた頃はボルティモアに対し、毅然とした対応をしていたために一定の抑止力がかかっていたのだが、近年は極左政権がこの国の政を担っており、ボルティモアが領海侵犯をしても大抵は見ても見ぬ振りをして、口先だけでも「遺憾の意」を示せばまだ良い方、と言った有様なので、ボルティモアがつけ上がる一方となっているのだ。

この半月程は、台風がしばしば周辺の海域を通過していたこともあり、ボルティモアも流石にこんな時期に船は出さないだろうと海上警備部隊は高を括っていたのだが、それが間違いだった。

軍人が漁師を装い、「難破を免れるため」との口実でいつの間にか島に上陸しており、現在、居座りを続けているのだ。

それが判明したのは、つい数刻前のことである。

ピーキング諸島上陸問題で、城中は紛糾した。

力尽くでも退去させるべきと主張する議員達と、台風の規模が実際大きかったため、本当に難破しかけた可能性も否定出来ず、人道
上、しばらくの滞在は認め、穏便に帰国を促すべきとする議員達との間で、意見がまとまらないのだ。

ボルティモアの見事な奇策であった。

穏便な対応を主張する議員の中には、ボルティモアに金を掴まされた者や同国のスパイが少なくないことを、ゼノは特殊部隊の報告から知っていた。

(隊長不在時に、この危機か)

謀られた、とゼノは思った。

今回の失態は、「表現の自由」の規制問題に保守派の目が向いている隙を突かれた形で起きた、と言って良い。

ボルティモアと連携して動いた勢力の筆頭は、間違いなくラスター・マツシュモールであろう。

現政権は、ボルティモアとの商業的な結びつきを重視している。

上陸について抗議した結果、ボルティモアが機嫌を損ねるのを恐れて、強くは出られないであろうことは、簡単に予測がついた。

内閣の面々にまつたく期待が出来ない現状において、自分達
の力で出来ることは何か？

ゼノがあれこれと策を巡らしていた所に、特殊部隊員の一人が報告に訪れた。

強張った表情を見て、嫌な予感がした。

「何事だ」

「申し上げます　オズウェルド海沿岸にボルティモアの軍艦が座礁しているのを発見しました」

「何っ！」

思わず、声を荒げていた。

上陸問題に気を取られ、完全に不意を突かれた形となった。

ピーキング諸島上陸でさえ、本土上陸のための目眩ましに過ぎなかったと言うことが。

揺れる心を必死に押さえ付けながら、努めて平静を装った声で「軍艦内にはどの位の兵がいたのか」とゼノは問うた。

「それが……我々が確認した時には既に、もぬけの殻だったので
無人だったと聞いた瞬間、不吉な予感がした。

「すぐに周囲の搜索にかかれ！　敵は既に拠点を築いている筈だ」
確信を持って述べた。

この好機を、相手が逃す筈がない。

「既に搜索は開始していますが、未だ姿が見えません。もしや、こ

れは真に難破した船なのでは……」

「それはない。必ず上陸している筈だ！ 見付からぬと言つなら、
搜索の範囲を広げよ！ 良いか！」

「はっ」

「では行け！」

隊員が去るのを見届けた後、ゼノは頭を抱えた。

状況は最悪である。

ボルティモアに相当な策士がいるのは間違いない。

（だが、やられっ放しでいられるものか。海から俺に喧嘩を売った
こと、後悔させてやる）

実はかつて、ゼノは「海賊王」として名を馳せた過去がある。

未だにその名は畏怖の念をもって語り継がれている程だ。

隊長であるアークがいない今、副隊長のゼノは遠からず出勤せざるを得ない事態となるであろう。

さすれば、城に待機する特殊部隊の指揮権は、近衛騎士団長を隊員と兼任するガルムに預けるのが妥当だ。

ガルムは特殊部隊において、アーク、ゼノに続く実力者なのだ。

（まずは、ガルムに会わねば。その次はローザだ。アークとも何とか連絡を……）

時間の猶予はない。

敵が動く前に、何としてもそれを阻止しなければならない。

(もし、それが適わなければ……泥沼だ)

暗い予想を振り払うが如く、ゼノは椅子を蹴るように立ち上がり、部屋を後にした。

2 「光と闇」

気付けば、狭い部屋の床一面に多数の騎士が腰を下ろしていると言っ、不思議な状態になっていた。

皆が亜希の言葉に聞き入り、合間に現内閣の政権運営への恨み言を並べ、国を憂えている。

監禁されている小娘一人を騎士が囲む様は、何とも異様な光景だが、自分の言葉が彼等の心に響いたのは、一重に今この国が置かれている危機的な状況によるものだろう、と亜希は感じていた。

と言うのも、亜希が監禁されている最中に何と、隣国ボルティモアの軍人がオズウェルドの領土であるピーキング諸島に上陸を強行し、更に間をおかずに本土にも乗り込んで来た、と言うのだ。

国内の保守勢力の目が、此度の情報弾圧に向いている隙に起きた最悪の事態だが、それが皮肉にも亜希を救うこととなった。

城内では官房長官が騎士団の出勤を進言したが、首相のイルダールは軍事アレルギーが強い新聞社等の批判を恐れて、騎士団本体の投入は見送り、海上騎士団傘下の海上警備部隊と陸上騎士団傘下の治安維持部隊の二隊のみをピーキング諸島及び本土の現場に派遣した。

しかし、武器使用許可が憲法に抵触するために下りず、一方的に攻撃されていると言っ。

その現状に、騎士達は憤懣やる方ない様子であった。

そんな彼等に対して、現政権の運営を批判し、正論を主張する亜希の言葉は胸に響いたのだ。

「しかし、殉職者を出さずに済んでいるのは、宮廷魔導師閣下のお陰だ」

不意に騎士の一人が口にした単語に、亜希は敏感に反応した。

「魔術で援護している？　でも、宮廷魔術師団に出動命令は出ていない筈じゃ……」

「独断さ。自分の首をかけて、我々を援護して下さっているんだ。魔術師団は動かせないから、閣下お一人で、な　されど、隊員すべてを護るような大規模な魔術を長時間行使し続ければ、いくら閣下でもお身体が持つまい……」

(ローザ……！)

術者のイメージに基づいて発動するタイプの精霊魔術は、術者の体力を消耗する。

かつてアルツァード教会の書庫にて学んだ魔術の知識が、亜希の胸を突いた。

この危機的状況において、何故騎士団本体と魔術師団に出動命令を下さないのか？

国民を護ろうともしない政府に、果たして存在価値があると言えるだろうか？

(私はこのまま、友人の危機を傍観するしかないの……？)

亜希が胸の中に広がる熱い思いを持って余していると、突然自身への来客が告げられた。

「客とは……誰ですか？」

「ラスター・マツシユモール幹事長です」

「なっ!？」

告げられた名を聞いて、亜希が思わず声を上げたのと同時に、騎士達のざわめきが周囲に広がった。

今までずっと表に出て来なかった闇將軍が、自分のような小娘に会ってどうするつもりなのか？

意図がさっぱり読めないため、何とも不気味だが、今はそれを気にしている場合ではない。

「皆さん。早く部屋を出て下さい！ 私と親密な関係にあると疑われれば、皆さんにまで累が及びかねない」

「されど、貴方は罪を犯した訳でもないのに……!」

「とにかく、早く!」

急かすように騎士達に退出を促す。

それでも何人かは亜希の身を察じて残ろうとしたが、半ば追い出すようにして部屋を出て行かせた。

それから暫しの後 扉のノック音が闇將軍の訪問を告げた。

衛兵が扉を開く時の音は、さながら地獄の釜が開く音のように亜希の耳には聞こえた。

コツ、コツと律動的な足音と共に、がっしりした体型で長身の男

が入って来る。

新聞等で顔は知っていたが、実際にあってみるとガタイの良さに圧倒された。

武人上がりで政治家になったタイプなのだろうか。

視線を上に向け、目が合った瞬間　ゾクリとした。

日焼けした顔の中で、琥珀色の双眸が浮き上がって見える。

目を縁取る異様に大きな涙袋が目力を強調していた。

その両眼が、真っ直ぐに亜希を射貫いている。

獰猛な肉食獣の目だ、と思った。

しばらく睨み合いを続けて　先に口を開いたのはラスターだった。

「ふむ　私の視線を正面から受けて、自分から逸らさなかった女性は何で三人目だな」

第一声は、思いの外穏やかな口調だった。

そのお陰か、亜希は冷静さを保って応じることが出来た。

「それは光栄です。差し支えなければ、他の二人の名をお訊きしても？」

「良いだろう。一人は亡き皇后陛下。もう一人はグロウ威尔宮廷魔導師閣下だ」

紡がれた名に、亜希は息を漏らした。

両者とも天下に名高い絶世の美女である。

また、智謀にも優れていることで知られていた。

皇后陛下はその辣腕を振るい、前国王陛下と共に善政を敷いた。

宮廷魔導師であるローザは、安全保障面での活躍は言うまでもなく、新しい魔術の開発でもその名が知られている。

「お二人の前では、私なんて見劣りしてしまいますね」

正直に思う所を述べると、「いや」とラスターが呟いた。

「確かに君は二人に並ぶほど器量好しいではない。だが、その目は同じだ」

「目？」

「ああ。亡き皇后陛下と近いものを感じる」

そこで一度言葉を切ると、ずいとラスターは詰め寄った。

「保守の一派の旗頭になれる目だ」

「それはどう言っ……」

「惚けなくても良い。私があと少し来るのが遅ければ、同情した騎士の内の誰かが君をこっさり逃がしていただろう。ここへ来る道すがら、出逢った騎士は皆、私を恨みがましい目で睨み付けて来おつた。『アキ・シジョウ』を解放しろと言わんばかりにな」

急にラスターの語気が強まった。

圧迫感が全身を襲う。

それに怯みそうになる自分を叱咤して、亜希はラスターを見据えた。

笑え。笑って見せる。

「はは……貴方は超能力者ですか？ 目を見ただけで何故そうだと断言出来るんです？ 日頃政争に明け暮れているせいで、少々被害妄想になっっているのでは？」

「ふ、被害妄想と申すか。私はこの手の勘は外れたことがないのだがな。今まで幾度も死線を掻い潜って来た身故に、危険な臭いには敏感だと自負しておる」

ラスターは愉快そうに笑うと、キラリと瞳を瞬かせた。

「とは言え、絶対外れないとは言いつてもいいでしょう。それよりも宜しいのですか？ お忙しい筈の幹事長がこんな所においでになられて」

「要らぬ心配だ」

さながら、狸と狐の化かし合いのような会話であった。相手に言質を取られないよう言葉を選びながら、互いに相手の考えを探るような台詞を投げかけている。

「そうですね。それにしても、わざわざ私の所へ足を運びになられた目的は何なのです？」

「さて、何だろうか」

「いつそ、はっきりとお答えを。情報弾圧に刃向かい、政府の内部情報を暴露し続ける小娘が好い加減目障りになって、『消しに来た』のだ、と」

お前の肚の内はこつだろつ、と直球で指摘すると、ラスタ―は目の色を変えた。

3 「博打」

それを一瞥しつつ、ラスターに背を向けて亜希は椅子に座り直した。

感情を押し殺しながら、震えそうになる身体を叱咤し、精一杯の虚勢を張る。

「さあ、『消す』ならどうぞ。逃げも隠れも致しません。あなたは武術の嗜みがあると見える。抵抗した所で、私等、あっさり殺られてしまうに違いない」

亜希の言に、ラスターは口を噤んだままにいる。
戸惑っているのだろうか。

「何もしないなら、会話を続けるとしましょうか？」

「……いや、それには及ばぬ」

そう述べると、ラスターは溜め息をついた。

「この僅かな間に、相手の性格を見切るとは……末恐ろしい娘だな
此度は私、いや俺の負けだ」

「はい……？」

唐突な敗北宣言に不審さを抱いたが、気が付けばその感情が思わず口から漏れていた。

「空惚けるでないわ 自分を狙って来た相手に向かって『私を殺

しに来ただろう』と指摘して、まず毒気を奪った。その上で、俺がそれなりの武人だと容姿から判断して、無防備に背中を晒したんだろう？ 武の心を持つ男なら、背中から斬るなんて真似は出来ぬ。ましてや相手が女子なら尚更だ。事ここに至っては、もはや斬るに斬れぬわ。今は、お前を斬るのが惜しいとさえ思っている」

ラスターの口調はいつの間にか砕けたものへと変わっていた。

「どうだ、計算尽くだったのだろうか？」

「断定口調ですね……そこまで考えて行動した訳ではないですけど」

しかし、ラスターの指摘はそう外れたものではなかったため、亜希は言葉を濁した。

実は最初にラスターと目が合った刹那、確かに殺気を感じたので「ああ、この人は私を殺しに来たのだな」と直感していた。

まともにぶつかれば命はないだろうことは、容易に想像がついたので、頃合いを見計らって相手の意表を突こうと考え、咄嗟に思い浮かんだ逸話を自分なりに実行に移してみたのだ。

その逸話は、坂本龍馬と千葉重太郎が勝海舟を暗殺しに行った時のエピソードだ。

この際、龍馬が海舟に弟子入りしたのは有名な話である。言葉で翻弄し、あえて隙を見せると言う手法は一步間違えば命取りだったが、幸いにもそれが成功した。

「その口振りでは、何も考えていなかった訳ではないと言うことだろうか？ 謙遜等要らぬわ。もっとも、その策が失敗していたとしても、お前の命は助かっていただろうか？」

「え……？」

首を傾げる亜希を余所に、ラスターは扉へと視線を投げて笑った。

「感じぬか？ 少し前より、あちらから僅かだが殺気が漏れ出しておる。隠れずとも出て来れば良かるう？」

ラスターの呼びかけの直後、衛兵によって扉が開けられ、現れた人物に亜希は目を見張った。

見上げる長身。

遅しい身体。

赤い三つ編み。

(アーク……！)

彼はいつも亜希が危機の時に、測ったように現れる。

それは天意か否か

腰に差した剣に手を添え、いつでも抜刀出来る構えを取り、アークは油断なく部屋へと入って来た。

視線はぴたりとラスターに合わせて、逸らさない。

「見る。この様子じゃ、俺が少しでも怪しい素振りを見せようモンなら、衛兵の制止なんざ撥ね付けて、扉を力尽くで壊してでも中に入って来てただろ。しかも、助っ人が彼の『赤の闘神』と来た。どうやら今、天はお前に味方しているらしい」

そこまで言うと、ラスターは踵を巡らせた。

「今日は一先ず退こう。お前とは改めて公の場にて、正々堂々やり合いたいものだ、アキ」

「……私は出来れば二度とお会いしたくありませんけどね」

「ふっ、そうつれなくするでない そちらの『赤の鬪神』殿もそうかっかするな。俺はもう帰る故、心配無用」

そう言っつて、愉快そうに笑いながらラスターは部屋を辞した。

去って行く足音が聞こえなくなった後、少ししてアークが動くのを視界の端に捉え いつの間にか目の前が真っ暗になっていた。

何やら少し息苦しい。

首を持ち上げて 亜希は固まった。

(……抱き締められてる……!?)

見ると、すぐ傍にアークの頭があり、背中と腰には逞しい腕が回されている。

どう見ようが紛れもなく アークに抱き締められている状態であつた。

ハグの文化がない日本人は、動揺する他ない。

「……マッシュモールと一緒にいるのを見て、肝を潰したぞ」

「ええっと、これはその、成り行きで……」

「聞けば、今日一人で出かけたらしいな？ 前に俺が一人になるな
って言ったこと、すっかり頭から抜けてるみてえだが」

段々と、アークの口調が説教じみたものになって来た。
どうやら怒っている……らしい。

「あの……な、名前が売れて大々的に活動するようになってから、
あからさまに狙われるようなことはなくなって、些細な嫌がらせ位
しか受けなくなったから、大丈夫かな、と……」

「しばらく狙われてなかったからって、ずっと安全だと言う保障が
どこにある？ ここに来る途中だって、アキが今日会っていた記者
のおっさんが、不審者に襲われている現場に出くわした」

記者、と聞いて心臓が凍り付いたように感じた。

「え……エディさん無事だったんですか!？」

「不審者は追っ払った。心配するな。あのおっさんは無事だ」

「良かった……」

ほう、と息をつくのと、アークが亜希の頭を撫でた。

「今回の件でよくわかったろ。お前個人を狙ってくる奴もいりゃあ、
真実を告げようとする人間であれば、誰彼構わず口封じをしよう
とする輩が少なからずいるんだ。頼むから、自分の立場を自覚してく

れ。アキは今や、国を憂える者達の精神的な柱の一つになりつつあるんだぞ」

「精神的な柱なんて、そんな大袈裟な……」

「そう思うなら、街の本屋に顔を出してみる。『リベルタ』の名前がどれだけ本の誌面に踊っているか確かめて見れば、俺の言いたいことがわかる筈だ」

自分の身を案じ、真剣に告げるアークの声音に亜希は背筋を伸ばした。

「……すみませんでした」

「わかれば良い」

そう言うと、再びアークは亜希の頭を撫でた。ちよつど撫でやすい位置にあるのだろうか？ その感触は久々で懐かしく、心地好かった。

「……だが、俺もアキを説教出来るような立場じゃないな」

「アーク……？」

不意にアークの声のトーンが下がり、訝しく思ったのが声に表れていた。

「そもそも、アキをこんな危険な世界に引っ張り込んだのは俺だ」

「それは違います」

悔いるように呟くアークの声に間髪入れず、被せるように言った。

「何が違う？ 事実だろう」

「いいえ、この道を進むと決めたのは他ならぬ私です。アークはちやんと選択肢を示してくれました」

「しかし、動機は元の世界に帰るためだった筈だ。今回みたいに命を狙われてまで……」

「お気遣い無用です。今はもう、祖国そっくりのこの国がすっかり好きになっちゃって、ここに骨を埋めても良いかなって思ってる位ですから」

「アキ……」

アークは悲しげな表情を浮かべて、亜希を見ていた。見ているこちらが居たたまれなくなりそうな程、悲痛な面持ちだった。

「そんな顔しないで下さいよ。私、本心で言ってるんですから、ね？」

そう言って笑いかけると、亜希を抱き締める力が強くなった。

少々苦しかったが、耐えられない程ではなかったため、アークの気が済むまでじっとしていた。

4 「出立」

どの位の間、そうしていただろうか？

「……いつまでも、こうしている訳にはいかないな」と呟いて、アークは抱いていた亜希を放した。

その時、ふと疑問が浮かんだ。

アークは何故ここに入って来られたのだろうか、と。

「あの」

「ん？ どうした」

浮かんだ問いをそのまま口にする、「ああ、確かにそれは気になる所だろうな」とアークは笑った。

「俺は昔から総司令と懇意でな。無理言って融通を利かせてもらった」

「い、今総司令って言いました!？」

亜希はアークの返答に目を剥いた。

この国で総司令とは、陸・海・空の三つの騎士団を統括する長であり、防衛大臣に次ぐ地位を指す。

さらりと「総司令と懇意」だと言えるアークは何者なのだろうか。

「ああ。総司令に、客将として迎える旨を書状に認めてもらった

『この危機を乗り切るまで』と言う条件付きだがな。一時的にせ

よ、今俺は將軍だ。騎士団駐屯地に入る位、平気で出来る。まだ普段着で格好は付かねえが……」

「成程　そう言えば、前に私が脅されている所を助けに来てくれた時には、海軍軍人の格好をしてましたが、あれも……」

亜希は声を潜めて問うた。

この話が外の騎士達に漏れては、アークにとって不味いかもしれないと思っただからだ。

「　お察しの通りだ。今回は前と違って、大っぴらに『赤の鬪神』としてだがな」

アークも小声で答える。

一体、彼が国でどう言う位置を占める人物なのか、非常に興味が惹かれる所だが、そこを訊ねることはしなかった。

この辺りの話題になると、アークはいつもぼかして話しているように感じていたが、それには恐らく理由があるのでは、と思っているからだ。

もし、国の機密に関わる人間ならば、うかつにものを言えば、周囲の者を危険に晒しかねない。

そんな事態を避けるために、亜希や教会の皆には素性を明かしていないのではないか。

以前にそれを仄めかすようなことを、カイも言っていた。

「けど、待つて下さい。『この危機を乗り切るまで、客将として迎え入れられた』と言うことは、現地に赴くと言うことですよね」

「ああ、そうだな」

「でも、騎士団本体の出陣命令は出ていませんよ?」

首相は海上騎士団傘下の海上警備部隊と、陸上騎士団傘下の治安維持部隊の二隊のみの派遣を指示したに過ぎなかった筈である。

「無論、承知の上だ。総司令は首覚悟で俺を戦場に送り込むことを決めた。そして……」

「将、軍中にありては君命を受けざる所あり、とな」

突如、第三者の声が話に容喙した。

振り向くと、立派な仕立ての黒い軍服を纏った壮年の男性が開いた扉の前に立っている。

三国志や戦国時代の武將を想起させるような、立派な黒い口髭が印象的だ。

「……気配を消して現れるな、アルフ。アキが驚いてる」

アークは振り返りもせずと言った。

唐突な登場にも、さして驚いてはいない様子だった。

「あの、驚くと言えば、今出た名前にもびっくりしたんですが……アルフってまさか、貴方はアルフ・ゲルナー総司令ですか!？」

「いかにも。アキ・シジヨウ殿。お初にお目にかかるが、瞳の澄んだ素敵な方ですな」

「……あ、ありがとうございます」

初対面でいきなり褒め言葉を投げかけられ、亜希は少し面映ゆくなった。

「ふふ、女嫌いだったアークを『落とした』女性と直にお会い出来て光栄ですぞ」

「落とす……？」

落とす、とはどう言う意味なのか？

首を傾げる亜希に、アルフは微笑を浮かべている。

「アルフ 俺に喧嘩を売りたいなら、喜んで買ってやるが？」

笑顔のアルフに対し、アークは対照的に怖い顔をして言った。

柄に手をかけているが、果たして本気が否か。

「この首をかけて無茶な要求を呑んだのだ。少しからかう位良からう」

「……やはり、先の言はわざとか」

「そのように、些細なことで目くじらを立てずとも良からう。それよりも、今後の話だ」

「話を逸らしたな……後で覚えておけ」

低い声で脅すように言ったアークを余所に、アルフは話を続けた。

「まずは、シジヨウ殿についてだ。マッシュモールめに狙われているとはつきりわかった以上、アークも彼女の身が心配な筈。さりと

て、戦場に連れて行くのも危険だ。私の下で保護しても良いが、どうされるおつもりか？」

「それはもつともだが……アキ、お前はとうしたい？」

「え……」

突然話を振られて、亜希は戸惑った。

ペンでの戦なら出番もあるだろうが、生身の戦において、今まで日本でぬくぬく暮らしていた自分に出番があるだろうか？

こちらに来た当初、まだ政府から睨まれてもいなかった状態であっても、亜希はぼんやりしている所があつて、一人で出歩かせるのは不安だと言われていた位なのだ。

この戦に関わつても、足を引っ張るのが関の山ではないか？
しかし、そんな思いと同時に、

友人のローザがその身を削って必死で騎士達を護っており、
また、今からアークも戦場に向かう……自分の大切な人達が大変な状況に置かれているにも関わらず、それをただ傍観していて良いのか？

と言う相反する思いもあり、両者が激しくぶつかり合い、亜希の胸中で暴れていた。

胸が、苦しい

返答に窮して俯いていると、アークが亜希の頭に手を乗せた。
じわりと伝わって来た人肌の温かさで、少し胸の痛みが軽くなつた。

「悪い……思い詰めさせちまったみたいだな」

「いえ、アークは選択肢を示してくれただけですから 戦では私はお荷物にしかならないでしょう？」

「俺は、そうは思わないから訊いた」

えっ、と思わず口にして顔を上げると、真っ直ぐにこちらを見つめているアークと目が合った。

真剣な表情を浮かべている。

「戦は、生身だけの争いじゃない。作戦を練ったり、兵糧や情報を集めるのも戦の内だ。情報の取り扱いなら、今や本職のようなモンだろう？」

「本職なんて……買い被り過ぎです」

戦時の情報収集と言えばスパイ等が思い浮かぶが、自分にそんな役割が勤まるとは思えない。

「俺は逆に、アキは自分を低く見過ぎだと思っけどな 娯楽媒体から世論に意見を発信して一大旋風を巻き起こし、政府から目を付けられたら、それを逆手に取って『表現の自由』を訴える対談企画を新聞社に持ち込んだ。しかも、相手に著名人を持って来て、潰しにくいように保険をかける……奇抜な発想の豊かさに加え、それを実現させるだけの力も持ち合わせてる。これを人物と呼ばずして、何と言っんだ？」

アークは亜希の耳元に口を寄せ、囁くように言った。

新聞紙上での対談企画は、まだ公にはされていないことなので、

部外者であるアルフに聞こえないよう配慮したのだろう。

「そのどちらも、私一人じゃなくて、みんなで成し遂げたことです」「でも、どちらも発案したのはアキだ。こう言えば否定するだろうが、『リベルタ』の牽引役はお前だと俺は思っているし、政府側も恐らくそう捉えている。アキばかり目を付けられるのはそれが理由で、お前が女だからじゃない」

否定しても、否定しても、それに被せるようにアークは亜希が戦に向いている面も持っているのだと語り続ける。

その口調は、次第に熱を帯びて来た。

「戦とは敵を欺くもの。その創造力は大いに活かせる筈だ」

「……何で、そんなに私を高く買って下さるんですか？」

「能力がある、と感じるからだ。それに、アキが謙虚を通り越して、自分を卑下し過ぎているように見えたから、率直に俺の思う所を述べた。でも、どうするかはお前の自由だ。強制はしない」

アークはそこまで述べると口を閉じた。

視線は亜希に留め置いたままである。

返答を待っているのだろう。

その後、暫しの間を置いて　　亜希は口を開いた。

「……ずるいです。最初から、私が本心では何かしたいと思っっているのは、お見通しだったんでしょ？　アーク」

「何となくだったが、な」

アークは悪戯っぽく笑って見せた。

「戦向きの能力は持っていないと言う所を真つ向から否定されて、そんなに評価されては、引くに引けないじゃないですか」

「なら、来るか？ 俺と共に」

「ここで逃げたら女が廃りますよ。もう肚は決めました」

亜希が笑い返すと、アークに頭をわしわしと撫でられた。その光景を、アルフは啞然とした表情で見つめている。

「これは驚いた……アーク、はじめから連れて行くつもりだったのか？」

「実は俺も、自分で自分がよくわからん。アキの身を危険に晒す不安もあるのに、同時に俺はこいつの才を愛おしいとも思うんだよ」

「將軍が人材を麾下に加えようと、必死になって勧誘しているようにも見えたぞ」

「はは……上手い言い回しをする 言い得て妙だ」

アークはそう言いながら、完爾として笑った。

5 「作戦会議」

「さて、アークよ。今の状況でいかに手を打つ？ 進んで自分を売り込みに来た位なのだから、何か策があるのだろうか」

「無論だ 今、我が国が防戦一方に追い込まれている様を見て、『やはり、騎士団は左翼政権に縛られてロクに動けないのだ』と、向こうは高笑いしているだろう。その心の隙を突く」

二人のそのやり取りで、場の空気が一変した。取り調べ室が今や作戦会議の場となっている。

「いかに突く？」

「偽報を流す。ボルティモアの泣き所はどこだ？ アキ」

突然アークに話を振られて亜希はどきりとしたが、気負わずにいつもの会話をしようと心掛けた。

自分が今まで調べた限りでは、ボルティモアの政情は中国とよく似ている。

「力尽くで領土を広げたために、少数民族と軍部の争いが絶えないことです。また、全体主義国家なので、表現の自由や思想・良心の自由を政府が否定し、統制下に置いていることに対する国民の不満が鬱積していることも挙げられますね」

「俺もそう思う。手っ取り早いのは、『どこかの少数民族が反乱を起こした』ことか、『民主化・自由化のデモが起きた』と言う偽報

を流すことだ。出来れば実際に人を送り込んで、煽動する所までやりたいが、残念ながらそこまでする時間の余裕はない。だが、大きな効果はなくとも、動きを鈍らせる効果はある筈だ」

「流す時を計ることが肝要だな。それに、時間が経てば相手もいずれ嘘であったと気付く」

アルフは顎に手を添え、思案顔で言った。

「だから、この戦は短期決戦となる。機を逃さず、『いかに相手を早く追い返すか』にすべてかかっていると云っても良い。そもそも最近では軍事予算を削られすぎていて、まともに相手をするだけの余裕もないんだが。まあ、軍資金ももう少し、余所から融通してもらいたい所だな」

「あてがあるのか？ 今でも既に国土交通省の『海上交通』関係の予算を、海上警備部隊を通じて騎士団の予算の増額部分として使っている」

「ちょ……ちょっと待って下さい！」

さらりとかなり内密な話題を出されて、亜希はぎょっとした。

今、民間人の自分が聞いて良いような話題ではない。

そのことを指摘すると、何故かアークとアルフは不思議そうな目でこちらを見た。

「作戦立案に関わるなら、国家機密に触れても不思議じゃない。そう言った点を避けて話していたんじゃ、アキが正確に全体像が把握出来なくて、適切な判断も下せなくなるだろうが」

「それは、確かにそうなんですが……！」

アークの言っていることは、もったもである。

正しい現状認識なしに、問題に対する適切な解決策は打ち出し得ない。

しかし、それとこれとは別問題なのだ。

そう述べようと口を開きかけた時、それをアルフに目で制された。強い眼力に一瞬こちらが気圧された隙について、アルフが口火を切った。

「シジヨウ殿。作戦に関わった以上、一時的とは言え、貴方は今軍人なのだ。機密情報を知るリスクを負うのが前提でな。先程『肚は決めた』とそうおっしゃっていたが、まさか、それを覚悟していなかった訳ではあるまい？」

がつん、と頭を殴られた気がした。

お前は軽い気持ちで戦へ関わることを決めたのか、とアルフは亜希に問うているのだ。

「一般人気分で横から意見を言っているつもりでいるなら、帰れ」とまで言わなかったのは、彼の優しさだろう。

在野で、本の書き手として情報を扱っていた時と今では、状況が違うのだと言うことを、亜希は今初めて、本当の意味で実感した。

今、亜希は民間人ではなく、軍人なのだ、と。

「……アルフ、言葉が過ぎるぞ」

「いいえ、アーク。私の覚悟が足りていなかったんです　しかし、

軽い気持ちで関わることを決めた訳ではありません。お許し頂けるなら、どうかこのまま同席することをお許し下さい。総司令」

「それを決めるのは私ではないな」

アルフはにやりと笑うと視線をアークに移した。

「俺はアキの思いを尊重する」

どうやら、許してもらえようだった。

「……ありがとうございます」

深々と頭を下げると、二人から止めてくれと引つ張り上げられた。日本式のお辞儀の仕方は、こちらでは大袈裟に見えるのかもしれない。

「じゃあ、仕切り直して話の続きをするぞ　俺が考えているのは、『漁業補償』名目で福祉関係の予算から軍資金を融通してもらって、今回の不足分を補填するって方法だな。今の左翼政権は『バラ撒き』が大好きだから、割合簡単に引つ張って来れるだろうと俺は踏んでいる。最近の台風で実際に被害に遭っている沿岸部の国民も少なくないしな」

「成程。斯様な方法があるとは……思い付きもしなかった」

「漁業と言えば……敵と同じ手を使ってみるのも意表を突けるかもな。向こうが軍人が漁師を装うと言うなら、こっちはいつそ漁船部隊でも編制して現地に乗り込んでみるのも悪くない。騎士団本隊を動かす命令が出ていないなら、民間人を装って近付き、油断した所

を攻めるってな。内閣の連中に聞かれても、騎士団とは関わりのないものとして、『知らぬ存ぜぬ』を通すことも出来なくはない」

「……お前はとんでもないことを考えるな、アーク」

「あの、でも思っんですけど、今までの国境付近のいざこざを見る限り、民間人に見えても攻撃して来ない保障はありませんよ？」

「承知の上だ。向こうは反オズウェルド教育が盛んだから、民間人だろうが憎い相手に違いはないしな。だが、必ず隙を生じさせることは出来る筈だ。それに、攻撃されたら『民間人に被害が及んだ』として、派手に世界にアピールすれば良い。昔から人権を尊重しない国として問題視されている分、そこを叩かれれば国のイメージダウンは避けられないからな。今回の戦も内閣はまともにも言い返してもしないで、報道機関を金で黙らせようとするだろうが、そこは民間から声を上げて行く。国民も長年平和に慣れ親しんでいたために、平和ボケしていたとは言え。今回実際に身の危険を肌で味わったから、黙ってはいない筈だ。それを煽るのは……」

「私と『リベルタ』の仕事、ですか？ アーク」

「いかにも。そうなった時は頼むぞ、アキ」

そう言ってアークはぼん、と亜希の肩を軽く叩いた。

未だ少し、亜希が先の緊張を引き摺って固くなっているのをアークは察して、気楽に行けよと言われたように感じ、胸が温かくなつた。

6 「狙い」

「あつ、あの……ちょっと良いですか？」

ふと疑問に思ったことがあったので、声を上げた。

「どうした？」

ここで「何だ」と返さずに「どうした」と声をかける辺り、些細な点だが、亜希はアークの人柄の良さを感じた。

「今回敵の数はどのくらいいるんですか？ 私がここで聞いた話では五百人程と少数で、見付かっている軍艦も1隻だけとのことですが……」

「流石シジヨウ殿、お耳が早い。その情報通りだ」

答えたのはアルフである。

「うーん……本当にそれ程少数となると、敵は本気ではない、と私は考えますね。今回はこちらがどのように動くのか、様子を探るのが主目的で、ある程度経てば、撤退するものと思います」

「何でそんなに楽観的な予測が立てられるんだ？」

そう問ったのはアークだ。

「いえ、これは決して楽観的な予測ではないんですよ。表向き『撤

退』して行くように見えるでしょうから、そう述べただけであって、実際は今回の戦いの後、『内戦状態』になると思います」

「そう考える根拠は？」

「昨年ボルティモアで成立した『国防動員法』が根拠です。これによって有事の際、海外在住のボルティモア人も皆、本国の政府の指示に従って動かなければいけなくなつたとか。私が考える今後のシナリオはこうです」

そこで一度言葉を切り、二人の目を正面から覗き込んだ。

「ボルティモア兵の大半は船で引き返すでしょうが、その一部は騒ぎに乗じて、現場から姿を眩ますでしょう。頃合いを見計らつて、民間人に成り済まし、大方、我が国に滞在しているボルティモア人や、親ボルティモア派の政治家・財界人等の元に身を寄せます。そして、あらかじめ出されていた本国からの指示通り、この国の協力者と共に作戦行動を開始する……とこんな所ですかね」

亜希が予想を淡々と述べた後、場を重い沈黙が支配した。
自分では、少し想像が膨らみすぎている点もあるのではと思うものだったのだが……

「一見突飛だが……笑えねえな」

暫しの後、ポツリとアークが一言溢した。
それに、アルフも同意を示すように頷く。

「確かに、この状況では『国防動員法』が実施されてもおかしくない。彼の国は『戦わずして勝つ』ことを戦の理想としておるしな。

まともにぶつかり合いをするより、内から我が国を崩壊させようしているとするシジョウ殿の考えは、当たっているやもしれぬ。今でもスパイだらけだと言うのに、さらに増えるとなれば……暗澹たる気分になるな」

「まったくだ　　アキ、仮にそうなった場合、打つ手はあるか？」

「あります。かなり過激な上に、少々時間がかかる策であれば……ですけど」

「過激とは？」

と、これはアルフ。

「ゼノバーランが締結を持ちかけて来ている経済連携協定を利用して、国内からスパイを叩き出します」

現在、オズウェルドと同盟国であるゼノバーランは、この近隣数カ国に経済連携協定の締結を求めている。

と言うのも、ゼノバーランは数年前にバブルが崩壊して一気に不景気になり、輸出増加による景気浮揚と雇用確保を狙っているが故に、周辺国の協定参加の呼びかけに躍起になっている……と言う訳である。

しかし実の所、協定交渉参加国のうち、国内総生産を合計すると、

オズウェルドとゼノバーランで全体の九割を占めており、協定は実質的には、この国とゼノバーラン二国の「自由貿易協定」と言っても過言ではなかった。

詰まる所、ゼノバーランは自国の商品やサービスを、経済大国のオズウェルドに「買わせて」輸出を伸ばすために、「経済連携協定」と言う策を考え出し、複数国が参加するものと言う形を装って、オズウェルドの油断を誘っているのだ。

当然ながら、協定の中身は発起人のゼノバーランを利するためのものとなっている。

現状、オズウェルドの現内閣は締結に前向きだった。

ロクに内容も読まずに「新時代の開国をし、貿易立国を目指す」等とおめでたいことを言っている大臣しかいない有様である。

ゼノバーランは卑怯だろうか？

否、ゼノバーランは協定の中身を広く周辺国に公開しているので、その姿勢はフェアと言えた。

中身が極端でも、事前に内容を確認めない方が悪い。

とは言え、何故かその内容について、オズウェルドのマスコミは報道を避けている節があり、中身を知らない国民が大半なのが現状であった。

国内の知識人の一部はそのことを憂えていたが 亜希はこの協定参加の呼びかけを利用しようと不意に思い付いた。

「具体的に言えば、ゼノバーランが求める自由化のうち、『サーピスの自由化』を利用して、ゼノバーランの企業にこの国の報道機関を『解体』して頂きます」

ボルティモアがスパイを送り込んで、始めに押さえに入っただのは新聞社と出版社であった。

報道機関を乗っ取って情報を統制し、国民に正しい判断が出来ないよう洗脳するのが、その目的である。

今や、この国の大半の新聞社と出版社の幹部には、ボルティモアの息がかかった者が居座っており、報道は明らかに偏向していた。殊に政治についての報道はそれが顕著だった。

投票の結果に報道は大きな影響を及ぼすので、上手く利用すれば、ボルティモアのスパイとその息がかかった者に当選させてオズウェルドを牛耳れるのであるから、それも当然であろう。

現に、今の内閣はそうして出来上がったものであった。

しかし近年、新聞社や出版社は年々売り上げが大幅に下がっていた。

若者を中心に、偏向している報道内容に疑問を持つ人々が増え始めていることによるものだった。

これには、ボルティモアも予想外であった。

また、彼等は長年に渡って談合や特権等により、「ぬるま湯」に浸かっていたため、消費者のニーズを掴むことさえ、いつしか忘れ

去っていた。

売り上げ低下に彼等は慌てたものの、消費者の要望に応えた体制にすぐさま変われよう筈もない。

そんな業界に、海外で激しい競争に晒されて来た大手企業が参入して来れば、どうなるか？

亜希の説明に続けて、「軒並み潰れるだろうな」とアークは呟いた。

「特に、世界でも我が国は新聞や雑誌の購読数が多い。参入障壁がなくなれば、『この商機を逃すものか』と雪崩を打って多数の企業が参入して来るだろう」

そこで言葉を切った後、「しかし」と彼は切り出した。

「そうすると、今度はゼノバーランが報道機関を牛耳り始める危険がある。大量に出る失業者をどうするかも考えねばならん。それに、ゼノバーランが『報道機関』のみの自由化を受け入れるとは思えん。だが、他の業種の自由化も合わせて受け入れるとなれば、経済の混乱は避けられねえ」

「アークの言う通り、リスクがあまりにも大きい作戦なので、『過激』なんです。特にスパイが多く巣くっている所を綺麗には出来ませんが、一掃とは行きませんし」

「アキの予想が現実になった場合は有効な策となるうが、基本的にはそうならないようにする方法を考えるべきだな。敵兵が戦場から街に行かせないように、策を練らなければ……」

閑話「出陣」

「とんでもない女傑を引っ張り出してきたな、アーク」

取調室の扉を背にしながら立ち、通路の奥に目を向けたままでアルフは言った。

あの話し合いの後、アキとアークはただちに現場へ向かうこととなったが、アキの格好はあまりにも無防備だったため、今取調室内にて着替え中であり、アークとアルフは外でそれを待っている最中である。

「お前が惚れたのもわかる。ここの騎士共も、今やほとんどが心酔してしまっているようだからな」

「当然だ」

アークは笑いながらそう述べたが、その刹那、彼から発せられた言い知れぬ圧迫感がアルフを襲った。

笑っているようで、笑っていない。

長年の付き合いから察するに、むしろ、不機嫌そうだ。

「おい、お前……今一瞬目が据わってなかったか？ 仮にも將軍に

なったんだから、あんまり騎士を虐めぬよう頼むぞ」

「見くびるな。用兵に私情を挟むような真似なんざしねえよ」

「否定しないんだな」

アルフはこれは意外、と目を丸くした。

私情を挟むような真似はしない　とは、そう言う気持ちがあること、肯定しているようにも取れる発言だった。

「お前は見抜かれて困る相手でもないし、隠す必要はないだろ」

そこまで言うと、アークはにやりとした笑みを浮かべた。

「　お前は反対するのか？」

「面倒なことになりそうだが、問題が起ころうと、どうせ全部叩き潰すんだらう？」

アークは笑顔を崩さない。

そのつもりでいると言っているようだった。

「なら、好きにすれば良い。伝え聞いた話じゃ、ゼノとガルム、ロックフォード閣下もお認めのようだし、私が言うことはないな」

そこで一度言葉を切りつつ「されど」と続ける。

「見た所、そちら方面には鈍感そうであったが」

アルフが思うに、今の所、完全にアークの片想いだらう。

先も「女嫌いだったアークを落とす」と指摘すれば、アキは首を傾げていた位なのだ。

本人が女性を邪険にする前は、眉目秀麗な偉丈夫のアークは大層モテていたのだが、彼女は美形に対して免疫があるのか、意識している様子も見えなかった。

ただ、アークの人となりには好感は持っているようではあったが。

「あいつがはつきり『こつち側』に来ると覚悟を決めない限り、迫るつもりはない」

「それは随分気の長いことで」

「俺に、あいつの自由を奪う権利はないからな。それに、今まで何年も不遇に耐えて来た。待つのに慣れているさ。それより」

アークの声音が突如、低くなった。

「……さつきからかってくれた礼は、戦の後に返してやる。覚悟しておけ」

アークは先と変わらず、爽やかな笑顔だが、声には明らかに殺気が滲み出ている。

赤の鬪神は、惚れた女が絡むと性格が変わるのか

否、半分冗談でこちらを脅していると言った所だろう。

その証拠に、その目には冷静さを湛えているように見える。

……半分は本気で言っているのかもしれないが。

「お前、意外と根に持つ性格だったんだな……」

「ほっとけ」

軽口の応酬をしていると、中の気配が動いた。どうやらアキが着替え終わったらしい。それを確かめた後、程なく背後の扉が音を立てて開いた。

「すみません！ お待たせしました」

振り返った目に飛び込んで来たのは アキの凛々しい男装姿だ。戦場でか弱い女と見れば狙われやすいので、こうした方が良いとアークとアルフの二人が判断したのだが……

（びっくりする位、違和感がないな）

元々、男と並べても見劣りしないだけの長身で、すらりとした肢体にきりっとした顔立ちを持っているので、男にしては少し長い髪を後ろで縛ってしまえば、もはや美青年にしか見えない。

「よく似合っている」

「そうですか？」

しかし、アークの言葉に頬を染めている姿は年相応の女性の姿である。

事情を知っているアルフにはそう見えるのだが、二人を知らない者が今の場面を見たら、ちょっと危ない光景に思えるかも……等とアルフが考えていた時、「総司令」と声をかけられ、慌てて変な想像を頭から追い払った。

「……今更かもしれませんが、本当に政府命令で監禁している私を

出しても良いんですか？」

「シジヨウ殿が気にすることは無い。無断で騎士団を動かそうとしているのだ。一人出す位、それに比すれば小さな問題であろう？」

「ありがとうございます。このご恩には必ず報いて見せます」

こちらに頭を垂れる彼女の口から紡がれたのは、力強い言葉だった。

声音に震えはなく、戦を前にしつつも臆した所はない。

初めは関わるかどうか悩んでいたが、肚を決めれば肝が据わる性格なのか。

「それは楽しみだ」

ポンと軽く肩を叩くと、アキはにっこりと笑い返して来た。

「では、アルフ。行って来る」

「ああ」

打ち合わせ通りに。

小声でそう交わした後、アークはアキを伴って、その場を後にした。

閑話「前線」

騎士団駐屯地が二人の勇士を戦場に送り出したその時から、少し時は遡る。

オズウェルド海沿岸部からハウスベルクの都市にかけて広がる平原の一角において、異様な空気が漂っていた。

そこは、治安維持部隊とボルティモアの軍との間で戦闘状態となっている「現地」である。

(……いよいよ、目眩ましかけとはいかなくなって来た、か)

ローザは溜め息をついた。

予想していたとは言え、想定より早く見破られてしまったのは悔しい。

宮廷魔導師ローザ・グローウィルは、戦場にほど近い所へ張られた陣幕の中に腰を下ろし、両手を合わせて目を閉じて、ただ一人魔術を行使していた。

「攻撃すれば、憲法に抵触する」とヒステリックに騒ぎ立てる議員連中に逆らえず、首相が攻撃許可を下ろさないため、騎士達は一方的に攻められるのをどうにか凌ぐ他ない現状。

それを見過ごせず　ローザは今、戦場にいる。

放って置けば、殉職者が後を絶たないのは、初めから目に見えていた。

騎士団本体に出動命令は出ていなかったため、当然ながら魔術師団を率いるローザも待機すべき立場であったが、いてもたってもいられずに現地に飛んだ。

到着後、すぐさま部隊全体を覆うように結界を張り、牽制に火柱や雷の幻を作り出して、相手の戦意を削ぐことに努めた。

しかし　いよいよ、偽物だと気付く者が出始めた。

その証拠に、敵の攻める勢いが増して来ている。

また、長時間に渡って広範囲の魔術を行使し続けることにより、宮廷魔導師の称号を持つローザであっても、体力の消耗が著しく、そろそろ限界が近い。

少し前から、頭に何やらぼうつと霞がかかったような、そんな感覚がしている。

今、床に据わった状態で魔術を使っているが、もし立った状態で行っていれば、とうに自分は倒れてしまっていただろう。

「ここで自分が倒れば、多くの犠牲が生じてしまう」と言う強い使命感が、かろうじてローザの意識を支えていた。

(……こうなったら、やむを得ない、か)

「アベル」

意を決して、傍らに控える男の名を呼んだ。

馬が合わない相手だと話す度に感じるのだが、何故か有事の際には一緒に行動していることが多い。

この男もローザと同様、地位を捨てて城から飛んで来たのだ。

以前、領海侵犯した不審船を追い返した時と同様に、傍らでローザの補助に回ってくれている。

価値観には似ている所も多いので、取る行動も同じような形となつて、表に現れて来るのかも知れない。

「もう良いわ。貴方は、戦場へ行つて」

「馬鹿なことを言わないで下さい。ましてや私は文官ですよ。戦場に出れば足を引っ張るだ」

足を引っ張るだけとアベルが言い切る前に、「嘘おっしやい」と被せるように言い返す。

「軍略には長けている筈 違つ?」

そう告げると、アベルは閉口した。

長く傍でその言動を見ている。

表に現れず、ただ周囲の言いなりとなり、「情弱」と誹りを受け

る今上陛下の傍で、いかにも無害そうな面を被りながら小間使いをしているが、その身に才を隠していることをローザは知っていた。皮肉屋な言葉の端々に、抑え切れない知性が滲んで溶けている。

「貴方は、現場で能力を生かすべきだわ……遠からず……使い物にならなくなる私の傍にいたって、時間の無駄、よ」

長く話そうとすれば、自然と途切れ途切れになってしまう、己の口が忌々しい。

「ローザ」

アベルが背を支えようとする気配がしたので、腕を払って拒否の意を示した。

「やめて」

「しかし」

「ねえ……貴方だってわかってる筈、よ。私一人のために、騎士全員を危機に晒す、つもり？」

背後にいるアベルの気配が 止まった。

「もしそうするなら、貴方に、失望するわ」

貴方のこと、嫌いだけど高く買ってるのよ、と胸中で続けて述べた。

声に出して言わなかったのは、素直に賞賛出来る程、仲の良い間柄ではないためだ。

暫しの沈黙を挟み、突如アベルはくすりと笑った。

「ふ、言われずとも、貴方がくたばるの見届けたら、とつと現場に向かわせて頂くつもりでおりました。されど、貴方が『早く出て行け』とおっしゃるなら、そうさせて頂きましょう」

「……どこまでも、可愛げのない男ね」

何故、ここでこうも人の神経を逆撫でするような言葉を返すのか、この男は。

しかし、自分に軍略の才があることは認めるらしい。

「男に可愛らしさなんて、なくて結構　それでは、失礼」

あっさりとは別れの言葉を告げると、アベルは天幕の外へと行ってしまった。

何やら、胸にすつきりしないものを感じるが　とにかく、これで良い。

いくら、あの皮肉屋なアベルであっても、今からローザがしようとすることを知れば、きつと力尽くでも止めようとするだろうから。

体力なしで魔術の行使をする方法が、実は一つだけある。

幽体離脱をして霊の状態となれば、世界に遍在する神の光を自身の手と、魔術の行使が出来るのだ。

神の光は無尽蔵で、尽きることがない。

しかし、霊の身は無防備でもある。

戦場に渦巻く兵達の憎しみ、恨み、怒り等の暗い想念の影響を露骨に受ける。

もし、心が折れてしまえば、精神が狂ってしまう。
想念のどす黒さは、以前、領海侵犯した不審船が出た現場の比ではないだろう。

また、それらの想念に吸い寄せられて来た「悪霊」の良い標的にされる恐れもある。

そうしたりスクがあるが故に、ローザは今まで自らの身を削って魔術を行使していたのだ。

また、霊体が抜けた肉の身も、無防備な状態に晒される。

もし、今近くにスパイが潜んでおり、刃を向けられれば、ローザは為す術もなく死んでしまっただろう。

還るべき身体が修復不可能な状態にまで痛めつけられれば、そのまま「あの世行き」となる。

仮定の話で言ったが、実際に軍部内において、スパイがいる気配はあるため、冗談ではすまなくなる可能性もある。

もし、天幕の外で警護してくれている騎士がスパイで、中にいるローザの様子が不審なことに気付いて襲って来たら、まず助からない。

(後で、絶対怒るわ。あいつ)

それでも、ローザには決心を翻す気はなかった。

有事の際に役に立てずして、何のために軍部において、一団の長となったのか。

ごめんなさいと心中でアベルに詫びた後、ローザは深い瞑想状態

へと入って行った。

閑話「市街」

きっかけは、クラウドザー商会と取引のある商社からの情報だった。

「その話は事実なんですか！」

エリオットは部下の報告を聞き、思わず声を荒げた。ガタン、と大きな音がしたのを聞いて初めて、椅子を蹴倒してしまった程に己が平常心を失っていることに気が付いた。

(僕としたことが……落ち着かなければ)

緊急事態とは言え、上司が周りに流されるまま、冷静さを失ってしまっただけではない。

こんな時こそ、落ち着いた様子で指示を出し、皆を安心させる位でなければ。

指導者は、常に凧いだ湖面の如き心境を維持すべし と、商会トップの父の言葉が脳裏を過ぎった。

跡継ぎとして修行中の身だが、こんな様を父が見れば、まだまだ未熟者だと呆れられるだろう。

一度深呼吸した後、エリオットは改めて部下に視線を合わせた。

「……愚問でした。ジョーは裏付けなくそのような報告はしないとわかつている筈なのに」

「驚かれるのも無理はないでしょう。事が事でございますので」

部下のジョー改めジョゼフは、くしゃりと初老の紳士の表に穏やかな笑みを浮かべて、こちらに向けた。

彼は古くからクラウザー家に仕え、以前は父の補佐役であったが、現在はエリオットの補佐役を務めている。

「されど、若君もこうなる危険性があることは、早くからお気付きだったのでは？」

励ますだけに留まず、続けてジョゼフはちくりと痛い一言も添えた。

ボルティモア軍がピーキング諸島と本土へ上陸し、我が国と交戦状態になっていると言つとんでもない情報が入って来たが、どちらも前からエリオットが危惧していたことだ。

政府がボルティモアに甘い顔をしていれば、最悪そう言った事態も起こり得るであろうと、周囲に話していた位なのだ。

オズウェルドは四方を海に囲まれた島国である。

ボルティモアとの緊張状態が続けば、当然、海上交通にも支障が出る。

さすれば、他国との商業上のやり取りにも大きな影響が出るのは自明の理と言えた。

安全保障こそ、経済発展の基盤なのだ。

恐らく、ジョゼフはこう言いたいのだろう。

「驚くのは良いとしても、以前から危機について想定していたのなら、何故取り乱したのか。胆力をもっと練るべきだ」と。

エリオットが落ち込まないようにフォローしつつも、きっちり反省を促す辺り、実によく出来た補佐役だと改めて実感させられる。

「ええ。それにも関わらず、醜態を晒してしまいました……相手がジョーでなければ、動揺を広げてしまっていたでしょう」

「そうして自身の失態を見つめられるのは、若君が健全な証です」

「ありがとうございます　では気を取り直して……早速ですが、ジョーに頼みがあります」

「何なりと」

「今から文を認めますから、エリックとルード、グランツ先生に早馬を。後、今時分であれば対談も終わっている筈です。アキとインディアス新聞社にも連絡を取って下さい」

「畏まりました」

異議を挟まず、馬と使者の用意をしにジョゼフはさっと部屋を後にする。

言葉を重ねずとも、エリオットの考えがわかるが故である。

自分が生まれた時からの付き合いなので、お互いがどう言いつ思考をする人間なのかはよくわかっていいるのだ。

それぞれに連絡を取り、メンバーがクラウド家の一室に集合した。

密談と言う点で最適なのはアルツァード教会の隠し部屋だが、この人数であるの部屋を使うには少々手狭であることや、呼びかけた人々のうち、教会関係者以外の人物が混ざっていることもあり、エリオットは実家を集合場所に決めた。

しかし、集まった面々の中には アキの姿がなかった。

現在ここにいるのはエリオット、エリックとルード、そしてインディアス新聞社から駆けつけた記者のエディの四人である。

ちなみにグランツは神父なので、基本的に教会から離れることはない。

また、彼には教会周辺から離れられない特別な事由もある。

「アキは一体どこに行っちゃったんだろうな？ 対談後は宿の手伝いに戻るって言ってたように思うんだが……」

ぼそりとそう述べたエリックの言葉に、隣にいたエディの顔が一瞬、強張ったように見えた。

「クレイトンさん？」

その仕草を訝しく思っただけで声をかけると、エディは頭を抱えるようにしながら俯いて、その口を開いた。

「……彼女は治安維持部隊の騎士達に、騎士団駐屯地へ連行されち

まった」

「何！？ どう言うことだ！」

ルードが身を乗り出して、噛み付くように言った。

普段は口数が少なめで落ち着いた男だが、一度火が付けば別人に変わる。

いつも余り感情を面に出さないため、周囲に無関心で冷たい人間だと思われがちなのだが、実は意外と情に厚く、熱血漢な所を持っている男なのだと言うことを、ここ数ヶ月の付き合いでエリオットは知った。

「それを知っていると言うことは、現場にいたんだろう。アキが連れ去られるのを黙って見ていたのか！」

「ルード、落ち着け おっさんは騎士達、と言った。多勢に無勢だったら仕方ないだろう。それに、一般市民で騎士に逆らおうなんて考える人はそうそういない」

「だが、貴方は腕に覚えのある方だとお見受けする。身のこなしに隙が見えないからな。平の騎士なんざ目じゃない筈だ。それだけの腕を持ちながら、あいつが拉致されるの見逃したのは何故だ」

エリックに宥められても、ルードは追及の手を緩めるどころか、さらに厳しく問い詰めた。

突かれた点が意外だったのか、刹那、エディは目を見開いた後、徐に切り出した。

「……流石、彼のアルツァード教会の一員でかつ、『リベルタ』のメンバーだ。この僅かな間にそこまで見抜いちまうとは、お見逸れ

した。正直に話すよ。信じてもらえねえだろうが、嬢ちゃんは俺に『ついて来んな』って言ったんだ。で、自分から進んで騎士達に連れて行かれた」

「は？ 何でそんな話に……」

「『今逃げたつて、どうせまた狙われるから』と。俺は見たことを記事にして、それを使って自分を駐屯地から出すよう協力を頼まれた」

「……アキラしいな。その男前っぷりは」

急にトーンダウンしたルードに、「信じるのか？」とエディは驚いた顔をした。

「行動を聞けば、事実だとわかる。それにしても、何でそんな事態になったのか、教えてくれ」

閑話「声東撃西」

「話を一通り聞かせてもらって、ふと思ったんだが……今回の件、かなり周到に計画を練られたモノじゃないか？」

ぼそりとそう漏らしたルードは苦い表情をしていた。

エデイの説明が終わった後、続けてエリオットがピーキング諸島と本土へボルティモア軍が上陸したと言う情報を皆に話したのだが、二つの話から彼なりの一つの結論を出したらしい。

怒りはすでに鎮静したが、新たに得た情報から導き出された自身の考えに、複雑な思いを抱いているようだ。

「でしょうね」

エリオットもルードと同じ感想を持ったため、同意するように相槌を打った。

きっかけは、地方分権推進派筆頭であったブリジアン領主が、少し前、唐突に推進活動凍結宣言を出したことだろうか。

その後、まるでその仕返しをするかの如く、左翼勢力は首都で「青少年健全育成条例」を成立させ、話題になっていた『リベルタ』の著作を『不健全図書』と認定し、狩った。

思えば、ここから既に、敵の策は実行され始めていたのだ。

この条例に加えて、さらに駄目押しをするかのように「デマ情報の自主的な削除」要請まで出したため、保守勢力の目は国内の「情報弾圧」問題に集中した。

そうして内政問題に保守勢力の意識が向いている隙を突くタイミングで、今回、ボルティモアがピーキング諸島と本土への上陸を決定した。

彼等の上陸に際して、隠蔽情報を漏らし続ける、鬱陶しい存在の「リベルタ」のメンバーの一人を政府の左翼勢力が「監禁」し、「リベルタ」の動きを鈍らせ、それを通じて保守勢力の動揺を誘っている。エリオットには、そのように思えてならなかった。

「前々からそうだろうとは思っていたが……こいつはもう、左翼連中とボルティモア側が連携していると見て良いだろうな」

これはエリックの言だ。

どうやら彼も、ルードと同じような結論に至っていたらしい。

「さて、あいつ等の策はここで打ち止めと見るか、まだ続きがあると考えるか……『リベルタ』の皆さんはどうお考えかな？」

「腐っても、ボルティモアは軍略発祥の国ですからね。まだ何かあると仮定して、対策を考えておくべきでしょう」

これ以上、何も起こらないとしても、備えをするに越したことはないだろうとエリオットは考える。

十分な備えが「抑止力」として働き、結果として「何も起きない」場合もあり得るのだ。

「どんな動作にも『前兆』はある。ボルティモアがここ最近、何か怪しい動きを見せたことがあれば、それも警戒事項の一つとして数えるべきだろう」

ルードの提案に、各々が首を捻り出した。

ボルティモアの怪しい動きとは、何か？

疑い始めれば、共産主義国家である彼の国の動きすべてが怪しく見えて来るので、困ったものだとしてエリオットは思った。

軍略では「戦わずして勝つ」ことを理想的な勝ち方とし、実際に戦って勝つよりも、策略で敵を破る方が優れているとされる。

また、軍略とは「敵を欺く」ことであるとも説かれている。

それに習ってか、ボルティモアはあまり正面切って攻めるやり方は取らない。

迂回戦術が基本である。

その証拠に、ボルティモアはしばしば領海侵犯して領土拡張の野心を見せるが、実際に攻めて来るのは今回が初めてであり、これまでとはかくスパイをオズウェルドに送り込むことに熱心だった。特にスパイが多く巣くっているのが、報道機関である。

ここを押さえれば偏向報道を行うことで、じわじわと国民を洗脳し、選挙の行方にも影響を与えることが出来るからだろう。現に、今の政権もそのようにして生まれたものである。

彼等の工作活動により、すっかり洗脳されて左翼となったオズウェルドの人々と今回は連携していると見られるが、それらをサポートするような動きが以前になかったかを思い出すべきだろう。

(例えば、ここ最近成立したボルティモアの法律とか……)

そこまで考えて、あつとエリオットはひらめいた。

確かに、サポートをするような法律が昨年、成立していたのだ。

それを口にしようと周囲に目を向けると 周りの視線が何故かすべてエリオットに集中していた。

あつと思ったあの瞬間、心の声がどうやら口から外へと漏れていたらしい。

「ごほん、と決まりの悪さを咳払いでごまかした後、エリオットは徐に切り出した。

「『国防動員法』はどうでしょう？ 有事の時には、海外在住のボルティモア人も皆、本国政府の指示に従って行動するように定めたものですが、これは連携作戦にも関わって来るもの筈です」

ここ十数年、オズウェルド在住のボルティモア人は急速に増えて

いる。

もし彼等が有事の際、本国政府の指示で動き始めれば、その瞬間、彼等は民間人から兵士になるのだ。

仮に全員が指示通りに動き始めれば、これ程恐ろしいものはない。

「成程。確かにその法律は、今使うにふさわしいものかもな

ああ、『国防動員法』の言葉でふと閃いたんだが、今ドンパチやっつてる兵士共の方が困で、我が国在住のポルティモア人達とスパイが『実働部隊』だつて可能性もあるんじゃないか？」

「！」

軽い口調でエディが呟いた「予測」は、周囲に波紋を広げた。

1 「龍」

首都から現場までは少々、距離がある。

そのため、移動手段として龍に乗ることになった。

今回アークは將軍として、秘密裏にはあるが一部隊を率いているので、彼等を含めて総勢五十人で現地に向かうことになる。

少数だが、総司令であるアルフが推挙し、さらにアークがその中から選抜した騎士達なので、恐らく精鋭揃いの筈だ。

ちなみに、龍は身体が大きくて目立つので、狙われないように戦場から少し離れた所で下りる予定とのことである。

ファンタジー世界で龍と言えば、西洋系のドラゴンか、蛇のように長い身体をした東洋系の龍の二タイプを思い浮かべるが、こちらでは東洋系の方だった。

大きさが　かなりデカかった。

何と、顔だけで乗用車位のサイズがあるのだ。

そこから首にかけて羽毛のようなものが生えており、その下には個体によって様々な色に染まった鱗に覆われた身体が続いている。

余談だが、アークから聞いた話によると、肉体を持った龍は騎士団で使用される他、荷の運搬等で活躍しており、天に住まう霊体のみの龍は神の指示の下、天候を司る存在らしい。

今まで、日本で問題視されていたのとよく似た、政治的な問題に関わっていたため、実感が薄らいでいたのだが、やはりここは異世界なのだと亜希は再認識させられた。

発着場で騎士達が龍を見繕っている間、アークは屯所の壁に凭れながら遠目にその様子を見守っていた。

亜希は今まで龍を見たことすらなかった人間なので、当然、審美眼に自信等ある訳もなく、どの龍に自分が乗るのかは周りの人達にお任せするつもりでいるが、彼は龍を選ばなくても良いのだろうか？

そう訊ねてみると、アークは自分には「相棒」がいるから構わないと言っ。

「成程　でも、呼ばなくても良いんですか？　もうしばらくしたら出発するんじゃない……」

重ねてそう問いかけると、アークはにやりと笑った。

「もう呼んだ　じきに来る」

その答えに亜希は首を傾げた。

いつの間に、彼は相棒の龍に連絡を取ったのか？

取調室を出てからずっとアークの傍にいるが、彼は特に変わった行動を取ってはいない。

不思議に思っていると、俄に強い風が頬を打った。

前髪が目にかかって、視界が遮られる。

手で掻き上げた先に見えたのは　騎士達の唾然とした表情。

皆、その首を上へと持ち上げている。

つられて視線を上へと移し

　　亜希は息を呑んだ。

雲の切れ間から差し込む光と共に、上空から舞い降りる一匹の白い龍。

発着場にいるどの龍よりも大きな身体は、鱗が日の光を反射して、幻想的に輝いている。

地球でもし同じ光景を見たなら、神だと思ったかかもしれない。そう感じさせる程に神々しく、威厳があった。

その姿に見惚れていると、その双眸が不意に真っ直ぐこちらを向いたように見えた。

金色に輝く瞳が一瞬細められたかと思った直後、龍は急降下を始めた。

アークと亜希に向かって。

ぐんぐん迫る巨体にびびり、思わずアークの腕に抱きつくと、大丈夫だと言うように頭を撫でられた。

彼は亜希や他の騎士達とは違い、泰然としている。

きつとあの龍がアークの呼んだ「相棒」と言うことなのだろうが、それでも真っ直ぐ身体を伸ばせば、下手をすれば飛行機以上に大きいかもしれない生物が自分に迫って来るのを見るのは、恐いことに違いはない。

ぶわつと大きな風が巻き起こり、風圧で思わず目を閉じた直後、ずん、と言う低い地響きと共に足下が揺れた。

着陸したらしい。

恐る恐る閉じていた目蓋を上げてみると、目と鼻の先で龍が亜希を覗き込んでいた。

車のタイヤ程はありそうな巨大な瞳を爛々と輝かせている。

生温い風を感じるのは、鼻息がかかっているからかもしれない。至近距離になって気付いたが、白に見えた鱗はごくごく薄い水色をしていた。

龍は亜希を見詰めたまま、目を逸らそうとしない。見たことのない人間が興味深いのだろうか。

しかし、そのことに戸惑いつつも、水晶玉のように透き通った金色の瞳と水色の鱗、首に映えた白い鬘の美しさに、自分から目を逸らそうと言つ気にはならない自分がいるのも確かだ、亜希は自分の複雑な感情を持て余しながら、龍と対峙していた。

『我が恐いか？ 娘よ』

前触れもなく、声が聞こえた。

「うわっ！？ 頭に直接声が……！」

それも、結構渋い美声だ。

これはいわゆるテレパシーと言つ奴だろうか。

「今、喋つたのは貴方ですか？」

確認のため、龍に向かって問いかけると、『うむ』とハスキーボイスを返された。

日本にいる声フェチの友人が聞いたら悶絶しそうな良い声だ。

『さて、改めて聞くが、我をどう思つのだ』

「身体の大きさにびっくりしましたが、同時に綺麗だとも思いまし

た」

『ふむ……褒められるのは悪い気はせんな。我は人を喰らったり、いじめたり等と野蛮な真似はしない。綺麗だと思ふなら、触っても良いぞ』

予想外の言葉をかけられて、どきどきしつつも、亜希はそろそろと龍に近寄った。

まみえた当初より、恐怖心は薄れて来ている。

それには、素敵なおじ様ボイスの効果が大きいかもしれない。

(……触るなら、当然、あそこだよね)

目で見て楽しむなら瞳と鱗だが、触感を味わうなら首回りのつやつやサラサラの白い鬘だろう。

日の光で毛の表面がうつすらと虹色に輝いて見えており、エルアノーラの御髪を想起させるものがある。

そつと触れると、サラサラだけでなく、思いの外ボリュームがあつてふんわりとしていた。

例えるなら、天然の極上のクッションと言った所か。

「……ふわふわで、気持ち良い……！」

気が付けば、いつの間にか鬘に顔を埋めて抱きついていた。

もはや、恐怖心は雲散霧消している。

『アークよ。面白い娘を連れて来たな……何故もつと早くに会わせてくれなかった』

「拗ねるな。最近では表立って動けなかったんだよ。お前と一緒にや
どうしても目立つ」

『それは否定せぬが 我と話が出る者に会えるのは久方振りだ
った故、嬉しかったのだ』

「えっ」

龍の言葉に、亜希はがばつと頭を上げた。

「龍さんとお話出来るのって、珍しいんですか……?」

『ここしばらく、人間ではアーク以外の誰とも話してはおらぬ』

そこまで聞いた直後、ふと周囲がやけに静まり返っていることに
気が付いた。

辺りを見回すと、こちらに騎士達の視線が集まっているように感
じる。

地声で普通に龍と会話をしていたため、注目を浴びてしまってい
るようだ。

「ええつと……私の心の声を読み取ったりって出来ます?」

今後、人前で話す度に注目を浴びるのは気不味いので、エルアノ
ーラと同様の方法が使えるかを問うと、可能とのことであった。

しかし、心の中で思うこと全部が見えるなら、それはそれで恥ず
かしい。

そのことを伝えると、龍は『その心配は杞憂だ』と述べてこう続
けた。

『そなたが我に伝えたいと思う言葉しか聞き取れぬ。故にそなたの考えすべてを読み取れる訳ではないので、安心するが良い』

エルアノーラのように、本心を読まれる心配はないらしい。それを聞いて亜希はほっとした。

(あ、そう言えば、アークが貴方を呼んだ方法はもしや、心の中から呼びかけた、とか……?)

『察しが良いな。その通りだ。澄んだ思いは互いの距離に関わりなく、届く』

試しに心の中から語りかけると、ちゃんと思いが届いた。

しかし、この状態だと傍にいるアークには龍の声だけが聞こえ、亜希の声が聞こえない状態なのではないだろうか？

それについて問いかけると、肯定の意を返された。

三人一緒にテレパシー会話するのは無理らしい。

「……この部隊の皆さんには、もう知られちゃったんで、隊の中ではもう、堂々と話します」

結局、開き直って声での会話に戻した。

もともと、駐屯地に連れて来られた当初から、亜希のことは話題になっていたため、部隊の皆が「リベルタのアキ」が男装して加わっていることは承知の上であり、秘密がもう一つ増えただけと思えば良いかもしれない。

亜希の素性については、將軍であるアークが麾下に秘匿を厳命している。

ちなみに、現在亜希は表向き、アークの「小姓兼見習い騎士」で「アルト」と言う偽名になっている。

「おう、そうしろそうしろ。それに、注目されるなんて、もうすっかり慣れてるだろ？ アキ。むしろ、これがきっかけでお前の参戦に内心、納得してなかった連中も少し見直しただろうし、返って良かったんじゃないかと俺は思うが」

「でも、ホントに私がこんなに目立つちゃっても良いんでしょうか……？」

「構わねえよ。そもそもアキが連行されたのだって、不当な理由だろ？ 仮に正体がバレたって、内閣の連中も抜け出したことを表沙汰に責めにくい筈だ。それに、今からお前が仕事をし始めりゃあ、嫌でも注目を浴びるだろうさ」

「……裏方役になるものとはかり思っていたんですが」

「冷静に考えてみる。將軍に堂々と献策するような見習い騎士なんざ、それだけで注目の的だと思わないか？」

「うっ……確かに」

「わかったら？ 肚括れ」

そう言うと、アークはぼんぼんと軽く亜希の頭を叩いた後、ひらりと龍の首の上に跨った。

その後、亜希へと腕を伸ばす。

「お前は俺と一緒に乗れ。今後の話もあるし、ラズも話したりない

「だろ？」

『うむ。アキ、と言ったか。そなたもアークと同様、我に近い匂いを感じるし、気に入った。アキも我をラズと気軽に呼ぶが良い』

「わかりました。ラズ　では、上に乗せてもらいますね」

一声かけた後、アークの手を取って引っ張り上げてもらった。もふもふした鬣の上に座る形となり、とても心地が良い。

亜希がぼんやりしている間、アークは命綱を手際よくラズの角に結びつけていった。

自分と亜希の身体が、角としっかり繋がっていることを確認した後、アークは麾下の騎士達に出陣の命を下した。

流石に粒ぞろいの騎士達とあって、はじめはラズの登場に呆気に取られて、亜希がラズと会話していることに驚きつつも、それを横目に見ながらしっかり出発準備を終えていたようだった。

アークの号令と共にラズが飛翔した後に続いて、騎士達も龍と共に空へと飛んだ。

2 「雲海」

龍による移動は、敵の目から少しでも姿を隠すため、飛行空域は雲の中もしくはその上となった。

上空からの眺めは実に美しく、今まで生きて来た人生で間違いない三本の指には入るであろう感動を亜希は味わった。
だが 良いことばかりでもない。

(……………寒い……………)

高度の高さに比例して、気温が低いのだ。

それに早く現場に向かおうと、かなりのスピードで移動しているため、激しく風が吹き付けて来て、尚のこと冷える。

すぐ後ろで、龍に乗り慣れない亜希をアークが支えてくれているのだが、その人肌の温かさが伝わって来るのが唯一の救いか。

「……………アーク」

「ん？」

「乗る度に、いつもこんなに寒い思いをしてるんですか？」

気が付けば、そんな言葉が口を突いて出ていた。

「ああ、俺は体温が高い方だから、風を切って飛ぶのが好きな質なんだが……………アキにゃ辛かったか。気付かなくて悪かったな」

「いえ。軟弱な私が悪いんです」

「自己卑下しなくて良い。そうだ、試しに魔術を使って風を防いでみる。しんどくなったら俺が代わりに結界を張るから言ってくれ」

「あ、成る程。こう言う時には魔術を使えば良いんですね」

言われるまで気が付かなかった。

こう言った発想が湧かない辺り、魔術と言うものが存在しなかった地球にいた時の思考から、まだ抜け切れていないのかもしれない。

亜希はルードから教わった、イメージを形にする方法を思い起さず。

まず、目を閉じて何度か深呼吸した。

こうして心を落ち着け、雑念を払うのだ。

ありありとしたビジョンを描くには、集中力がモノを言う。

呼吸に意識を集中し、寒さと身体を打つ風の強さは考えないようにした。

ラズの飛行に支障がないよう、自分とアーク二人を包む小規模な範囲の、透明な風の膜を思い浮かべる。

目を閉じる前に見た光景に想像で作った結界を重ね合わせて、出来る限りはつきりとしたイメージを作るよう、努めた。

（よし、行ける）

そう確信が持てたと同時に、亜希は意識を指先に移した。

そこから自分の身体の中を巡っているエネルギーが流れ出て行く

のを想像しつつ、静かに目を開ける。

あれ程激しく吹き付けていた風は、すっかり凪いでいた。無風状態で、気温も快適な状態である。

「……上手くいったみたいです。アークはこれ位の温度だと、暑くないですか？」

「いや、丁度良い。流石に絵描きなだけあって、創造力豊かな分、筋が良いな」

「恐れ入ります」

彼らしい真つ直ぐな褒め言葉に、亜希は少し頬を染めつつ俯いた。

「さて、落ち着いた所で、そろそろ今後の話をするか」

ふと、アークの纏う空気が変わった。それを感じ取って、亜希の背も自然と伸びる。

「まず、確認したい。お前の立場と役割を述べてみる」

「私はアルト・クレイン。年は十五。表向きは見習い騎士で、將軍の小姓をしています。実際は軍師の一人です。行軍時に状況に即した戦術を將軍に進言すること、また、將軍の指示を隊員達に円滑に伝達することが私の役割となります」

「宜しい。今更だが、兵に刃を向ける覚悟はあるな？」

「言わずもがな」

「俺はお前が情に傾いて判断を誤れば、軍法に則り容赦なく処罰を下す。他の者と同様に、だ。隊の規律は徹底する。將軍の命令は絶対だ。例外はない」

厳しく重々しい口調で、アークは告げる。

戦は国家の大事であり、多数の人の命がかかっているが故に、上に立つ者は他者に、もちろん自分には尚更、厳しくあらねばならないのだろう。

「承知しております」

「はじめに言っておく。隊の連中は純粹に実力主義で選んだ。その結果……アークの強い奴が揃っている」

「ああ……確かに少々、個性的ではありませんね」

言いながら、ちらりと周囲に目を向けた。

赤毛をソフトモヒカンにした三白眼のお兄さん。

彼には何故か、初対面からずっと睨まれ続けている。

自意識過剰だと言われそうだが、実際、彼と目が合う度に殺気の籠もった三白眼と対面しているのだ。

恨みを買うようなことをした覚えは一切ないのだが……

顔立ちは整っているものの、返ってそれが恐怖感を煽っている。

そこから視線を横にずらせば、片目にだけ丸渕の眼鏡をつけ、眼鏡なしの目の下には入れ墨をした、痩せ形のお兄さんがいた。

顔色は青白く、口に手を当てた状態のままているのは、見た所、吐き気が続いているためのようだ。

乗り物酔いが酷いタイプなのだろうか？

戦場にまで持つのかどうか心配だが、これでも一応実力者なのだろう……きつと。

更に視線を下に降ろせば、水色の長髪美人なお兄さんと目が合い、上品な微笑みを返された。

モヒカンのお兄さんとは違い、こちらは視線が交わる度に笑みを向けられるのだが、睨まれるのとはまた別の意味で、何やら亜希はプレッシャーを感じていた。

自分でも何故かわからないのだが　鳥肌が立つのだ。

つまりは、本能が危険を訴えているのである。

もしかすると今までの経験上、表向きは良い人ぶっていて、実は腹黒策士タイプなのだろうか？

まだほとんど言葉を交わしてもいないのに、安易にレッテル貼りしてはダメだと思いつつも、そう考えずにはいられない、そんなお兄さんだ。

今、目に付いた人物数人を挙げただけでも、この「濃さ」である。

隊員達の個性の強さは推して知るべしだろう。

そんなことを思っていた時、ああと亜希は心中、声を上げた。

アークの言いたい所が　何となくわかった気がしたのだ。

3 「天賦」

「彼等といかに信頼関係を築くか、が最優先課題……」と云うことで
すか？」

「そうだ。あいつ等は総司令の命を受けて、新たに編制された隊に
付くことになった訳だが、その頭が著名人の『赤の鬪神』、加えて
『リベルタ』のアキも加わると聞いて、とりあえずは様子を見てみ
ようと言つ状態だ。ふとしたきっかけで、統制が取れなくなる恐れ
もある」

この少人数の隊で混乱状態になれば、自滅しかねない、とアーク
は言った。

亜希が駐屯地で親しくなった顔見知りの兵もいるが、嫌悪感を露
わにして睨み付けてくるものもいる。

任務の達成と言つ共通の目的がなければ、心はバラバラの寄せ集
めの部隊に過ぎない。

個々人の能力が優れていても、各々が好き勝手に動き回る部隊は、
敵に隙を狙われて瓦解する。アークの言いたいことは、そう言っ
ことなのだろう。

「だが、俺は現地に着いたら、出来る限り速やかに作戦行動に移り
たい。隊が落ち着くのを戦況は待っちゃくれないからな。だから、
実地でお前の実力をあいつ等にはつきりと見せる。それが一番手っ
取り早い」

「私の……実力」

「既成の概念に捕らわれない発想の豊かさ、魔術の才がお前の武器だ」

既成の概念、と言う言葉に亜希ははっとした。

そう、自分は異世界人なのだ。

亜希の持つ最大のアドバンテージが「地球の知識」であり、それを元に敵には思い付かない策を練ることを、亜希は期待されている。そうであるが故に、この立場に就くことを許されたのだ。それを忘れてはいけない。

魔術の才については、絵を書くのが得意な点から創造力の豊かさを認められ、伸びしろがあると判断されたのだろう。

こちらはまだまだ修行中の身で、どれだけ伸びるのは未知数だが、期待には応えたい。

『魔術の才なら、今既に証明されておるぞ』

不意にラズが話に容喙した。

「えっ……と、どう言うことですか？」

『今、これだけ話しながら結界への意識を途切れさせず、疲れた様子が見えないのが何よりの証拠』

「いやいや。これ位なら、私の友人にもっと凄い人がいますよ。彼等の方が私よりもっと長時間、結界を維持出来ますし……」

話し合いの際、長時間平気な顔で「風の防音膜」を張っていたルードをエリオットを脳裏に思い浮かべつつ、言った。

『これは私の推測だが、その友人達は体力がある方ではないか？』

「そうですね。男性ですし……昔、アークに絞られたのを機に発起して、頑張って鍛えてるとか言っていましたっけ」

『なら、彼等と比べてアキはどうだ？ 見た所、体力自慢なタイプには見えぬが』

「お察しの通り、まったく体力に自信はないです」

身体を動かすより、家で本を読む方が好きな子供だった。

その流れのまま、中・高・大と文化系のクラブや同好会を渡り歩いて来た人間であり、体型は極端に細くも太くもないものの、締まりがあるとは言い難い。

こちらの世界に来てからは、地球でやっていたバイトよりハードな宿の仕事のお陰で、若干体力が付いた気がしないでもないが。

『それなのに、疲れを感じないのは何故か？ 魔術を長時間行使出来る理由が、そなたは友人達と根本的に異なるのだよ、アキ。それがそなたの強みなのだ』

「ラズ、焦らすな 言いたいことは何だ？」

『おや？ お前も気付いていなかったのか、アークよ。人の目とはまこと、不便なものよ 我は首の周囲に群がっておる精霊が目について仕方がないのだがな』

精霊なるものが、自分の周りに群がっている……？

指摘されて、じっと目を凝らしてみるが よくわからない。

「成程、精霊か……彼等がアキの魔術の行使を手伝ってくれてるから、体力をそれ程消費せずに済んでるって訳だな」

『左様　アキ、今までに誰かに、「精霊に好かれる性質がある」と言われたことはなかったか？』

「うーんと……あ、そう言えば以前、グランツさんがそんなことを仰っていました」

あれは、アークの仲間になると決意し、アルツアード教会の隠し部屋を訊ねた時のことだ。

とっかかりを思い出せば、芋づる式に記憶が甦り始める。

その部屋は密室でありながら風が吹いていたのだが、それは亜希が原因だとグランツは言っていた。

彼は、亜希から「清浄な空気が広がっている」とし、それは数日前に彼に会った時まで、まったく見られなかった現象だとも語っていた。

（そうだ。確か、その数日の間にエルアノーラさんに逢ったんだ）

何気なく、この国の民族神であるエルアノーラに会った話をする
と、ラズはひどく驚いたような声を出した。

『親神様に逢ったことがあるとは真か！？　アークが気に入る位だから、ただの娘ではないだろうと思っていたが……そなた、一体何者なのだ？』

口調から察するに、かなり興奮していると見える。

亜希は今更ながら、エルアノーラはオズウエルドを統べる偉い神様だったんだなと、再確認した。

（ラズなら、言っても大丈夫……かな？）

亜希は無意識にアークを見上げていた。

こちらの不安を読み取ったのか、アークは大丈夫だと言うように穏やかな笑みを浮かべた。

何の根拠もないのだが、彼が認める友人なら身の上を明かしても良いと思っている自分がいる。

周りに聞こえないよう、心の中で亜希はラズに、自分は「異世界人」なのだと言った。

『何と……！ 実に、実に興味深い。アークが述べていた「既成の概念に捕らわれない」発想とは、そのことであつたのだな。それに、親神様の加護があるなら、精霊に好かれるのも当然だ』

その後、ラズは何事か一人でぶつぶつ呟いた後、ぼそりと言った。「精霊魔術師にならないか？」と。

4 「開花」

「精霊魔術師、ですか……」

その単語を聞いて、アルツァード教会の書庫で借りた書物の記述が、おぼろげながら亜希の頭に甦った。

魔術は、白魔術・黒魔術・精霊魔術・その他の魔術の四つに、大別される。

四つの内、一般的に広く普及している魔術が、精霊魔術だ。

と言うのも、魔術の中で最も扱いやすく、かつ自由度が高いためである。

その他の魔術はそもそも使えない代物だし、黒魔術は使用そのものが禁じられているので論外として、白魔術は普通、心を磨いて修行を積み重ねば使えない。

それとは異なり、精霊魔術は頭にイメージをしたものを、体力と引き替えに形にするものなので、創造力の豊かさ具合で上手い下手はあれど、言わば誰にでも使えるものなのだ。

そのプロセスは、精霊たちが支配する空気中の元素に、人が想いの力で働きかけ、体力を使って望む形に練り上げる……と言うのが一般的だが、稀に、直接精霊にお願いして、精霊魔術を発動させる

ことが出来る人間もいるという。

彼等は一般に、「精霊魔術師」と呼ばれている。

『精霊に好かれている、と言う事実一つだけ取っても、アキには素質があると断言出来る。そなたが命じれば、きっと精霊達は進んで結界を張ってくれようぞ　モノは試し、一度お願いしてみてもうだ？』

「お願いとは……どうやってすれば？」

『心の中で願っても良いし、口に呟いても良い。ただ、彼等が「気に入る」ような形でお願いが出来るかどうか、だ』

精霊は、その生態があまり明らかにはなっていない。

どうしたら彼等に好かれるのか、長い間研究が続けられているらしいのだが、それはわからず仕舞いである。

死した人の魂と同類のものと言う説があるが、実際の所はよくわからない。

ただ、そうした存在があることが、認知されているのみなのだ。

(でも、仮説を信じて考えるっきゃないか)

もし、自分に精霊魔術師の素質があるなら、是非とも開花させたい。

今は戦の最中にある。
頼れるモノがあるなら、躊躇っている場合ではないのだ。

(彼等は、今、私の魔術の行使を手助けしてくれている。つまり、人と同じように『意志』のある存在な訳だ)

もし彼等が人と同じように「思考」する存在だと仮定して、自分が精霊だったとしたら……と亜希は想像した。

上から目線で命令して来るような人間に、力を貸したいと思うか？
答えはノーだ。

自分達の力を利用しての上上がるうと考えるような、権力欲・名誉欲が強い人間も、ゴメンだ。

自分なら、謙虚で無欲な人間でない限り、危なくて力を貸そうと言う気にはならないだろうと、亜希は思った。

仮にその条件を満たしていても、性格が気に入る相手かどうか……と言う個人的な好みも条件に加わって来るだろう。

(結局の所、どう接するかを私が悩むだけ、無駄なことも)

媚びへつらって近付いて来るような奴も、自分なら願ひ下げだ。

そんな考えが浮かんで、亜希は考えるのが馬鹿馬鹿しくなり、止めた。

自分の心を晒け出して、ただ彼等とぶつかるのみ。
それ以外に手はないのだ。

心に整理がついたことで、肚が据わった。

一目を閉じて深呼吸し、心を落ち着けた後、祈るように胸中で言葉を綴った。

（今から、私の勝手なお願いを精霊様方に申し上げます。聞き届けるか否かは、皆様の自由です。しかし、どうか話だけでも聞いて頂ければ、幸いです）

この話口調で良いのかどうか、わからない。

丁寧過ぎて鬱陶しがられる恐れもあるが、自分の誠意を伝えようと考えながら話し始めたら、自然とこんな台詞が口を突いて出て来た以上、もう引き返せないのだ。

（今、皆様もご存じの通り、この国とボルティモア軍は交戦状態にあります。武器使用許可が憲法に抵触するために下りず、一方的に攻撃されている状況です）

領土の一部を不法占拠された上、敵が武力行使に及んでいるにも関わらず、左翼議員達や報道機関の反発を気にして、未だ政府は反撃すら認めようとせず、聞けば、国会では憲法上の解釈で揉めると言う。

ローザの活躍で犠牲は抑えられているとのことだが、始まって数時間。

いくら宮廷魔導師と言っても体力も限界だろう。

国会でくだらない議論が続いている間に、現場では血が流れているかもしれないのだ。

（私は、この国の政府に憤っています。祖国に似た状況に置かれたオズウェルドの出来事が、とても他人事とは思えないんです）

ボルティモアは、近年、領海侵犯を繰り返していた中国に。
ピーキング諸島は、尖閣諸島に……姿が被って見えるのだ。

（私は特別、何の力も持たない人間ですが、どうしても現状を見過ごせずに、軍に加わりました。私一人、大した役に立たないかもしれませんが、じっとしてはいられなかった）

ふと、幕末の志士、吉田松陰の有名な言葉が脳裏を過ぎった。

かくすれば かくなるものと知りながら やむにやまれぬ大
和魂

思い上がりも甚だしいかも知れないが、もしかしたら幕末の志士の心境はこのようなものだったのでは、と不意に思った。

そう言えば、大学の恩師も言っていた。

誰に頼まれた訳でもないのに、勝手に国の大事を自分の責任と考え、背負い込んだのが志士達なのだ、と。

亜希の場合は異世界人なのだが、この国に骨を埋めても良いとさえ思える程に、情が沸いている。

既に今まで、いくつか死んでいてもおかしくないような死線を掻い潜って来た。

それも、オズウェルドを「第二の故郷」と思うが故だ。

（どうか、どうか手を貸しては頂けないでしょうか！ 虫の良いお願いだとは承知の上です）

言うまでもないが、ボルティモアの側にも言い分はある。

自分達にだけ手を貸せと言う願いは、身勝手にひどく傲慢なこと

は、自覚していた。
それでも

(どうか、騎士達をお守り下さい。私自身はどうでも良いです。せめて前線に立っている人達だけでも、構いませんから……)

ありつただけの熱意を込めて、語った。
言いたいことは、全部、ぶちまけた。

その後、しばらく反応を待っていたが、返って来るのは静寂ばかりだった。

駄目だった、のだろうか。

(いや、今結界を張るのを手伝ってもらってるだけでも、貴重で有り難いことだったんだよね)

ラズは「素質はある」と言ってくれたが、進んで特定の個人の思いを彼等に叶えてもらうなんてことは、やはり難しいことだったのだ。

重くなった気分を振り払うように、閉じていた目を開いた。

その直後 亜希は固まった。

「えっ……」

自分の周囲に、多数の生物が浮かんでいるのが……見える。
先程まで、何もないと思っていた空間に、ラズが指摘していたように、それはもうたくさんいる。

和風な天狗のような、鳥のような生き物や、西洋のおとぎ話に出

て来そうなペガサス、ラズを小さく半透明にしたようなちび龍……
等々。

その視線がすべて、亜希の方に集中している。

「あの……アーク」

本能的に自分に向いている注意を逸らしたくなっただのか、無意識に彼に声をかけていた。

「ん？ どうした」

「何か……急に、精霊さん達が視えるようになった、みたいですよ」

5 「天の声」

『ようやく霊視出来るようになったか、亜希よ』

突然、鈴の鳴るような愛らしい、第三者の声が亜希の頭の中に響いて来た。

ラズとテレパシー会話をしている時の感覚に似ている。
覚えのあるものだったので、とても驚いた。

この世界で、自分の名前を正確に発音出来る人物で、心当たりがあるのは……一人だけ。

辺りを見回して姿を探して見るが、見当たらない。
その挙動を不審に思ったのか、アークが「アキ？」と訝しげに名を呼んだ。

『今、遠方から「そなた一人」に語りかけているから、探しても無駄じゃよ。直接ここに来たら、人にはほとんど見える者がいないとは言え、精霊や龍達が大騒ぎするからな』

特徴的な口調と「精霊や龍達が大騒ぎする」と言う台詞に、亜希は自分の推測に確信を持った。

彼女は オズウエルドの女神、エルアノーラだ。
以前に彼女と逢ったと話ただけで、ラズがひどく興奮していたことを思い出し、確かに大変な騒ぎになるだろうな、と納得する。

それにしても、毎回登場がいきなりなのは相変わらずである。
まったくもって心臓に悪い。

(……お久しぶりです、エルアノーラさん。ご用件は何ですか?)

彼女が何の用もなく現れたことは、一度もない。
それをわかっているのです、単刀直入に問うた。

『せっかちな娘よのう』

(ずっと私が黙り込んでいたら、周りが不審がるじゃないですか)

『それについては心配無用。今から、こちらと進む時間が異なる所に場所を移して話す故、な』

そこまで言うと、彼女がくすりと笑った声がした。

『ふふ……亜希の「保護者」殿が、そなたの様子を随分心配しているようじゃ。ふむ……素質はあるが力は封じられているか……共に連れて行けるなら、その方が話は早いな』

(保護者? つっ!)

一瞬、頭頂部に痛みが走った直後、亜希はずぼりと何かから抜け出した感覚を覚えた。

何だか……自分の身体が軽くなったように感じる。

ふと足下を見ると、自分の身体が……浮いていた。

すぐ下には、「自分と同じ顔をした人物」が、ラズに跨った体勢で据わっているのが見える。

よくよく目を凝らせば、その人物の頭上からヒモが伸びていて、

その先が亜希の頭上へと繋がっていた。

「こりゃ、いつぞやに体験した幽体離脱かな？……って、うわあ！？」

突然、下に広がる風景が猛スピードで遠ざかり始めた。

つまり 亜希が凄腕で得体の知らない力に、上へと引っ張り上げられている、と言える。

昔、遊園地で垂直に急上昇・急降下するアトラクションに乗ったことがあるが、その何十倍も恐怖心を感じる。

何せ、幽体離脱なんて奇怪極まりない体験をしている最中なのだ。それにアトラクションと違って、ベルトも椅子も、何も無い。

「ぎゃあああ……！」

女性にあるまじき色気のない叫び声が、無意識の内に口から漏れていたが、こんな状況に置かれては致し方ないだろうと思う。

きつとエルアノーラが一本釣り宜しく、亜希の霊体を何らかの方法で引っ張り上げているのだろうが、そうだとわかっている、怖いものは恐いのだ。

「アキ！」

不意に、耳慣れた声が上方から聞こえた。首を上げると

「アーク！？ 何で……！」

自分の少し上には、アークがいた。

彼も亜希と同じように、同等の勢いで上へと引っ張られている。

（　　）　　そう言えば、エルアノーラが『共に連れて行く』とか何とか言っていたような……）

よく見れば、彼の頭頂部からもつつすらとヒモらしきものが伸びているのが、見える。

どうやら、アークも亜希の巻き添えで幽体離脱させられてしまったらしい。

申し訳ない、と亜希は心の中で呟いた。

ぼんやりとそんなことを考えていると、がしりと手首を掴む感触がした。

見ると、アークが器用にも空中で体勢を変え、逆さ向きになって亜希へと腕を伸ばしている。

「くっ……やっ」と合流出来たなっ……と

そのままぐつと引き寄せられて、アークの腕の中へと収まった形となった。

その後、アークは上手い具合にぐるりと回転し、再び頭を上にした。

「しっかし、いきなり身体から引きずり出されたのに驚いてたら、お前まで引っ張り上げられてるし……何が何だか状況がさっぱりわかんねえ」

どうやら、エルアノーラは彼には何も告げずに幽体離脱させたらしい。

「えつとですね。実はさつきエルアノーラさんから連絡がありました。少し場所を変えてお話がしたいとか……」

「それで移動手段がこれか？　前にお前からうちの女神さんに逢った話を聞いた時も思ったが、やり方が強引すぎるぞ」

「ですよね」

「それに、今は有事の最中で身体を長時間、空にしている時間の余裕はないんだが……」

「あ、それについては、時間の進み方が違う場所で話すので大丈夫だそうです」

「ふむ………そういや、あの世についてはそう言う説もあったような気はするな」

アークはそう言って、思案顔になった。

彼はとても冷静だ。

環境適応能力が高いのだろうか？

また、今の彼の言葉を聞く限り、宗教的な知識が少しあるらしい。

「宗教学を嚙ってたのが今回、初めて生きたかもな。実はアキと合流出来たのも、ある話を思い出したのがきっかけなんだ」

「その話とは？」

訊ねてみると、「あの世は『思い』がすべての世界」との説があると言っ。

その説は、多数報告されている、幽体離脱体験者の話から導き出されたものとのことだった。

ある人の話では、水面に足を触れた時、「歩きたい」と思えば水面を地面のように歩くことが出来、「泳ぎたい」と思えば地上にいる時のように潜れるらしい。

「もしそれが事実なら、得体の知れない力で引つ張り上げられている状態でも、それなりに動けるんじゃないかと思ってな。最初はアキの姿が遠目にしか見えなかったんだが、引つ張られる力に逆らいながら必死で近くまで行こうと足掻いてたら、何とかなっただけだ」

「……わけのわからない状況で、そんな風に行動出来るアークはすごいですね」

話を聞いて思い出したが、アークは以前に魔術の話をした際、「俺は思いの強さに関しては、結構自信がある方だ」と言っていた。その自信が、非常事態の中にあっても、彼が前向きに行動出来た理由でもあるかもしれない。

「自分の身に起きた事態に戸惑ってた時に、アキの姿が見えたから、とにかく傍に行っ……自分が安心したかっただけだ」

そう言っくと、アークはぎゅっと亜希を抱えた腕の力を強めた。

「今、アキが傍にいるから、冷静でいられる」

「あつ……私も、アークが傍にいるお陰で、いつの間にか引つ張り上げられてる恐怖感がすっかりなくなっちゃいました」

今一人だったら、多分まだ叫び続けてたと思いますよ、と付け加えると、彼はくすりと笑った。

その後、いくつか雲を潜り抜けた。

高さが増すごとに、周囲が明るくなって来たように感じる。少し眩しさを感じ始めた時 身体の上昇が止まった。

6 「第一の標的」

「あれ？　ここは……」

引つ張り上げられていた力が消えたことで、亜希は周囲に目を向ける余裕が生まれた。

大理石の壁に青い絨毯が敷かれた、中世のお城の一室のようなインテリアの部屋。

テラスに続く窓は少しだけ開かれ、そこから差し込む光は柔らかく、吹く風は澄んだ空気を室内に運んでいる。

備え付けの暖炉を囲む檻は、白色でどこか愛らしい。

そのすぐ傍に丸テーブルが置かれ、謀ったように椅子が「三つ」用意されている。

「アキ、この部屋がどうかしたのか？」

「何か、見覚えがあるんですよ」

（　　）　どこで見たんだっけ

青い絨毯と言う点ではローザの家にも似ているが、少し雰囲気がい異なる。

同じように高級そうな建物で入ったことがあるのはエリオットの家だが、あちらの絨毯は赤で統一されていた。

「前にそなたと妾があった場所がここじゃ。忘れたのか？」

突然、背後から声がした。

「ひっ！」

ぎょつとして振り返れば、白髪の絶世の美女が微笑を浮かべながら立っている。

エルアノーラ、その人である。

逢うのは数ヶ月ぶりだ。

彼女は、生前にこんな格好をしていたのかもと思わせる、王族然とした白いドレス姿で登場した。

エルアノーラはオズウエルドの初代女王なのだ。

「エルアノーラさんっ！ 毎回毎回、いきなり現れないで下さい！ 久しぶりなんで余計にびっくりしましたよ！」

扉から普通に入ってくるとか、たまにはそう言う登場の仕方をしたいものである。

まだ動悸がしている 今、自分は霊体なので、そんな気がするだけなのかもしれないが。

「済まぬ。つい癖で、こちらで生活している時のやり方を取ってしまっ」

「……俺も、気配をまったく感じなかった」

その手のことには敏感そうなアークも、純粹に驚いている。

彼の左手が、自身の腰に提げられている剣の柄を握っているのが、その驚きの度合いを示しているかのように見えた。

「それに……さっきのアレは何なんですか！？ めちゃくちゃ恐か

「ったんですけど！」

仮にも神様相手に、こんなにぞんざいな口の利き方をしても良いのだろうかと言う思いもあったが、どうしても一言物申したいと言う気持ちの方が勝った。

今まで、彼女と逢うのに先程のような恐怖感を味わうようなことはなかったのに、今回は何故あのような手段を取ったのかと問うと、彼女は「訓練だった」と答えた。

「いずれ、亜希が自由に肉体から抜け出して、行きたい所に行けるようにするための、な。肝の太いそなたなら大丈夫だと思っておったんだが、その様子だと、少々飛ばし過ぎたようじゃな 悪かった」

「……………少々……………」

あの遊園地にある絶叫マシン以上の恐怖を感じた出来事を、「少々」の一言で片付けるのかと口調が自然と責めるものになったのは、仕方がないことだと思う。

そんなことを心の中で呟いていた時、「エルアノーラ、さん」とアークが声を上げた。

名と「さん」付けの間に少し間が空いたのは、自国の神に対して、どう呼べば良いか悩んだためだろう。

「今日アキと俺をこちらに呼んだ目的を聞きたい。時間の流れが地上と違うと言っても、ずっとのんびりしていられる程の余裕はないだろう」

「それは確かにその通りじゃ。単刀直入に言えば、目的は二点。亜希の開花した能力の注意点と、そなた等が見逃している敵の意図を

どうしても今、伝えておきたかったのじゃ。戦場の中に入れば、辺り一帯に立ちこめている暗い想念の煙で、連絡が取りづらくなる故
な」

「その意図とは？」

アークが訊く前に、亜希から問うた。

自分の身一つより、今実行しようとしている作戦の成功に関わる問題の方が重要だと思ったからだ。

「そなた達、ボルティモアの兵がこの戦に乗じて、市街地に潜り込んだとして、最初に狙われるのがどう言ったグループだと思う？」

質問に質問を投げ返したエルアノラに「おい、言葉遊びしてる時間なんて……！」とアークが声を荒げかけたが、彼女が鋭い目で一瞥すると、彼は開いていた口を閉じた。

神格を持つ霊の威圧感には、世界でも名だたる武人であるアークを黙らせる程の言い知れぬ迫力があつたようだ。

隣にいる亜希も、ぞくりとした。

彼女は人の心を読めるのに質問を振るのは、自分達に「考えさせたい」からだろうか、と亜希は思った。

「……今までの彼等の行動から察するに、保守派ではないでしょうか」

「特に、俺達みたいな奴等だろう。アキも実際危険な目に遭ってるしな」

亜希とアークは同意見だった。

国民の愛国心を鼓舞して、ボルティモア人のオズウェルド植民地化計画を邪魔する自分達を、彼等は目の上のたんこぶのように感じている筈であり、有事となれば真っ先に狙う筈だ、と。

「それが当然だろう」と思つてエルアノーラの返事を待っていると、彼女はにやりとした。

「両者共、同じ考えか　されど、今我が国の中枢に、左寄りの思想の者ばかりが居座つておる現状を見るに、保守の勢力は悲しいかな、まだまだ小さい。狙うのは後回しにされる筈じゃ。彼等が先に肅正したい者達は別におる」

「え……？」

予想外の返答に、驚いた気持ちが思わず口から音となつて、漏れていた。

「わからぬか？　今、わが国で大きな勢力を築いている者達だ。彼等の大半はこの現状の深刻さがわからずにおいて、中には無条件降伏さえ言い出しかねない輩もある。彼等が無明の中にいる内は、ボルティモアは良い手駒として利用する　だが、もし彼等が危険性に気付けば、激しく抵抗する筈じゃ　今の保守勢力よりも過激にな」

エルアノーラの言に、亜希とアークははっと目を見開いた。

「……左翼の活動家か」

「如何にも。ボルティモアは、共産主義者と社会主義者を真っ先に肅正するはずじゃ。同じ思想を掲げる者として、その過激さは重々

承知しておるだろうからのう」

左翼活動家には、他人の痛みや苦しみに敏感な人が多い。

一度、彼等の怒りに火が付けば エルアノーラの言の通り、ボルティモアへ激しく衝突くだろう。

彼等の掲げる思想において、暴力による革命を肯定していることから、その本質的な過激さは明らかだ。

このような危険分子を、ボルティモアが捨て置く訳がない。

何で、今までこのことに気付かなかつたんだらう。

エルアノーラに指摘されて気が付いたが、考えて見れば納得出来る予測だった。

アークも彼女に言われて初めて、気が付いたらしい。

おのが不明を恥じるように、唇を噛んでいる。

また、彼等が暴力革命を肯定する背景には、左翼思想が人を機械と同列に見ると言っ点にある。

いわゆる、唯物論だ。

唯物論では、人には「労働力としての尊さ」しかない。

それ故に、その理論には人の命を軽んじさせる、思想的欠陥があった。

共産主義国や社会主義国でしばしば粛正が行われるのは、このためであり、言わずもがな、ボルティモアもその例に漏れない。

「我が国に入り込むために現地の左翼活動家を利用した後、事が終われば、活動家達を始末する そんなところだらう」

7 「心の針」

ボルティモアに媚び諂い、進んで彼等をこの国に招いた人達が、真つ先に肅正されると言うのは、実に滑稽な話だった。

それと同時に、敵が最初に自分達が鬱陶しいと思つてゐる奴等を一掃してくれるなら、有り難い。そんな残酷な感想も、ちらりと亜希の胸を過ぎった。

今まで、左寄りの思想の政治家と、その取り巻きには散々酷い目に遭わされて来たのだ。

命が危うい状況に身を置いたこともある。
自業自得ではないか、そう思つた時だった。

「 良い気味、と思うか? 」

エルアノーラの鋭い気迫の籠もつた声と眼差しに、亜希は息を呑んだ。

彼女が「 霊には、心はガラス張りのように透けて見える 」と話していたことを、今更ながら思い出す。

今、自分は何を考えていた ?

良いか、と彼女は言葉を続けた。

「 人は、至高神が生み出せしものであり、そなた達も妾も、そして左翼の者達も、皆、神の一部なのじゃ。左翼思想もその根底には、人々を救いたいと言う愛の思いがあり、そこから生み出されたものであった筈。ただ、憎しみ合うのではなく、理解するよう努めよ。すぐには難しかろうが、長い目では彼等と協力して国難に当たる方向で、考えるのじゃ 」

そこで言葉を切つて、亜希、と名を呼ばれた。声に、自然と背筋が伸びる。

「憎しみを捨てて、愛を取れ」

言葉が、ずしりと胸に響いた。

「そなたの心が憎しみで染まれば、悪魔にたちまち身体を乗っ取られるじやろう。霊視出来るようになって間もないそなたは今、悪魔の格好の的になる存在じゃからな」

「……それは、『アキの開花した能力の注意点』に繋がる話なのか」

不意にアークが話に容喙した。

「如何にも。亜希は今、霊全般に対する感度が非常に鋭い状態になつておるのじゃ」

「良いもの、悪いもの問わず……と言つことですか？」

「左様。心の針が天を向けば、神々や良き精霊達と、逆に地獄に向けば悪魔や悪霊達が寄つて来よう。心を乱さぬよう、肝に銘じねばらぬ」

聞きながら、あつと思ひ出した。

以前にも心を乱さないよう、注意を受けていた　この部屋の中で。

今の今まで、それをすっかり忘れていた。

自分の至らなさに、身の竦む思いがした。
それに引き摺られるように、無意識のうちに自分の頭は下に下が
っている。

自分と意見が違う人達であれば、目の前で殺されても構わな
い。

そんな思いを一瞬であれ、抱いてしまった自分自身が恐ろしい。

こんな私が、国を立て直す等と試みてみた所で、大言壮語も甚だ
しいのではないか？

内ゲバを繰り返す左翼を白い目で見ていた自分も、同じ穴のムジ
ナだろう。

……私は、未熟だ。

「そう卑屈になるな。完璧な人間等おらぬ」

「しかし……」

「過てば、また改めれば良いのじゃ。先程、亜希は少し心境が下が
りかけていたが、すぐに反省が入ったから、持ち直しておる。日々、
反省の時間を取ることに。さすれば、大きく道を踏み外すことはない
筈じゃ」

「はい」

「 実の所、先に亜希が反省の気持ちを持っていなければ、この
床が真つ二つに裂けて、今頃、地上めがけて真つ逆さまに落ちてい
た所だったろうが」

「!?!」

さらりと呟かれた言葉に、背筋が冷えた。

「この世界は『思いの世界』じゃからな。高き神々の世界における時に、その世界に留まるに相応しゅうない心境になれば、それに見合った世界に落とされてしまうようになっておる。ま、危ない所じやったが、踏み留まれて良かったのう」

笑いながら、ばしばしとエルアノーラに肩を叩かれたが、亜希はぞっとする思いをなかなか消せずに俯いていた。

先程、急上昇させられていた時もかなりの恐怖を感じていたのだ。真つ逆さまに落とされていたら、今頃、発狂しそうな状況になっていたに違いない。

「あまり自分を責めるでない。『良い気味』と思ったのは隣の男も同様じゃったみたいだからな」

「え……?」

驚いて隣に視線を移せば、アークはばつの悪そうな表情で、視線を明後日の方向へと向けている。

その様子を眺めるエルアノーラの眼差しは、どこか優しく見えた。

「こ奴も、すぐに反省の念を持たたお陰で、転落せずに済んでおるのじゃ。マッシュモールに対する憎しみは、まだ深いか」

「……っ！ 貴方は全部……」

アークは亜希が今までに見たことがない程、狼狽した表情を浮かべていた。

口調も、固くなっている。

ラスター・マッシュモールと過去に、何かあったのか。

左翼の親分格である彼に対する憎悪が、左翼の活動家達への憎しみへと繋がったのかもしれない。

「知っておる。そなたも過去の因縁があるから許し難いのはわかるが、それを乗り越えねばならぬ。リーダーを自任するならばわかるな？」

「……はい」

アークは慇懃に返事をする。
未だに顔は強張ったままだ。

「まったく、そなた等は似たもの同士じゃな。反省が過ぎて卑屈になり、心が暗くなったら本末転倒ぞ」

呵々とエルアノーラは笑った後、その視線を再び亜希へと移した。

「この男は普段は冷静じゃが、マッシュモールのこととなると憎しみで判断力が鈍る危険がある。その時は、亜希。そなたが手綱を引いてやれ」

「……私に……出来るでしょうか」

咄嗟に、後ろ向きな言葉を返してしまった。

以前に基地でラスターと対面した時の威圧感は、忘れようがない。あのプレッシャーに晒されながら、果たして自分にアークを抑え

られるのか　自信がなかった。

「何を謙遜しておる。あの男と正面から渡り合う度胸があったそなたなら、大丈夫じゃ。それに、アークはその一点を除けば、頼りになる男だぞ？」　他に弱点らしい弱点がない分、一つ位弱点があった方が、可愛げがあつて良いとも思つてやれ」

「……エルアノーラさんよ、それは褒めてるのか？　貶してるのか？」

「もちろん、褒めておるぞ」

そう言つてけらけらと笑う彼女に、アークは訝しむような目を向けている。

ほんとかよ、と小さく呟いた声が聞こえた。

(あ、いつの間に……)

ふと見れば、アークはすっかり緊張が解けている。

エルアノーラとの会話を続けるうち、いつものペースを取り戻したようだ。

(いや、エルアノーラさんがそう仕向けたんだ)

叱るべき点は厳しく叱るが、ただ相手を責めるだけではなく、落ち込んだ後のフォローもしっかりやる。

指摘が胸に響いても、突き刺すような痛みがないのは、ユーモアのある語り口調だからだ。

その行動が突拍子のない所もあるとは言え、やはり神を名乗る人

物だけはある。

器が、大きい。

畏怖の念に打たれていると、エルアノーラがにっこりと亜希に微笑みかけた。

「いざと言う時、傍で支えてやる代わりに、普段はしっかりと守ってもらうが良い。今、亜希は人々の暗い想念にも当てられやすい状況じゃが、アーク、そなたが傍にいただけでも大分違うじゃろう。強い光のオーラの持ち主故な。必要とあれば『気』を使え。そなたが本気で『気』を発せばその辺の雑霊は全部弾き飛ばせる位の力が、今でもある」

「はい」

「アークの霊道は開いておらぬ故、身体に戻れば亜希のように霊は視えなくなってしまうが……人々が発する『想念』の煙を戻る道中、よく見ておくことじゃ。後でしっかりと亜希を守るようにな。亜希は四六時中、霊視出来る状況だと気が狂いかねぬ。必要に応じて妾に祈ってくれ。霊道の開け閉めに手を貸そう。されど、いずれ自力で出来るように心を整えるのじゃ」

ああ、そうそうとエルアノーラは付け加えた。

「祈る際に心が乱れていると、妾にそなたの声が届かぬ。その点、ゆめゆめ忘れることのなきよう」

「……わかりました」

「では、今からそなた達を送り返す

健闘を祈っておるぞ」

彼女がにっと笑ったのを見た、と認識した直後　突如、足が床をすり抜けて　亜希とアークの身体は落下して行った。

8 「飛行」

「って、結局落とされるんですか!? いやああ……!」

風を切って落ちていく身体。

頭が下なので、行きよりもより一層、恐怖感が増している。

「亜希、落ち着け!」

ぐっと腕を掴まれた。

気が付くと、いつの間にかアークに抱き抱えられている。

部屋にいた際、傍にいたため、落ちてからも彼との距離はあまり広がっていなかったらしい。

「今、俺達は『霊体』だ。このまま落ちても命の危険はない」

「それはわかってます! でも、こんな空高くから頭から落とされて、恐がるなって方が無茶な話じゃありませんか!？」

「俺もまったく恐くない訳じゃないが……女神さんが、行き帰りにこんな体験をさせるのは『訓練』のためだと言っていた。慣れる、と言っことだろう」

「慣れる!? 慣れられるモンなんですか、これが?」

どうにかこの恐怖から逃れる術はないものだろうか?

急上昇した時は、アークが傍にいたお陰で落ち着いていられたが、真っ逆さまに突き落とされるシチュエーションでは、彼の存在があ

っても、まだ足りない。

(あの世は、『思い』がすべての世界って言ってたけど……)

思考の海に入ること、恐怖心から逃れようとするのは本能的な行動かもしれない。

先程のアークの言葉を反芻しながら、考える。

あの世とこの世の境目はどこだったのか？

天国を雲の上の世界として表現する話はよく聞くが、雲なんてそこからあるので、それも基準とするには曖昧すぎる。

そもそも、アークが「思い」の力を使って亜希と合流したのは、雲よりも下だった。

(……明確な境目は、ない？)

ふと、そんな考えが浮かんだ。

もしかすると、幽体離脱した時点で「思い」の力が使えるようになっていた可能性もある。

その仮説が正しいとすれば　あの世とこの世は重なり合っている世界なのかもしれない。

霊の身になると、その重なり合っている世界の方に移動することになる　言い換えれば、霊であれば、「思い」の力を常に使える状況にある、と言うことになるのだろうか……？

(もし、そうだとすれば、今私が『思い』の力を使うことで、落下しているのを止められるかも……？)

駄目で元々。

目を瞑り、魔術を行使する時と同様に、創造力を働かせる。

今、宙に浮いていて一番不自然じゃない状態として、頭に浮かぶのは 天使。

(……背中から生えてるイメージで、二人分の体重支えられるようなデカイ奴……！)

自身の中にあるエネルギーが背中から外へと漏れ出し、それが翼を形作る様を思い浮かべる。

肉の身では、四大元素と光と闇に関わる魔術以外は使えないものとされていたが、霊の身だとモノを生み出すことも、あるいは出来るかもしれない。

はつきりとしたビジョンが見えた瞬間、がくんと逆向きに身体に負荷がかかった。

(いけた、か……?)

ゆっくりと目を開くと、視界の隅を白い羽が一つ、ひらひらと横切っていた。

見える景色は地面が下になっていて、ゆらゆらと小さく上下に揺れている。

落下しては、いない。

「出来た……何でもやってみるモンですね」

「あの世が『思い』の世界って話から、こんな真似が出来ちまうとは……すげえな、アキ」

「いえ。ただ恐い状況から逃げようと必死に考えてたら、たまたまこうなっただけって言うか……」

「もしかすると、女神さんが求めていたものの中には、『思い』の力の使い方もあったのかもしれないな」

それにしても、とアークは続けた。

「アキ、重くないのか？ 霊の身とは言え、この体勢だと……」

「一応、最初に二人分抱えられる位、大きい翼が生えたイメージを思い浮かべたので……あ、そうだ。ちょっと待って下さい」

ふと、自分の身体をどうにかするだけではなく、地上で魔術を使った時と同様、自分以外のものに「思い」の力を形にして、「付与」することも出来るのでは そんな考えが浮かび、再び目を閉じた。

(アークの背からも羽を生やせるかも)

先程と同様のビジョンを描き、はっきり思い浮かべられるまでのものになった直後、目を開いた。

アークの背を見ると しっかりと羽が生えていた。

「よし、大成功！ どうでしょう？ ちゃんと思っように動けそうですか？」

「ああ しっかり規格外だよな、お前は。予想の斜め上に行く行動を取ると言うか……」

「そうですね？」

「そうやって自覚がない所がまた、見てて面白いんだよな　しかし、どのみち、のんびり飛んではいられないぞ。ここが地上と時間の流れが違うとは言っても、ラズに乗って飛行中の肉体をいつまでも放置してはいられんからな。知らない間にバランスを崩して落下してたとかつてなつてたら、笑えねえし」

「それは、確かに……」

戻ってみたら、還るべき肉体がありませんでした、となつては困る。

還れないとなれば、それはイコールあの世行き、となつてしまう。

「そうとなれば、急いで戻るぞ」

アークは亜希の腰に片腕を回して抱き締めたまま、再び頭を下にした降下体勢を取った。

結局は逆さまの体勢で、結構な速さを出しながら落ちて行かなければならない状況からは、逃れられないと言う訳だ。

「……恐いだろうが、耐えてくれ」

ここで我慢しろ、と来ないで、耐えてくれと、頼むような口調で告げるのは、アークの気遣いだろう。

折角、羽を生やしてみせると言うアイデアを形にしたのに、あまりそれを活かさないことになってしまったことに関して、亜希を落ち込ませまいとしているのだろう。

「いえ、大丈夫ですよ　さっきまでと違って、羽があると言うことで、もし何かあっても大丈夫だって言う安心感があるからか、大

分恐怖心が薄らいだ感じなので」

これは本心で、虚勢で言った訳ではない。

羽があると言うことが、亜希の中ではある種の保険と言うか、心の拠り所となっているのだ。

それ故、羽がなかった時とは違い、安全装置が付いている遊園地の絶叫マシーンに乗っている位の、耐えられなくはない程度まで、恐怖感の度合いは下がっていると言う訳である。

それでも、結構恐いことに違いはないのだが、これ位の恐怖感であれば、傍にアークがいてくれることでほとんど相殺出来る。

だから大丈夫、そんな思いが伝われば良いなと顔を上げると、柔らかな面持ちのアークと目が合った。

「そうか　まあ、羽があるうとなかろうと、何かあったら、ちゃんと庇ってやるから」

だから安心しろ　そう耳元で囁かれ、胸がほわっと温かくなっ
たと同時に　何故か少し、動悸がした。

9 「使命を果たせ」

自分達の身体に戻るべく、飛行を続けてしばらく経った頃。開けた視界の隅に黒いものが見え、何気なく視線を移して 亜
希はぎよつとした。

(何だ、あれ……)

海から海岸にかけて、上空には異様なまでに黒い雲がかかっている。

灰色ではなく、本当に漆黒と言って良い黒さだった。

そのすぐ周りは雲一つ無い青空がなので、その青と黒のコントラストが際立って見える。

よくよく見ると、雲はかなりの濃さであるにも関わらず、その下には日光がすり抜けたように差し込み、周囲を照らしていた。

その点を取っても、普通の雲でないことは明らかだ。

黒い雲は徐々に周囲へと広がって行っている。

異常なもの、としか言いようのない光景だった。

「女神さんが言ってた『想念の煙』ってのは、あれのことかもな」

アークが不意に声をかけて来た。

彼も、亜希と同様に、あの異様な雲に気が付いたようだ。

「ちょうどあの辺りが俺達の目的地で、戦場の真っ只中だ。あの黒い煙が女神さんの言うように、ホントに人間が生み出してるモンだとしたら……気味が悪いな」

エルアノーラは「想念の煙」を「人々が発する」ものだと言っていた。

思いが形となるこの世界に、戦場の人々の憎しみや恨み等の感情が流れ込み、黒い雲へと姿を変えているのか。

とすると、こちらの世界とあちらの世界は、やはり重なり合い、互いに干渉し合っている存在なのかもしれない。

容易に行き来は出来ない等、干渉するに当たっては色々な規制があるのだろうが、どうやら完全に分離された世界ではなさそうだ。

アークの言葉に同意を示すように頷きつつ、遠目に戦場の様子を窺っていると、一瞬きらりと光が瞬いた。

「！ 今の、見ました？」

「ああ。確かに、何か光ったな」

気のせいかと思いながら、アークに問いかけると、彼も同じものを見たと言った。

しばらく様子を見てみると、場所を変え、時折明滅しているのがわかる。

光が見えた直後は、一時的ではあったが黒い雲が薄くなり、その動きが鈍くなっていることが窺えた。

しかし、黒い雲が周囲に広がっていく勢いは早く、謎の光はその速度を若干抑えるに留まっているようだ。

「あれは……一体何なんでしょう？」

「人の思いが闇を生むなら、光を発している者もいるんだろう。しかし、あの様子だと……戦場はかなり荒れていると見て良いだろうな。ほとんどの奴は敵に対する憎しみが理性を上回っちまってる状態、って所か」

アークの言葉が、重く響いた。

少し前にエルアノーラから注意を受けたことを思い出す。

(……私とアークも、さつき足を踏み外してたら、あの闇に吞まれてたんだ……)

憎しみを捨てろ、とエルアノーラは言っていた。

人は、至高神が生み出したものであり、皆が神の一部であるとも彼女は語っていた。

無論、今攻めて来ているボルティモアの兵達も、その言が正しいとすれば、神の一部なのだろう。

あえて彼女がそのことに触れなかったのは、言っまでもないことだと思っただからか。

ふと、アメリカの大統領で有名なリンカーンを思い出した。

南北戦争において、北軍の劣勢が続く中、彼はホワイトハウスの祈りの部屋に籠もることが多かったと言う。

北も南も同じ神に祈り、敵を倒すことを願っている
その心境はどのようなものだったのだろうか？

「何人に対しても悪意を抱かず、すべての人に慈愛を持って、神が我等に示し給う正義を実現する」と宣言するに至った、その経緯は？

そこを思い出したかったが、残念ながら亜希の専門は日本史であり、彼の人生についての詳細な内容まではそもそも、知識がなかった。

（人の命は人種、国家、性別等の区別を問わず、尊いものだ）

故に、エルアノーラが憎しみを捨てる、と言うのは至極当然の話だった。

しかし、だからと言って、刃を向けて来る相手に対して、無抵抗のままにいると言うのは間違っている、と亜希は思っている。

エルアノーラも愛を説きつつ、一方で戦場に向かおうとしている亜希達を助けてくれているのは、きっとこの考え方が正しいからだと信じていた。

日本にいた時から、この考え方は変わらない。

大学の教職課程に含まれるある講義において、某講師が「日本は昔、戦争でアジアの国々を酷い目に遭わせたんだから、今多少脅されたって仕方ないことだと思う。ミサイルを撃たれても仕方なかったとしても、やむを得ない」と話すのを聞いた時、むくむくと反発心が沸き起こって来たのは、今では良い思い出だった。

友達数人と自らの単位をかけ、試験においてその講師の意見に真っ向から刃向かう論文を提出したのだ。

しかし 後日、返って来た成績は全員が「優」だったので、皆拍子抜けした。

その講師は恐らく日教組教育の洗脳を露骨に受けていた人だったのだろうが、偏った自説を披露するばかりであった講義に反し、案外フェアな目で学生を評価出来る人であつたらしい。

国政に携わる者や、国家と国民の安全を守る職務にある者は、

国民の生命と財産を護るため、時には非情な判断を下さなければならぬことがある。

「されどその際、エルアノーラは心を乱さず、憎しみを捨てると説く。」

難しい。

でも、それを両立しなければならない。

政に介入するなら、この重責に堪えなければならない。

（戦場を目前にして、今更怖じ気付いてどうするんだ、私！ 二二二まで来て迷ってる場合じゃないのに……）

先にアークから「敵兵に刃を向ける覚悟があるか」と問われ、頷いた時の自分には、本当の覚悟なんか出来ていなかったのではないか？

そんな自分と比べて、武功で名を挙げた彼は……と視線を移すと至って落ち着いた表情で戦場の方を眺めていた。

その達観したような面持ちは、自分になんか何かを湛えているように見えた。

静かにその横顔を眺めていると、アキ、と突然名を呼ばれてどきりとした。

アークは視線を外したまま、言葉を紡ぐ。

「親父が好きで、俺がガキの頃にしょちゅう聞かされた神話があるんだが……戦場に行く時、いつも思い出すんだ」

「オズウェルドの、ですか……？」

「ああ。今は我が国で、軍神として祀られている英雄アルテアが、親族との争いで罪の意識に苛まれていた時のことだ」

天から舞い降りた神セルフィドは、アルテアに告げた。

おのが義務を果たせ、と。

セルフィドは愛を説く神として有名だったが、そこではアルテアに「戦え」と命じたのだと言う。

「これは親父の受け売りなんだが　セルフィドは『使命を果たすことも大事なことだ』って言いたかったんじゃないかと思うんだ」

「……使命を果たす……」

「例えばこの国の騎士達に置き換えてみたら、『騎士としての使命を果たせ』ってことだよな。騎士としての使命は何だと思う？」

「国と国民を護ること、です」

「そうだ。騎士達の仕事は単なる人殺しと違って、その使命を果たすためにあると俺は思う　この話を思い出すお陰か、俺は今まで戦場で自分を見失わずにいられた」

そう言って、アークはこちらを見るとにっこり笑って、おどけて言った。

「初陣の見習い騎士『アルト』君に、この話を贈ってやるよ」と。

「何で、その神話を私に？」

「ん、何となく必要になって。余計なお世話だったら悪かったな」

「いえ、そんな！」

余計なお世話なんて、とんでもなかった。

まるで亜希の心の葛藤を見透かしていたかの如く、彼は適切な処方箋となるような話を亜希に聞かせてくれたのだ。

「おっと、何か龍の影っぱいものが見えて来たぞ。ほら、下見してみる」

アークはそこではっと話題を変えた。

言われて見たものの、亜希の目には何も見えない。

亜希への気遣いからそうしてくれたのだろうか、と思いつき、自分を抱える腕の温かみを改めて亜希は実感した。

若くして「赤の闘神」の異名を持つだけのものが、やはり彼にはあるのだ。

(肚は据わった)

もう、揺らがない。

そう心中呟いた後、亜希は口を開いた。

「急ぎましょうアーク いえ、將軍」

「おう。もっと速度を上げられるよう、気合い入れてみる。しっかりしがみついている、アルト」

亜希の表情を見て、何か吹っ切れたものを感じ取ったのだろう。

アークはにやりとした後、亜希を抱く腕に力を込め、背に生えた

翼を大きく羽ばたかせた。

閑話「帰還」

少し前から、戦場を包む空気が明らかに変わった。それを、ローザは肌で感じ取っていた。

と言つても、今自分は霊体なので、あくまでそう言う感覚がすると言つことなのだが……

そう言った雰囲気を作っているのは、先程から見える数が明らかに増えている。精霊達、だろう。

人が生み出した暗い想念の煙に捕らわれないようにか、戦場と一定の距離を置いて周囲を漂いながら、こちらの様子を窺っているようだった。

彼等の姿が増え始めてから、ローザが自軍に張っている結界を強化するようにその外側に膜のようなものが出現し、また、ローザが作り出した以外の小規模な幻影によるボルティモア軍への威嚇魔術が時折展開されているのを見るに、どうやら精霊達はオズウェルド軍の方に肩入れをしれくれいてるらしい。

今まで不干渉を決め込んでいたかの如く見えた彼等が、一転、こちらに協力してくれるようになった、その理由が非常に気になる所ではあったが、ローザもそう言ったことを考えながら、目の前の状況に対処するほどの余裕がないため、浮かんだ疑問を呑み込んだ。

(魔術の行使に意識を集中しなきゃ……この想念に吞まれちゃうわ)

ふつと気を抜くと、途端に周囲を漂う想念に籠もっている兵達の憎しみの「声」や、それに吸い寄せられてきた悪霊の「囁き声」が聞こえて来るのだ。

いつそ、吞まれちゃえば良いじゃん。それで死ぬ訳でもないし。頑張ってたってしんどいだけでしょ。

貴方一人だけが何故、身を粉にして働く必要があるのです？
理不尽とは思いませんか？　そこまで国に尽くす価値なんてないでしょう。

(……ほーら、聞こえて来た)

こつした声には、絶対に耳を貸してはいけない。
霊能力を持つ者の中には、気が狂ってしまう者も少なくないと聞くが、恐らくこれ等の「声」が原因であろう。

(国のために自分の力を使えることが、私の生き甲斐なんだから。
とことんあがき続けてやるわよ)

心を強く持つこと。

幽体離脱中の大事な心得だ。

決然とした思いがオーラとなって、ローザの霊体から周囲に発せられると、纏わり付いていた煙が吹き飛んだ。

霊の身で飛び回ってからと言うもの、自分の心の隙を突いて纏わり付いて来た煙を、その都度吹き飛ばしている。

鬱陶しいこと、この上ない。

そうこうしていると、突然、視界の端から彗星の如く、大きな光が尾を引いてこちらに落ちて来るのが見えた。

「あれは……」

遠目なので、ここからでは何なのか、まったく見当が付かない。

その気になれば、幽体離脱経験豊富なローザにとって、対象物付近まで瞬間移動することは造作もなかったが、そのことで、今行っている魔術から気が逸れた結果、万が一にも騎士達を覆っている結界が解けてしまつては、大惨事になる。

（光を纏った存在なんだから、少なくとも悪いモノじゃないことは確かだわ。だったら、放置してたつて平気よね）

そう自分に言い聞かせながら、ローザは再び魔術の行使へと意識を集中させることに専念した。

急いで戻ろう　亜希がそう思った直後、急に視界が暗闇に覆われて……気が付けば、周囲が様変わりしていた。

（あれ……？）

目の前には、大きな角が二本によきりと生えており、そこに結びつけられた紐が亜希の身体へと繋がっている。

おしりの下の感触はふわふわ、もこもこ。
辺りを吹く風は強く、冷たい。

背中に翼が生えていた感覚は、いつの間にか消えていた。

「もしかして……戻った？」

「どつやらそうらしいな」

無意識に口から出た問いに対して、後ろから返事が返って来た。

先程、宙にいた時に前から亜希を抱えて飛んでいたアークが、今背後にいる。

幽体離脱前の状態に、二人は戻っていた。

辺りの見える景色にさほど変化が見られない所を見るに、幽体離脱していた時間はこちらの時間に換算すると、ごくごく短いものであったようだ。

そのことにほっとしていると、「アーク！ アキ！」と大きな声が脳に直接響いて来て、うわあと亜希は思わず声を上げた。

「何があった！？ 数秒間だけだったが、二人の気配がまったくなくなつて、我がどれ程心配したか……！」

ラズが自身の感情の揺れを、言葉と共にこちらへ伝えて来た。

「それにそのオーラ 二人共、纏う光が先刻よりも一回り大きくなつておる。この短時間のうちに何がしかの学びを得たとは考えにくい……もしか、天界へと行つていたのか？ だとすれば、こちらと時間の流れが違う故、説明がつく」

「ええと……そのまさかです」

『飛行中に身体を置き去りにして天界に向かう等、一歩間違えば自殺行為だぞ!?!』

ラズが発した怒罵が脳天を直撃して、亜希はうつと呻いた。

亜希とアークの身を案じるが故の怒りだと言つのは、言葉と共に伝わって来る感情の波でよくわかるが、そのあまりの激しさに頭がクラクラしている。

「ラズ、落ち着け。突然俺達は『向こう側』から引つ張り上げられたんだ」

『それは一体、何者の仕業だ』

「実はその……エルアノーラさんです」

ラズの問いに、亜希は恐る恐る名を挙げた。

彼の信奉する神がそんな突拍子もない真似をしたと知れば、シヨックを受けるかも知れないと思つたためだった。

『……それは、真か?』

「はい。どうしても今伝えたいことがあつたので、呼んだ、と」

『親神様は、その……当然、天界にそなた等の魂を招いている間の、二人の身体の安全は保障して下さつたおつた筈だな?』

そう言えば、その点についてエルアノーラからは何の言及もなかった。

手を貸す人間をうつかり死なせてしまうような不手際は、あり得

ないと信じたいが……

少し返答に迷った後、「多分」と答えると、暫しの間ラズは沈黙した。

少し、ショックを受けたのかもしれない。

10 「信頼関係」

呆然としているラズにどう声をかけようかと考えていると、視界を上から下へと何かが過ぎった。

そちらに目を向けると、半透明のタツノオトシゴ風な形をしたちび龍が、亜希の手の上に乗っかるようにしながら、こちらを見上げていた。

このちび龍は確か、幽体離脱前に亜希の側にいた精霊の内の一匹だ。

水晶玉のような瞳をくりくり動かしながら、尻尾をぱたぱたと振っている様子が実に愛らしい。

「君、どうしたの？」

声をかけてみると、突然脳裏に様々な映像が浮かび上がって来た。

たくさんの精霊達が、戦場の方に飛んで行く光景。

濃い黒い雲で覆われた戦場。

（もしかして、この子が映像をテレパシーで伝えて来ている……？）

何の根拠もないが、そう感じた。

映像は、次第に戦場をズームアップしていく。

黒い雲の中で時折明滅する光に、焦点が絞られていき、その中に人の姿が見えて来た。

長い金の髪。

華奢だが均整の取れた四肢。

（あれは……もしかして、ローザ!? でも）

姿がうつすらと透けて見える。
もはや、幽体離脱中なのでは……

「おい、どうした？」

映像をじっと観察していると、アークに肩を揺すられた。
虚ろな目でぼうつとしていたため、心配をかけてしまったようだ。

「急に頭の中に映ぞ　いえ、風景が浮かび上がって来たので、それを見てたんです」

「映像」と言いかけた直後、こちらには映画もテレビもないので、映像と言う概念がない可能性に気が付き、亜希は咄嗟に「風景」と言い換えた。

「風景？」

『恐らく、この子龍は人の言葉が使えない故、己の見たものを絵にしてアキに伝えているのだろう』

ラズはこちらの状況に検討がついていたらしく、解説を付け加えた。

「あ……ラズ、そう言えば、さっきまでたくさん見えてた精霊がないのは、もしかして戦場へ……？」

「如何にも。アキの願いを聞いて、協力する気になったようだな。とは言え、負の想念に対して耐性がない者が多いためか、戦場に入らず、傍から魔術の援護をしていると言った所ようだ」

この危機的な状況下において、彼等の協力は実に有り難い。
駄目元でお祈りをしたことが功を奏したようだ。

「あの、ア……將軍」

今、見た映像についてアークに伝えようとする際、いつものように名前を呼びそうになって、慌てて言い直した。

とつくに覚悟を決めた筈だ。

今、亜希はもう見習い騎士の「アルト」なのだ。

甘ったれた気持ちを捨てるために、亜希は「アルト」としての自分であるうと努めることに決めた。

「この子が見せてくれた戦場の中に、魔導師閣下らしき姿が見えたのですが、それが……透けていました。おそらく閣下は……」

「幽体離脱中、か」

「はい」

頷きながら、亜希は自分が幽体離脱中に体験したことや、エルアノーラの言葉を反芻していた。

背中に羽を生み出した際、「疲れ」はまったく感じなかった。

肉体に入っている時には、魔術を使えば幾許かの「疲れ」を感じるのが普通だが、霊の身だともしかすると、魔術は使い放題なのかもしれない。

そう言った利点があるなら、彼女が幽体離脱して戦場にいるのも

わかる。

しかし、良いことばかりでもない筈だ。

まず、還るべき彼女の身体は、今安全な所にあるのだろうか？
留守中にもし身体が傷つけられでもしたら、即お陀仏だろう。

それに、亜希には本能的に感じるものがあつた。

戦場を覆う、あの「黒い雲」は危険だ。

人々の憎しみや恨み等の感情が、「黒い雲」へと姿を変えているのだとすると、あの只中において、何も影響がないとは思えない。

精霊達が警戒して、距離を取っていると言う話もある。危険なのは間違いないだろう。

「私見ですが、閣下が長く幽体で戦場においては大変危険だと思われ
ます。援護を……」

「その点は心配しなくて良い。この緊急事態だ。恐らくローザの傍
にはゼノがいる。あいつがああ爆弾娘を野放しにしておく筈がない
からな」

「ば、爆弾娘……」

真面目な会話野中に突然、コミカルな単語が出て来て、亜希は困
惑した。

彼の口振りからすると、彼等三人は古い付き合いなのかもしれな
い。

「出勤命令も出ていないのに、戦場に入った挙げ句、後先考えずに
幽体離脱までして魔術使ってるんだ。これを爆弾娘と言わずして何

と言う？ 猪娘か？」

「は、はあ……」

どうコメントして良いものかわからず、曖昧に相槌を打つ。

それにしても、「猪娘」と言う呼び方の方がもつと酷いのではないかと思うのだが……

「まあ、とにかくローザはゼノに任せておけば大丈夫だ。お前はこれから取りかかる『作戦』に集中しろ」

「わかりました」

釈然としないものを感じつつも、彼が大丈夫だと言うのなら、きっとそうなのだろう。

確信を持って言える「何か」があるのだ。

自分の知らない「何か」が彼等三人の間には、ある

そう思った時、胸の奥の方にかすかな痛みを感じたが、正体のわからないそれと向かい合っている余力が、今の亜希にはなかった。

間もなく、戦場に着く。

アークの言う通り、今、亜希はこれから取りかかる「作戦」に意識を集中すべき時なのだ。

そう自身に言い聞かせながら、これから自分が取るべき行動について、亜希は思いを巡らせた。

閑話「戦場の影」

ゼノに靈感はない。

しかし、気配には人一倍敏感で、直感も鋭い方だと自負している。

先程見た限りでは、ローザの体力はもう限界に近い様子だった。

だからと言って、それで彼女は諦めるような性格ではない。

同期で仕官した間柄であり、付き合いは長いので、行動や思考のパターンは何となく読める。

（ 今頃、幽体離脱してるに決まってる ）

以前のような小規模な争いに、遠方から飛んで行くのならまだしも、今回のように、武器と魔術による攻撃が実際に行われている只中で幽体離脱を行うのは、危険極まりない行動である。

「幽霊離脱の際には深い精神統一が必要であり、清らかな場所で行わなければ、『魔』に魅入られる危険がある」とは、ローザ本人の言だ。

本心ではやめて欲しかったが、止めても聞く性格ではないことは分かりきっているので、ゼノはあえて気付かない振りをして、陣幕

を後にしたのだが……

(だからって、そのまま放って置けるか……まったく手のかかる姫さんだよ)

しかし、それを嫌とは感じないのは、惚れた弱みか。

あれから、ローザのいる陣幕周辺の警備に目を光らせている。

ゼノの姿で自由に動くのが理想だが、うっかり幽体離脱中のローザに見つかっては大変なので、アベルとして立ち回りつつ、裏で部下に指示を出さなければならぬのだが、どうにも歯痒い。

「宰相閣下！」

周囲に目を配っているゼノの下に、また一人、騎士が息を切らせて駆け寄って来た。

宰相が机上の空論ではない軍略の「知恵」を持ち合わせていると知るや、海上警備部隊と治安維持部隊の面々が、次々に助言を求めてやって来るようになったのだ。

彼等は正確に言えば 騎士団傘下である海上警備部隊と治安維持部隊の中の、「小隊」二つと言う立場に過ぎない。

つまり、リーダーには隊長格の騎士が二人いるだけであり、それ等を束ねる指揮官が「存在しない」のだ。

これで、自分とローザが来るまで指揮系統の混乱もなく、よく持ち堪えていたものである。

このような状況であれば、突然加勢に現れた魔導師や宰相を頼りたくなるのも分かると言うものだ。

「矢が切れました」

「予想より早いですが……止むを得ません。魔術単独の使用を許可します」

騎士には、魔術が不得手なものが多いため、矢に火や氷、雷等を纏わせて射ると言う、誰でも使用が可能な簡単な牽制方法を提案してみたのだが、どうやら思いの外、敵の攻める勢いが激しく、予想以上に早く矢が切れてしまった。

何もない空間に想像力一つで魔術を行使するのは、不得手な者だと体力自慢の騎士であっても、思いの外、身体のエネルギーを持って行かれてしまうものなので、出来ればもう少し後にしたかったのだが　こうなっては致し方ない。

オズウェルドでは、国土防衛の任に当たる人材の登用に際し、武に秀でる者は騎士団へ、魔術に秀でる者は魔術師団へと単純に分けて来たが、その結果、両方に長けた戦士があまり育っていないのが問題だった。

アーク率いる特殊部隊の面々には、その貴重な「両刀遣い」の猛者が集っているが、如何せん、数が少なく、今も戦場で精力的に動いてくれているのだが、残念ながらまだまだ力及ばずと言った所だ。

しかし、そんな現状を嘆いてみた所で、どうしようもない。
今ある戦力でいかにして敵に立ち向かうのか　ただそれに専心すべきである。

承知しました、と頭を下げて背を向けた騎士を見送る際、ふと後ろに部下らしき者が付き従っていたことに気が付いた。

(俺としたことが、人の気配に気付かないとは……)

最近、書類仕事にかまけていたせいで、少し勘が鈍ってしまったのかもしれない。

そこまで考えて　　ん、とゼノは一度思考を止めた。

(いや、待て。さっきまでは普通に、俺の周囲を歩いてる騎士達の気配は掴めてた。なのに、今さっきだけ気付かないなんて……)

向こうが気配を隠そうとでもしていなければ、読めていた筈だ。

そこまで考えて、はっとした。

わざわざ仲間の前で、気配を消して行動する必要があるのか　　？

(否、だ)

気が付けば、無意識に足が前へと駆け出していた。

あの騎士は、妙だ。

一見、あれはただの「空気のような存在」に過ぎないが、一度その違和感が目に付くと、この戦場の中において、もはや「異質な一点」にしか見えない。

特殊部隊の部下達が今まで見過ごしていたのも、その存在の「希薄さ」故であろう。

素人のスパイは消し切れなかった殺気によって、しばしば捕らえられるが、熟練のスパイは逆に、自身の気配を「消し過ぎて」「しまい、それがきっかけで捕らえられることもある」と言う。

(さて、どうしたものか……)

気持ち昂ぶるままに、不審な騎士を呼び止めようと足を向けてしまっただが、今のゼノは「宰相アベル・シユタイナー」である。

周囲には「宰相は頭は切れるが、戦闘能力はからつきしな人物」だと思われるように演じて来たため、この姿で問い詰めることは出来ても、武力に訴えてとっ捕まえることは出来ない。

そんな様子を、事情を知らないローザに見せる訳にもいかない。

(まったく、やり辛いなあ)

まずは、適当な理由を付けて、人目のない場所に引き摺り込むべきだろう。

そこで自分は実は「宰相の影」だとか何とか言い、適当に理由を付けて、叩きのめして引っ捕らえるか？

部下に声をかけて、自分の代わりに捕まえさせる手もあるがどうも、そうしようと言う気が起こらなかった。

(何となく……嫌な予感がするんだよな)

アキを助けに行くアークを見送った、その少し前に、「かなりの手練れ」である不審者によって、特殊部隊の隊員一名が負傷したとの報告も入っている。

あの騎士も、もしかかなりの遣い手であった場合、部下では太刀打ち出来ないかもしれない。

もしかすると、同じ組織の人間か、同一人物と言う可能性も無い。

あれこれ考えているうちに追いついたので、ゼノは不審な騎士の肩を掴んで、止めた。

「すみません。少し貴方をお願いしたいことがあるのですが、あちらの天幕までご同行頂けますか」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3748j/>

recall

2011年12月16日00時55分発行